

# 川原平(4)遺跡Ⅱ

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2013年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第527集

# 川原平(4)遺跡Ⅱ

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2013年3月

青森県教育委員会



調査区近景（東から）



調査区近景（南西から）



第2号竖穴住居跡（南から）



左→第5号竖穴住居跡石囲炉遺物出土状況  
右→第8号竖穴住居跡土偶出土状況

# 序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成15年度から津軽ダム建設事業予定地内に所在する発掘調査を実施しています。そのうち川原平(4)遺跡は、平成15年度から断続的に発掘調査を実施しており、今回は平成23・24年度に発掘調査を実施したA区の調査成果をまとめました。

調査の結果、縄文時代中期から後期にかけての竪穴住居跡をはじめとする遺構や、同時期の土器・石器等の遺物が発見されました。特に竪穴住居跡はまとまった数が見つかっており、当時の集落跡としての特徴などを知る上で貴重な成果と言えるでしょう。

この成果が今後、埋蔵文化財の保護等に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成25年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 柿 崎 隆 司

# 例 言

- 1 本書は、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成23・24年度に発掘調査を実施した西目屋村川原平(4)遺跡A区の発掘調査報告書である。発掘調査面積は7,700㎡である。
- 2 遺跡の所在地及び青森県遺跡番号は以下のとおりである。

川原平(4)遺跡 青森県中津軽郡西目屋村大字川原平字福岡 青森県遺跡番号 343022
- 3 川原平(4)遺跡の発掘調査報告書は、既に1冊刊行(2006)されており、本書は第2冊目となる。
- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間 平成23年5月11日～同年11月18日  
平成24年8月1日～同年9月28日

整理・報告書作成期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日
- 6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター新山文化財保護主幹・畠山文化財保護主幹・平山文化財保護主査・最上文化財保護主事が担当した。事実記載の担当は以下のとおりである。

(遺構) 竪穴住居跡：新山 土坑：平山 掘立柱建物跡：新山 その他の遺構：新山  
(遺物) 土器：平山 石器：新山 その他の遺物：新山

なお、第1・2・5章については文末に執筆者名を記した。依頼原稿については文頭に執筆者名を記した。
- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

空中写真撮影 株式会社 シン技術コンサル  
基準点・水準点測量 株式会社 キタコン  
周辺の地質・地形分析 青森県立郷土館主任学芸主査 島口 天  
石器の石質鑑定 青森県立郷土館主任学芸主査 島口 天  
種実同定分析 株式会社 パレオ・ラボ  
放射性炭素年代測定 株式会社 加速器分析研究所  
遺物の写真撮影 シルバーフォト、フォトショップいなみ
- 8 発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 9 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 10 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の機関と方々からご協力・ご指導を得た。(敬称略、順不同)

西目屋村教育委員会、弘前市教育委員会、大鰐町教育委員会、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、北秋田市教育委員会、高橋義介、星 雅之、村上 拓、細田昌史、斉藤慶史

- 11 本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「川原平」及び西目屋村役場発行の25,000分の1地形図「西目屋村管内図」を複写して使用した。
- 12 計測原点の座標値は、世界測地系に基づき、平面直角座標第X系による。
- 13 挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 14 全体図等の縮尺は、挿図毎にスケール等を示した。
- 15 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。なお遺構番号は整理作業段階で付け直したのものもあるが、発掘作業段階で用いた遺構の略号を（ ）内に合わせて記した。遺構に使用した略号は、以下のとおりである。

S I = 竪穴住居跡、S K = 土坑、S B = 掘立柱建物跡、S N = 焼土遺構、S M = 硬化面
- 16 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 17 遺構実測図の縮尺は、挿図毎にスケール等を示した。
- 18 各遺構に伴うピットは、開口部径および深さを計測し、挿図内に表を付して示している。単位はcmである。なお、遺構内部は「Pit」、遺構外部は「PIT」と区別した。
- 19 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。
- 20 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記には、『新版標準土色帖 2006年度版』（小山正忠、竹原秀雄）を使用した。
- 21 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構図版等に使用した略号は、以下の通りである。

●・P = 土器・土製品、▲・S = 石器・石製品・自然礫、△・C = 炭化物、○ = 分析資料
- 22 遺物実測図には、挿図毎に1から通しの図番号を付した。同一個体と考えられる土器等には、図番号に小文字アルファベットを組み合わせて表記した。
- 23 遺物実測図の縮尺は、原則として縄文土器・礫石器は1/3（礫石器のうち台石・石皿類は1/6・1/8）、土製品・石製品・剥片石器は1/2に統一し、挿図毎にスケール等を示した。
- 24 遺物観察表・計測表に使用した略号等については、表毎に指示内容を示した。土製品・石器等の計測値は、長さ×幅×厚さ（cm）・重さ（g）の順に表記した。（ ）内の数値は現存値である。
- 25 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付したが、縮尺は統一していない。

# 目次

序	
例言	
目次・図版目次・写真目次	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	3
第2章 遺跡の環境	6
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第2節 川原平(4)遺跡A区の地形・地質	7
第3節 基本層序	9
第3章 検出遺構と出土遺物	15
第1節 遺跡と調査区の概要	15
第2節 遺構・遺物の凡例と分類	15
第3節 竪穴住居跡	18
第4節 土坑	58
第5節 掘立柱建物跡	68
第6節 その他の遺構	68
1 硬化面	68
2 小ピット	71
3 焼土跡	76
第7節 遺構外出土遺物	81
1 土器	81
2 石器	86
3 その他の遺物	91
第4章 理化学的分析	93
第1節 川原平(4)遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)	93
第2節 川原平(4)遺跡から出土した炭化種実	98
第5章 総括	103
第1節 検出遺構について	103
第2節 出土遺物について	107
引用・参考文献	114
遺物観察表	116
写真図版	123
報告書抄録・奥付	

## 図版目次

図1	遺跡の位置と周辺の遺跡	6	図38	第15号竪穴住居跡(2)・出土遺物	52
図2	地形・地質の様子(写真図版)	7	図39	第16号竪穴住居跡	53
図3	川原平(4)遺跡ほか各遺跡の位置	8	図40	第19号竪穴住居跡(1)	55
図4	川原平(4)遺跡A区的位置	8	図41	第19号竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)	56
図5	基本層序	9	図42	第19号竪穴住居跡出土遺物(2)	57
図6	調査区域図	10	図43	第19号竪穴住居跡出土遺物(3)	58
図7	遺構配置図	11・12	図44	土坑(1)	59
図8	竪穴住居跡の凡例	15	図45	土坑(2)	61
図9	石器の凡例	17	図46	土坑(3)	63
図10	第1号竪穴住居跡・出土遺物	19	図47	土坑(4)	65
図11	第2号竪穴住居跡(1)	20	図48	土坑出土遺物	67
図12	第2号竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)	21	図49	第1・2号掘立柱建物跡	69
図13	第2号竪穴住居跡出土遺物(2)	22	図50	第1号硬化面	70
図14	第3号竪穴住居跡(1)	23	図51	第2号硬化面	71
図15	第3号竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)	24	図52	小ピット群①・②	73
図16	第3号竪穴住居跡出土遺物(2)	25	図53	小ピット群③・④	74
図17	第3号竪穴住居跡出土遺物(3)	26	図54	小ピット群⑤・⑥	75
図18	第4号竪穴住居跡(1)	27	図55	小ピット群⑦	76
図19	第4号竪穴住居跡(2)・出土遺物	29	図56	その他の遺構出土遺物(1)	79
図20	第5号竪穴住居跡(1)	30	図57	その他の遺構出土遺物(2)	80
図21	第5号竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)	31	図58	用途不明の落ち込み(SX)	81
図22	第5号竪穴住居跡出土遺物(2)	32	図59	遺構外出土遺物(1)	83
図23	第6号竪穴住居跡・出土遺物	33	図60	遺構外出土遺物(2)	84
図24	第7号竪穴住居跡・出土遺物	35	図61	遺構外出土遺物(3)	85
図25	第8号竪穴住居跡(1)	36	図62	遺構外出土遺物(4)	87
図26	第8号竪穴住居跡(2)・出土遺物	37	図63	遺構外出土遺物(5)	88
図27	第9号竪穴住居跡・出土遺物	39	図64	遺構外出土遺物(6)	89
図28	第10号竪穴住居跡・出土遺物	40	図65	遺構外出土遺物(7)	90
図29	第11号竪穴住居跡・出土遺物(1)	41	図66	遺構外出土遺物(8)	91
図30	第11号竪穴住居跡出土遺物(2)	43	図67	遺構外出土遺物(9)	92
図31	第12号竪穴住居跡(1)	44	図68	竪穴住居跡集成	105
図32	第12号竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)	45	図69	出土土器時期別比率	107
図33	第12号竪穴住居跡出土遺物(2)	46	図70	Ⅲ-1群土器集成(1)	109
図34	第13号竪穴住居跡	47	図71	Ⅲ-1群土器集成(2)	110
図35	第13号竪穴住居跡出土遺物	48	図72	Ⅲ-1群土器集成(3)	111
図36	第14号竪穴住居跡・出土遺物	49	図73	出土石器器種組成	113
図37	第15号竪穴住居跡(1)	51			

## 写真目次

写真1	空中撮影・基本層序	123	写真15	土坑(4)	137
写真2	作業風景	124	写真16	土坑(5)	138
写真3	第1・2号竪穴住居跡	125	写真17	土坑(6)	139
写真4	第3・4号竪穴住居跡	126	写真18	土坑(7)	140
写真5	第3・4号竪穴住居跡石囲炉・ 第5号竪穴住居跡	127	写真19	土坑(8)	141
写真6	第6・7号竪穴住居跡	128	写真20	硬化面・掘立柱建物跡(PIT)	142
写真7	第8・9号竪穴住居跡	129	写真21	小ピット群	143
写真8	第8号竪穴住居跡石囲炉・ 第10号竪穴住居跡	130	写真22	竪穴住居跡出土遺物(1)	144
写真9	第11・12号竪穴住居跡	131	写真23	竪穴住居跡出土遺物(2)	145
写真10	第13・14号竪穴住居跡	132	写真24	竪穴住居跡出土遺物(3)	146
写真11	第15・16号竪穴住居跡	133	写真25	竪穴住居跡出土遺物(4)	147
写真12	第19号竪穴住居跡・土坑(1)	134	写真26	竪穴住居跡出土遺物(5)	148
写真13	土坑(2)	135	写真27	土坑・その他の遺構出土遺物	149
写真14	土坑(3)	136	写真28	遺構外出土遺物(1)	150
			写真29	遺構外出土遺物(2)	151
			写真30	遺構外出土遺物(3)	152

## 表目次

表1	出土土器型式一覧	16	表3	小ピット属性表(2)	78
表2	小ピット属性表(1)	77	表4	竪穴住居跡炉及びその他の属性	103

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経緯

平成14年に、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所から青森県教育庁文化財保護課へ、津軽ダム建設予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する協議の依頼があり、これを受けて同年7月に、津軽ダム工事事務所、県文化財保護課、西目屋村教育委員会の3者により、現地踏査と津軽ダム建設工事の工程・内容、津軽ダム建設予定地内の埋蔵文化財調査の進め方等についての協議が行われた。その後、県文化財保護課による分布調査が実施され、津軽ダム建設予定地常時満水区域内の埋蔵文化財調査対象範囲を12地区、総面積約768,000㎡と確定した。

発掘調査は、青森県埋蔵文化財調査センターが担当することとなり、川原平(4)遺跡は、平成15年度に着手し、A区については主に平成23・24年度に発掘調査を実施した。

なお、周知の埋蔵文化財包蔵地に対する土木工事のための発掘に関する通知は、平成23年4月に国土交通省津軽ダム工事事務所長から提出され、青森県教育委員会から事前の記録保存のための発掘調査を実施するよう指示がなされている。また、工事に伴う事前の準備や発掘調査時の安全管理などについても、その都度関係諸機関と協議を行いながら調査を進めた。

### 第2節 調査の方法

#### 1 発掘作業の方法

川原平(4)遺跡は遺跡範囲が広範囲にわたるため、便宜的に既存の県道・村道および段丘ラインを境界として、A・B・C・D・E区に区割りして実施した(図6参照)。本書で報告するA区については、平成23年度に北半部・24年度に南半部の調査を実施し、縄文時代の遺構調査に重点をおいて、集落の時期・構造等を把握できるような進め方をした。

##### (1) 測量基準点・水準点の設置・グリッドの設定

平成23年度の調査で測量業者に委託して設置した基準杭をもとに、調査区内に4×4mのグリッドを設定した。各グリッドは、南から北にローマ数字とアルファベット(A~Y)、西から東に算用数字を付けて、その南西隅の組み合わせで呼称した。実測基準点となったグリッドの国土座標(世界測地系)は、IA-0グリッドが $X=58200.000$ ・ $Y=-51700.000$ 、IIA-25グリッドが $X=58300.000$ ・ $Y=-51600.000$ 、IIIA-50グリッドが $X=58400.000$ ・ $Y=-51500.000$ 等である。測量原点には、測量業者のGPS測量機による4級基準点No3-6(世界測地系で $X=58840.189$ ・ $Y=-51262.967$ )、No3-7( $X=58835.398$ ・ $Y=-51361.774$ )を使用し、指定されたグリッド打設のための中心線測量を実施した。レベル原点も、測量業者のGPS測量機により基1-1(地盤高205.457m)、K(4)E-3(地盤高185.618m)を与点として実測基準点2点(No3-6・7)に設置し、必要に応じ実測基準点から移動して使用した。

##### (2) 基本層序

遺跡の基本層序については、表土から順にローマ数字を付けて呼称した。2カ年に渡って調査を実施したが、同じ土層番号を用いて分層した(図5参照)。詳細については第2章第3節「基本層序」を参照のこと。

### (3) 表土等の調査

遺跡範囲内の表土等の調査は、トレンチ掘りにより確認したところ、畑作により表土が大幅に削平されていることが明らかとなったため、重機を併用して表土剥ぎを行った。出土した遺物は、適宜地区単位でグリッド・層位毎に取り上げた。

### (4) 遺構の調査

検出した遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構の平面図は、主に「遺構実測支援システム（遺構くん）」（株式会社CUBIC）を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図、出土遺物の形状実測図などは、簡易遣り方測量等で縮尺1/10・1/20の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位・遺構内地区単位で層位毎又は覆土一括で取り上げたが、床面・底面及び炉の出土遺物については、トータルステーションや簡易遣り方測量により、必要に応じて縮尺1/10・1/20のドットマップ図・形状実測図等を作成した。

### (5) 写真撮影

写真撮影は、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び約1800万画素のデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、遺物の出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を業者に委託して行った。

## 2 整理・報告書作成作業の方法

平成23・24年度の調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡17軒、土坑40基、掘立柱建物跡2棟、硬化面2箇所、焼土跡2基、小ピット294基が検出され、土器・石器等の遺物が段ボール箱で52箱出土した。縄文時代の集落の時期・構造等を解明するため、竪穴住居跡をはじめとする各遺構の構築時期と集落の様相等の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

### (1) 図面類の整理

遺構の平面図は、主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の1で図化し、簡易遣り方測量で作成した堆積土層断面図や炉の実測図等との図面調整を行った。また、遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

### (2) 写真類の整理

35mmモノクロームフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付け、ハードディスク・DVD等に保存した。

### (3) 遺物の洗浄・注記と接合・復元

縄文時代の遺構出土遺物及び包含層遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個

体の出土地点・出土層等の整理を併せて行った。

#### (4) 報告書掲載遺物の選別

遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄（放置）された資料、遺構の構築・廃棄時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・形式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

#### (5) 遺物の観察・図化

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、観察表・計測表等を作成した。

#### (6) 理化学的分析

遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定、同じく種実・炭化種実の同定を業者に委託して行った。

#### (7) 遺構・遺物のトレース・版下作成

遺構・遺物の実測図やその他挿図のトレースは、「遺構実測支援システム（トレースくん）」（株式会社 CUBIC）を用いたデジタルトレースによって行った。実測図版・写真図版等の版下作成についても、デジタル機器で作業を進めた。

#### (8) 遺構の検討・分類・整理

遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。また、発掘調査後の整理作業に伴い、発掘調査時に付した遺構名に変更が生じたため、第3章の記載・表などに示した。

#### (9) 遺物の検討・分類・整理

遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

#### (10) 調査成果の検討

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の集落の時期・構造について検討・整理した。

（新山）

## 第3節 調査の経過

### 1 発掘作業の経過

平成23年度はA区北半部（5,200㎡）、平成24年度は南半部（2,500㎡）の調査を実施することとなり、それぞれ予定の期間内に調査を終了した。

発掘調査体制は、以下の通りである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

（平成23年度）所長	松田 守正（平成24年3月定年退職）
次長	成田 滋彦（平成24年3月定年退職、現文化財保護主幹）
総務GM	木村 繁博（平成24年3月定年退職）
調査第二GM	川口 潤
文化財保護主幹	新山 隆男（発掘調査担当者）
文化財保護主査	平山 明寿、浅田 智晴（発掘調査担当者）

	文化財保護主事	最上 法聖（発掘調査担当者）
	調査補助員	森山 智恵、佐々木 隆英、櫻庭 裕也、寺田 隼也
（平成24年度）	所長	柿崎 隆司
	次長（総務GM）	高橋 雅人
	調査第二GM	川口 潤
	文化財保護主幹	畠山 昇（発掘調査担当者）
	文化財保護主査	平山 明寿（発掘調査担当者）
	調査補助員	佐々木 隆英、櫻庭 裕也、小泉 徹郎

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔	国立大学法人弘前大学名誉教授・故人（考古学）
調査員	葛西 勵	前青森短期大学教授（考古学）
調査員	関根 達人	国立大学法人弘前大学人文学部教授（考古学）
調査員	上條 信彦	国立大学法人弘前大学人文学部准教授（考古学）
調査員	山口 義伸	日本第四紀学会会員（地質学）
調査員	柴 正敏	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授（地質学）
調査員	島口 天	青森県立郷土館主任学芸主査（地質学）

（平成23年度）

- 5月11日 A区の調査（北半部）を開始した。作業は、調査区全体に任意にトレンチを入れ、遺構・遺物の分布を確認しながら進めることとした。
- 6月上旬 遺構・遺物の分布が調査区の全体に及ぶことがわかったため、重機を併用して表土剥ぎを進めていくこととした。表土剥ぎは、調査区東側から西側に向けて順次進めていき、検出した遺構は、検出順に遺構番号を付して精査を行った。
- 6月中旬 株式会社キタコンに委託して、基準点・中心線・仮BM設置測量を行った。
- 9月21日 調査員上條氏による、考古学に関する現地指導を受けた。
- 10月13日 調査員柴・島口氏による、地形・地質に関する現地指導を受けた。
- 10月20日 株式会社シン技術コンサルに委託して、遺跡及び調査区域全体の空中撮影を行った。
- 11月18日 予定されていた調査範囲（北半部：5,200㎡）の調査を全て終了した。遺物は段ボール箱で45箱分出土した。

（平成24年度）

- 8月1日 A区の調査（南半部）を開始した。平成23年度の調査で遺構・遺物の分布を確認しているため、それに配慮しながら表土剥ぎを進めていくこととした。遺構・遺物の分布が希薄な部分については重機を併用しながら進めた。検出した遺構は、平成23年度の遺構番号の続き番号を付して精査を行った。
- 9月12日 調査員山口氏による、地形・地質に関する現地指導を受けた。

9月28日 予定されていた調査範囲（南半部：2,500㎡）の調査を全て終了した。遺物は段ボール箱で7箱分出土した。

## 2 整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は、平成23年度の調査終了時から実施し、平成24年度には整理・報告書作成体制を整えて本格的な作業を行った。

なお、平成24年度に調査した遺構・遺物についても、調査を終了した時点から整理・報告書作成作業を開始して、平成23年度分と一括して報告することとした。

整理・報告書作成体制は以下の通りである。

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター
文化財保護主幹	新山 隆男 畠山 昇（報告書担当者）
文化財保護主査	平山 明寿（報告書担当者）
文化財保護主事	最上 法聖（報告書担当者）
調査補助員	佐々木 隆英、飯塚 岳雪、佐々木梨穂
整理作業員	半田 さくら、大杉 喜盛、山下 真理子

（平成23年度）

12月上旬～ 写真類の整理作業、図面類の整理作業、遺物の洗浄・注記作業を行った。

12月中旬 炭化物のサンプル等を整理して、株式会社加速器分析研究所へ理化学的分析を委託した。

（平成24年度）

4月上旬～ 平成23年度分の遺物を中心に整理作業を開始した。遺物は分別・集計・計量等を行った後、接合・復元作業から進めた。併せて、遺構の検討・整理を開始した。また、遺構図面の修正作業も開始した。

5月上旬～ 遺物の接合・復元作業を集中的に行った。この間に、土器・石器の報告書掲載遺物の選別作業を行った。さらに、遺物の検討・分類・整理作業を進め、遺物観察表の作成を開始した。

6月上旬～ 選別した報告書掲載遺物（土器）の実測・拓本等の図化作業を行った。

8月上旬～ 土壌サンプルのフローテーション・種実選別を行った。

9月上旬～ 地形・地質に関する分析を青森県立郷土館主任学芸主査島口 天氏に依頼した。また、選別した種実（炭化種実中心）の同定を（株）パレオラボに委託した。

10月上旬～ 平成24年度分の遺物整理作業を開始した。

11月中旬～ シルバーフォト・フォトショップいなみに委託して、報告書掲載遺物の写真撮影を行った。また、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。

12月上旬～ 修正・図化作業が完了した遺構・遺物のトレースを行った。

1月下旬～ 原稿・版下等が揃ったので、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。

3月27日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。最後に記録類・出土品を整理して収納をした。

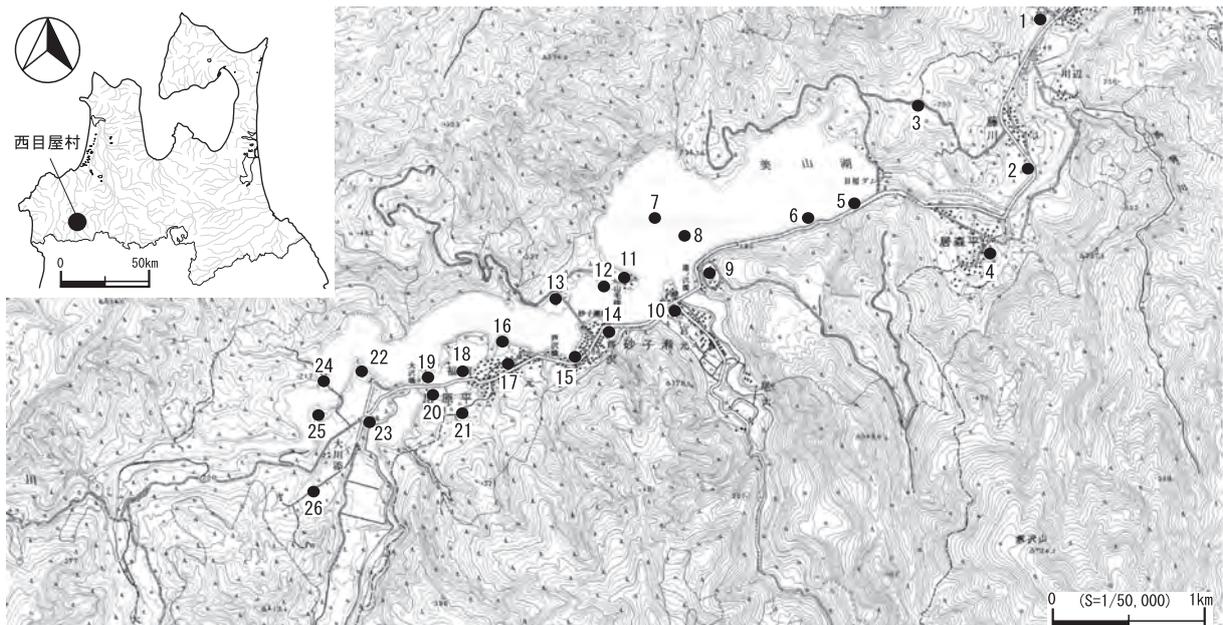
（新山・平山）

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

西目屋村には現在36カ所の遺跡が登録（平成24年12月現在）されている。遺跡の多くは、美山湖右岸側の川原平台地と呼ばれる河岸段丘上に集中しているが、昨年新たに川原平(6)遺跡が新規登録された。左岸側の遺跡として、鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡、大川添(3)遺跡が周知されている。

地図上（図1）に見られる芦沢橋を境に北東側を砂子瀬地域、南西側を川原平地域として従来登録されていた美山湖右岸側の遺跡を概観してみる。砂子瀬地域は、北東側から水上(3)遺跡、水上(4)遺跡、水上(2)遺跡、水上(1)遺跡、砂子瀬村元遺跡、砂子瀬遺跡、芦沢(1)遺跡、芦沢(2)遺跡、以上8つの遺跡が周知されている。なお、平成18年度に実施された調査により、水上(2)・(3)・(4)遺跡は新規登録されており、従来の水上遺跡は水上(1)遺跡に名称が変更となっている。川原平地域は、南西側から、大川添(4)遺跡、大川添(2)遺跡、大川添(1)遺跡、川原平(2)遺跡、川原平(3)遺跡、川原平(1)遺跡、川原平(4)遺跡、川原平(5)遺跡、以上8つの遺跡が周知されている。これらの遺跡は、すべて縄文時代の遺跡として登録されており、今後の調査によって美山湖周辺地域における縄文時代の様相が明らかになることが期待される。（新山）



番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別
1	343006	稲葉(2)遺跡	西目屋村大字村市字稲葉	平安	散布地	14	343020	芦沢(1)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字芦沢	縄文	散布地
2	343024	瀬の上遺跡	西目屋村大字藤川字瀬の上	縄文(後・晩)	散布地	15	343021	芦沢(2)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字芦沢	縄文	散布地
3	343007	芦菴遺跡	西目屋村大字藤川字瀬の上	縄文(後)	散布地	16	343035	川原平(6)遺跡	西目屋村大字川原平字宮本	縄文(後)、平安	集落跡
4	343015	寒沢遺跡	西目屋村大字居森平字寒沢	縄文	散布地	17	343023	川原平(5)遺跡	西目屋村大字川原平字宮元、平安	縄文	散布地
5	343026	水上(3)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(中)	散布地	18	343022	川原平(4)遺跡	西目屋村大字川原平字福岡	縄文(中・後)	散布地
6	343029	水上(4)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(後・晩)	散布地	19	343009	川原平(1)遺跡	西目屋村大字川原平字福岡	縄文(後・晩)	散布地
7	343014	砂子瀬村元遺跡	西目屋村大字砂子瀬字村元	縄文(中)	散布地	20	343010	川原平(2)遺跡	西目屋村大字川原平字福岡	縄文(後)	散布地
8	343025	水上(2)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(中)	集落跡	21	343016	川原平(3)遺跡	西目屋村大字川原平字福岡	縄文	散布地
9	343017	水上(1)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字水上	縄文(中・後)	集落跡	22	343018	大川添(1)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	散布地
10	343008	砂子瀬遺跡	西目屋村大字砂子瀬字宮元	縄文(中・後・晩)	集落跡	23	343019	大川添(2)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	散布地
11	343032	鬼川辺(1)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地	24	343030	大川添(3)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	集落跡
12	343033	鬼川辺(2)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地	25	343031	大川添(4)遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	散布地
13	343034	鬼川辺(3)遺跡	西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺	縄文	散布地	26	343011	焼山遺跡	西目屋村大字川原平字大川添	縄文	散布地

青森県教育委員会2009『青森県遺跡地図』に一部加筆

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

## 第2節 川原平(4)遺跡 A 区の地形・地質

青森県立郷土館 島口 天

川原平(4)遺跡は、大沢川と美山湖の合流点付近より東側、美山湖右岸に広がる平坦面上に位置する(図3)。A区は、同遺跡の中で最も北寄りにあり、湖面との標高差は約20mである(図4)。

A区の調査において遺構が検出された地層面では、巨礫が多く集まり帯状に分布しているようす(図2:写真1)が観察された。その分布は湖岸にほぼ平行、東西方向に複数列並び、列と列の間にはシルト質の褐色土が堆積していた。帯状に巨礫が集まっている部分は、中央部がやや高くなっており、褐色土の部分は逆に中央部がやや低くなっていた。礫は大きいものでは長径50cm近いものがあるが、その大きさは一定ではなく、形は角～亜円礫、礫と礫は接することなく間にはシルトや砂が堆積していた。また、遺構内での観察から礫の大きさは下方ほど小さくなる逆級化の傾向がみられた(図2:写真2)。このような特徴から、この巨礫が多く集まる堆積物は土石流堆積物であると考えられた。

このように巨礫が多く集まって帯状に分布している様子は、大川添(2)遺跡および水上(2)遺跡(図3)でも観察されており、大川添(2)遺跡では大沢川で発生した土石流の堆積物、水上(2)遺跡では湯ノ沢川で発生した土石流の堆積物と考えられた。本遺跡A区の土石流堆積物は、遺跡の位置や堆積物の分布する方向から岩木川で発生した土石流の堆積物と考えられる。堆積物が複数列に帯状に分布しているのは、土石流による自然堤防的な堆積作用によるもので、複数回の土石流によってできたと思われる。

今回の調査では、基盤岩の砂子瀬層まで掘り下げたトレンチがなかったため土石流堆積物の下位層は不明であり、段丘の性格を明らかにできなかった。美山湖周辺の段丘は、今回のほかにも段丘面に土石流堆積物が存在することがわかってきているため、その標高や発達の程度だけでは簡単に区分できないと考えられる。段丘面が形成されたのは最終氷期と考えられるため、縄文時代にはすでにこのような地形ができており、縄文人は単純に段丘面の標高や広さで利用の仕方を決めていた可能性もある。段丘面を利用していた年代や利用のされ方等を明らかにするためにも、今後は段丘面の性格を明らかにするための調査も必要だと思われる。



写真1 巨礫が多く集まり帯状に分布



写真2 遺構内の礫のようす。スケール下の巨礫は礎石で人為的なもの

図2 地形・地質の様子(写真図版)

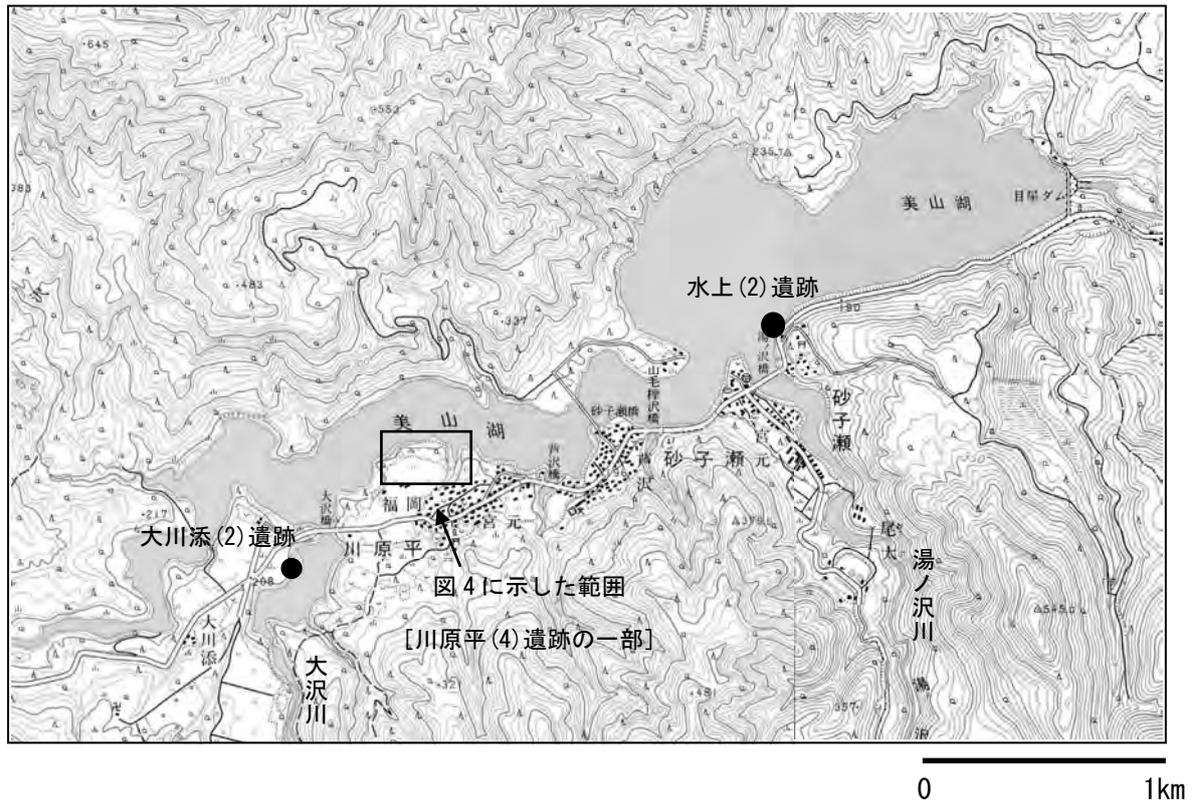


図3 川原平(4)遺跡ほか各遺跡の位置

(国土地理院発行の1/25,000地形図「川原平」および「陸奥田代」の一部を使用)

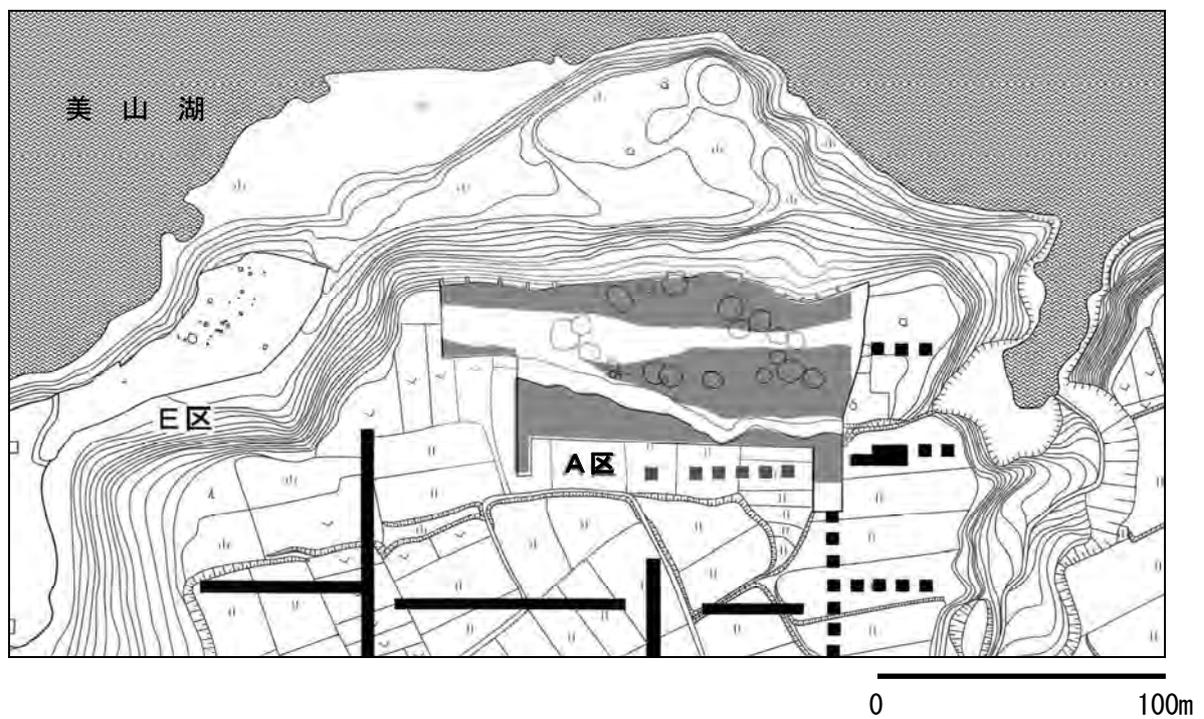


図4 川原平(4)遺跡A区的位置

(巨礫が多く集まり帯状に分布している範囲をやや濃い灰色で示した)

### 第3節 基本層序

川原平(4)遺跡は、第2節でも述べているように、岩木川で発生した土石流の堆積物による地形・地質ということとなる。調査区域図(図6)に示したA区の網掛け部分は礫がほとんど混入しない部分で、網掛け部分以外は礫が散在する部分となっている。

本節では、便宜上、網掛け部を「埋没沢」部分、網掛け以外を「礫堆積」部分と呼称して基本層序の詳細を示す。なお、含有物の違いによりアルファベット小文字で細分している層もある。

#### (埋没沢部分－基本層序①)

##### 第I層 黒褐色土 (10YR2/3)

旧表土、耕作土である。

##### 第II a層 褐色土 (10YR4/4)

第II層の上層に堆積する層である。遺物はほとんど含まない。火山灰が二次的に流入した層である可能性が高い。

##### 第II層 暗褐色土 (10YR3/3)

縄文時代の遺物を含む層である。竪穴住居跡等の遺構は、本来、この層から掘り込まれたものと考えられるが、残存しているのは埋没沢の一部である。

##### 第III層 褐色土 (10YR4/4)

IV層との漸移層である。縄文時代の遺物を含む。

##### 第IV層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)

粘土質の無遺物層である。

##### 第V層 褐色砂 (10YR4/4)

礫(φ50～150mm)を20～30%含む砂層(無遺物層)である。

#### (礫堆積部分－基本層序②) ※第I・II・V層は埋没沢状部分と同様である。

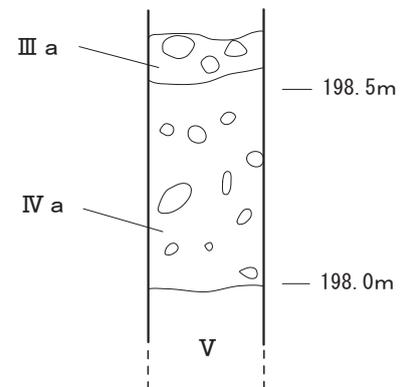
##### 第III a層 褐色土 (10YR4/4)

礫(φ30～150mm)を全体に20～30%含む。IV a層との漸移層である。縄文時代の遺物を含む。

##### 第IV a層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)

礫(φ50～200mm)を全体に20～30%含む。無遺物層である。

#### 基本層序②(礫堆積部分)



#### 基本層序①(埋没沢部分)

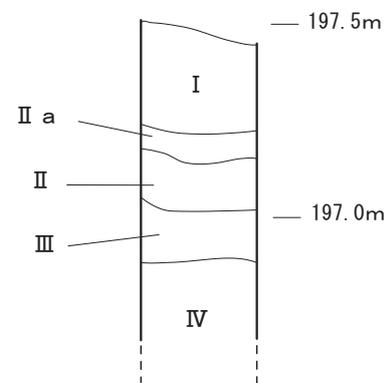


図5 基本層序

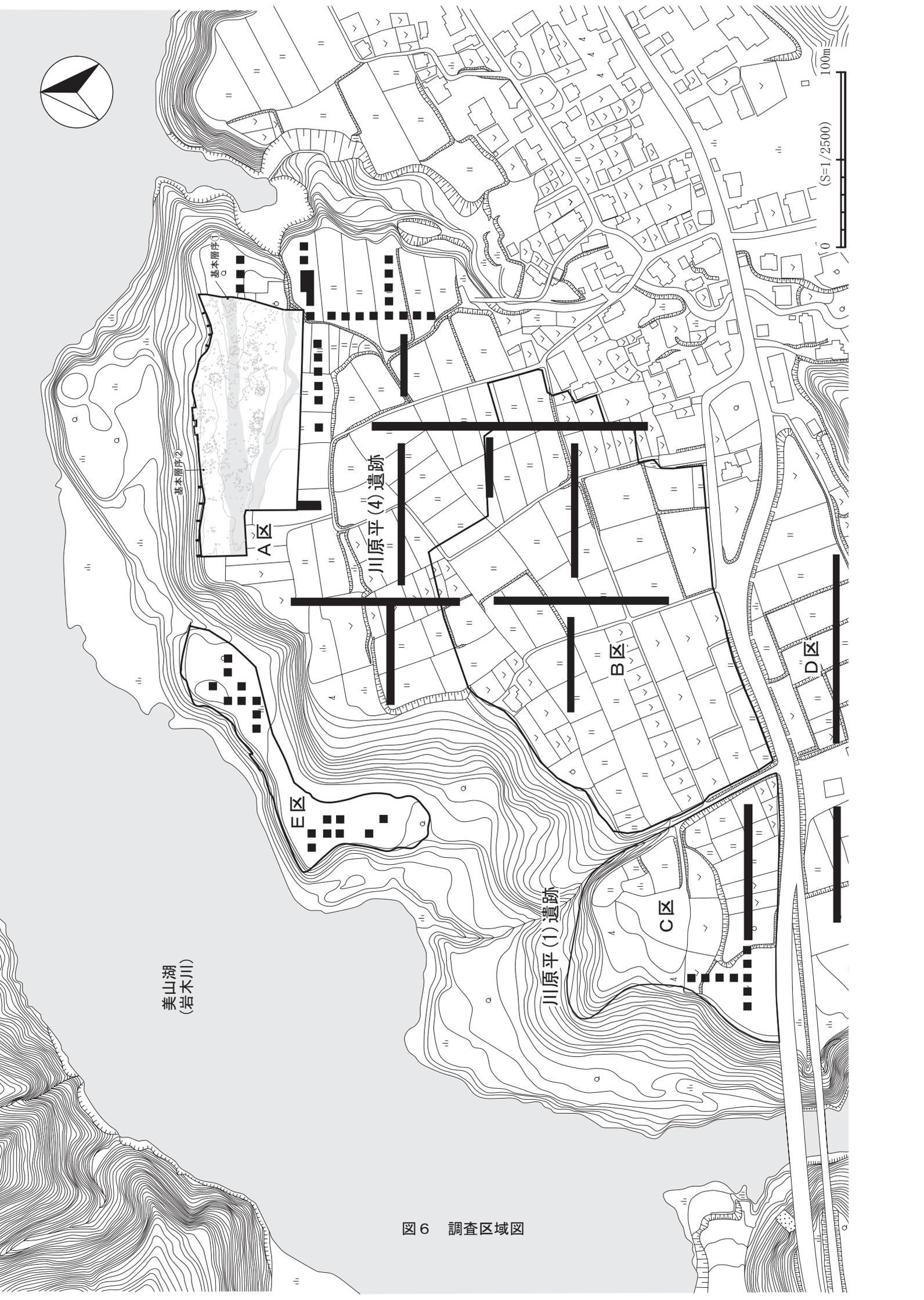
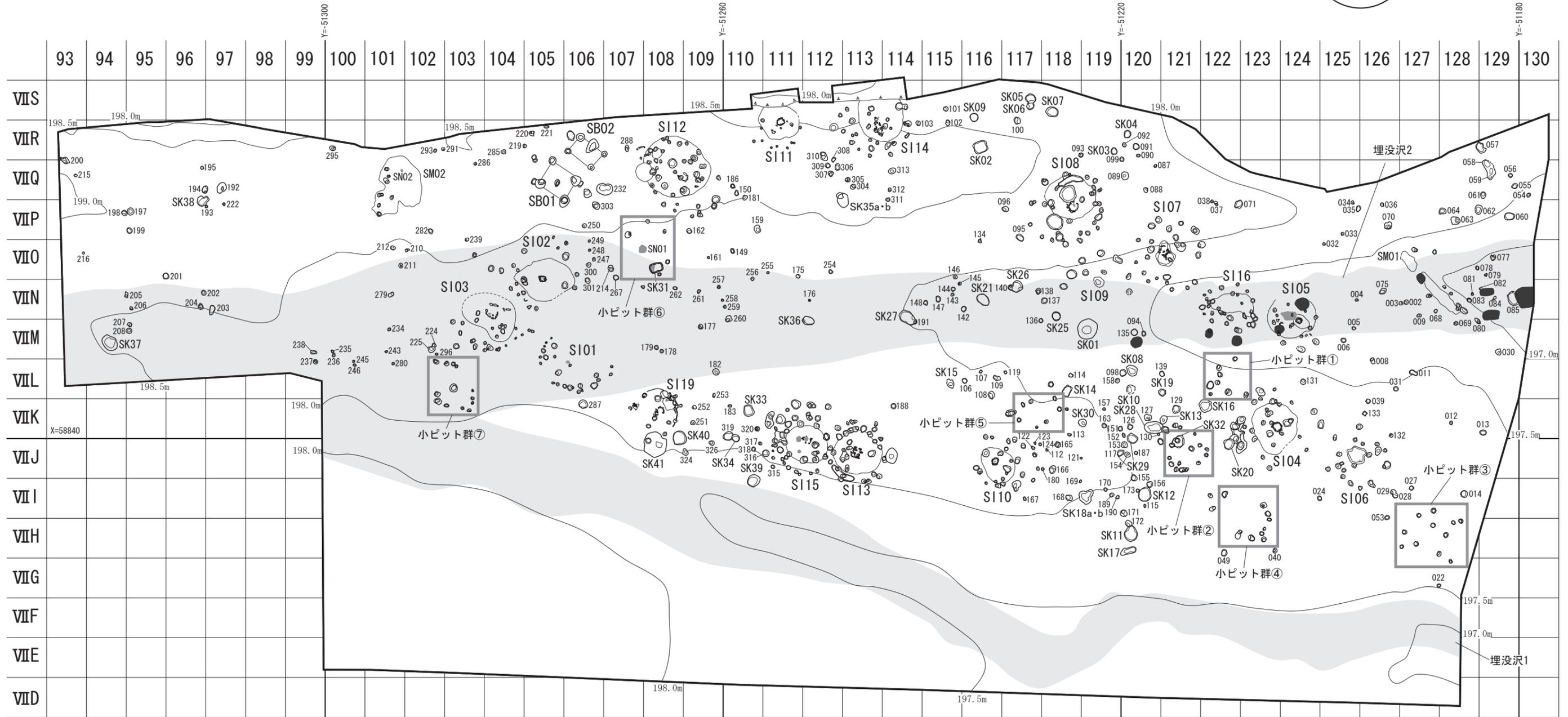


図6 調査区域図



(凡例)

- 炉・焼土範囲
- 攪乱範囲 (SX)

※3ケタの数字のみの遺構は「PIT」である

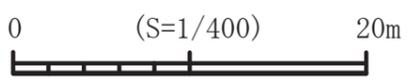


図7 遺構配置図

## 第3章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 遺跡と調査区の概要

川原平(4)遺跡は、遺跡の北東部、岩木川（現在は美山湖）右岸に位置し、川原平台地の高位面に区分される。標高は約200～205mの平坦地に立地している。本書では、A区の調査成果を報告するものであるが、B・E区については、別途報告予定である。

検出遺構は、竪穴住居跡17軒、土坑40基、掘立柱建物跡2棟、硬化面2箇所、焼土跡2基、小ピット294基である。ほとんどが縄文時代の遺構であるが、土坑の一部に中世・近世のものが含まれる。遺跡の現状は畑や水田として耕作されていたことから遺存状態は悪く、表土直下から竪穴住居跡の石囲炉や貼床などが検出されるような状態であった。

出土遺物は、縄文時代のものがほとんどであるが、前述した通り遺存状態は悪く、表土中や竪穴住居跡の床面と思われる部分から出土するような状態であった。遺構外では、埋没沢部分の堆積土中から出土するものが多かった。なお、古代・中世の遺物は確認されなかったが、近世・近代の遺物は少量出土している。

### 第2節 遺構・遺物の凡例と分類

本書における遺構・遺物の凡例、分類、計測箇所、定義等について本節にまとめた。

#### 1 遺構について

##### (1) 竪穴住居跡

本遺跡から検出した竪穴住居跡は、ほとんどが後世の耕作等により、竪穴部が欠損しているものと考えられる。よって、調査時においては、炉（掘方含む）・貼床・硬化面・柱穴（Pit）が組み合わせられるような範囲を本遺構として取り扱った。

なお、各種範囲等を示すラインや網掛けなどについては図8の凡例に示した。また、Pitの規模については、それぞれの図版内に計測表を付した。

##### (2) 土坑

土坑は、竪穴住居跡に付随する遺構や柱穴状の遺構（PIT）以外の、意図的に掘られた穴を総称したものである。竪穴住居跡同様、後世の耕作等により、土坑の上半部は壊されているものが多く。下半部もしくは底面近くしか残存しないものがほとんど

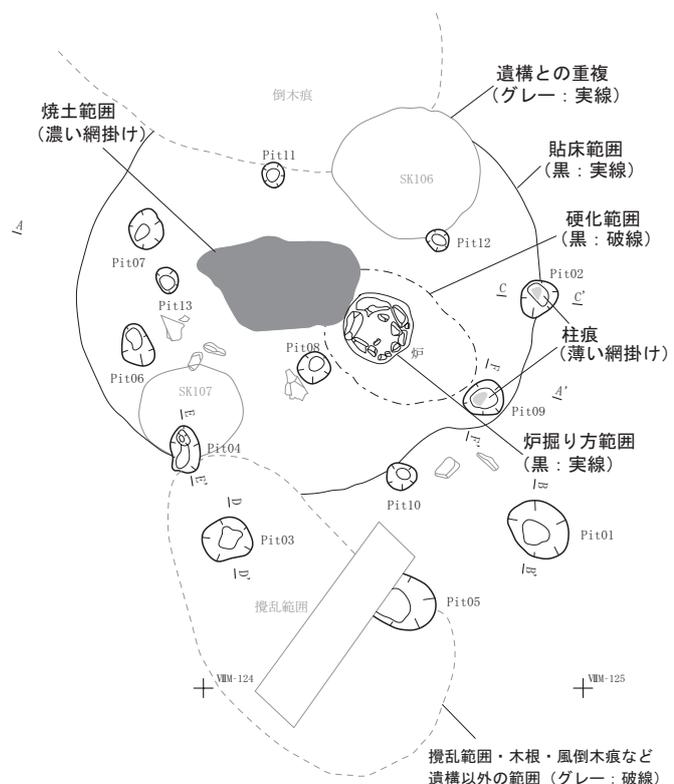


図8 竪穴住居跡の凡例

である。土坑の用途は不明なものが多いが、中・近世の土坑の中には炭窯や埋葬を目的としたものも含まれる。なお、各種範囲等を示すラインや網掛けなどについては、竪穴住居跡の凡例と同様である。

### (3) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、柱穴が規則的な柱列配置となっている、平地式もしくは高床式の建物跡と考えられるものを取り上げた。本遺跡では、4基の柱穴で構成される1間×1間の建物跡のみ検出された。なお、PIT番号は調査時に使用した番号をそのまま使用した。また、PITの規模については、それぞれの図版内に計測表を付した。

### (4) その他の遺構

(1)～(3)に当てはまらない遺構について本報告書では次のような呼称で取り扱うこととする。

#### ・硬化面

掘方内部に土壌を充填して踏み固めたり、人の往来などにより固く締まったりする面を有する遺構。

#### ・小ピット

竪穴住居跡や土坑などの遺構に伴わない柱穴状の遺構で、表記は「PIT」とした。なお、個々の小ピットの位置・規模・出土遺物等の基礎データについては、「小ピット属性表」にまとめた。

#### ・焼土跡

竪穴住居跡や土坑などの遺構に伴わない、被熱痕跡。

## 2 遺物について

遺構内出土遺物の層位について一部補足する。竪穴住居跡出土遺物については、覆土自体がわずかに残存するような状況であったため、貼床や床面と思われる範囲に接している遺物を「床面」、床面よりやや浮いた状態の遺物を「覆土」として取り上げた。また、炉内・貼床内・Pit内出土遺物は、それぞれ区別して取り上げた。

### (1) 土器

土器は、主として遺構の構築・廃絶時期などを示す資料、全体的な形状を把握することが可能な復元資料、同類の中で代表的な資料、土器型式・器種・文様などがわかる資料、類例が希少な資料などを選択して掲載した。

本報告書で使用した土器型式、対応する時期区分などについては表1にまとめた。各土器の土器型式、帰属時期、器種、計測値、文様の特徴、土器の付着物・塗布物などについては巻末の観察表に示した。

表1 出土土器型式一覧

I 群—縄文時代前期の土器
1 前期前葉の土器
2 前期末葉の土器 (円筒下層d式)
II 群—縄文時代中期の土器
III 群—縄文時代後期の土器
1 後期初頭の土器 (牛ヶ沢式・葦窪式)
2 後期後葉の土器
IV 群—縄文時代晩期の土器
※中期末葉～後期初頭にかけての粗製土器 は「II～III群」とした

(2) 石器

石器は、素材により大きく2つに大別した。剥片を素材として制作された石器を「剥片石器類」、礫を素材として制作された石器を「石斧・礫石器類」として本書では扱うこととする。本遺跡で出土した石器の器種名については下記に示した。なお、観察表における( ) 表記は、破損品の現存値を示す。

(剥片石器類)

石鏃、石槍、石匙、石錐、石筥、搔器、削器、石核、二次調整のある剥片 (R・f)、微小剥離痕のある剥片 (U・f)

(石斧・礫石器類)

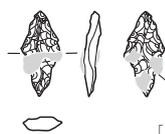
磨製石斧、磨り石、敲き石、凹み石、石錘、台石、その他の礫

※その他の礫は、部分的に加工が施され剥離しているもの(加工礫)や、被熱の痕跡があり火はじけや被熱剥離しているもの(被熱礫)を扱う。

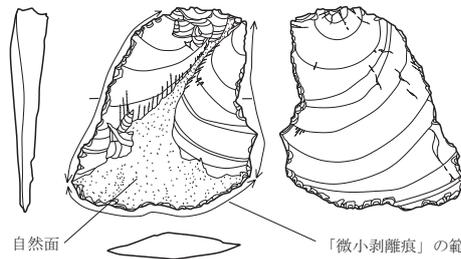
(3) その他の遺物

その他の遺物として、土製品、石製品、陶磁器を扱う。土製品は土偶、石製品は円盤状石製品のみで出土したもの全てを掲載した。陶磁器は用途不明の落ち込み (SX) から出土した2点を掲載した。

剥片石器類



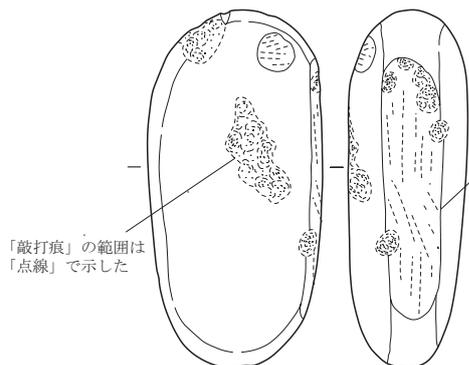
「アスファルト付着範囲」を網掛けで示した



自然面

「微小剥離痕」の範囲は矢印で示した

石斧・礫石器類

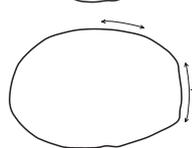


「敲打痕」の範囲は「点線」で示した

「磨り・擦痕」の範囲は「実線」で示した

「被熱剥離」したと考えられる範囲を点線で示した

「被熱範囲」を網掛けで示した



断面にも「敲き」「磨り」の範囲を矢印で示した

図9 石器の凡例

### 第3節 竪穴住居跡

竪穴住居跡は17軒検出した。表土直下から石囲炉や貼床などが検出される状況であったため、遺物は床面出土として取り上げたものの、表土第Ⅰ層中の遺物と区別がつかないものもあったため、床面出土遺物による時期決定は難しいものと考えられる。また、現場段階では土坑やPITとして取り扱った遺構を、整理段階において竪穴住居跡に伴うものとして番号を変更したものがある。それらは図版内に( )表記で旧遺構名を示した。また、「Pit計測表」は全遺構に、「炉石重量計測表」は必要に応じて図版内に示した。

#### 第1号竪穴住居跡 (ASI-01: 図10、写真3)

〔位置・確認〕 VII・M-105~107グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で焼土・Pitを確認した。

〔重複〕 遺構との重複はないが、北側・西側は風倒木と思われる痕跡により一部壊されている。

〔平面形・規模〕 平面形・規模は不明であるが、推定径7×6mの楕円形となる可能性がある。

〔壁・床面〕 壁は竪穴部欠損により不明である。床面は貼床によりほぼ平坦に構築していたと思われるが、炉の周辺以外は、検出作業時に第Ⅲ層下面まで掘り下げてしまったため不明である。

〔炉〕 Pit21から北東へ約1m地点から地床炉を検出した。掘り込みはもたず、貼床上を直に燃焼部としている。被熱規模は約33×20cmで、深さは4cm程度である。地床炉南東側からは扁平な礫が出土したが、被熱や使用の痕跡等は確認できなかった。

〔Pit〕 23基のPitを検出した。倒木痕により全体の配置は不明であるが、住居の主軸を北西-南東とした場合、Pit20-16、03ともう1基が対をなす4本による支柱穴であった可能性が考えられる。その他のPitは壁柱穴として住居跡全体を巡るような配置であったと考えられる。

〔覆土〕 掘り下げる際、表土から設定した土層観察用ベルトによって確認できた、わずかに残存する覆土と貼床層を示した。住居跡覆土である第1層は暗褐色土中心で、貼床範囲である第2層は黒褐色土中心である。

〔出土遺物〕 土器が660.2g、石器が94.1g出土した。このうち土器は8点を図示した。内訳はⅢ-1群が4点(図10-3・4・6・7)、Ⅱ~Ⅲ群が4点(図10-1・2・5・8)である。石器は、石核が1点のみ出土した。

〔その他〕 覆土第1層から出土した炭化物の炭素年代測定を行った結果、 $2,399 \pm 17$ (暦年較正用)との値が得られた(第4章第1節)。また、地床炉第1層から土壌を採取し、水洗選別して確認された炭化種実と思われる資料を同定分析したが、同定可能な種実は得られなかった(第4章第2節)。

〔時期〕 炭素年代測定の結果では、縄文時代晩期~弥生時代の年代値が得られたが、出土遺物は小破片で出土数が少ないため詳細な時期は不明である。(新山)

#### 第2号竪穴住居跡 (ASI-02: 図11~13、写真3)

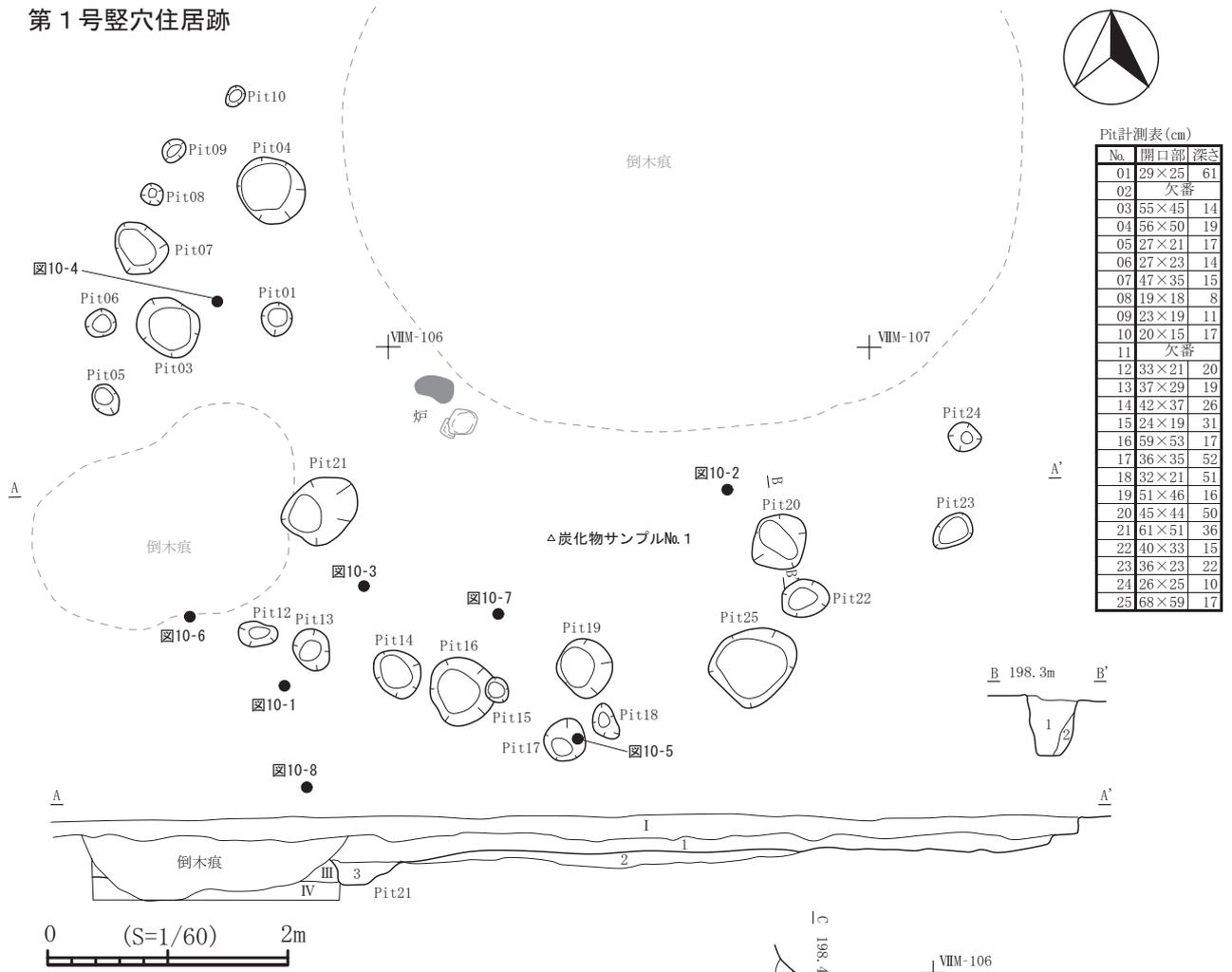
〔位置・確認〕 VII・O-104~106グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で石囲炉・Pitを確認した。

〔重複〕 本遺構の南側、北側および中央部付近は風倒木と思われる痕跡により一部壊されている。

〔平面形・規模〕 平面形・規模は不明であるが、推定径約7mのほぼ円形となる可能性がある。

〔壁・床面〕 壁は竪穴部欠損により不明である。床面はほぼ平坦で、炉の周囲に長軸約6m、短軸約

第1号竪穴住居跡



第1号竪穴住居跡 (A-A')

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 覆土、褐色土(10YR4/6)10%との混合土、ロームブロック10%、炭化物(φ1~3mm)3%未満
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2 貼床層、暗褐色土(10YR3/4)10%との混合土、ローム粒(φ1~3mm)3%未満
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3 Pit21覆土、炭化物(φ1~2mm)

Pit20 (B-B')

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ1~3mm)1%
- 第2層 にふい黄褐色土 10YR4/3 炭化物(φ1~2mm)1%未満

炉 (C-C')

- 第1層 明赤褐色焼土 5YR5/8 褐色土(7.5YR4/6)25%との混合土
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 黄褐色土(10YR5/8)15%、褐色土(10YR4/6)10%との混合土

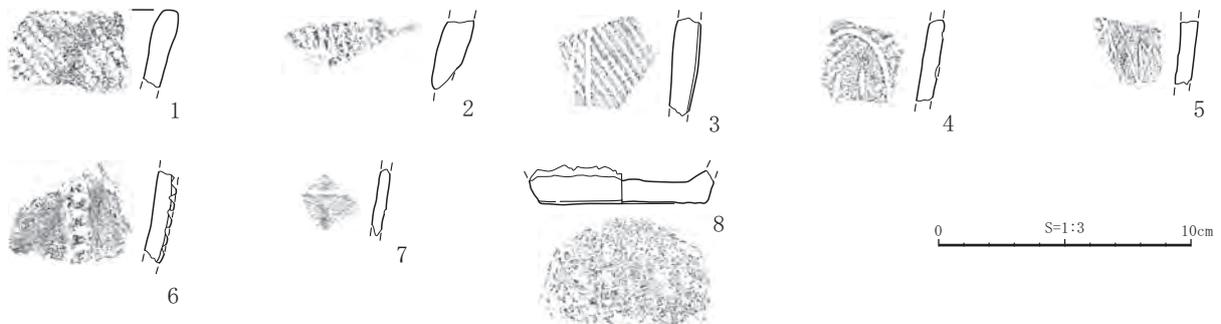
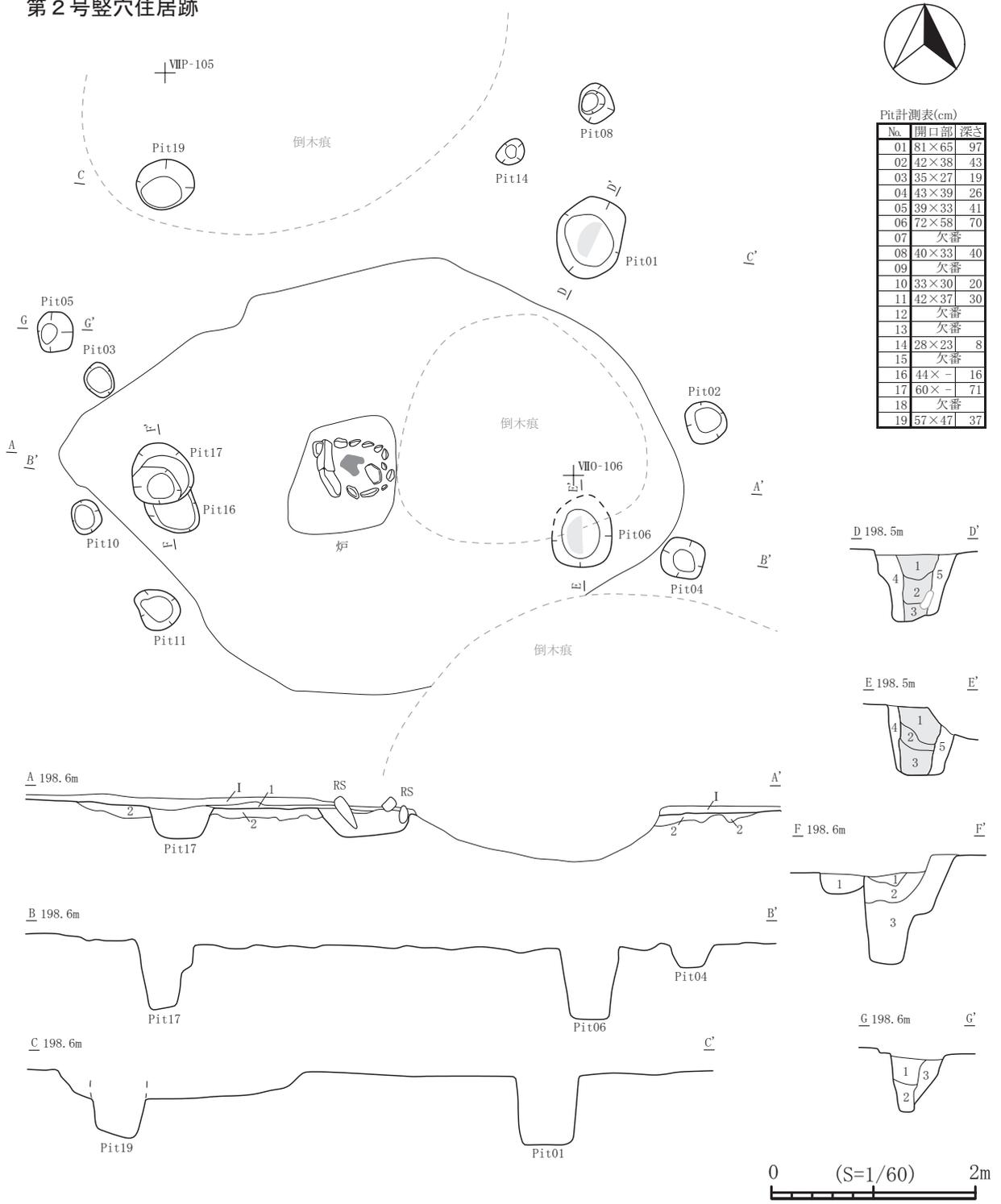


図10 第1号竪穴住居跡・出土遺物

第2号竖穴住居跡



第2号竖穴住居跡(A-A')

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ1~2mm)1%、ローム粒(φ1~3mm)1%
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 黒褐色土(10YR3/2)10%、ローム粒(φ10~80mm)20%、硬化面、貼り床層

Pit01(D-D')

- 第1層 黒褐色土 10YR3/2 炭化物(φ1~4mm)2%、ローム粒(φ1~5mm)1%
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ1~2mm)1%、ローム粒(φ1~6mm)1%
- 第3層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物(φ1~2mm)1%未満、ローム粒(φ1~7mm)1%
- 第4層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ1~2mm)1%未満、ローム粒(φ1~2mm)1%未満
- 第5層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ1~2mm)1%、ローム粒(φ1~3mm)1%未満

Pit06(E-E')

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ1~5mm)2%、ローム粒(φ1~4mm)1%
- 第2層 暗褐色土 10YR3/2 炭化物(φ1~5mm)1%、ローム粒(φ1~2mm)1%未満
- 第3層 暗褐色土 10YR2/3 炭化物(φ1~4mm)1%、ローム粒(φ1~5mm)1%
- 第4層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ1~2mm)1%、ローム粒(φ1~3mm)1%
- 第5層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ1~3mm)1%、ローム粒(φ1mm以下)1%未満

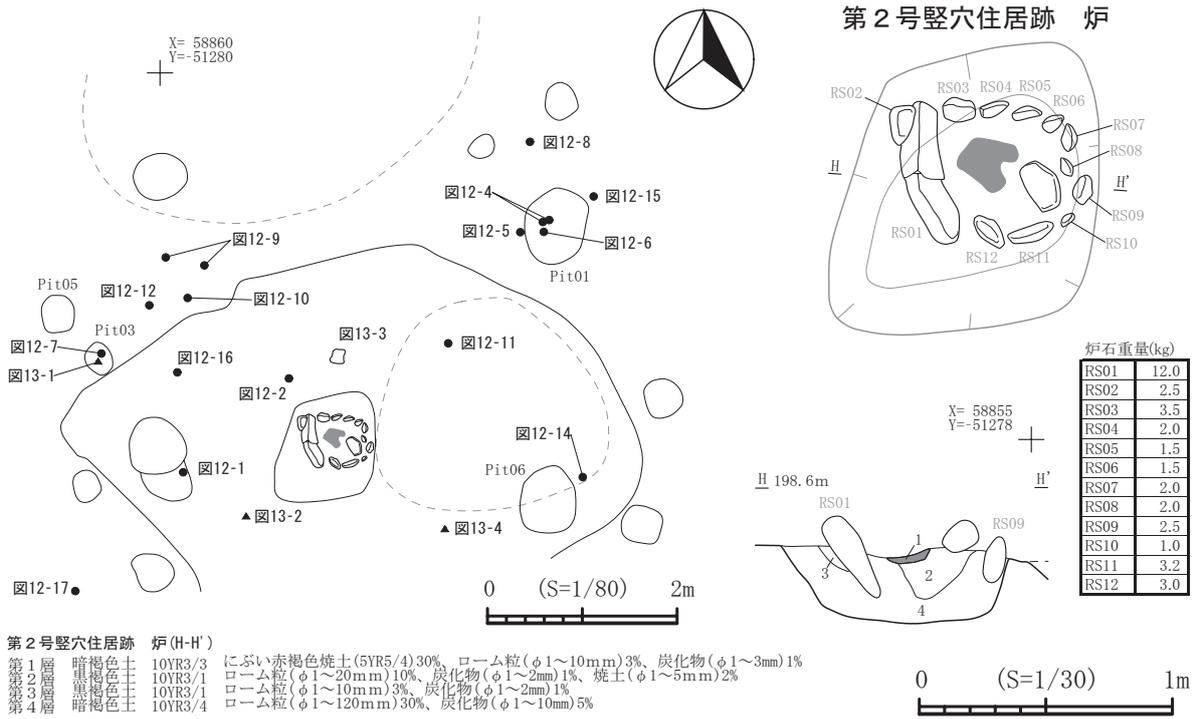
Pit16・17(F-F')

- Pit16 第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ1~3mm)1%、ローム粒(φ1~2mm)1%
- Pit17 第1層 黒褐色土 10YR3/2 炭化物(φ1~4mm)2%、ローム粒(φ1~2mm)1%
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ1~2mm)2%、ローム粒(φ1~3mm)1%
- 第3層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ1~6mm)3%、ローム粒(φ1mm)2%

Pit05(G-G')

- 第1層 黒褐色土 10YR3/2 炭化物(φ1~2mm)1%未満、ローム粒(φ1~2mm)1%未満
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物(φ1~5mm)1%、ローム粒(φ1~3mm)1%
- 第3層 褐色土 10YR4/4 炭化物(φ1mm)1%未満、ローム粒(φ1~3mm)1%未満

図11 第2号竖穴住居跡(1)



第2号竪穴住居跡 炉(H-H')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 にぶい赤褐色焼土(5YR5/4)30%、ローム粒(φ1~10mm)3%、炭化物(φ1~3mm)1%  
 第2層 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒(φ1~20mm)10%、炭化物(φ1~2mm)1%、焼土(φ1~5mm)2%  
 第3層 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒(φ1~10mm)3%、炭化物(φ1~2mm)1%  
 第4層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒(φ1~120mm)30%、炭化物(φ1~10mm)5%

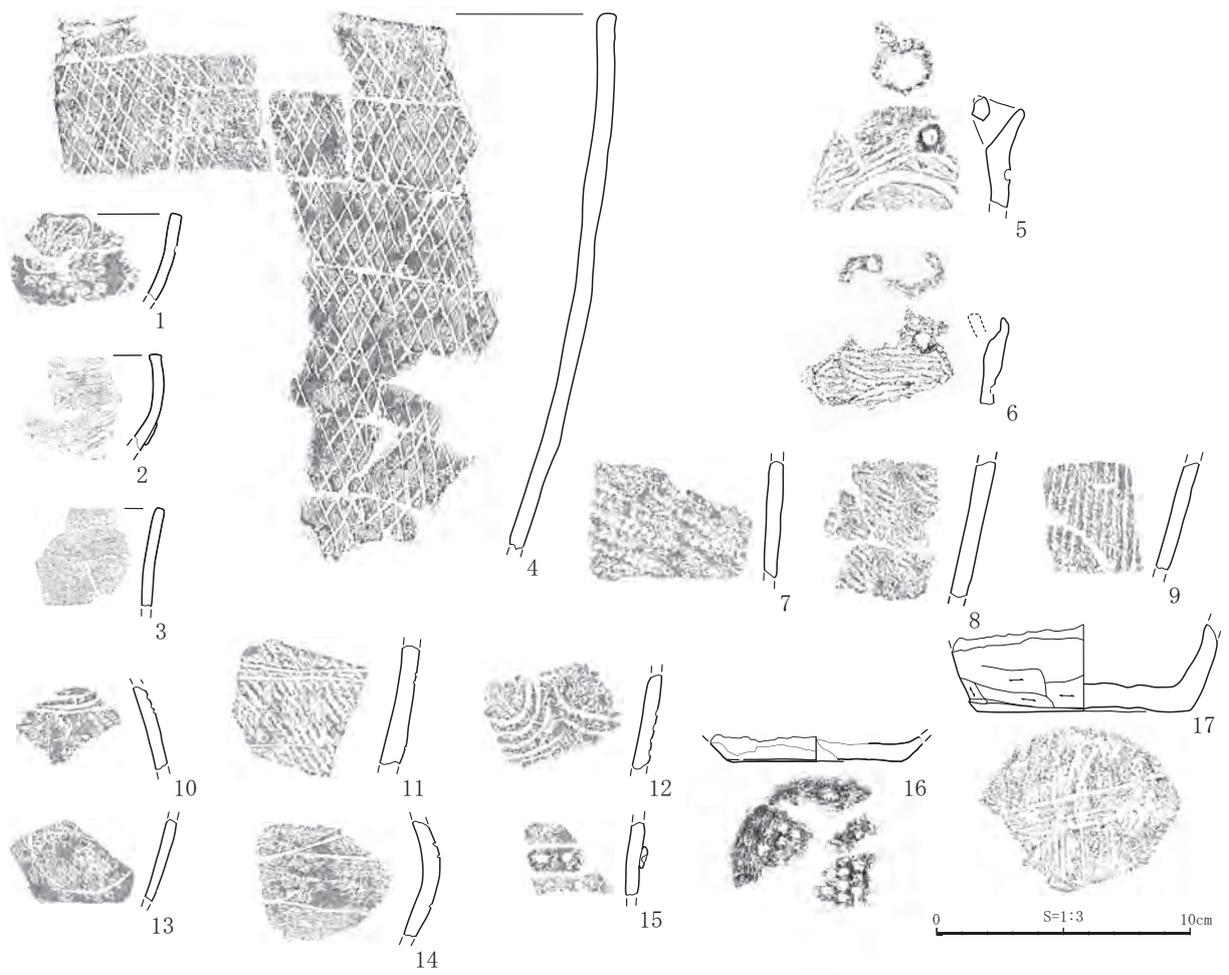


図12 第2号竪穴住居跡(2)・出土遺物(1)

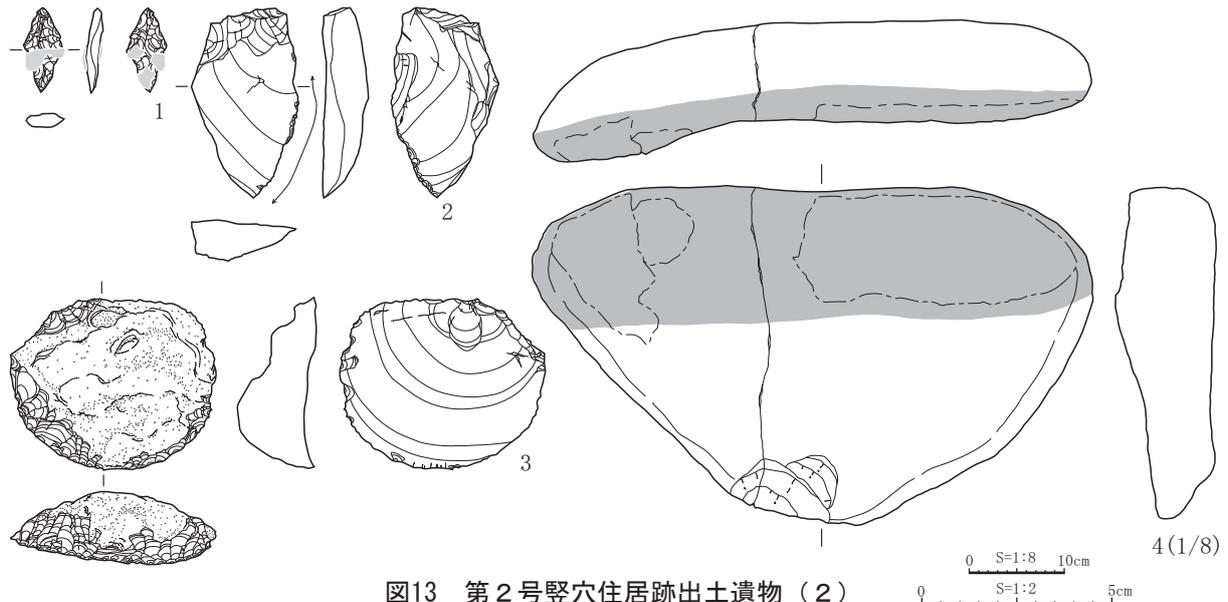


図13 第2号竪穴住居跡出土遺物(2)

4 mの貼床範囲を確認した。

〔炉〕 貼床範囲のほぼ中央から石囲炉を検出した。炉の外径は約87×66cmの方形で、西側の側辺には大型の石が据えられている。焼土は残存状況がわるく暗褐色土中に混在する程度である。石囲炉の北側では、比較的大型の被熱礫が散在的に出土している。被熱礫は住居内堆積土から出土しており、周辺に焼土等は確認されなかった。石囲炉下部には黒褐色土の落ち込みがみられるが、炉石を据える程度の掘方を想定するには深すぎるため、炉の改修・造りかえなどの可能性も考えられる。

〔Pit〕 Pitは13基検出した。主柱穴はPit01・06・17・19の4本柱である。この内Pit01・06からは柱痕を検出した。主柱穴の規模は、壁際に並ぶ他のピットと比較して大型である。

〔覆土〕 覆土は炭化物が少量混入する暗褐色土である。第2層は貼床層で地山粘土がブロック状に混入する。

〔出土遺物〕 土器が1673.6 g、石器が30849.1 g出土した。このうち土器は17点を図示した。内訳はⅢ-1群が10点(図12-1・2・5・6・10~15)、Ⅱ~Ⅲ群が7点(図12-3・4・7~9・16・17)である。図12-4・5はPit01覆土、図12-7はPit03覆土、図12-13はPit05覆土から出土した。石器は4点を図示した。器種内訳は石鏃1点(図13-1)、搔器1点(図13-3)、二次調整のある剥片5点、微小剥離痕のある剥片7点(図13-2)、その他の礫(被熱礫)1点(図13-4)である。図13-1はPit03から出土しアスファルトが付着している。

〔時期〕 Pit出土遺物から、縄文時代中期末葉~後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。(最上)

### 第3号竪穴住居跡 (ASI-03: 図14~17、写真4・5)

〔位置・確認〕 VII M~O-103~105グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で石囲炉・Pitを確認した。

〔重複〕 本遺構の北西半と中央は風倒木と思われる痕跡により一部壊されている。

〔平面形・規模〕 平面形・規模は不明であるが、推定径約9×8 mの楕円形となる可能性がある。

〔壁・床面〕 壁は竪穴部欠損により不明である。床面はほぼ平坦で、炉の周囲に貼床範囲を確認した。

〔炉〕 Pit25から北西へ約1 m地点から石囲炉を検出した。炉の北半は風倒木と思われる痕跡により

第3号竖穴住居跡

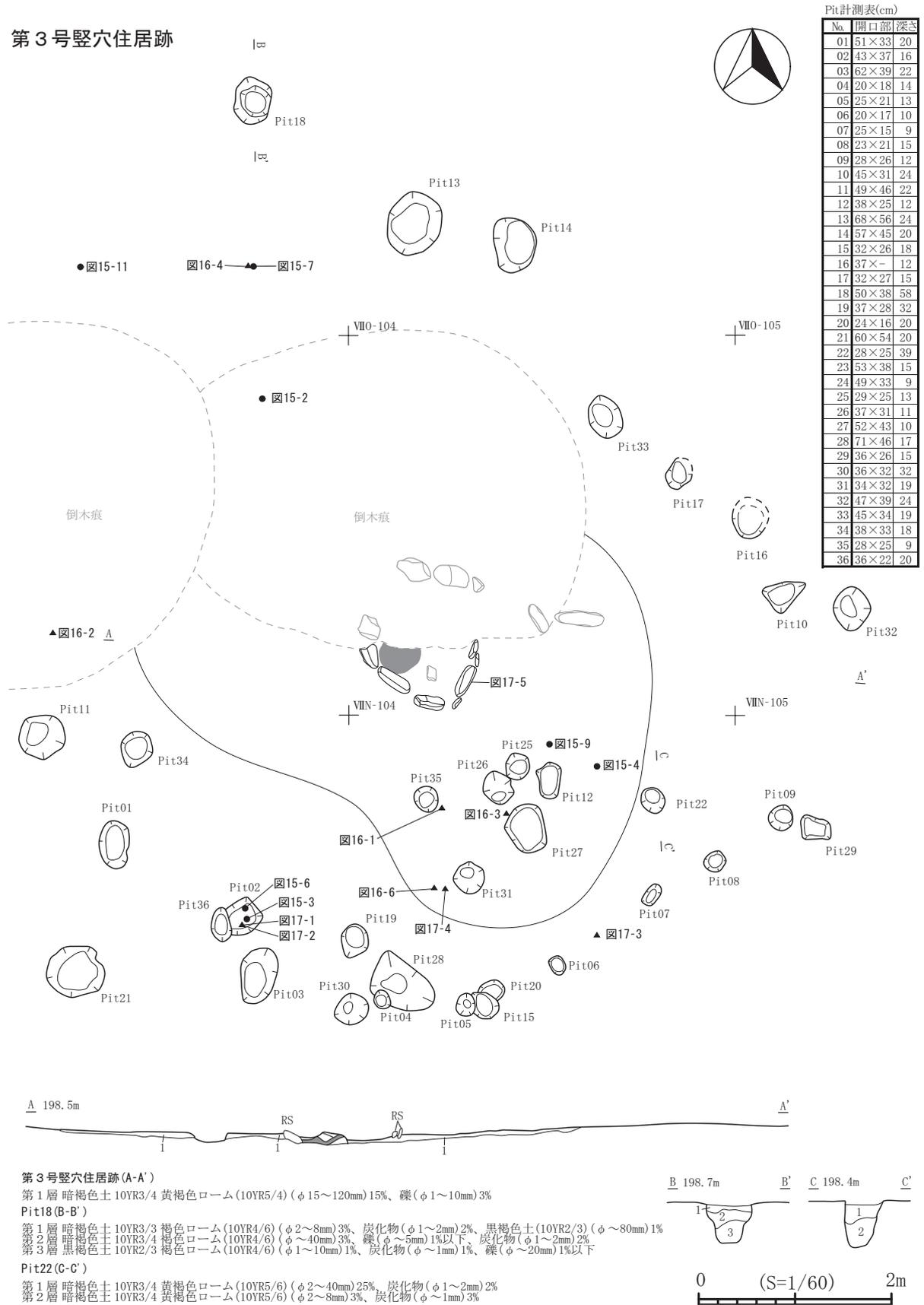


図14 第3号竖穴住居跡(1)

第3号竖穴住居跡 炉

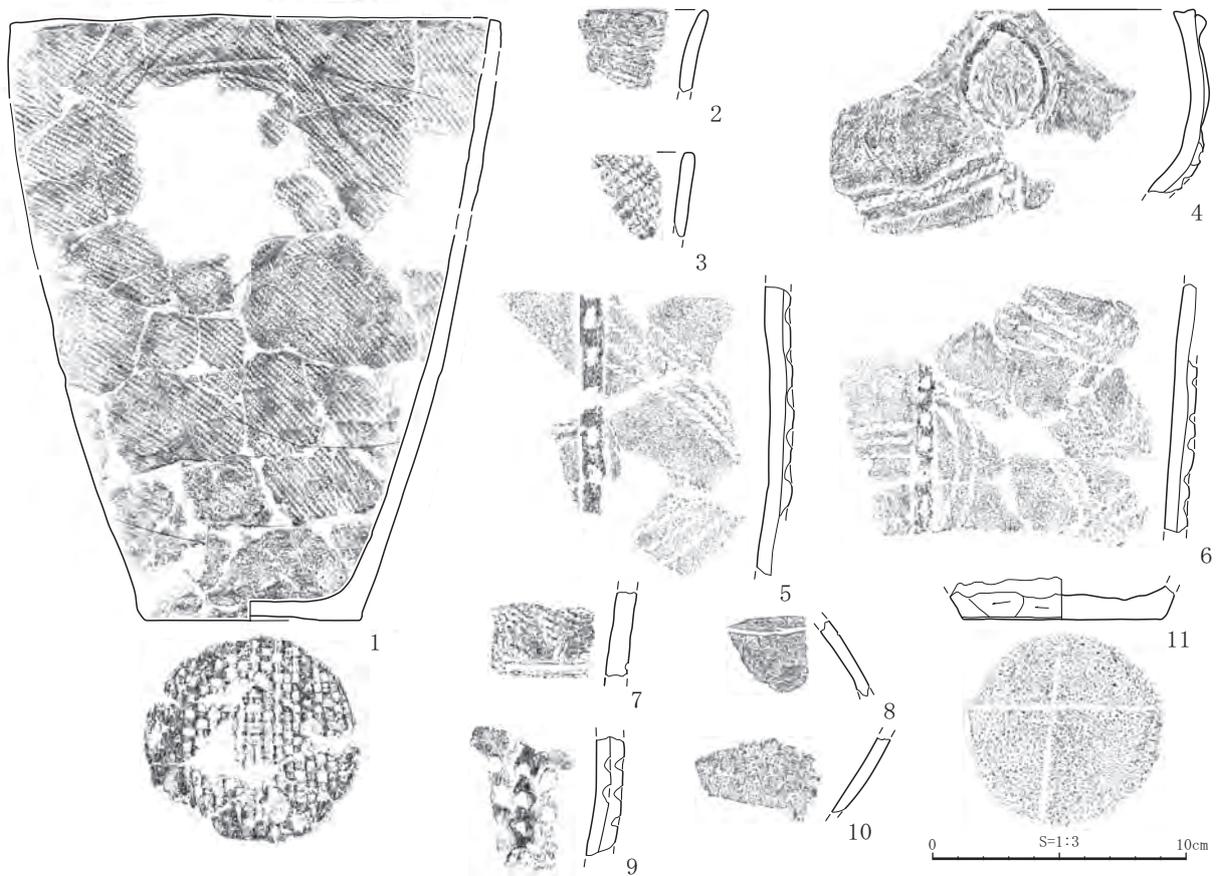
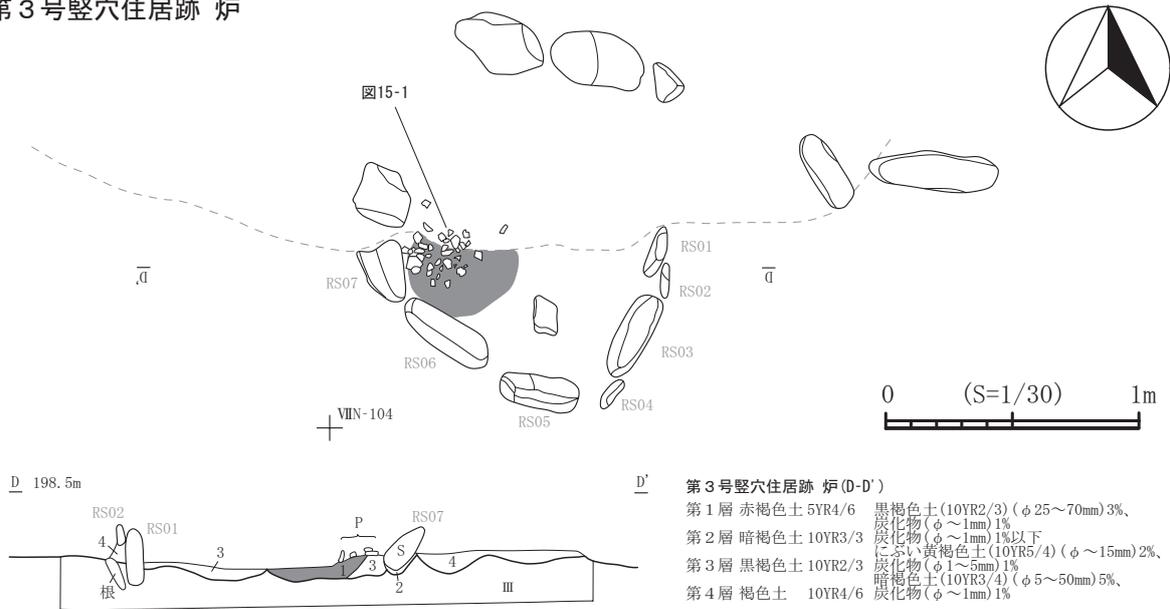


図15 第3号竖穴住居跡 (2)・出土遺物 (1)

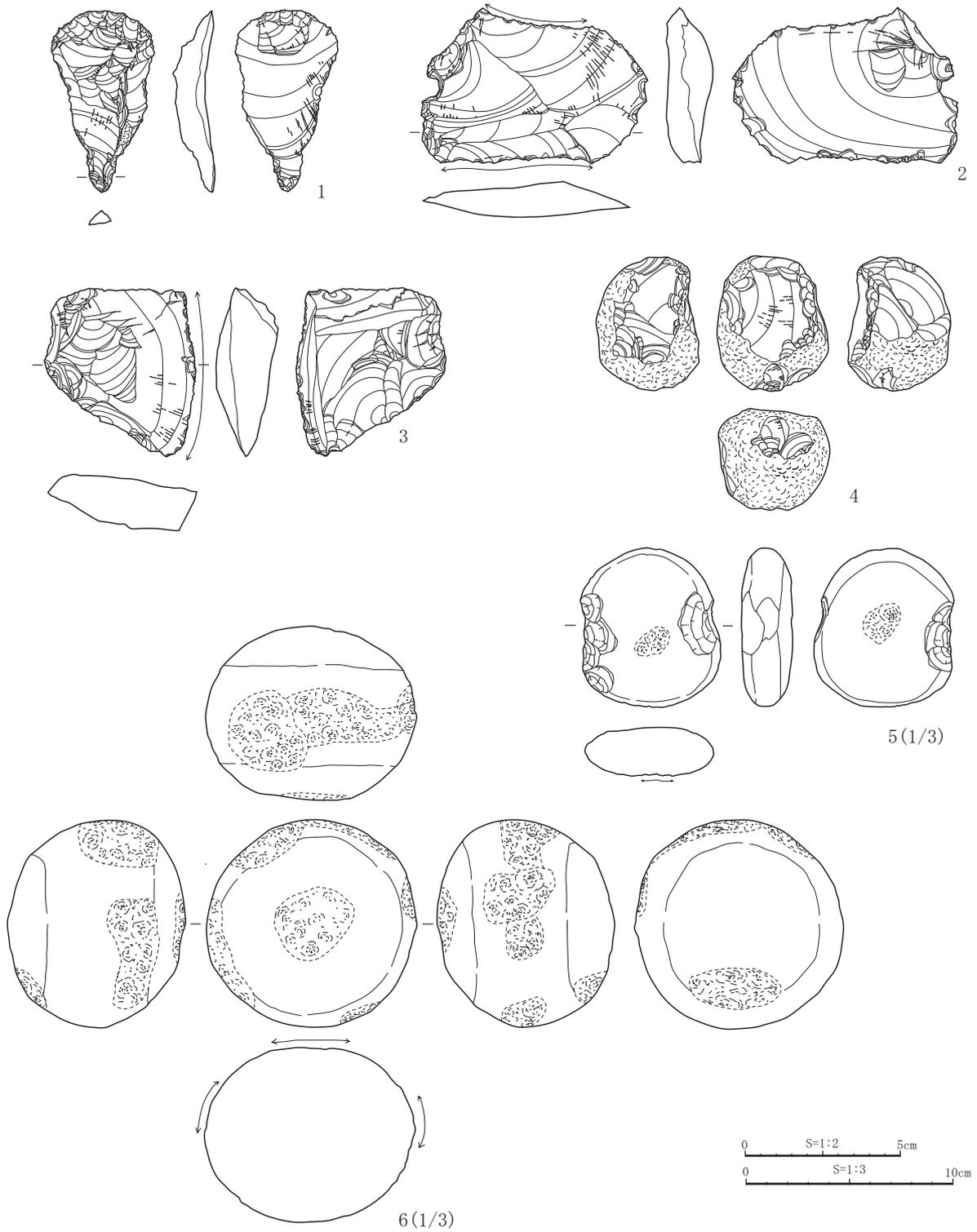


图16 第3号竖穴住居跡出土遺物（2）

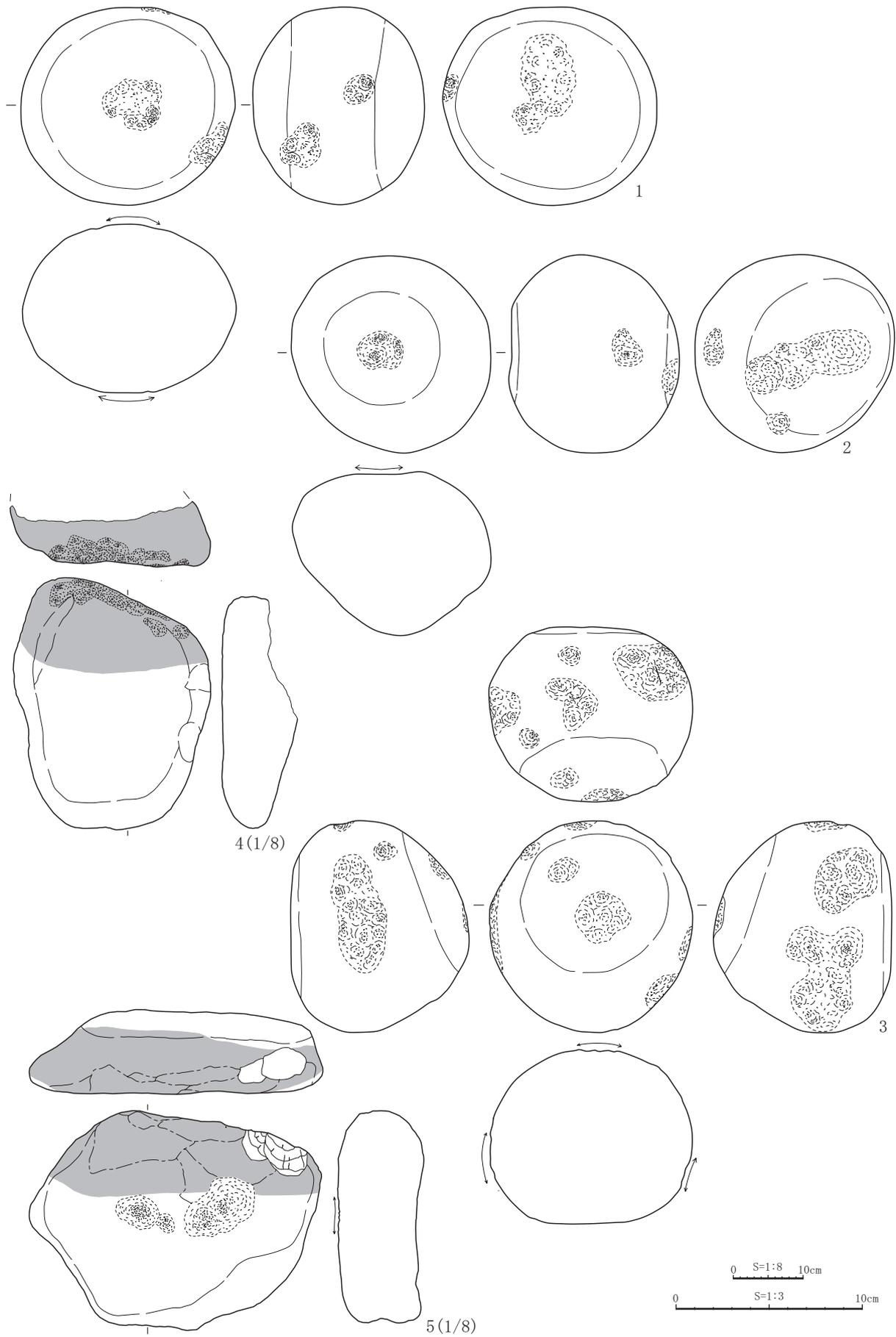


图17 第3号竖穴住居跡出土遺物(3)

第4号竖穴住居跡

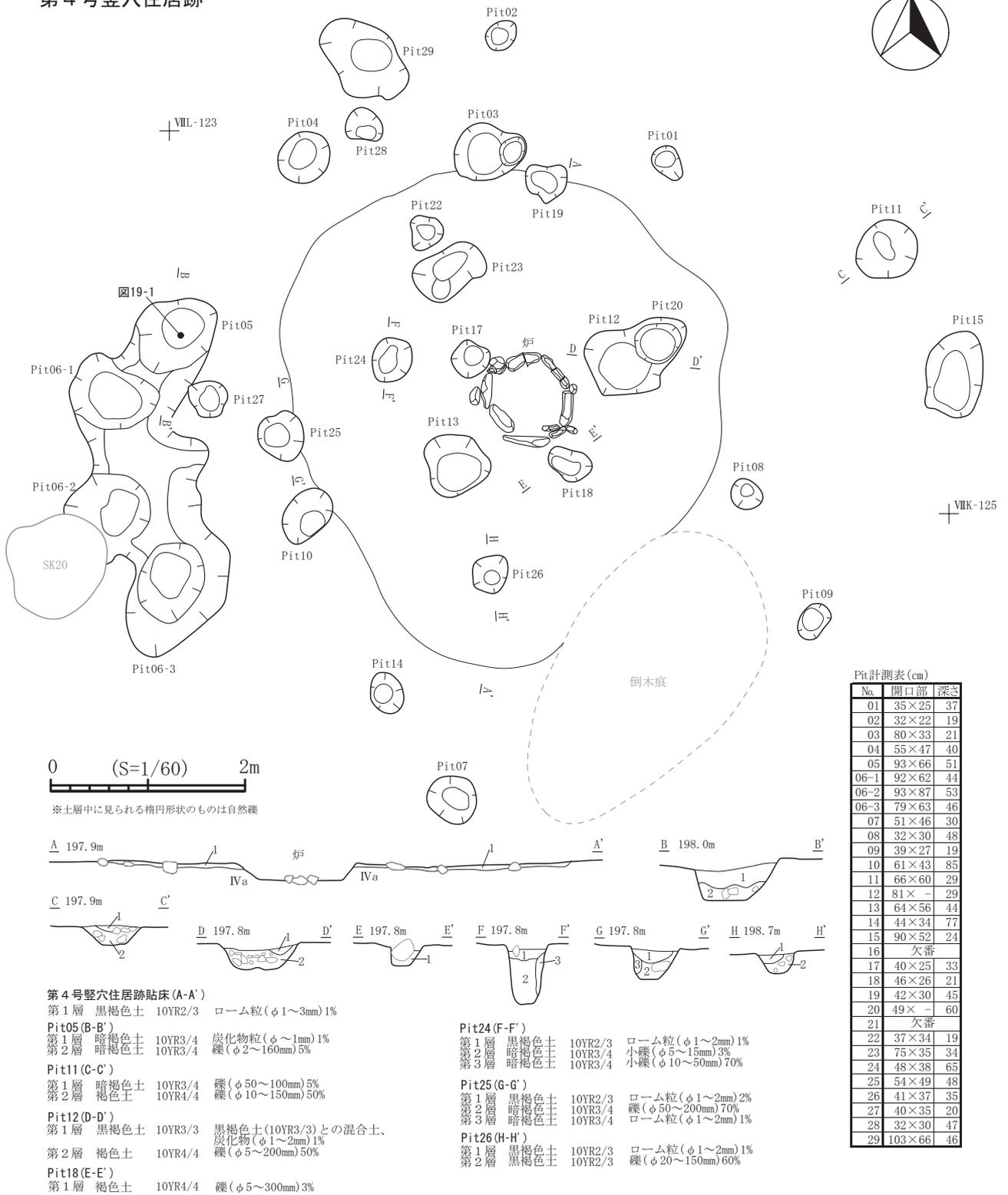


図18 第4号竖穴住居跡 (1)

壊されているが、残存する炉石の配置から炉はほぼ長方形に組まれたものと思われ、炉の外径は長軸137cm前後と推定される。炉石は掘方を掘り込んでいるものの、燃焼部は貼床上を直に用いている。焼土は炉内の西寄りから確認された。範囲は径約50cm、厚さは約10cm程であるが、色調も明るくなく、また、硬く締まっていなかったため明瞭でなかった。遺物は、焼土直上から深鉢土器が出土したが、ほぼ完形となるまで接合・復元できたため、土器片敷炉もしくは埋甕炉であった可能性がある。

[Pit] 36基のピットを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、主柱穴はPit03・10・14ともう1基の4本柱であると考えられる。その他のPitは住居跡を壁伝いに弧状に巡るものと思われるが、住居南西側で重複するものがあることから、住居の拡張を行った可能性がある。

[覆土] 竪穴部欠損のため、貼床範囲の覆土を示した。貼床範囲第1層は暗褐色土中心である。

[出土遺物] 土器が1707.6g、石器が35390.3g出土した。うち、土器は11点を図示した。内訳はⅢ-1群が6点(図15-4~9)、Ⅱ~Ⅲ群が5点(図15-1~3・10・11)である。図15-1は炉の焼土直上から出土したものである。炉内からは1114.9gの土器が出土し、1個体の深鉢に接合・復元できた。石器は11点を図示した。器種内訳は石錘1点(図16-1) 削器1点(図16-2)、二次調整のある剥片6点、微小剥離痕のある剥片8点(図16-3)、敲き石5点(図16-4・6、図17-1~3)、石錘1点(図16-5)、その他の礫として、被熱礫が2点(図17-4・5)である。図17-1・2はPit02覆土から出土した。敲き石1点(図16-4)は剥片素材である。

[時期] 炉内出土遺物から、縄文時代中期末葉~後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。(平山)

#### 第4号竪穴住居跡 (ASI-04: 図18・19、写真4・5)

[位置・確認] VIIJ~L-122~125グリッドに位置している。第IV a層上面で石囲炉・貼床を確認した。

[重複] Pit06-2が第20号土坑と重複し、Pitが古い。南東側は風倒木と思われる痕跡により一部壊されている。

[平面形・規模] 平面形・規模は不明であるが、推定径約6mのほぼ円形となる可能性がある。

[壁・床面] 壁は竪穴部欠損により不明である。床面はほぼ平坦で、炉を中心に直径約4mの貼床範囲を確認した。

[炉] 貼床範囲のほぼ中央から石囲炉を検出した。石囲炉は8個ほどの石でほぼ円形に組み立てられ、炉の外径は約117×96cmである。焼土は確認できなかったが、炉石の内側は黒褐色に変色しており、炉内覆土第2層まで炉石が埋設されてきたものと考えられる。炉石埋設の掘り方はドーナツ状を呈しており、北側は地山(第IV a層)まで掘り込まれていないことを確認した。

[Pit] 29基のPitを検出した。住居の主軸を北東-南西とした場合、主柱穴はPit19-27、08-14が対をなす4本柱であると考えられる。

[覆土] 竪穴部欠損のため、貼床範囲の覆土を示した。貼床範囲第1層は黒褐色土中心である。

[出土遺物] 土器が209.7g出土し、このうち3点を図示した。内訳はⅡ~Ⅲ群が3点(図19-1~3)で、図19-2はPit01から、図19-3はPit06から出土したものである。

[その他] 石囲炉覆土第2・3層から土壌を採取し、水洗選別して確認された炭化種実と思われる資料を同定分析したが、同定可能な種実は得られなかった(第4章第2節)。

[時期] 出土遺物は小破片で出土数が少ないため詳細な時期は不明である。(新山)

第4号竪穴住居跡 炉

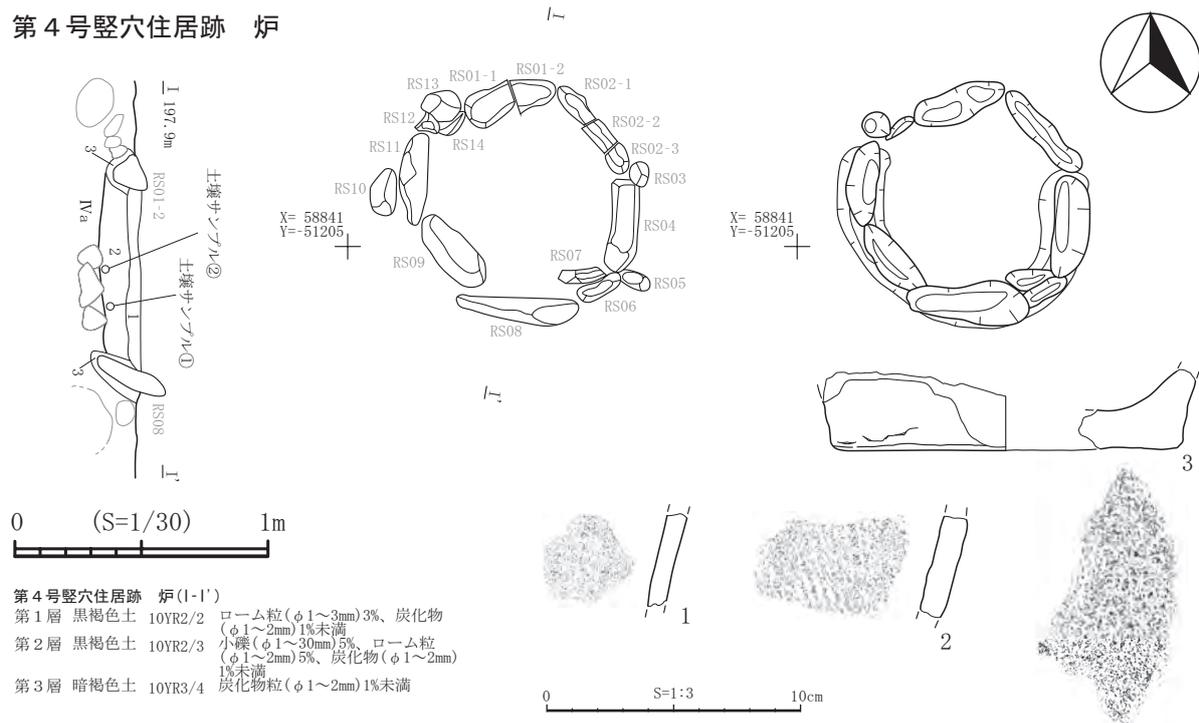


図19 第4号竪穴住居跡(2)・出土遺物

第5号竪穴住居跡 (ASI-05: 図20~22、写真5)

[位置・確認] VII M・N-123・124グリッドに位置している。第Ⅲ層上面で石囲炉・貼床を確認した。

[重複] 遺構との重複はないが、北・南側は風倒木と思われる痕跡および用途不明な落ち込み(SX-06・07)により一部壊されている。

[平面形・規模] 平面形・規模は不明であるが、推定径約5mのほぼ円形となる可能性がある。

[壁・床面] 壁は竪穴部欠損により不明である。床面は貼床によりほぼ平坦に構築されているが、貼床範囲ほぼ中央から焼土や炭化物を多く含む範囲を検出した。規模は約170×100cmで、深さは3~7cm程度である。被熱したというよりは焼土・炭化物を集めて踏み固めたという印象を受けた。

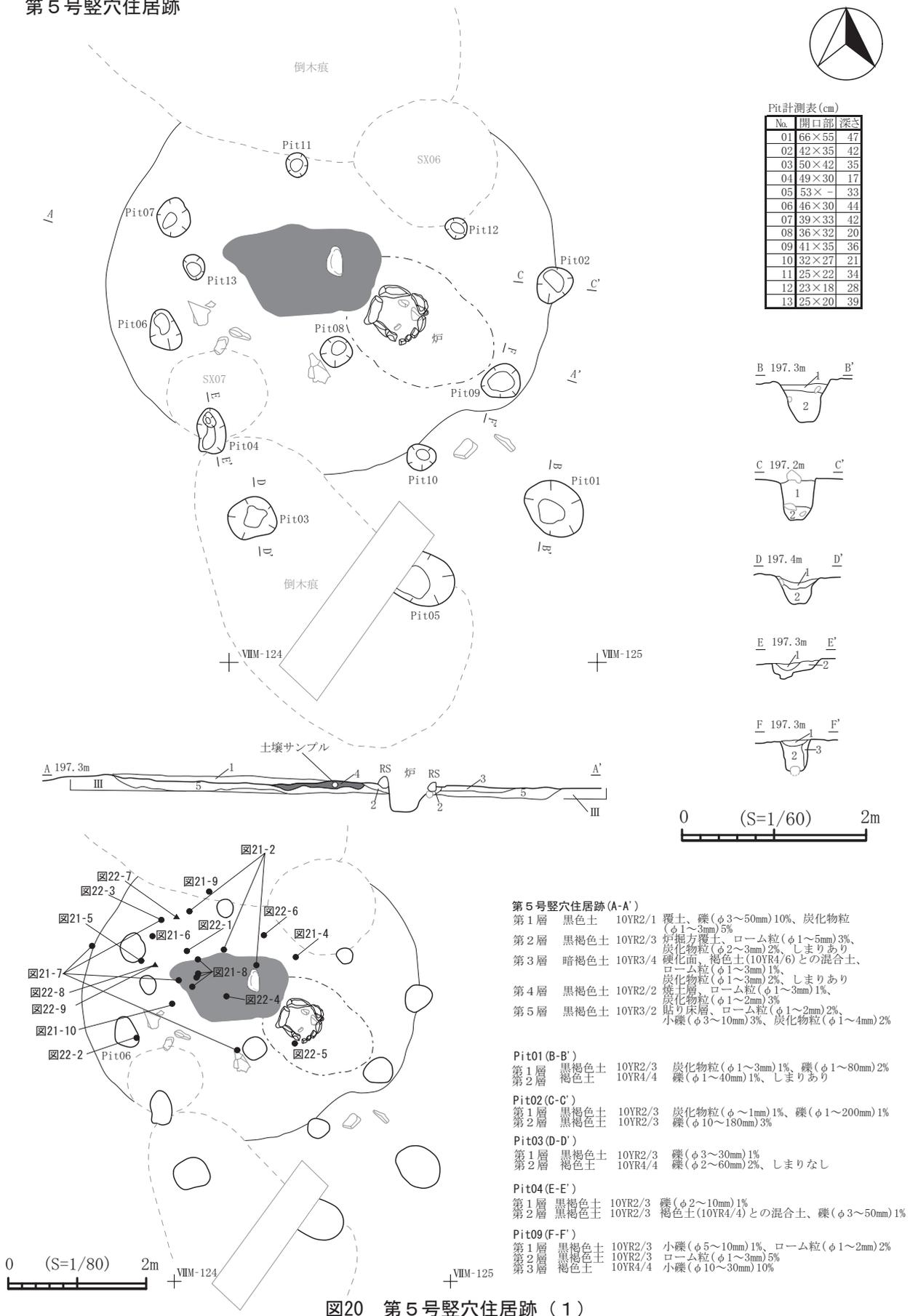
[炉] 貼床範囲の中央よりやや南東寄りから石囲炉を検出した。石囲炉は10個ほどの石で方形に組まれており、炉の外径は約70cmである。炉堆積土第1層下面から第3層にかけて、小破片状になった深鉢形土器1個体が出土した。炉内部には、南西側に偏って径33×25cm、深さ11cmの掘り込みも確認されたことから、小破片状になった深鉢形土器が埋設されていたことも考えられる。焼土は確認できなかったが、炉石の内側は黒褐色に変色していた。また、石囲炉の外側は、径1.7×1.2mの範囲で堅く締まっているのを確認した。

[Pit] 13基のPitを検出した。住居の主軸を北東-南西とした場合、支柱穴はPit11-06、02-10が対をなすの4本柱であると考えられる。

[覆土] 竪穴部欠損のため、わずかに残存する覆土と貼床層を示した。住居跡覆土である第1層は黒色土中心で、貼床範囲である第3層は暗褐色土中心の硬化部分、第4層は黒褐色土中心の焼土・炭化物層、第5層は黒褐色土中心である。

[出土遺物] 土器が4081.7g、石器が927.2g出た。このうち土器は16点を図示した。内訳はⅢ-1

第5号竖穴住居跡



第5号竖穴住居跡 炉

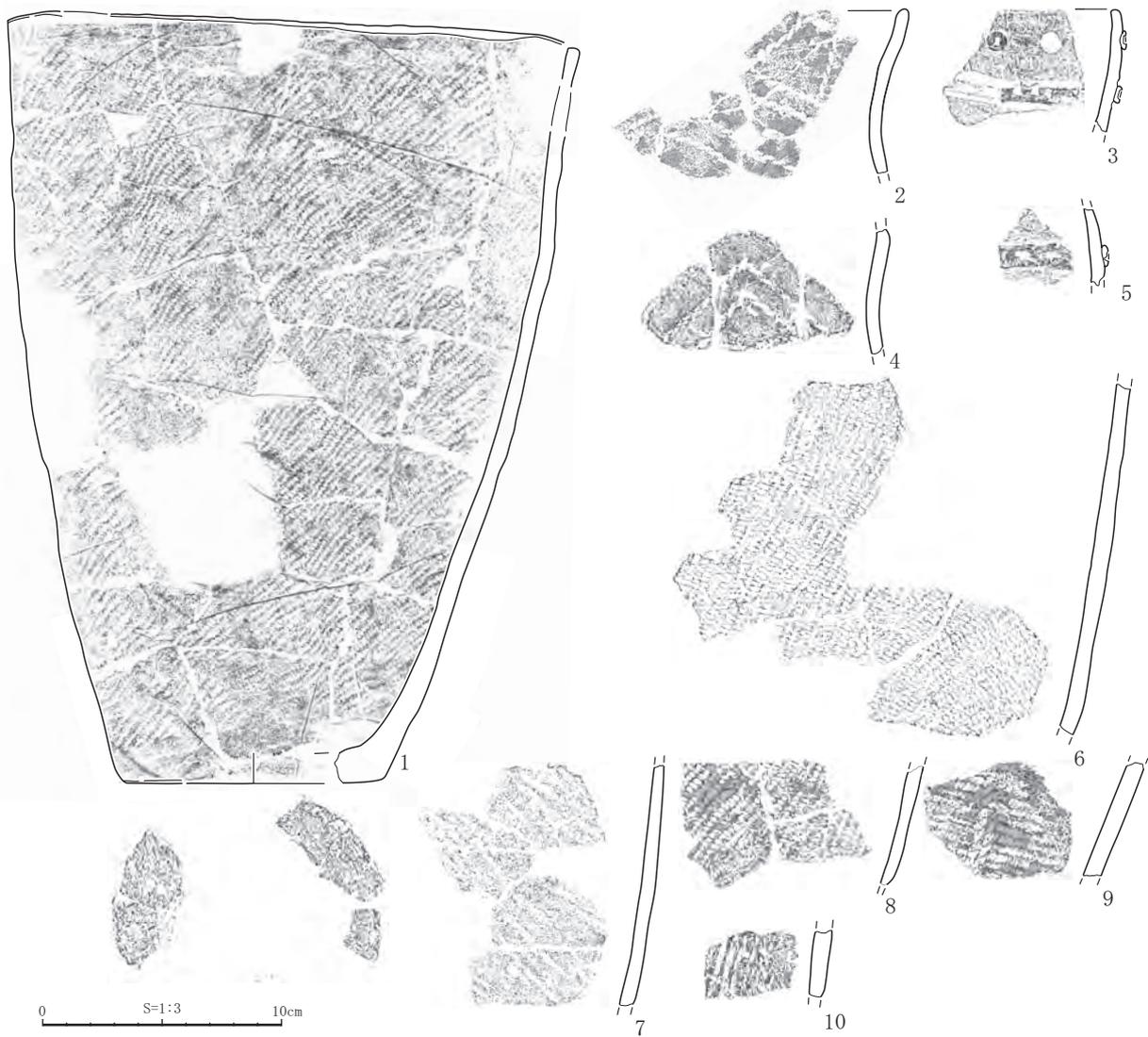
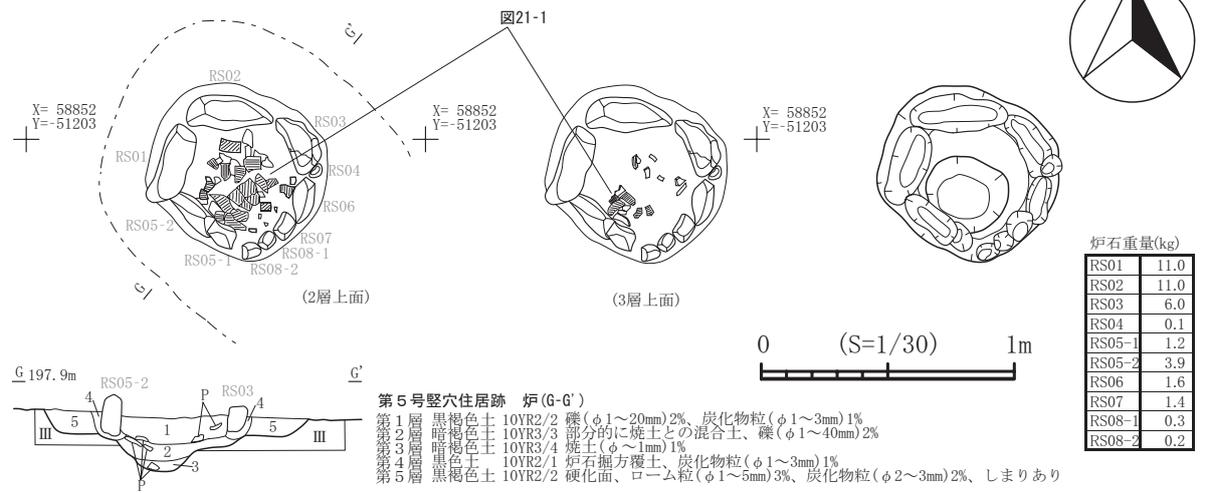


図21 第5号竖穴住居跡(2)・出土遺物(1)



図22 第5号竪穴住居跡出土遺物（2）

群が7点（図21-2~5・図22-2~4）、Ⅱ~Ⅲ群が9点（図21-1・6~10・図22-1・5・6）である。図21-1・7は炉から出土した。石器は3点を図示した。器種内訳は削器1点（図22-7）、二次調整のある剥片1点、微小剥離痕のある剥片5点（図22-8・9）、敲き石3点（図22-10~12）である。

〔その他〕石囲炉覆土第1層から土壌を採取し、水洗選別して確認された炭化種実を同定分析したところ、オニグルミ・クリがわずかに得られた（第4章第2節）。

〔時期〕炉内出土遺物から、縄文時代中期末葉~後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。（新山）

#### 第6号竪穴住居跡（ASI-06：図23、写真6）

〔位置・確認〕ⅦI~K-125・126グリッドに位置している。第Ⅳa層上面で多数のPitを確認した。

〔平面形・規模〕平面形・規模は不明であるが、推定径約7mのほぼ円形となる可能性がある。

第6号竖穴住居跡

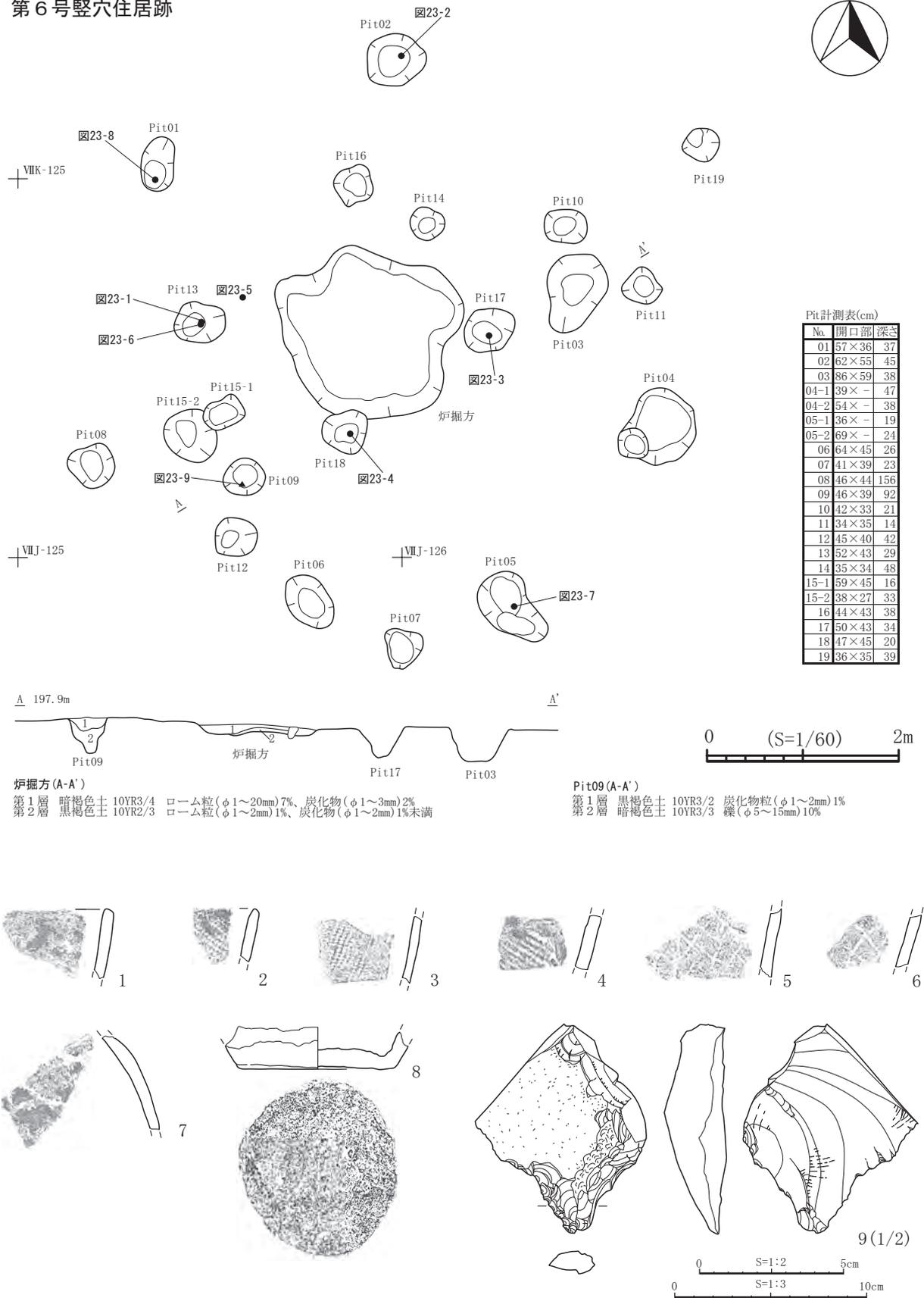


図23 第6号竖穴住居跡・出土遺物

〔壁・床面〕壁は竪穴部欠損により不明である。床面は全体的に貼床をしていた可能性があるが、検出作業時に第Ⅳ a 層まで掘り下げてしまったため不明である。

〔炉〕Pit17・18と接するように炉の掘方と思われる落ち込みを検出した。掘方の規模は約1.9×1.8mで、深さは10cm程度である。焼土は炉内覆土第1層にブロック状で含まれる程度であった。

〔Pit〕22基のPitを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、Pit01・02、Pit04・07、Pit10・15は対をなしていると考えられる。

〔覆土〕竪穴部欠損のため、覆土は不明である。

〔出土遺物〕土器が238.4g、石器が59.8g出土した。このうち土器は8点を図示した。内訳はⅢ-1群が1点(図23-7)、Ⅱ~Ⅲ群が7点(図23-1~6・8)である。図23-8はPit01覆土、図23-2はPit02覆土、図23-7はPit05覆土、図23-1・6はPit13覆土、図23-3はPit17覆土、図23-4はPit18覆土から出土した。石器は1点を図示した。器種内訳は石錐1点(図23-9)、二次調整のある剥片1点、微小剥離痕のある剥片2点である。

〔時期〕Pit出土遺物から、縄文時代中期末葉~後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。(新山)

#### 第7号竪穴住居跡(ASI-07:図24、写真6)

〔位置・確認〕ⅦN~P-120~122グリッドに位置している。第Ⅳ a 層上面で多数のPitを確認した。

〔重複〕遺構との重複はないが、東側は現代の攪乱により一部壊されている。

〔平面形・規模〕平面形・規模は不明であるが、推定径約7mのほぼ円形となる可能性がある。

〔壁・床面〕壁は竪穴部欠損により不明である。床面は全体的に貼床、もしくは住居跡南側は傾斜しているため、第Ⅲ a 層を床面としていた可能性があるが、検出作業時に第Ⅳ a 層まで掘り下げてしまったため不明である。

〔炉〕Pit08から北へ約1m地点から炉の掘方と思われる落ち込みを検出した。掘方の規模は約2.5×1.9mで、深さは10~12cm程度である。焼土は確認できなかった。

〔Pit〕24基のPitを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、主柱穴はPit19-15、18-21が対をなすの4本柱であると考えられる。

〔堆積土〕竪穴部欠損のため、覆土は不明である。

〔出土遺物〕土器が220.7g出土し、このうち3点を図示した。内訳はⅡ~Ⅲ群が3点(図24-1~3)で、図24-1は炉の掘方から出土したものである。

〔その他〕炉検出面から出土した炭化物の炭素年代測定を行った結果、 $637 \pm 16$ (暦年校正用)との値が得られた(第4章第1節)。調査時は、炉掘り方上に散在する礫を石囲炉関連のものと考え炭素年代測定を行ったものであるが、後世の炭化物が礫と一緒に攪拌されたものと考えられる。

〔時期〕出土遺物は小破片で出土数が少ないため詳細な時期は不明である。なお、炭素年代測定の結果は、後世の攪乱の影響を受けた可能性が高いものと考えられる。(新山)

#### 第8号竪穴住居跡(ASI-08:図25・26、写真7・8)

〔位置・確認〕ⅦO~Q-117・119グリッドに位置している。第Ⅳ a 層上面で石囲炉・貼床を確認した。

〔平面形・規模〕平面形・規模は不明であるが、推定径約8mのほぼ円形となる可能性がある。

第7号竖穴住居跡

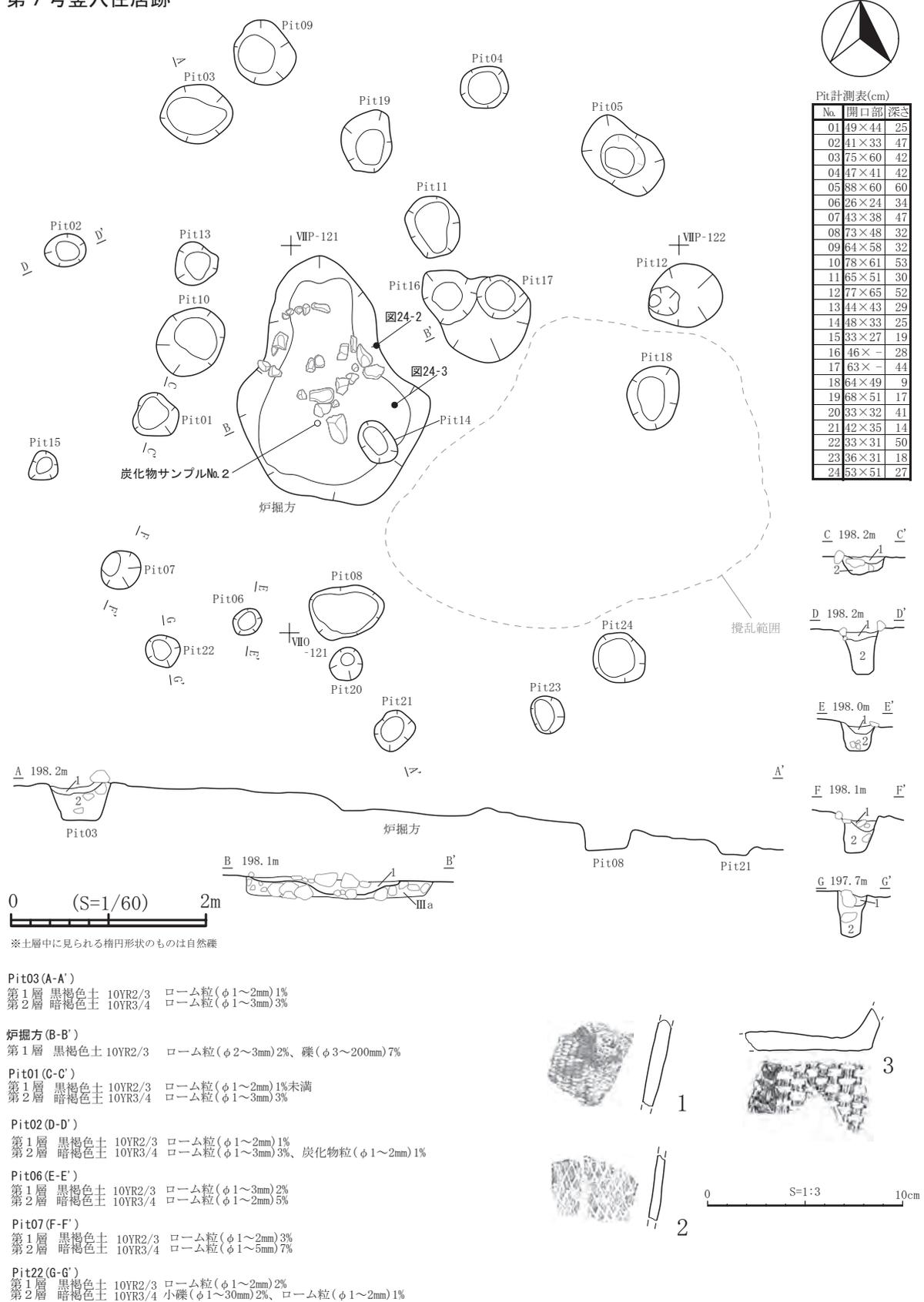


図24 第7号竖穴住居跡・出土遺物

第8号竖穴住居跡

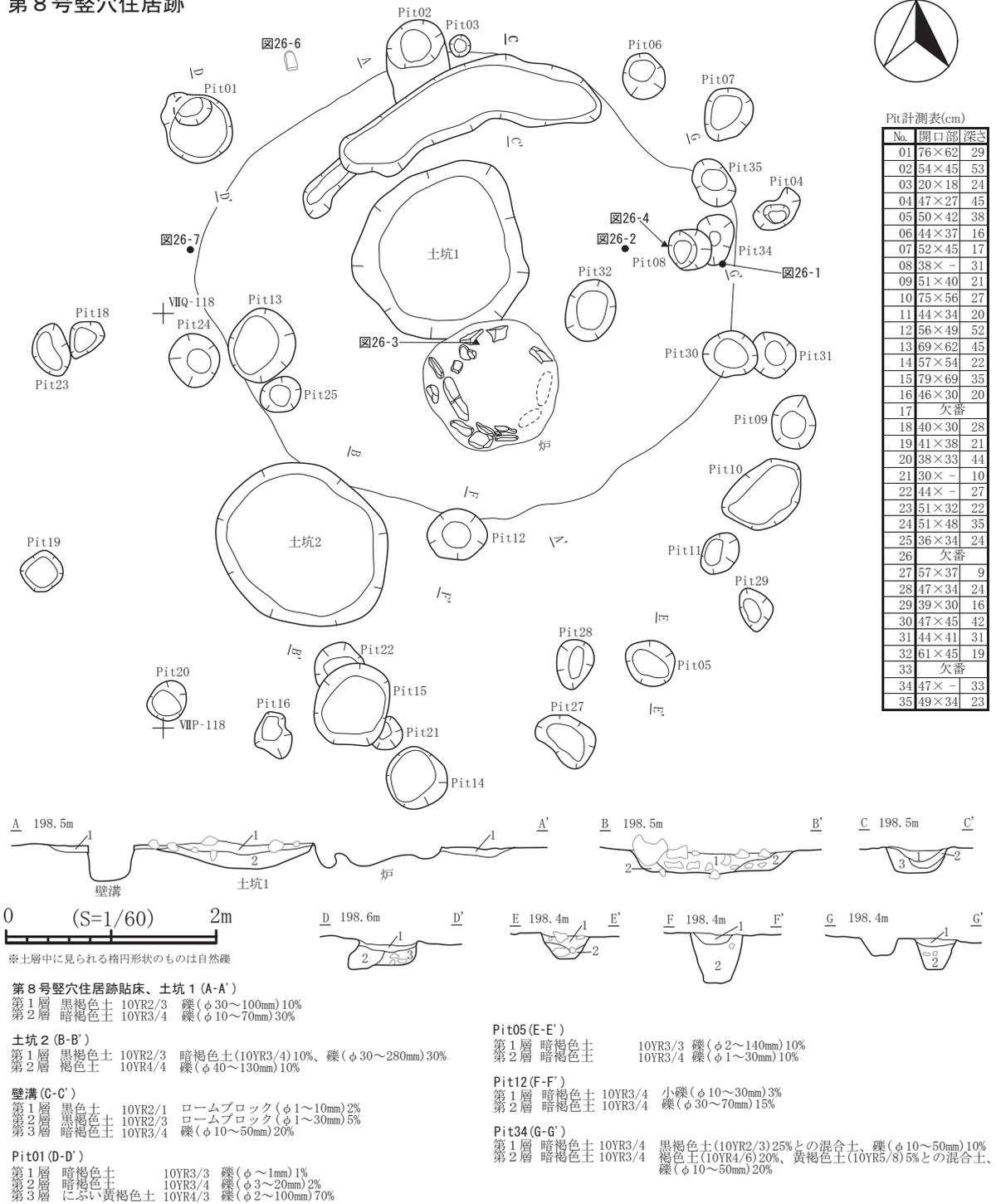


図25 第8号竖穴住居跡(1)

第8号竖穴住居跡 炉

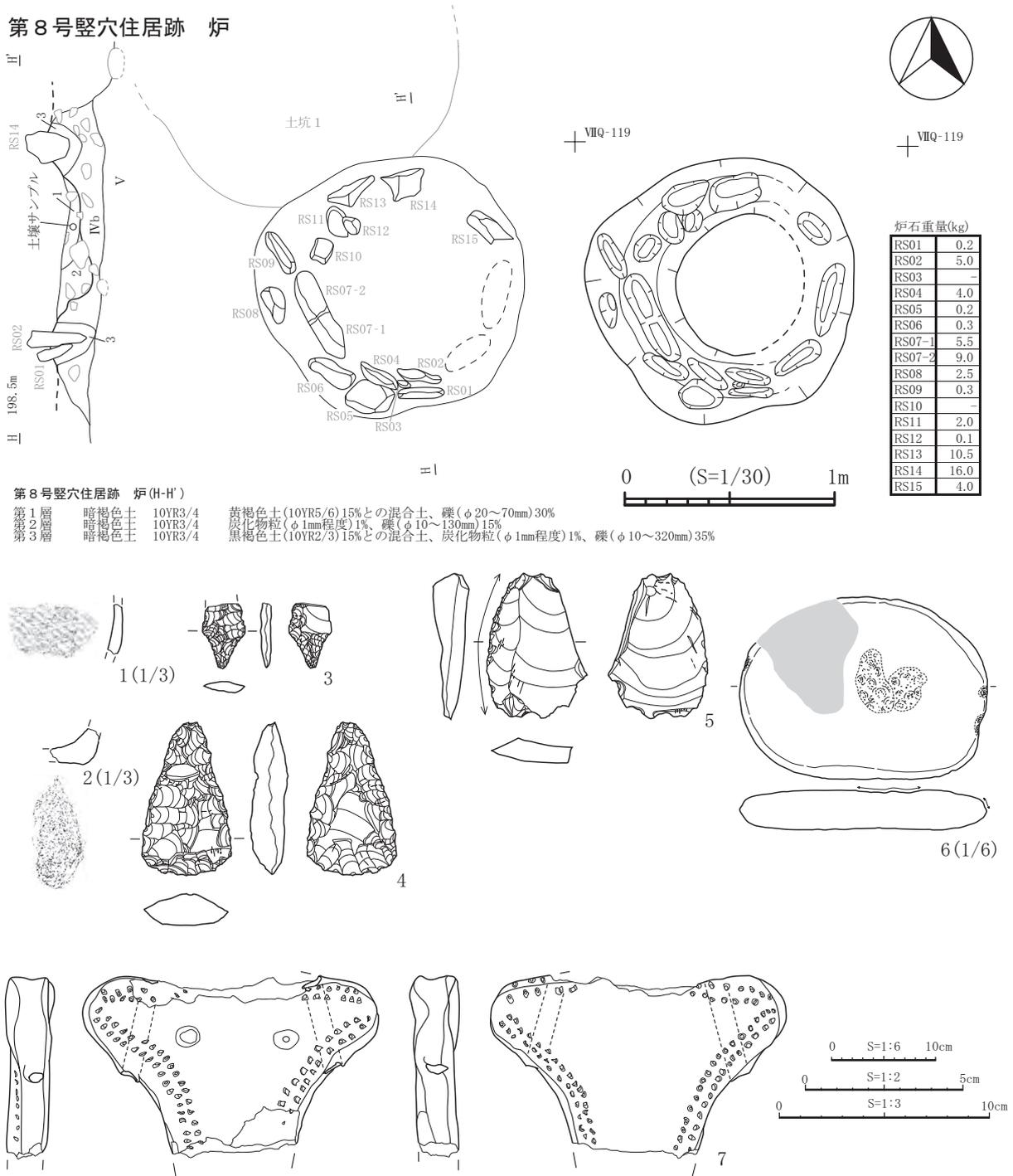


図26 第8号竖穴住居跡(2)・出土遺物

〔壁・床面〕 壁は竖穴部欠損により不明である。床面はほぼ平坦で、炉より北西側に偏って直径約4mの貼床範囲を確認した。

〔炉〕 貼床範囲の中央よりやや南東寄りから石囲炉を検出した。石囲炉は13個ほどの石が残存していたが、本来は16個ほどの石でほぼ円形に組み立てられていたものと考えられる。炉の南西側は石を二重に組んでいる部分も確認できた。炉の外径は長軸約122cmである。明確な焼土は確認できなかったが、炉石の内側は黒褐色に変色していた。炉石埋設の掘方はドーナツ状を呈しており、地山(第IV a層)ま

で掘り込まれていることを確認した。

〔Pit・壁溝〕 32基のPitと壁溝1条を検出した。住居の主軸を北東－南西とした場合、支柱穴はPit06－09、02－29、01－27、23－16が対をなす8本柱であると考えられる。壁溝の規模は、長さ約310cm、幅63～28cm程度で、深さは20～35cmである。

〔土坑〕 住居跡内部に土坑を2基検出した。土坑1は貼床範囲のほぼ中央で検出した。規模は直径約1.7mのほぼ円形で、深さは約24cmである。貼床範囲を建て替え前の住居跡と仮定した場合、土坑1は炉の掘方という見方もできる。土坑2は住居跡推定範囲の中央より南西側で検出した。規模は直径約1.5mのほぼ円形で、深さは約20cmである。用途は不明である。

〔覆土〕 竪穴部欠損のため、貼床範囲の覆土を示した。貼床範囲第1層は黒褐色土中心であり、土坑1覆土第1層と同様である。

〔出土遺物〕 土器が22.0g、石器が1926.6g出土した。このうち土器は出土全量である2点を図示した。Ⅱ～Ⅲ群(図26-1・2)である。石器は4点を図示した。器種内訳は石鏃1点(図26-3)、石槍1点(図26-4)、削器1点(図26-5)、台石1点(図26-6)である。その他の遺物として、貼床範囲のすぐ西側から土偶の破片(図26-7)が1点出土した。

〔その他〕 石囲炉覆土第1層から土壌を採取し、水洗選別して確認された炭化種実と思われる資料を同定分析したが、同定可能な種実は得られなかった(第4章第2節)。

〔時期〕 出土遺物は小破片で出土数が少ないため詳細な時期は不明であるが、出土した土偶の特徴からすると縄文時代中期末葉に帰属する可能性がある。(新山)

#### 第9号竪穴住居跡(ASI-09:図27、写真7)

〔位置・確認〕 VII・O-118～120グリッドに位置している。第IV a層上面で多数のPitを確認した。

〔重複〕 遺構との重複はないが、南側は風倒木と思われる痕跡により一部壊されている。

〔平面形・規模〕 平面形・規模は不明であるが、推定径約7mのほぼ円形となる可能性がある。

〔壁・床面〕 壁は竪穴部欠損により不明である。全体的にPitが浅いことから、第Ⅲ a層を床面としていた可能性があるが、検出作業時に第IV a層まで掘り下げてしまったため不明である。

〔炉〕 Pit07から南西へ約50cm地点から炉の掘方と思われる落ち込みを検出した。掘方の規模は約1.2×0.9mで、深さは10cm程度である。焼土は確認できなかった。

〔Pit〕 9基のPitを検出した。住居の主軸を北西－南東とした場合、支柱穴はPit04-01、08ともう1基が対をなす4本柱であると考えられる。

〔覆土〕 竪穴部欠損のため、覆土は不明である。

〔出土遺物〕 土器が67.5g出土し、2点を図示した。Ⅲ-1群(図27-2)とⅡ～Ⅲ群(図27-1)である。

〔時期〕 出土遺物は小破片で出土数が少ないため詳細な時期は不明である。(新山)

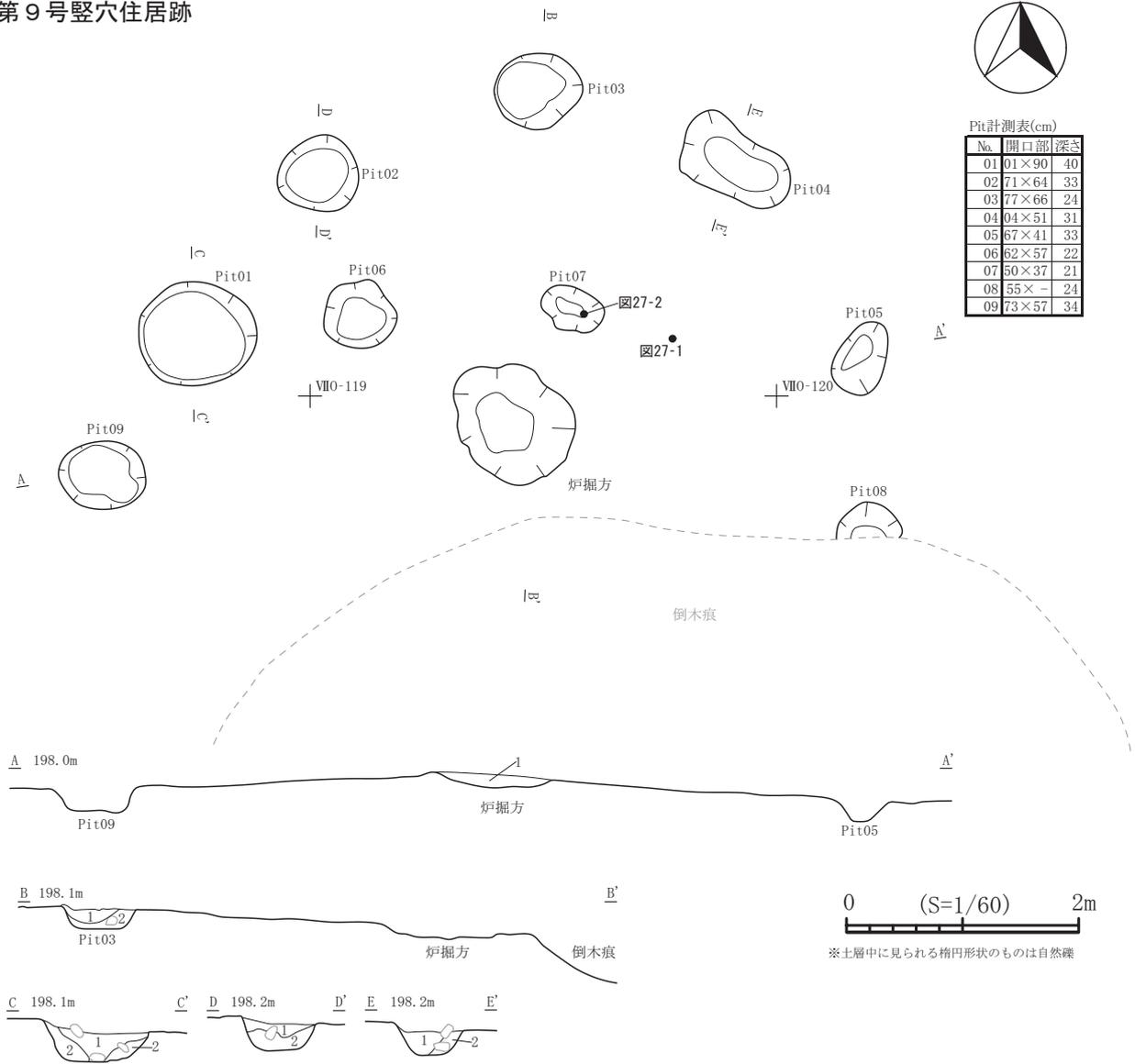
#### 第10号竪穴住居跡(ASI-10:図28、写真8)

〔位置・確認〕 VII-K-116・117グリッドに位置している。第IV a層上面で石囲炉・貼床を確認した。

〔平面形・規模〕 平面形・規模は不明であるが、推定径約7×6mの楕円形となる可能性がある。

〔壁・床面〕 壁は竪穴部欠損により不明である。床面はほぼ平坦で、炉を中心に直径約3mの貼床範

第9号竖穴住居跡



- 第9号竖穴住居跡 炉掘方 (A-A')**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒(φ1~3mm)4%、礫(φ3~80mm)2%、しまりあり
- Pit03 (B-B')**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒(φ1~3mm)3%
  - 第2層 暗褐色土 10YR3/4 小礫(φ1~100mm)1%
- Pit01 (C-C')**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒(φ1~2mm)3%、炭化物(φ1~3mm)1%
  - 第2層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒(φ1~2mm)1%、小礫(φ1~100mm)3%
- Pit02 (D-D')**
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒(φ1~2mm)1%
  - 第2層 褐色土 10YR4/4 小礫(φ5~50mm)5%
- Pit04 (E-E')**
- 第1層 暗褐色土 10YR2/3 ローム粒(φ1~3mm)3%
  - 第2層 褐色土 10YR4/4

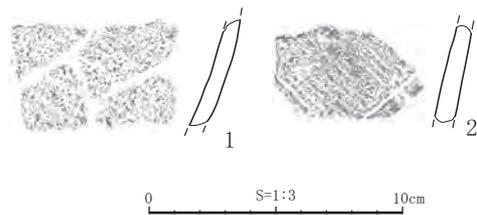
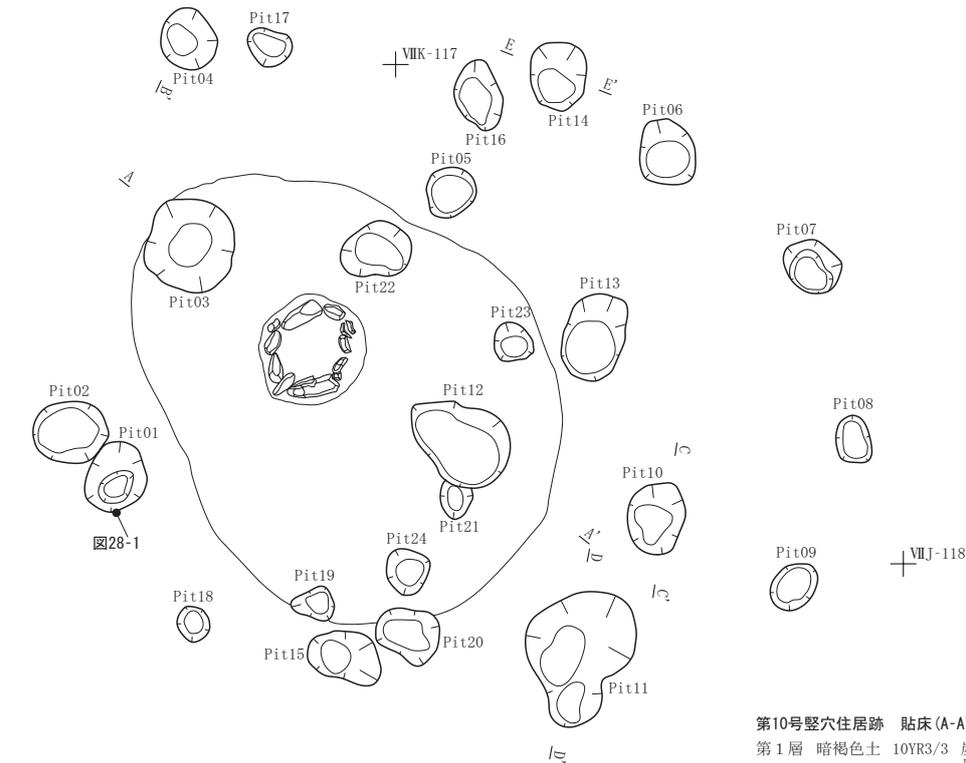


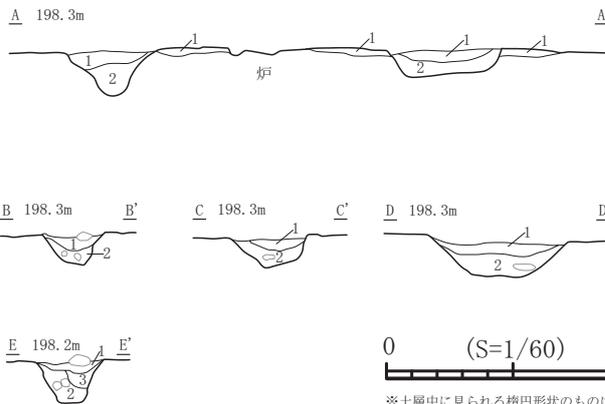
図27 第9号竖穴住居跡・出土遺物

第10号竪穴住居跡



Pit計測表(cm)

No.	開口部	深さ
01	57×47	38
02	61×50	21
03	76×75	24
04	49×44	41
05	41×37	10
06	46×43	25
07	44×39	25
08	36×25	14
09	43×30	17
10	59×45	28
11	112×83	37
12	86×59	25
13	69×46	27
14	54×44	35
15	60×39	28
16	58×35	20
17	35×28	22
18	29×24	16
19	33×22	31
20	51×35	21
21	19× -	18
22	57×44	26
23	30×28	28
24	38×35	17



第10号竪穴住居跡 貼床(A-A')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒(φ1~2mm)1%、  
口-ム粒(φ~1mm)1%未満、  
礫(φ1~120mm)2%

Pit03(A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/2 小礫(φ10~90mm)1%  
第2層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ30~100mm)10%

Pit12(A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ1~80mm)3%  
第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~80mm)5%

Pit04(B-B')

第1層 暗褐色土 10YR3/4 小礫(φ10~30mm)3%  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ30~60mm)10%

Pit10(C-C')

第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ20~50mm)1%  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ~100mm)1%

Pit11-1(D-D')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ~30mm)1%  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ20~180mm)7%、  
炭化物粒(φ~10mm)1%

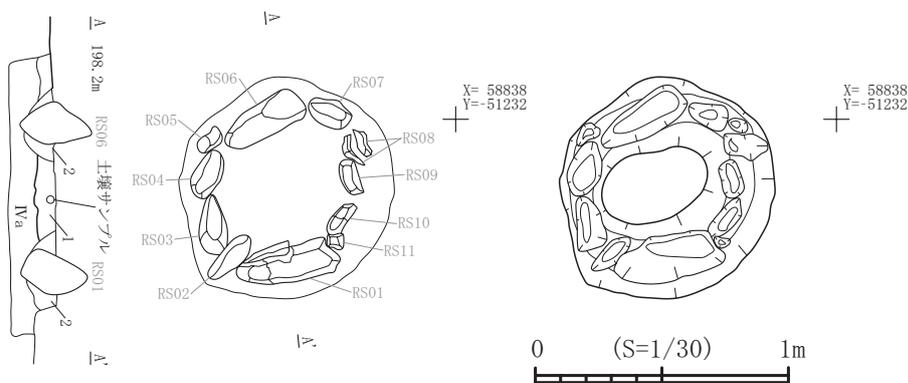
Pit14(E-E')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ2~160mm)3%  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ2~80mm)5%  
第3層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~20mm)1%

炉石重量(kg)

RS01	17.0
RS02	2.0
RS03	6.5
RS04	8.0
RS05	0.5
RS06	13.5
RS07	6.0
RS08	3.9
RS09	2.5
RS10	2.1
RS11	0.2

第10号竪穴住居跡 炉



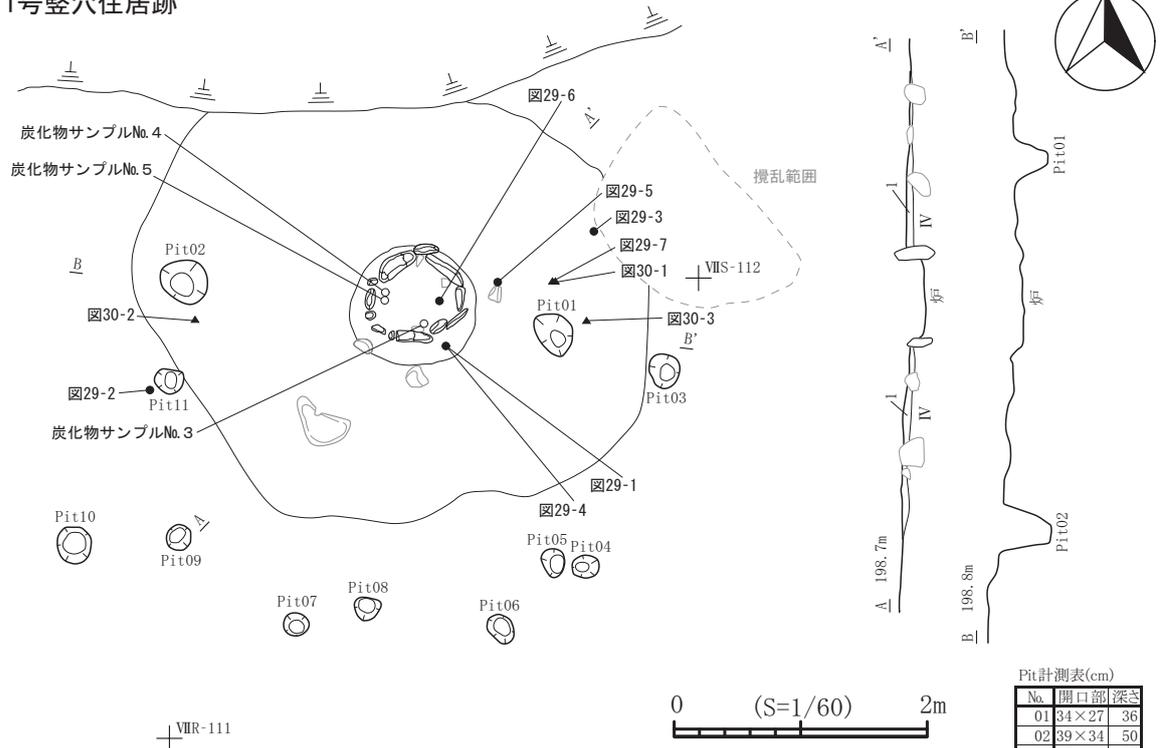
第10号竪穴住居跡 石囲炉(F-F')

第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物粒(φ1~2mm)1%、ローム粒(φ1~2mm)1%、礫(φ1~50mm)5%  
第2層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物粒(φ1~2mm)1%、ローム粒(φ1~2mm)3%、礫(φ1~200mm)10%

0 S=1:3 10cm

図28 第10号竪穴住居跡・出土遺物

第11号竪穴住居跡

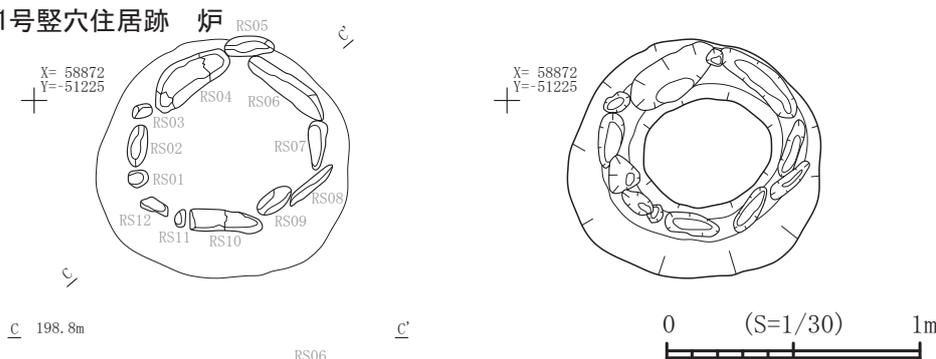


Pit計測表(cm)

No.	開口部	深さ
01	34×27	36
02	39×34	50
03	27×24	17
04	22×18	27
05	22×17	25
06	25×18	13
07	19×18	12
08	21×17	9
09	21×18	18
10	29×27	18
11	21×19	26

第11号竪穴住居跡 貼床(A-A')  
第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ1~400mm)30%、ローム粒(φ1~10mm)2%、炭化物粒(φ1~2mm)1%

第11号竪穴住居跡 炉



炉石重量(kg)

RS01	2.0
RS02	3.0
RS03	1.0
RS04	19.5
RS05	2.7
RS06	11.0
RS07	3.0
RS08	1.0
RS09	0.8
RS10	1.3
RS11	0.5
RS12	2.0

第11号竪穴住居跡 炉(C-C')  
第1層 黒褐色土 10YR2/2 黒褐色土(10YR2/3)20%との混合土、ローム粒(φ1~5mm)2%、炭化物粒(φ1~15mm)2%  
第2層 黒褐色土 10YR2/3 黒褐色土(10YR2/2)30%、ローム粒(φ1~10mm)2%炭化物粒(φ1~2mm)2%

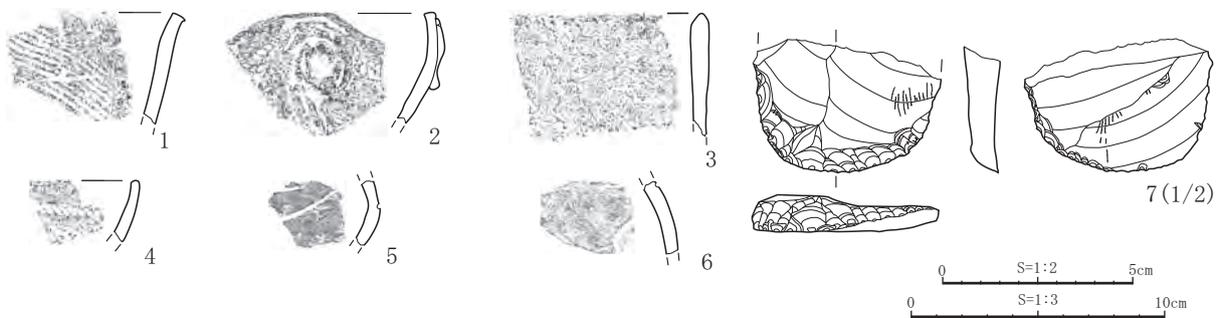


図29 第11号竪穴住居跡・出土遺物(1)

囲を確認した。

〔炉〕貼床範囲の中央よりやや北西寄りから石囲炉を検出した。石囲炉は11個ほどの礫でほぼ円形に組まれており、炉の外径は約87×74cmである。明確な焼土は確認できなかったが、炉石の内側は黒褐色に変色していた。炉石埋設の掘方はドーナツ状を呈しており、地山（第Ⅳa層）まで掘り込まれていることを確認した。

〔Pit〕24基のPitを検出した。住居の主軸を北西－南東とした場合、主柱穴はPit17-02、07-11が対をなす4本柱であると考えられる。

〔覆土〕 堅穴部欠損のため、貼床範囲の覆土を示した。貼床範囲第1層は暗褐色土中心であり、石囲炉第1層と同様である。

〔出土遺物〕 土器が10.7g出土し、出土全量であるⅡ～Ⅲ群の1点を図示した（図28-1）。

〔その他〕 石囲炉覆土第1～3層から土壌を採取し、水洗選別して確認された炭化種実を同定分析したところ、クリがわずかに得られた（第4章第2節）。

〔時期〕 出土遺物は小破片で出土数が少ないため詳細な時期は不明である。 （新山）

#### 第11号堅穴住居跡（ASI-11：図29・30、写真9）

〔位置・確認〕 VII R・S-110・111グリッドに位置している。第Ⅳa層上面で石囲炉・貼床を確認した。

〔重複〕 遺構との重複はないが、東側は現代の攪乱により一部壊されている。

〔平面形・規模〕 平面形・規模は不明であるが、推定径約5mのほぼ円形となる可能性がある。なお、住居跡北側は段丘ラインにあたり、一部崩落しているものと考えられる。

〔壁・床面〕 壁は堅穴部欠損により不明である。床面は大部分が貼床によりほぼ平坦に構築されている。

〔炉〕 貼床範囲のほぼ中央から石囲炉を検出した。石囲炉は12個ほどの礫でほぼ円形に組まれており、炉の外径は約83×81cmである。明確な焼土は確認できなかったが、炉石の内側は黒褐色に変色していた。炉石埋設の掘方はドーナツ状を呈しており、地山（第Ⅳa層）まで掘り込まれていることを確認した。

〔Pit〕 11基のPitを検出した。住居の主軸を北西－南東とした場合、主柱穴はPit03-08、02ともう1基が対をなす4本柱であると考えられる。

〔覆土〕 堅穴部欠損のため、貼床範囲の覆土を示した。貼床範囲第1層は黒褐色土中心であり、石囲炉第1層と同様である。

〔出土遺物〕 土器が212.7g、石器が726g出土した。このうち土器は6点を図示した。内訳はⅢ-1群が4点（図29-2・4～6）、Ⅱ～Ⅲ群が2点（図29-1・3）である。図29-6は炉から出土した。石器は4点を図示した。器種内訳は搔器1点（図29-7）、削器2点（図30-1・2）、磨り石1点（図30-3）である。

〔その他〕 石囲炉覆土第1層から出土した炭化物の炭素年代測定を行った結果、No.3が3,817±19、No.4が3,842±19、No.5が3,910±19（暦年較正用）との値が得られた（第4章第1節）。

〔時期〕 出土遺物や炭素年代測定の結果から、縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。 （新山）

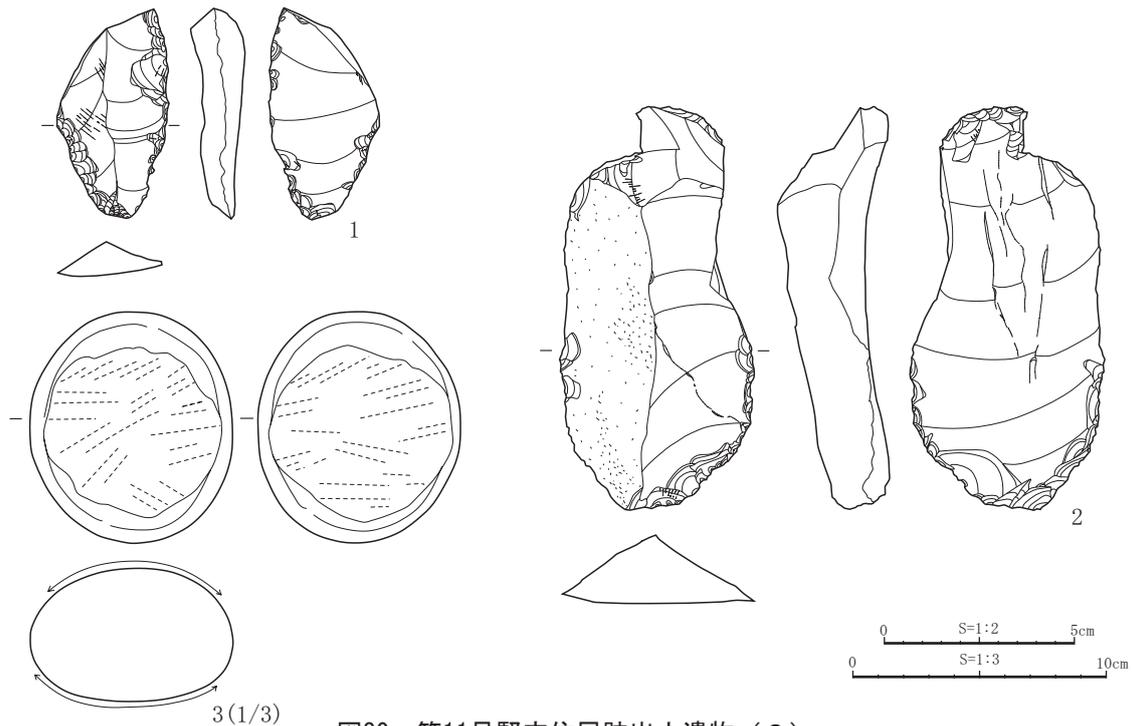


図30 第11号竪穴住居跡出土遺物（2）

#### 第12号竪穴住居跡（ASI-12：図31～33、写真9）

〔位置・確認〕 VII P～R-107～109グリッドに位置している。第IV a層上面で石囲炉・貼床を確認した。

〔平面形・規模〕 平面形・規模は不明であるが、推定径約9×7mの楕円形となる可能性がある。

〔壁・床面〕 壁は竪穴部欠損により不明である。床面はほぼ平坦で、炉を中心に直径約6mの貼床範囲を確認した。

〔炉〕 貼床範囲の中央よりやや南東寄りから石囲炉を検出した。石囲炉は6個ほどの礫が残存していたが、本来は8個ほどの礫でほぼ円形に組み立てられていたものと考えられる。炉の外径は短軸約94cm程度である。明確な焼土は確認できなかったが、炉石の内側は黒褐色に変色していた。炉石埋設の掘方はドーナツ状を呈しており、地山（第IV a層）まで掘り込まれていることを確認した。炉の南西側はPit35と一部重複しているが、炉の方が新しい。

〔Pit〕 38基のPitを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、主柱穴はPit08-11、17-09、30-24、29-23が対をなす8本柱であると考えられる。

〔覆土〕 竪穴部欠損のため、わずかに残存する覆土と貼床層を示した。覆土第1層は黒褐色土中心であり、石囲炉覆土第1層と同様、貼床範囲第2層は黒褐色土中心であり、石囲炉覆土第2層と同様である。

〔出土遺物〕 土器が4426.1g、石器が57748.5g出土した。このうち土器は18点を図示した。内訳はⅢ-1群が8点（図32-3・4・6・8～12）、Ⅱ～Ⅲ群が10点（図32-1・2・5・7・13～17・図33-1）である。図32-9は炉、図32-11はPit05覆土、図32-1・2・5・14・15はPit33覆土から出土した。石器は6点を図示した。器種内訳は削器2点（図33-2・3）、二次調整のある剥片4点、微小剥離痕のある剥片6点、敲石1点（図33-4）その他の礫（被熱礫）3点（図33-4～6）である。

〔その他〕 Pit31覆土第1層から出土した炭化物の炭素年代測定を行った結果、 $3,942 \pm 19$ （暦年較正

第12号竖穴住居跡

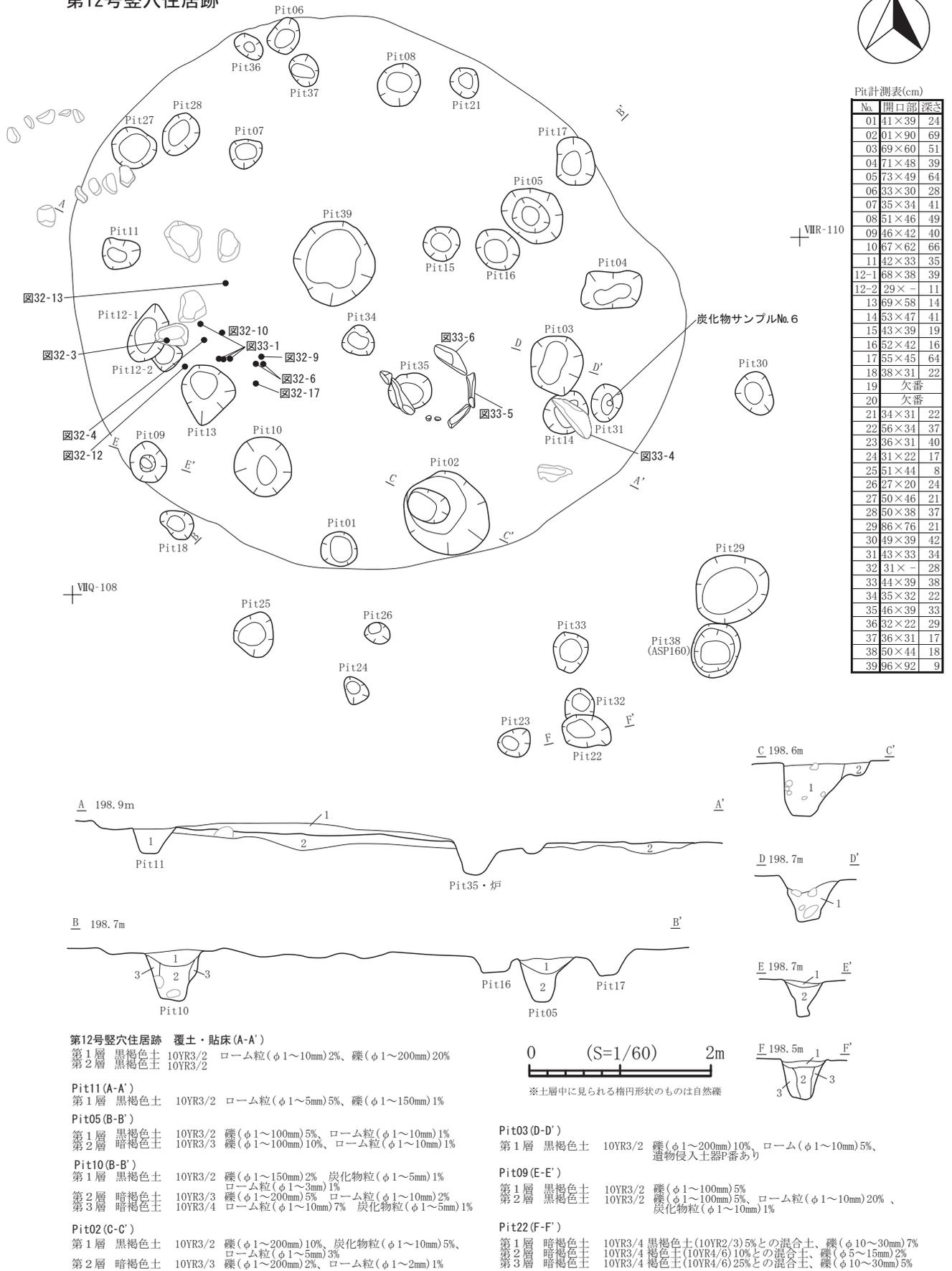
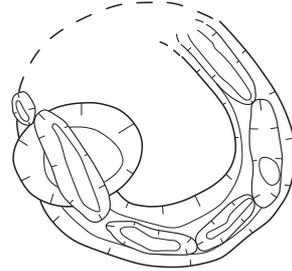
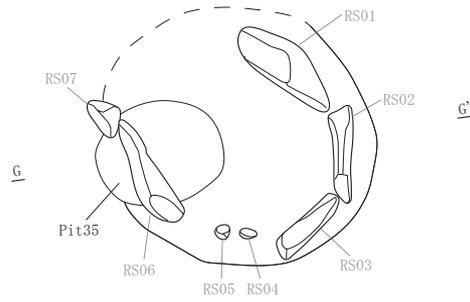


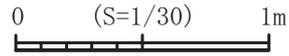
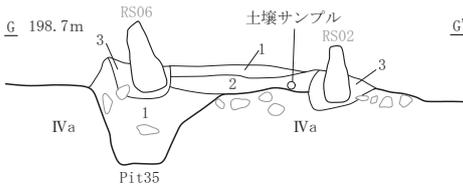
図31 第12号竖穴住居跡(1)

第12号竖穴住居跡 炉 X= 58867  
Y= -51264

X= 58867  
Y= -51264



炉石重量(kg)	
RS01	25.0
RS02	22.0
RS03	4.0
RS04	-
RS05	-
RS06	19.7
RS07	0.2



第12号竖穴住居跡 炉 (G-G')

- 第1層 黒褐色土 10YR3/2 石灰粒 (φ1~10mm) 2%、礫 (φ1~200mm) 20%
  - 第2層 黒褐色土 10YR3/2 礫 (φ1~100mm) 3%
  - 第3層 暗褐色土 10YR3/4 黒褐色土 (10YR2/3) 15%との混合土、礫 (φ5~30mm) 10%
- Pit35 (G-G')
- 第1層 黄褐色土 (砂質) 10YR5/6 暗褐色土 (10YR3/4) 10%、礫 (φ10~50mm) 15%

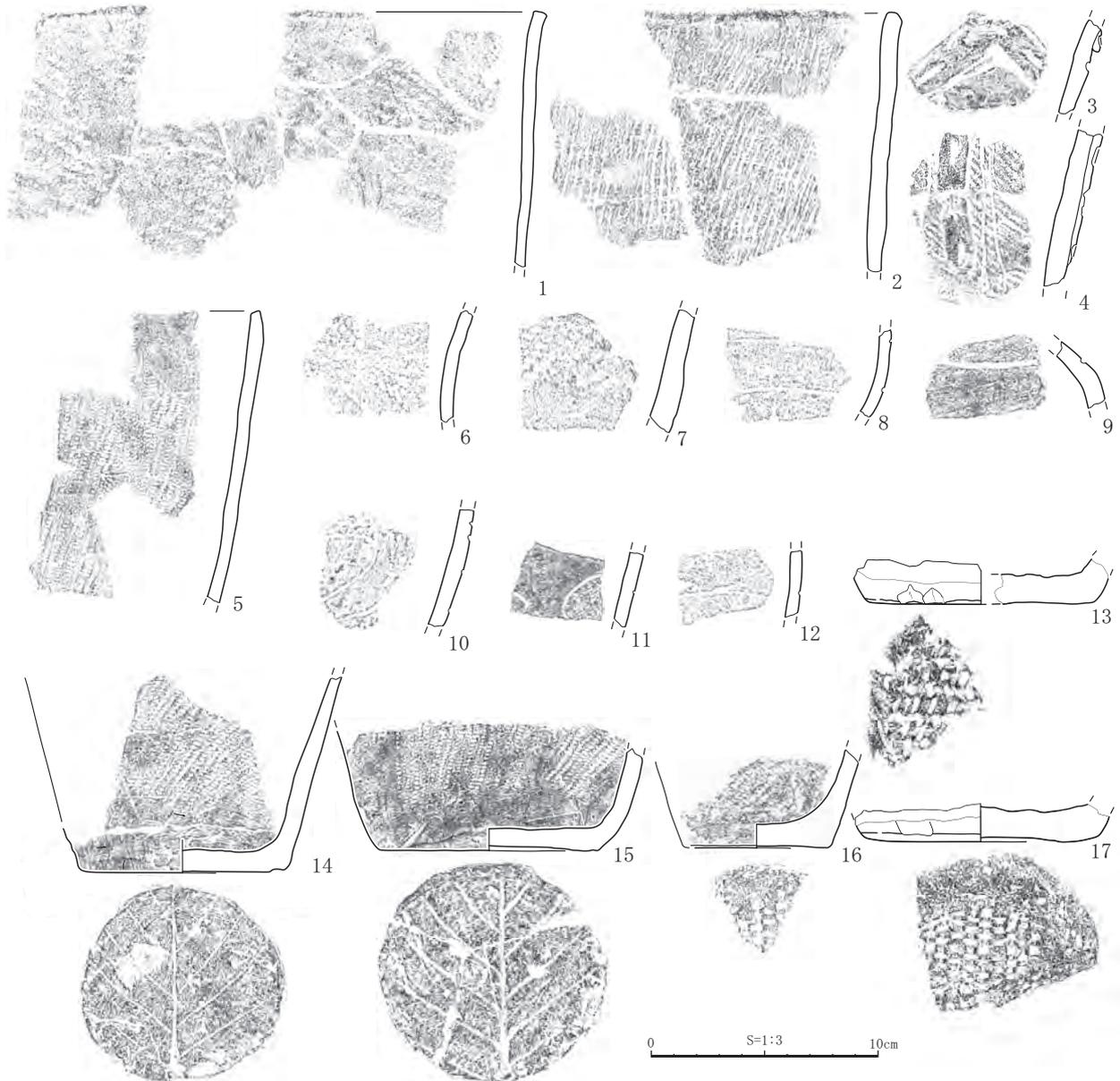


図32 第12号竖穴住居跡 (2)・出土遺物 (1)

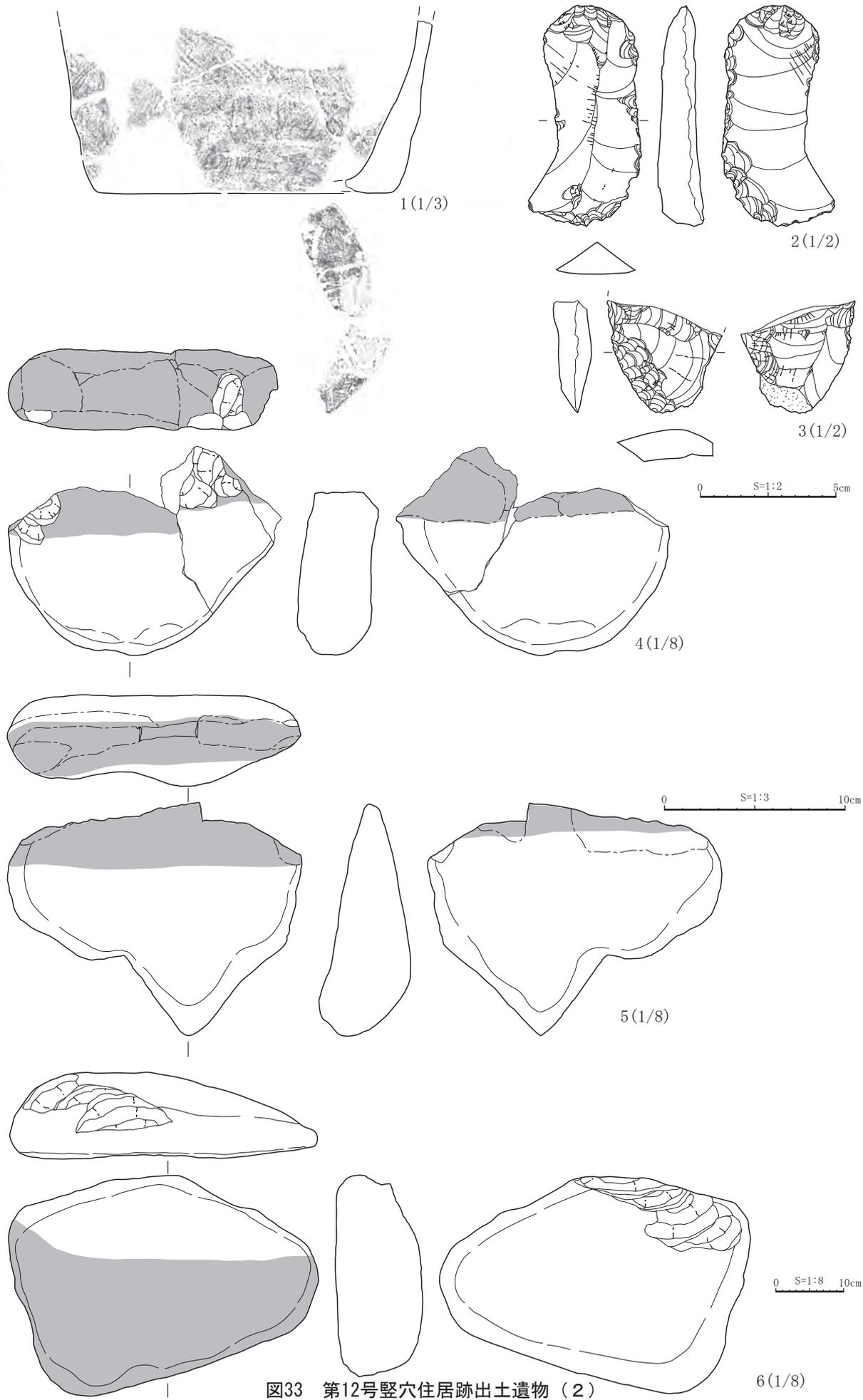


图33 第12号竖穴住居跡出土遺物(2)

第13号竖穴住居跡

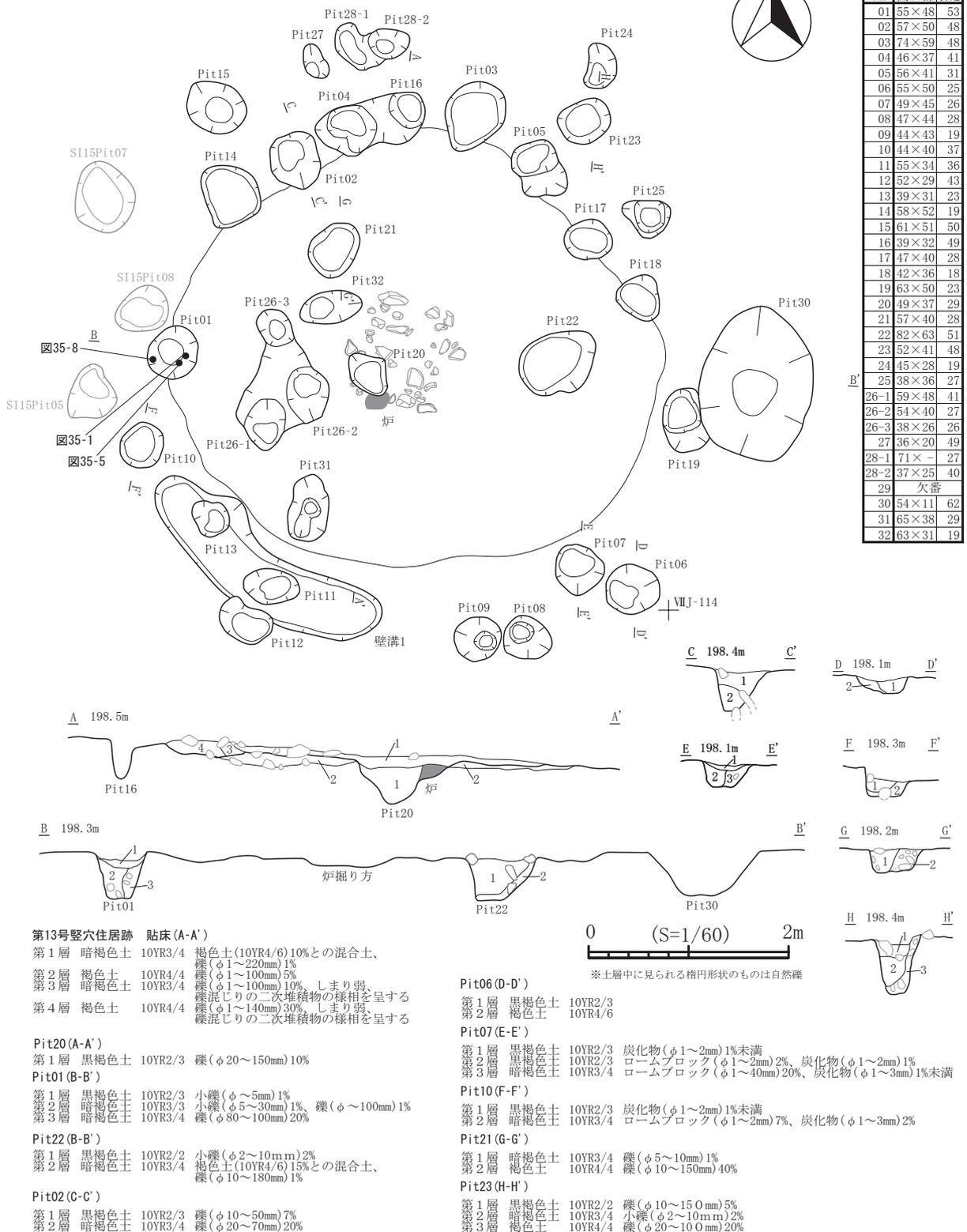


図34 第13号竖穴住居跡

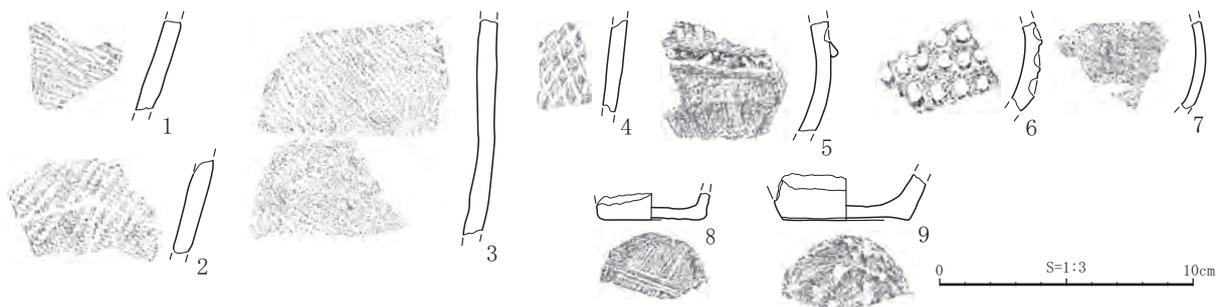


図35 第13号竪穴住居跡出土遺物

用)との値が得られた(第4章第1節)。また、石田炉覆土第2層から土壌を採取し、水洗選別して確認された炭化種実を同定分析したところ、クリとイヌビエ属がわずかに得られた(第4章第2節)。

[時期] 出土遺物や炭素年代測定の結果から、縄文時代後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。

(新山)

### 第13号竪穴住居跡 (ASI-13: 図34・35、写真10)

[位置・確認] VII~K-112~114グリッドに位置している。第IV a層上面で貼床とPitを確認した。

[重複] 第15号竪穴住居跡と重複するものと考えられるが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形・規模は不明であるが、推定径約7mのほぼ円形となる可能性がある。

[壁・床面] 壁は竪穴部欠損により不明である。床面はほぼ平坦で、炉を中心に直径約5mの貼床範囲を確認した。

[炉] 貼床範囲のほぼ中央部から地床炉を検出した。掘り込みはもたず、貼床上を直に燃焼部としている。Pit20に切られ全体形は明らかではないが、被熱規模は最大径23cm、深さは10cm程度である。地床炉付近に散在している礫からは、被熱や使用の痕跡等は確認できなかった。

[Pit・壁溝] 34基のPitと壁溝1条を検出した。住居の主軸を北東-南西とした場合、支柱穴はPit03-SII15Pit07、07-12が対をなす4本柱であると考えられる。壁溝の規模は、長さ約260cm、幅63cm程度で、深さは15~20cmである。

[覆土] 竪穴部欠損のため、わずかに残存する覆土と貼床層を示した。覆土第1層は暗褐色土中心で、貼床範囲第2層は褐色土中心、第3~4層は礫が多く混入する暗褐色土・褐色土の層である。

[出土遺物] 土器が394.3g出土し、9点を図示した。内訳はI-1群が1点(図35-1)、III-1群が3点(図35-5~7)、II~III群が5点(図35-2~4・8~9)である。図35-6・9はPit01覆土、図32-2・4・7はPit22覆土、図35-3はPit26覆土から出土した。I-1群の図35-1は、流れ込みによるものと考えられる。

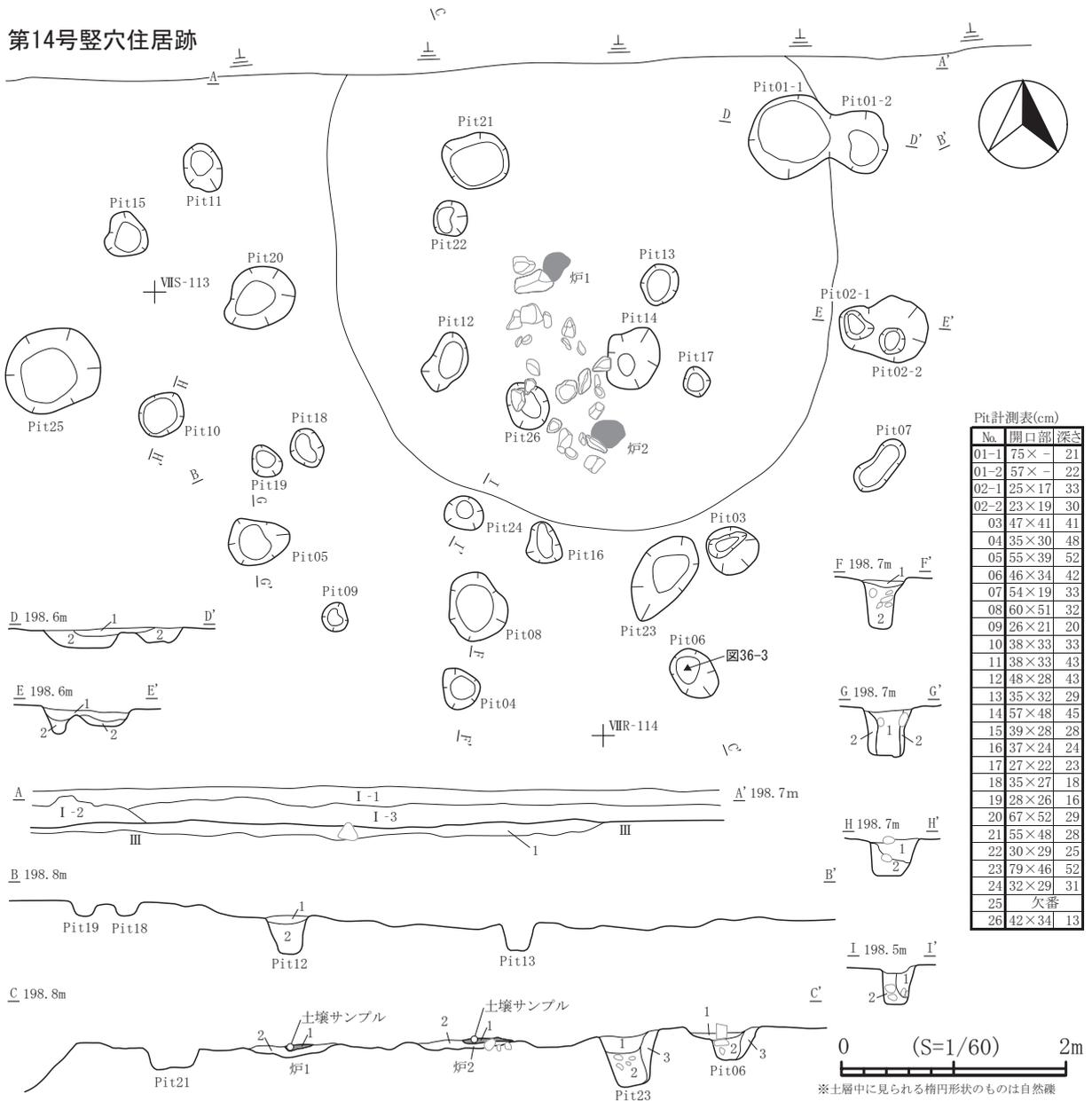
[時期] Pit出土遺物から、縄文時代中期末葉~後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。(新山)

### 第14号竪穴住居跡 (ASI-14: 図36、写真10)

[位置・確認] VII R・S-112~114グリッドに位置している。第IV a層上面で貼床とPitを確認した。

[平面形・規模] 平面形・規模は不明であるが、推定径約7mのほぼ円形となる可能性がある。なお、住居跡北側は段丘ラインにあたり、一部崩落しているものと考えられる。

第14号竪穴住居跡



Pit計測表(cm)

No.	開口部	深さ
01-1	75×	21
01-2	57×	22
02-1	25×17	33
02-2	23×19	30
03	47×41	41
04	35×30	48
05	55×39	52
06	46×34	42
07	54×19	33
08	60×51	32
09	26×21	20
10	38×33	33
11	38×33	43
12	48×28	43
13	35×32	29
14	57×48	45
15	39×28	28
16	37×24	24
17	27×22	23
18	35×27	18
19	28×26	16
20	67×52	29
21	55×48	28
22	30×29	25
23	79×46	52
24	32×29	31
25	欠番	
26	42×34	13

第14号竪穴住居跡 貼床(A-A')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~180mm)3%

Pit12(B-B')

第1層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ2~60mm)2%、炭化物粒(φ1~3mm)3%

第2層 暗褐色土 10YR2/3 礫(φ2~30mm)2%、炭化物粒(φ1~3mm)4%

炉1・2層(C-C')

第1層 にぶい赤褐色焼土 5YR5/4 炭化物(φ1~3mm)1%

第2層 にぶい褐色土 7.5YR5/4 礫(φ1~120mm)30%、ローム粒(φ1~2mm)1%

Pit06(C-C')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒(φ1~2mm)3%、礫(φ2~120mm)5%

第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ2~140mm)30%

第3層 褐色土 10YR4/4 礫(φ1~20mm)1%

Pit23(C-C')

第1層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/6)5%との混合土、礫(φ10~20mm)2%

第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ20~90mm)30%、炭化物粒(φ7mm)1%

第3層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土(10YR4/6)20%、10YR5/6(黄褐色土)5%との混合土

Pit01(D-D')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物粒(φ1~10mm)3%、礫(1~3mm)1%

第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒(φ1~10mm)2%、礫(1~2mm)1%

Pit02(E-E')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物粒(φ1~3mm)5%、礫(1~4mm)1%

第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒(φ1~2mm)2%、礫(φ1~2mm)1%

Pit04(F-F')

第1層 黒褐色土 10YR2/3

第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ2~120mm)40%

Pit05(G-G')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ1~60mm)2%

第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ1~140mm)15%

Pit10(H-H')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ2~100mm)1%

第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ2~100mm)5%

Pit24(I-I')

第1層 褐色土 10YR4/6 礫(φ40mm)10%、炭化物粒(φ1~2mm)1%

第2層 褐色土 10YR4/6 黄褐色土(10YR5/8)15%、礫(φ50~120mm)35%

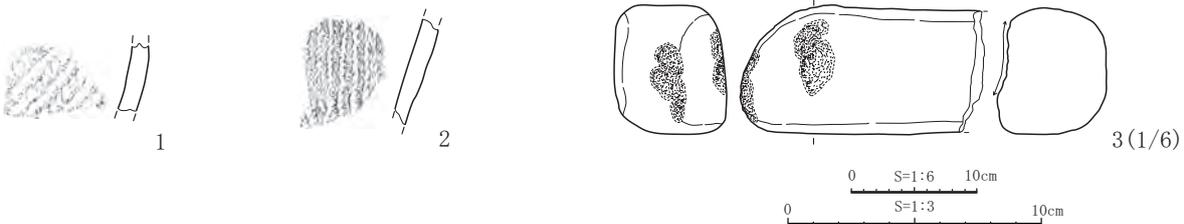


図36 第14号竪穴住居跡・出土遺物

〔壁・床面〕 壁は竪穴部欠損により不明である。床面はほぼ平坦で、炉を中心に直径約5mの貼床範囲を確認した。

〔炉〕 貼床範囲のほぼ中央と南寄りから地床炉を2基検出した。いずれも掘り込みはもたず、貼床上を直に燃焼したものと考えられる。被熱規模は、炉1が最大径23cmで深さ8cm、炉2が最大径30cmで深さは5cm程度である。地床炉付近に散在する礫からは、被熱や使用の痕跡等は確認できなかった。

〔Pit〕 27基のPitを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、主柱穴はPit02-2-04、15ともう1基が対をなす4本柱であると考えられる。また、同軸上で一回り小さいPit02-1-08、20ともう1基の柱穴で4本柱となり、住居の建て替えなどの可能性も考えられる。

〔覆土〕 竪穴部欠損のため、貼床範囲の覆土を示した。貼床範囲第1層は暗褐色土中心であり、小礫が微量含まれる。

〔出土遺物〕 土器が27.2g、石器が2400g出土した。このうち土器は出土全量である2点を図示した。いずれもⅡ～Ⅲ群（図36-1・2）で、図36-2はPit06から出土したものである。石器はPit06第1層から出土した台石1点（図36-3）のみである。

〔その他〕 炉1焼土層（第1層）から土壌を採取し、水洗選別して確認された炭化種実を同定分析したところ、オニグルミ・クリ・ブドウ科がわずかに得られた（第4章第2節）。

〔時期〕 出土遺物は小破片で出土数が少ないため詳細な時期は不明である。 （新山）

#### 第15号竪穴住居跡（ASI-15：図37・38、写真11）

〔位置・確認〕 ⅧI・K-111・112グリッドに位置している。第IV a層上面で貼床とPitを確認した。

〔重複〕 第13号竪穴住居跡と重複するものと考えられるが、新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕 平面形・規模は不明であるが、推定径約8×7mの楕円形となる可能性がある。

〔壁・床面〕 壁は竪穴部欠損により不明である。床面はほぼ平坦で、炉を中心に直径約4mの貼床範囲を確認した。

〔炉〕 貼床範囲のほぼ中央と南寄りから地床炉を3基検出した。いずれも掘り込みはもたず、貼床上を直に燃焼したものと考えられる。被熱規模は、炉1が最大径44cmで深さ8cm、炉2が最大径56cmで深さは7cm、炉3が最大径31cmで深さ11cmである。燃焼部の高低差から炉1が一番新しく、炉3が一番古いものと考えられる。炉1付近に散在する礫からは、被熱や使用の痕跡等は確認できなかった。

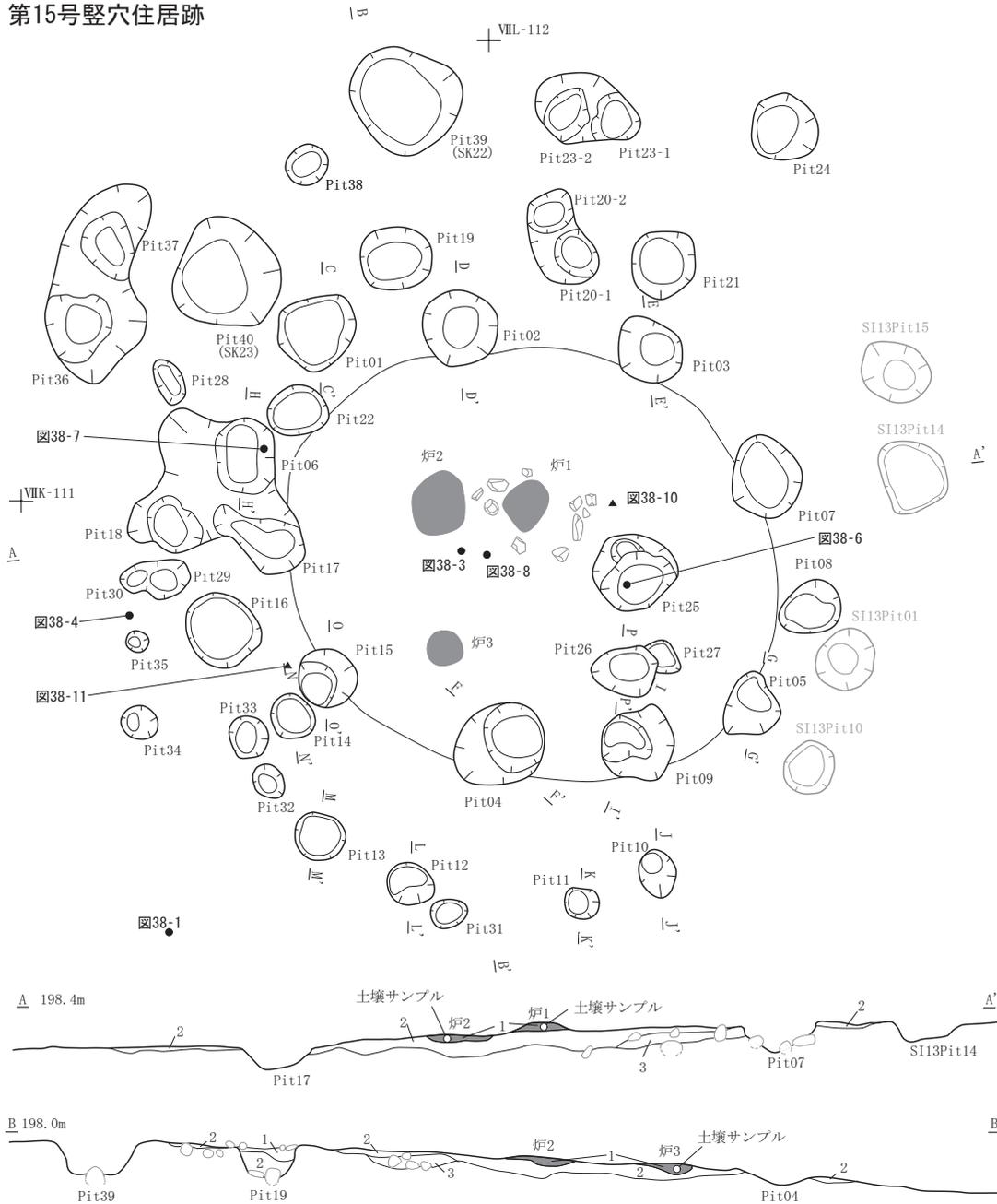
〔Pit〕 43基のPitを検出した。住居の主軸を北東-南西とした場合、主柱穴はPit01-07、34-11が対をなす4本柱であると考えられる。炉やPitの数から考えると数回建て替えを行った可能性がある。

〔覆土〕 竪穴部欠損のため、貼床層を示した。貼床範囲第2・3層は暗褐色土中心で、第2層の方が黄褐色ロームをブロック状に多く含む層である。

〔出土遺物〕 土器が339.0g、石器が3938.7g出土した。このうち土器は9点を図示した。内訳はⅢ-1群が3点（図38-3・4・8）、Ⅱ～Ⅲ群が6点（図38-1・2・5～7・9）である。図38-5はPit02覆土から出土した。石器は2点を図示した。器種内訳は削器1点（図38-10）、台石1点（図38-11）である。

〔その他〕 炉1～3焼土層（第1層）から土壌を採取し、水洗選別して確認された炭化種実を同定分析したところ、オニグルミ・クリ・ナス属がわずかに得られた（第4章第2節）。

第15号竪穴住居跡



Pit計測表(cm)

No.	開口部	深さ
01	64×57	38
02	64×63	86
03	62×56	79
04	80×68	33
05	51×43	27
06	63×50	13
07	72×58	32
08	52×41	25
09	61×60	52
10	39×30	47
11	29×27	25
12	36×35	42
13	43×42	18
14	37×34	18
15	50×46	42
16	63×55	16
17	84×34	12
18	50×38	21
19	61×52	38
20-1	42×31	31
20-2	37×33	27
21	55×51	35
22	49×41	34
23-1	35×34	19
23-2	46×32	24
24	56×55	23
25-1	62×46	74
25-2	21×13	41
26	56×43	54
27	31×-	46
28	38×20	19
29	38×-	32
30	29×-	29
31	30×22	19
32	27×23	17
33	36×30	17
34	29×27	21
35	20×17	13
36	51×45	39
37	49×40	32
38	38×30	24
39	90×89	33
40	93×85	38

第15号竪穴住居跡 炉・貼床(A-A'・B-B')

第1層 暗褐色土 7.5YR3/3 粘質土、黄褐色ローム(10YR5/6) (φ1~3mm)2%との混合土、炭化物(φ1~4mm)1%、礫(φ1~40mm)1%  
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 粘質土、黄褐色ローム(10YR5/6) (φ20~40mm)7%との混合土、炭化物(φ1~3mm)3%  
 第3層 暗褐色土 10YR3/4 粘質土、暗褐色土(10YR3/3)5%、黄褐色ローム(φ5~30mm)15%、礫(φ5~150mm)5%

Pit19(B-B')

第1層 暗褐色土 10YR3/4 小礫(φ10~20mm)2%、礫(φ70~90mm)2%上層部  
 第2層 褐色土 10YR4/4 小礫(φ10~40mm)2%、礫(φ50~120mm)2%下層部

0 (S=1/60) 2m

※土層中に見られる楕円形状のものは自然礫

図37 第15号竪穴住居跡(1)

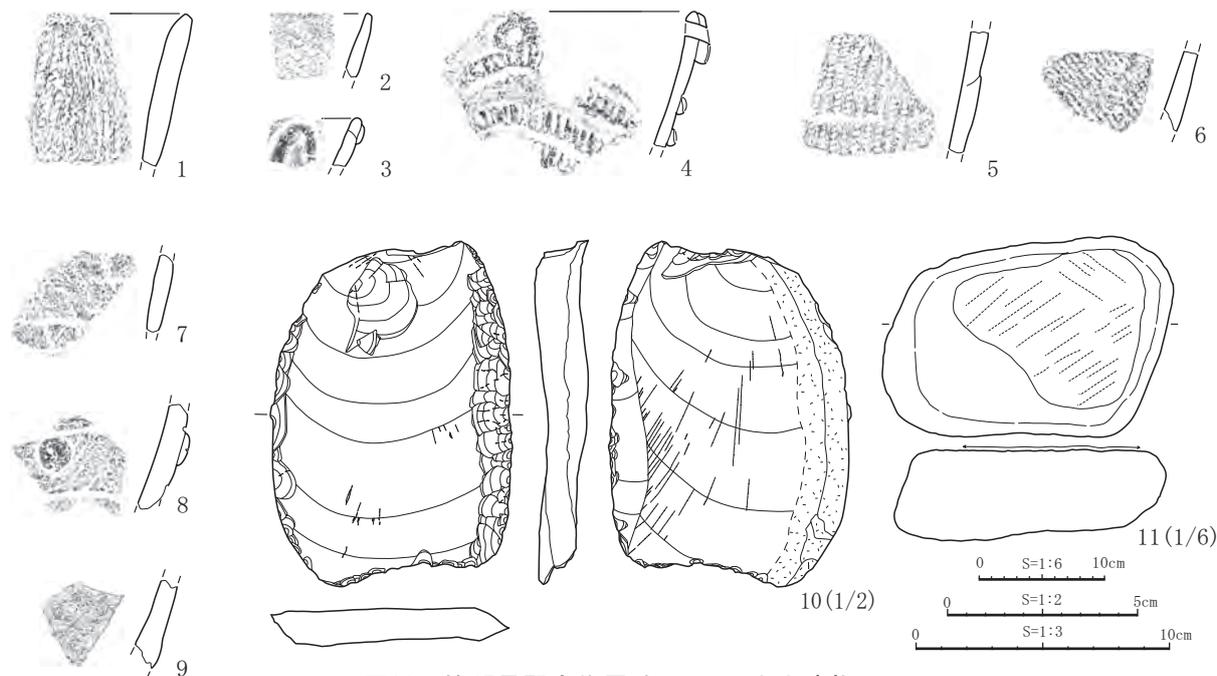
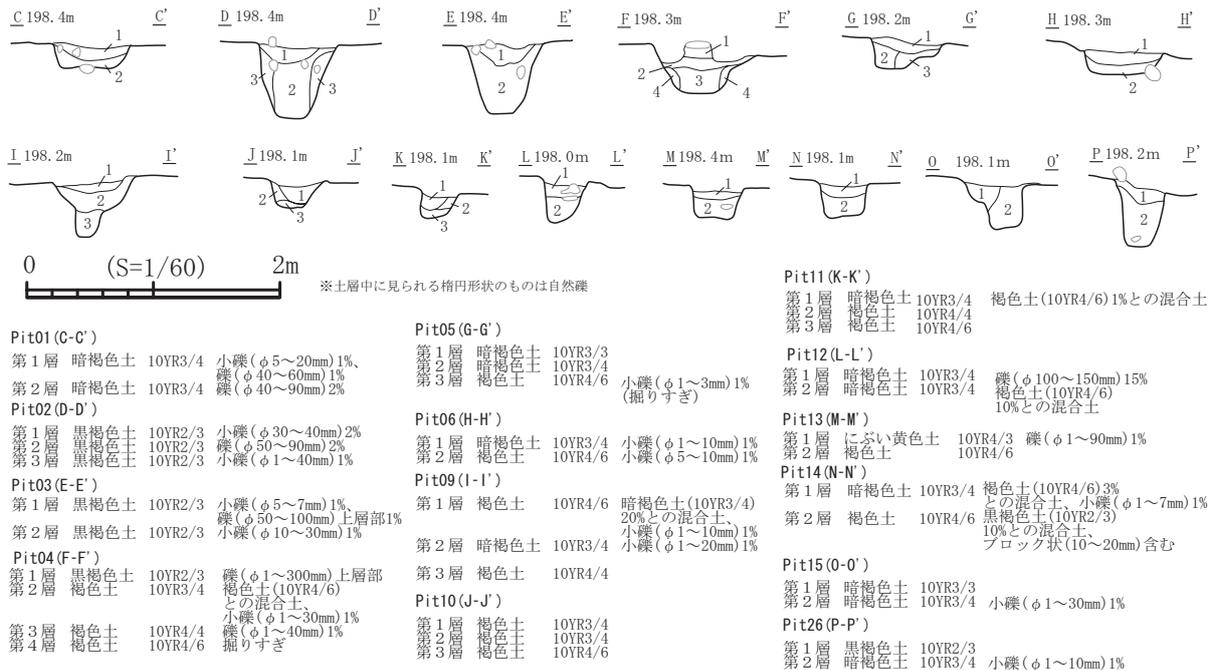


図38 第15号竪穴住居跡(2)・出土遺物

[時期] Pit出土遺物から、縄文時代中期末葉~後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。(新山)

**第16号竪穴住居跡 (ASI-16: 図39、写真11)**

[位置・確認] VII M・N-122・123グリッドに位置している。第Ⅲ層上面で貼床(硬化面)を確認した。

[平面形・規模] 平面形・規模は不明であるが、推定径約5mのほぼ円形となる可能性がある。

[壁・床面] 壁は竪穴部欠損により不明である。床面はほぼ平坦で、径約4×2mの不整形な貼床範囲を確認した。

[炉] 検出されなかった。

第16号竪穴住居跡

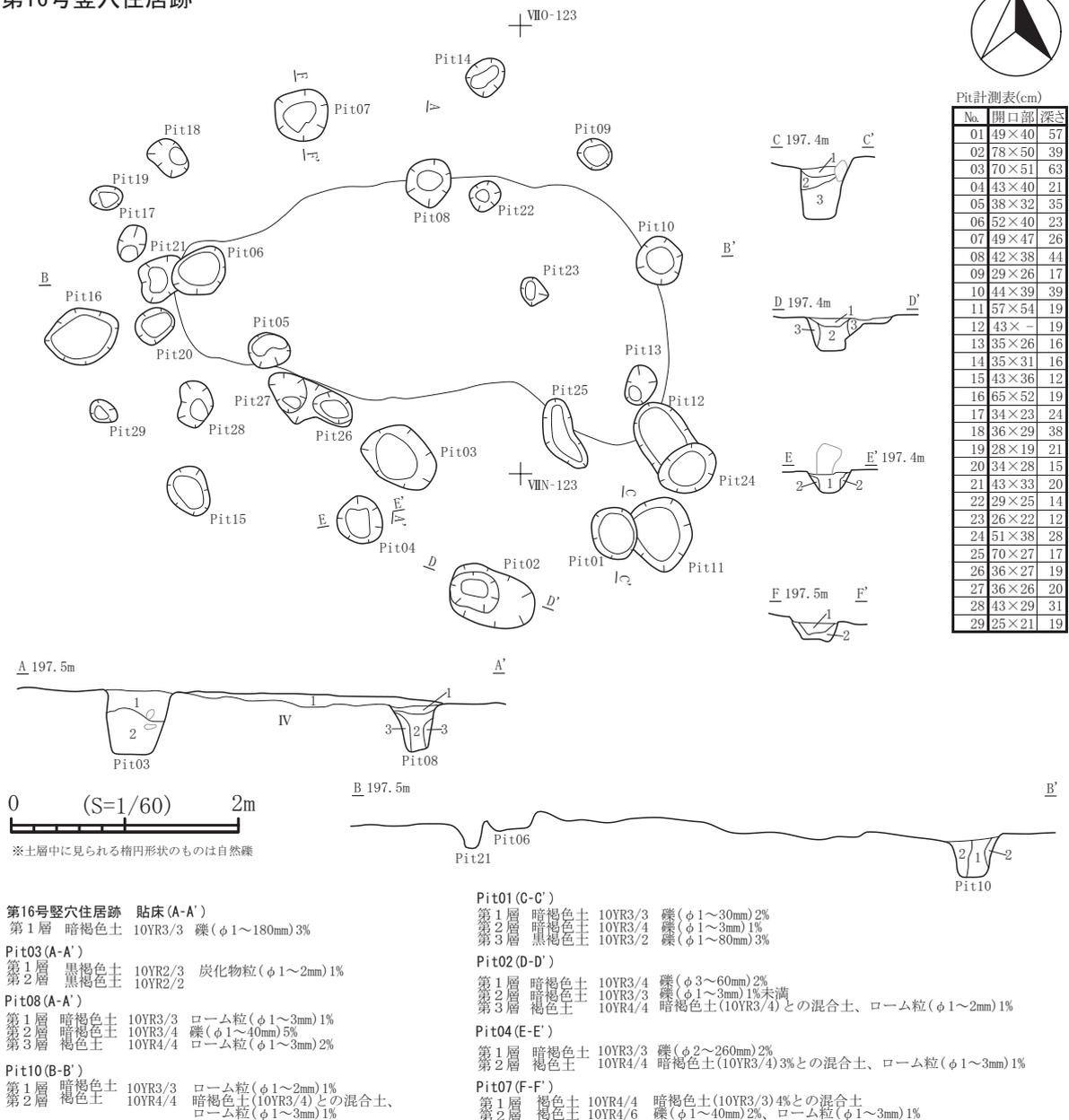


図39 第16号竪穴住居跡

[Pit] 29基のPitを検出した。住居の主軸を北西-南東とした場合、支柱穴はPit07-29、10-02が対をなす4本柱であると考えられる。

[覆土] 竪穴部欠損のため、貼床層を示した。貼床範囲第1層は暗褐色土中心であり、表面は非常に固く締まっていた。

[出土遺物] Pit03からⅡ～Ⅲ群の土器が16.9g出土した。

[時期] 出土遺物は小破片で出土数が少ないため詳細な時期は不明である。

(新山)

第17号竪穴住居跡 (ASI-17)

小ピット群①に変更になったため欠番とする。

### 第18号竪穴住居跡 (ASI-18)

小ピット群②に変更になったため欠番とする。

### 第19号竪穴住居跡 (ASI-19：図40～43、写真12)

〔位置・確認〕 VIIJ～L-107・108グリッドに位置している。平成23年度の調査で、黒っぽい土壌の広がりの中に土器や石器・自然礫等が多数見られたことから竪穴住居跡ではないかと推測されていたもので、平成24年度の調査でそのことが確認された。

〔重複〕 明確にはできなかったが、南側に位置している第41号土坑と重複している可能性もある。

〔平面形・規模〕 平面形は不明であるが、円形ないしは楕円形の可能性がある。規模は不明である。

〔壁・床面〕 壁・床面とも確認できたのは北東側の部分だけであり、炉と壁と間の部分には硬化面が確認された。この部分は、いわゆる出入り口に通じる部分と考えられる。

〔炉〕 北東側の壁から約1 m50cm離れたところに石囲炉を検出した。南側に炉石が確認されなかったが、本来は円形に組まれていたものと考えられる。炉の外径は長軸約76cmである。炉石は拳大の礫を用いて構築されているが、埋設されていたのは北東側の3個のみで、ほかの礫は平坦面を上にして置かれていた。

〔Pit〕 20基のPitを検出したが、Pit01・02・15は攪乱であったため、本住居跡と関連がありそうなのは17基である。このうち位置や深さから支柱穴の可能性のあるものにPit03・07・13・14・16・18があるが、北西側のPit03・18が本住居跡に伴う可能性が最も高い。

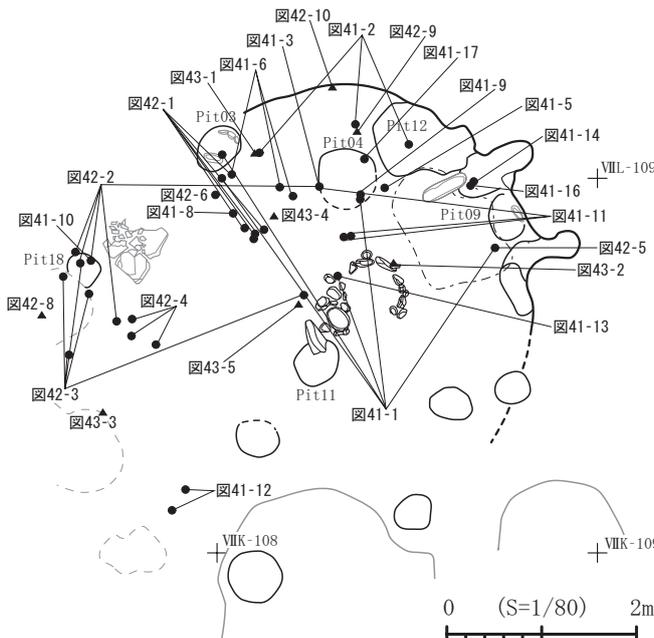
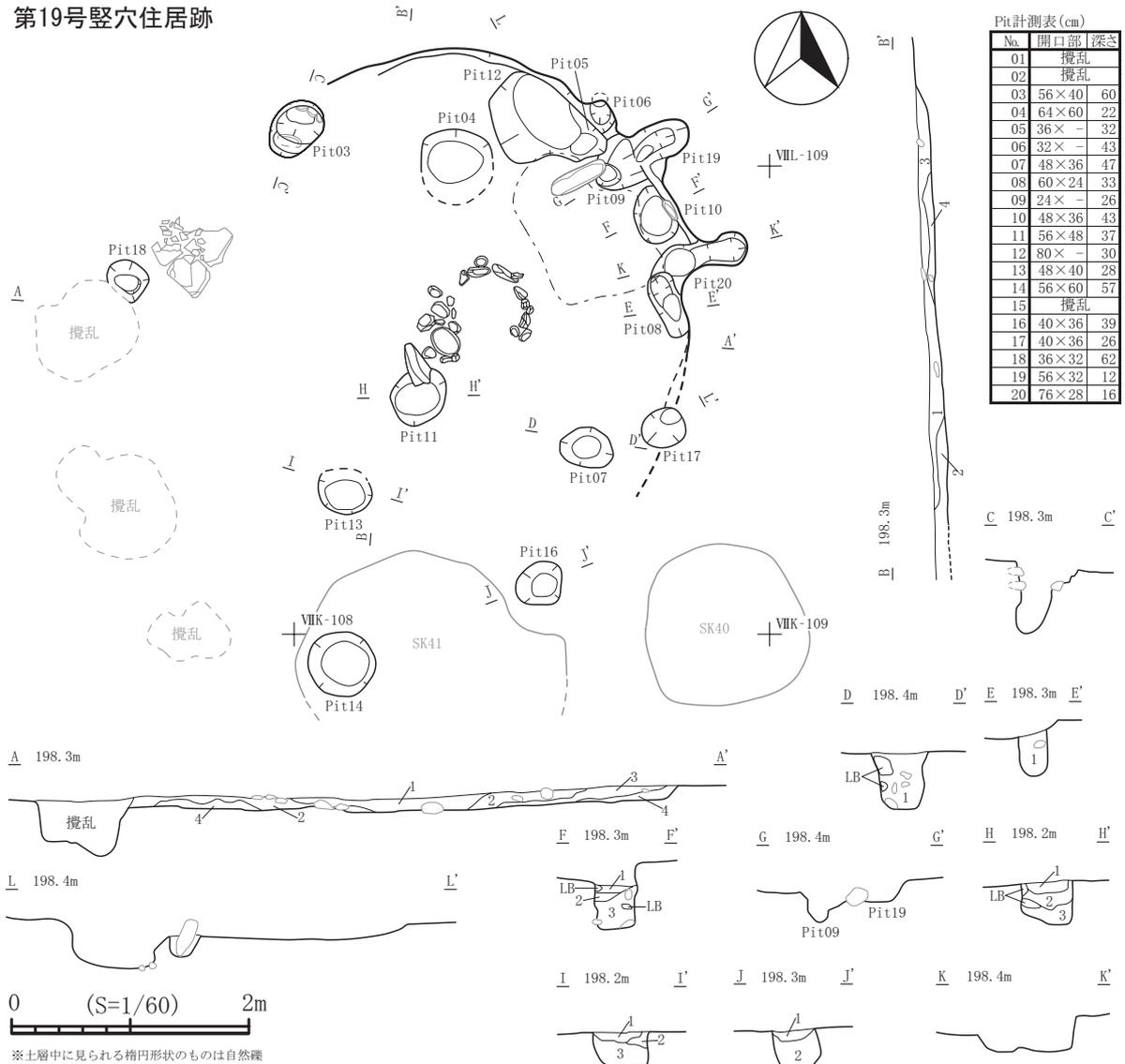
〔出入り口〕 北東壁で確認した。溝状を呈した2基のピット (Pit19・20) が角状に壁外へ突き出ているものである。ピット間の間隔は約80cmであるが、この部分の壁は外側へ20～30cmほど張り出している。壁際には6基のピットを確認したが、このうち中央のPit10は埋められていた。ここから炉近辺までの床面は硬く踏みしめられているが、この北側にはPit19に連なるように大礫 (52cm×36cm×15cm) が横位に設置されていた。

〔覆土〕 4層に分層することができた。中央付近にはローム粒やローム塊を含んだ黒褐色土 (第1層) や暗褐色土 (第2層) が広く見られた。北東側の床面上では黄褐色系のローム質の土壌 (第3層、第4層) が見られた。

〔出土遺物〕 土器が6806.1 g、石器が950.5 g 出土した。このうち土器は24点を図示した。内訳はⅢ-1群が11点 (図41-3～5・8・10・13～17・図42-7)、Ⅱ～Ⅲ群が13点 (図41-1・2・6・7・9・11・12・図42-1～6) である。図41-7はPit04覆土から、図41-2はPit05覆土から、図41-13はPit09覆土から出土した。図41-12は第40号土坑出土のものと接合したものである。石器は9点を図示した。器種内訳は石錐1点 (図42-8)、削器2点 (図42-9・10)、磨製石斧1点 (図42-11)、凹み・磨り石1点 (図43-1)、石錘4点 (図43-2～5) である。

〔時期〕 Pit出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する遺構であると考えられる。(畠山)

第19号竖穴住居跡



**第19号竖穴住居跡(A-A'、B-B')**

第1層 黒褐色土 10YR2/2 硬く、ぼそぼそしている。ローム粒を多量に含む

第2層 暗褐色土 10YR3/3 やや硬く、しまりあり、ローム塊を若干含む

第3層 黄褐色土 10YR4/3 小礫(φ10~30mm)、やや硬く、しまりあり

第4層 黄褐色土 10YR5/6 炭化物粒(φ3~5mm)、やや硬く、しまりあり、小礫含む

**Pit 7 (D-D')**

第1層 暗褐色土 10YR3/3 しまり弱い、ローム塊多量混入

**Pit 8 (E-E')**

第1層 暗褐色土 10YR3/4 細粒で、褐色土がやや混じる

**Pit10 (F-F')**

第1層 黄褐色土 10YR5/6 しまりあり

第2層 褐色土 10YR4/4 しまり弱い

第3層 暗褐色土 10YR3/4 しまりややあり

**Pit11 (H-H')**

第1層 黒褐色土 10YR2/3 しまりあり

第2層 暗褐色土 10YR3/4 しまり弱く、ぼそぼそしている

第3層 褐色土 10YR4/4 しまりややあり、ローム粒主体

**Pit13 (I-I')**

第1層 暗褐色土 10YR3/3 しまりあり

第2層 暗褐色土 10YR3/4 しまりあり

第3層 褐色土 10YR4/4 しまりあり、ローム粒多量混入

**Pit16 (J-J')**

第1層 暗褐色土 10YR3/3 しまりあり

第2層 褐色土 10YR4/4 しまり弱い、ローム粒多量混入

**出入り口部の礫堀方(L-L')**

褐色土(10YR4/4)主体

図40 第19号竖穴住居跡(1)

第19号竖穴住居跡 炉

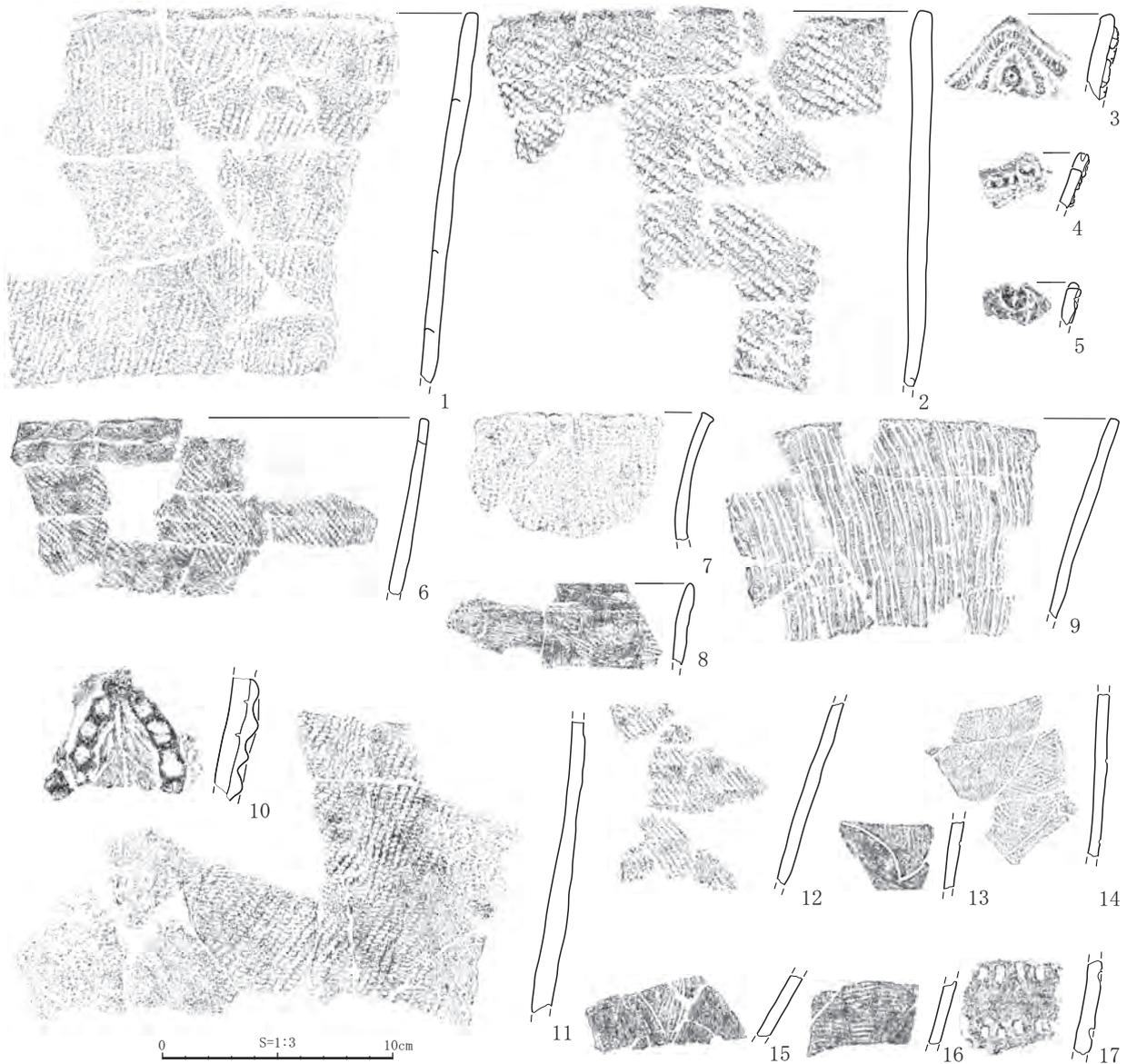
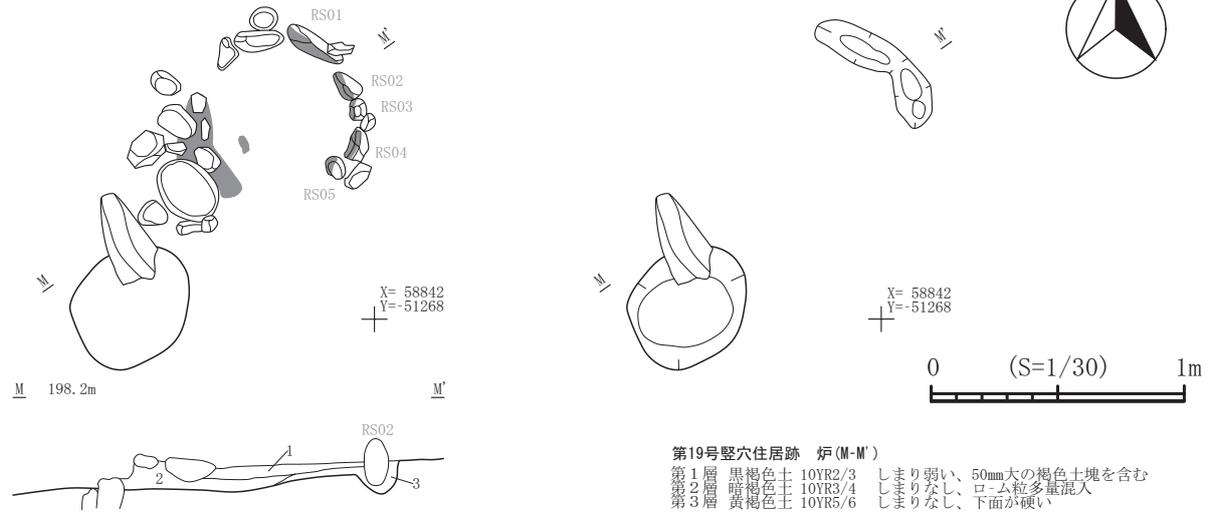


図41 第19号竖穴住居跡 (2)・出土遺物 (1)

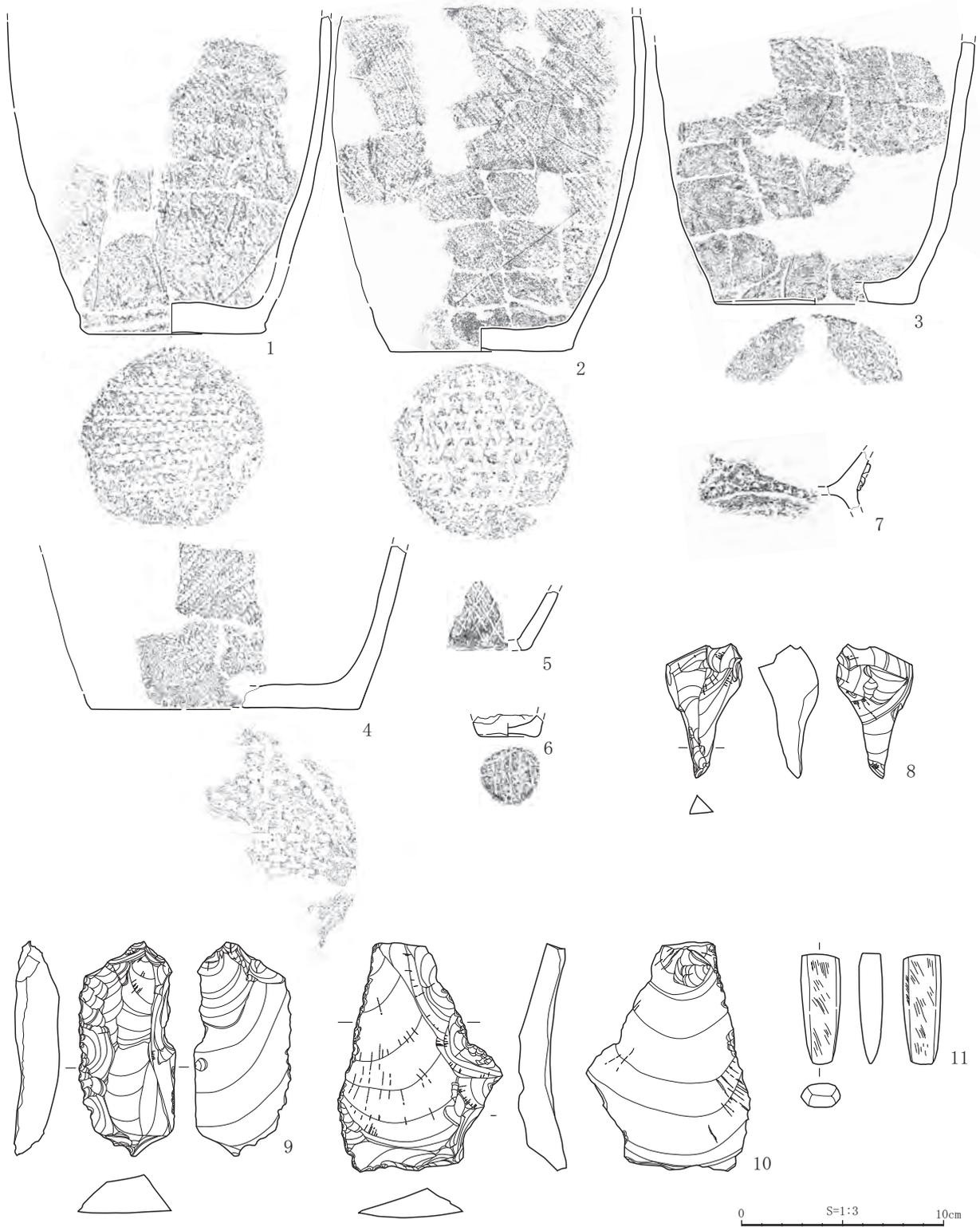


图42 第19号竖穴住居跡出土遺物（2）

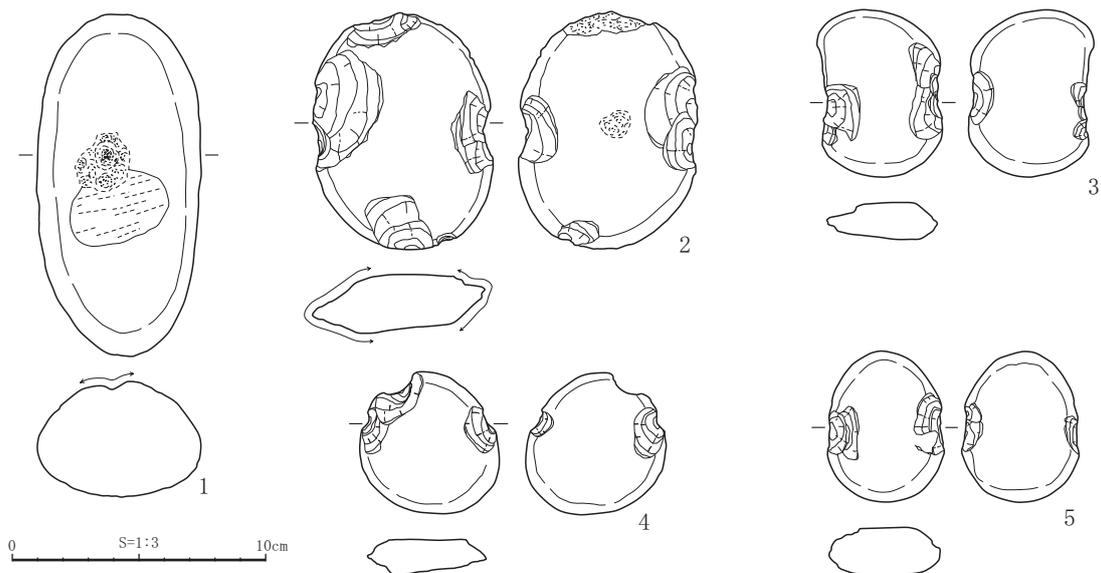


図43 第19号竪穴住居跡出土遺物（3）

#### 第4節 土坑

土坑は40基検出した。整理段階で遺構番号を変更したものがあり、第22・23・24号土坑は下記のとおり変更したため欠番とした。以下、詳細について記述していく。

（遺構番号の変更）

第22号土坑→第15号竪穴住居跡Pit34に変更

第23号土坑→第15号竪穴住居跡Pit40に変更

第24号土坑→第8号竪穴住居跡住居内土坑2に変更

##### 第1号土坑（ASK-01：図44、写真12）

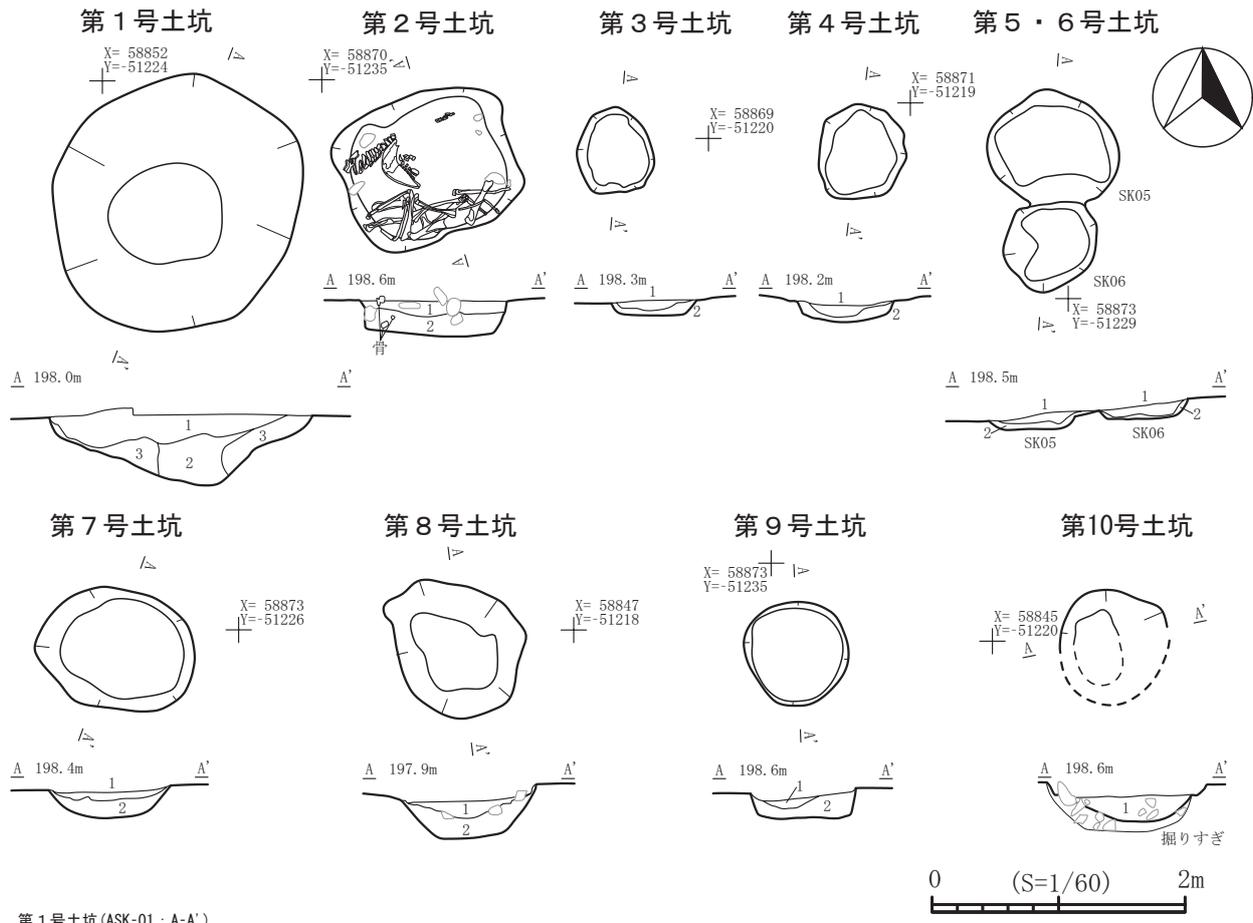
VII M・N-118・119グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。風倒木痕と重複し、これより新しい。平面形はほぼ円形である。規模は開口部で212×197cm、底面で91×76cm、深さは43cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、V字状の断面形状をなす。底面は中央が掘鉢状にくぼむ。覆土は3層に分層された。第2・3層中に黒褐色土が混入する。

##### 第2号土坑（ASK-02：図44・48、写真12）

VII R-116グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。平面形はほぼ方形である。規模は、開口部で132×114cm、底面で114×98cm、深さは31cmである。壁は底面からほぼ直立に立ち上がり、箱状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土主体で2層に分層された。人為堆積である。覆土中からⅡ～Ⅲ群の土器片4点と動物遺存体が出土し、うち土器1点を図示した（図48-1）。動物遺存体は頭骨・寛骨を除くほぼ全身骨格が出土し、下顎骨と大腿骨の特徴からウマと同定される。遺物が出土しているものの、覆土や動物遺存体の様相は新しいと思われ、詳細な時期は不明である。

##### 第3号土坑（ASK-03：図44、写真12）

VII R-119グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口



- 第1号土坑 (ASK-01 : A-A')**  
 第1層 黒褐色土 10YR2/2 暗褐色土 (10YR3/4) 10%、ローム粒 (φ 1~3mm) 2%、炭化物 (φ 1~5mm) 1%  
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 しまり有 黒褐色土 (10YR2/2) 5%  
 第3層 褐色土 10YR4/4 ローム粒 (φ 1~3mm) 1%未満、炭化物 (φ 1~3mm) 1%未満、黒褐色ブロック (10YR2/2) (φ 1~70mm) 5%、褐色土 (10YR4/6) 3%、0.4粒 (φ 1mm) 1%未満
- 第2号土坑 (ASK-02 : A-A')**  
 第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫 (φ 3~100mm) 20%  
 第2層 黒褐色土 10YR2/2 礫 (φ 3~80mm) 10%、獣骨 (φ 40~70mm) 5%
- 第3号土坑 (ASK-03 : A-A')**  
 第1層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒 (φ 1~3mm) 1%  
 第2層 褐色土 10YR1/6 ローム粒 (φ 1~2mm) 1%
- 第4号土坑 (ASK-04 : A-A')**  
 第1層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒 (φ 1~2mm) 1%、炭化物 (φ 1~3mm) 1%  
 第2層 褐色土 10YR4/6 ローム粒 (φ 1~2mm) 1%
- 第5号土坑 (ASK-05 : A-A')**  
 第1層 暗褐色土 10YR3/3  
 第2層 にぶい黒褐色土 10YR4/3 小礫 (φ 10~50mm) 50%

- 第6号土坑 (ASK-06 : A-A')**  
 第1層 暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土 (10YR3/3) との混合土、炭化物 (φ 1~2mm) 1%  
 第2層 黄褐色土 10YR5/8 ローム粒 (φ 1~2mm) 1%、ローム粒 (φ 1~2mm) 1%
- 第7号土坑 (ASK-07 : A-A')**  
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒 (φ 1~2mm) 3% にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 10%、ローム粒 (φ 1~2mm) 1%  
 第2層 褐色土 10YR4/6 小礫 (φ 5~10mm) 5%
- 第8号土坑 (ASK-08 : A-A')**  
 第1層 黒褐色土 10YR3/3 小礫 (φ 20~40mm) 5%、ローム粒 (φ 1~2mm) 2%、炭化物 (φ 1~3mm) 1%未満  
 第2層 褐色土 10YR4/6 小礫 (φ 10~50mm) 10%、ローム粒 (φ 1~3mm) 3%
- 第9号土坑 (ASK-09 : A-A')**  
 第1層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物 (φ 1~3mm) 1%  
 第2層 黄褐色土 10YR5/8 暗褐色土 (10YR3/4) 5%、炭化物 (φ 1~3mm) 3%
- 第10号土坑 (ASK-10 : A-A')**  
 第1層 黒褐色土 10YR2/3 小礫 (φ 5~50mm) 10%、ローム粒 (φ 1~2mm) 3%、炭化物 (φ 1~3mm) 3%

図44 土坑 (1)

部で70×62cm、底面で59×47cm、深さは17cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分層された。

**第4号土坑 (ASK-04 : 図44、写真13)**

VIR-120グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で79×70cm、底面で69×52cm、深さは18cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面は中央が深くくぼむ。覆土は2層に分層された。

**第5号土坑 (ASK-05 : 図44・48、写真13)**

VIS-117グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。第6号土坑と重複し、これに切られている。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で104×89cm、底面で96×68cm、深さは27cmである。

壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分層された。覆土中からⅡ～Ⅲ群の土器片が7点出土し、うち1点を図示した(図48-2)。出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する可能性がある。

#### 第6号土坑 (ASK-06: 図44・48、写真13)

VIS-117グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。第5号土坑と重複し、これより新しい。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で75×71cm、底面で65×58cm、深さは21cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分層された。覆土中からⅡ～Ⅲ群の土器片1点(図48-3)と微小剥離痕のある剥片1点(図48-4)が出土した。出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する可能性がある。

#### 第7号土坑 (ASK-07: 図44、写真13)

VIS-118グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で127×94cm、底面で98×80cm、深さは30cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面は中央が深くくぼむ。覆土は2層に分層された。

#### 第8号土坑 (ASK-08: 図44、写真13)

VIL-120グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。平面形は歪な円形状である。規模は、開口部で124×101cm、底面で81×60cm、深さは54cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分層された。

#### 第9号土坑 (ASK-09: 図44、写真13)

VIR・S-116グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。平面形は円形である。規模は、開口部で84×83cm、底面で78×74cm、深さは22cmである。壁は底面から垂直に立ち上がる箱状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分層された。

#### 第10号土坑 (ASK-10: 図44、写真14)

VIL-120グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。平面形は円形と推測される。推定規模は、開口部で90×86cm、底面で58×37cm、深さは20cmである。壁は底面から内湾気味に立ち上がり、半円状の断面形状をなす。底面は中央が深くくぼむ。覆土は黒褐色土の単層である。

#### 第11号土坑 (ASK-11: 図45、写真14)

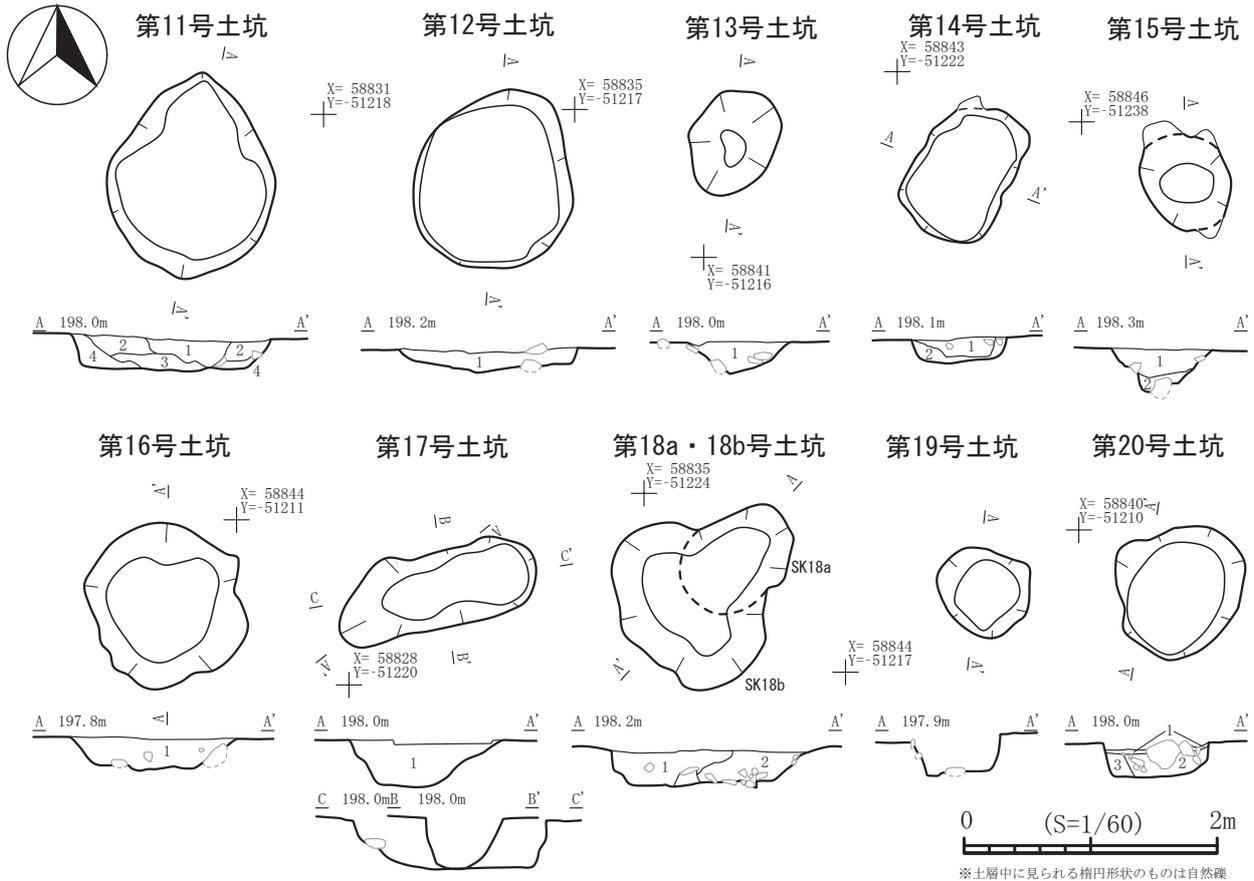
VIIH-120グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で165×133cm、底面で143×119cm、深さは29cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、箱状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は4層に分層された。

#### 第12号土坑 (ASK-12: 図45、写真14)

VII-120グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で148×127cm、底面で131×114cm、深さは25cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、皿状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土主体の単層である。

#### 第13号土坑 (ASK-13: 図45、写真14)

VIIK-120・121グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で87×67cm、底面で30×17cm、深さは28cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、V字状の断面形状をなす。底面は中央が楕円状にくぼむ。覆土は黒褐色土の単層である。



第11号土坑 (ASK-11 : A-A')

第1層 黒色土 10YR1.7/1 礫(φ2~10mm)2%、ローム粒(φ1~2mm)1%  
 第2層 黒褐色土 10YR2/2 礫(φ30~70mm)5%、ローム粒(φ1~3mm)2%  
 第3層 暗褐色土 10YR4/1 礫(φ20~40mm)5%、ローム粒(φ1~2mm)2%、炭化物(φ1~2mm)1%未満  
 第4層 褐色土 10YR4/4 礫(φ2~20mm)2%

第12号土坑 (ASK-12 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/2 褐色土(10YR4/4)(φ~70mm)1%混入、褐色土(10YR3/4)(φ~5mm)1%混入、炭化物(φ1~5mm)1%混入、礫(φ~200mm)層上部混入

第13号土坑 (ASK-13 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 小礫(φ3~10mm)5%、ローム粒(φ1~2mm)2%、炭化物(φ1~3mm)1%未満

第14号土坑 (ASK-14 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫(φ~60mm)1%混入、小礫混入  
 第2層 褐色土 7.5YR4/4 小礫混入2%混入、礫(φ~60mm)1%混入、炭化物粒混入1%

第15号土坑 (ASK-15 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/2 小礫(φ~40mm)混入2%混入、礫混入(φ~100mm)層左部混入、礫混入(φ~70mm)、層右部混入  
 第2層 褐色土 10YR4/6 小礫(φ~70mm)混入1%混入、礫混入(φ~130mm)層下部混入

第16号土坑 (ASK-16 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 小礫(φ3~20mm)7%、炭化物(φ1~2mm)2%

第17号土坑 (ASK-17 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 黒褐色土(10YR3/4)20%、小礫(φ5~20mm)3%、礫混入(φ~200mm)中層部混入

第18a・18b号土坑 (ASK-18a・18b : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物(φ1~10mm)1%、小礫(φ~60mm)1%混入、礫混入(φ~200mm)中層部混入  
 第2層 黒褐色土 10YR2/3 褐色土(7.5YR4/4)10%、小礫混入(φ~100mm)層全体

第20号土坑 (ASK-20 : A-A')

第1層 暗褐色土 10YR3/4 礫(φ3~20mm)3%  
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫(φ3~240mm)20%、ロームブロック(φ1~3mm)1%  
 第3層 黒褐色土 10YR3/2

図45 土坑(2)

第14号土坑 (ASK-14 : 図45・48、写真15)

VII L-118グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。風倒木痕と重複し、これより新しい。平面形は長方形である。規模は、開口部で114×72cm、底面で100×62cm、深さは21cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、箱状の断面形状をなす。底面はほぼ水平である。覆土は2層に分層された。覆土中からⅢ-1群の土器片が2点、Ⅱ~Ⅲ群の土器片が2点出土し、うち2点を図示した(図48-5・6)。出土遺物から、縄文時代中期末葉~後期初頭に帰属する可能性がある。

第15号土坑 (ASK-15 : 図45、写真15)

VII L-115グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で74×70cm、底面で43×31cm、深さは36cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、V字状の断面形状をなす。底面は中央が掘鉢状にくぼむ。覆土は2層に分層された。覆土中から二次調整のある

剥片1点が出土したが図示しなかった。

**第16号土坑**（ASK-16：図45・48、写真15）

VIIK・L-121・122グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で134×129cm、底面で92×86cm、深さは28cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土主体の単層である。覆土中からⅢ-1群の土器片が1点、Ⅱ～Ⅲ群の土器片が14点出土し、うち3点を図示した（図48-7～9）。出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する可能性がある。

**第17号土坑**（ASK-17：図45・48、写真15）

VIIH-119・120グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。平面形は楕円形である。規模は、開口部で165×61cm、底面で118×47cm、深さは38cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土主体の単層である。覆土中からⅡ～Ⅲ群の土器片が1点出土しており、それを図示した（図48-10）。出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する可能性がある。

**第18号 a 土坑**（ASK-18a：図45、写真16）

VII-118・119グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。第18号 b 土坑と重複し、これより新しい。平面形は楕円形と推定される。推定規模は、開口部で96×67cm、底面で87×45cm、深さは38cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土主体の単層である。

**第18号 b 土坑**（ASK-18b：図45、写真16）

VII-118・119グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。第18号 a 土坑と重複し、これに切られている。平面形は楕円形と推定される。推定規模は、開口部で141×59cm、底面で91×31cm、深さは35cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土主体の単層である。

**第19号土坑**（ASK-19：図45、写真16）

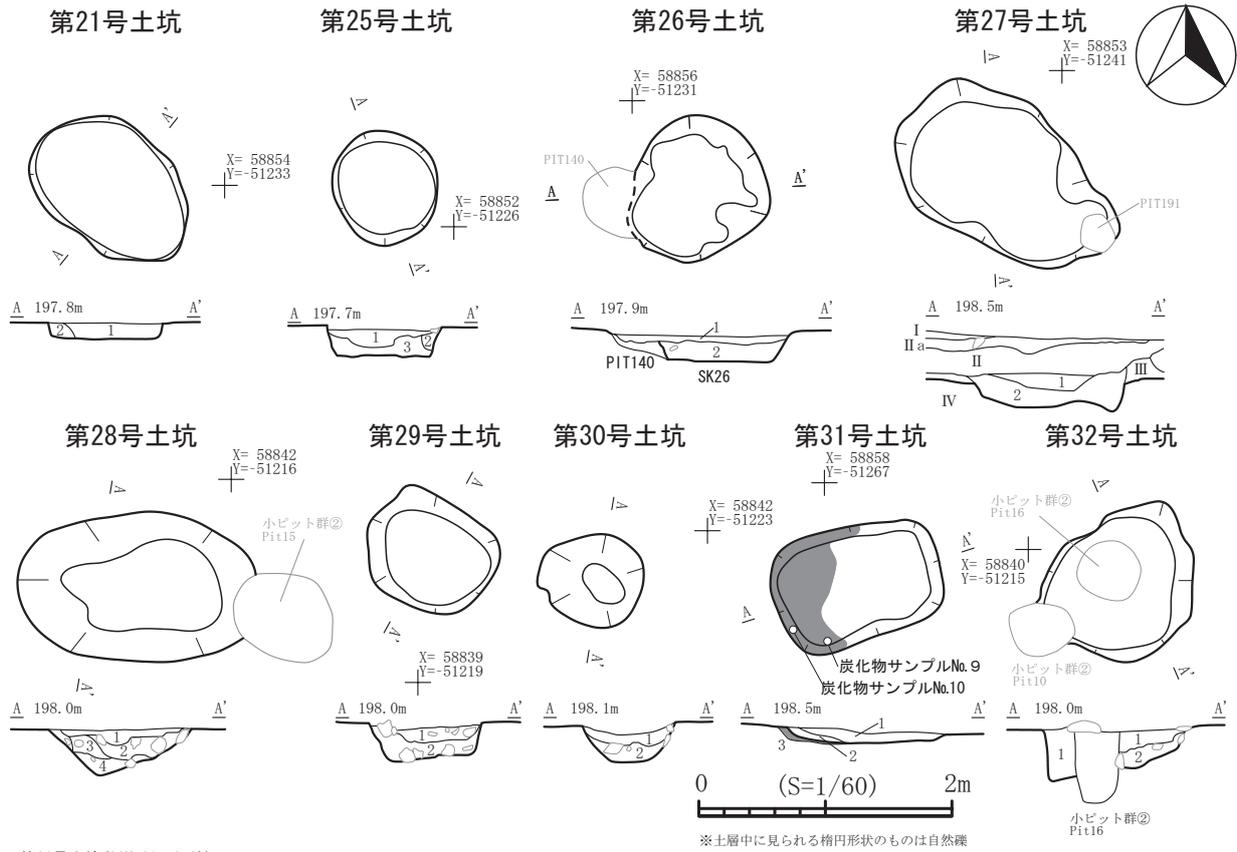
VII L-120・121グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で76×67cm、底面で57×50cm、深さは28cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、箱状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。

**第20号土坑**（ASK-20：図45・48）

VIIJ・K-122グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。第4号竪穴住居跡と重複し、これより新しい。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で109×103cm、底面で92×72cm、深さは35cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、箱状の断面形状をなす。底面はほぼ水平である。覆土は3層に分層された。覆土中からⅡ～Ⅲ群の土器片が1点出土しており、それを図示した（図48-11）。出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する可能性がある。

**第21号土坑**（ASK-21：図46、写真16）

VII N-116グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。平面形は楕円状である。規模は、開口部で138×91cm、底面で135×88cm、深さは13cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、皿状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分層された。



第21号土坑 (ASK-21 : A-A')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫 (φ1~30mm) 2%、ロームブロック (φ1~2mm) 1%未滿  
第2層 褐色土 10YR4/4 礫 (φ1~3mm) 1%

第25号土坑 (ASK-25 : A-A')

第1層 褐色土 10YR4/4 炭化物粒 (φ1~3mm) 5%、ローム粒 (φ1~2mm) 3%  
第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物粒 (φ1~2mm) 1%  
第3層 褐色土 10YR4/4 炭化物粒 (φ1~2mm) 2%、ローム粒 (φ1~2mm) 1%

第26号土坑 (ASK-26 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫 (φ1~30mm) 5%、ローム粒 (φ1~2mm) 2%、炭化物 (φ1~2mm) 1%  
第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫 (φ1~60mm) 3%、炭化物 (φ1~2mm) 1%、ローム粒 (φ~1mm) 1%未滿

第27号土坑 (ASK-27 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 小礫 (φ5~30mm) 1%  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土 (10YR4/4) 1%、小礫 (5~30mm) 1%

第28号土坑 (ASK-28 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR3/2 礫 (φ1~40mm) 5%、ローム粒 (φ1~2mm) 3%  
第2層 暗褐色土 10YR3/3 礫 (φ1~140mm) 30%、ローム粒 (φ1~2mm) 5%  
第3層 暗褐色土 10YR3/4 礫 (φ1~80mm) 10%、ローム粒 (φ1~2mm) 3%  
第4層 褐色土 10YR4/4 礫 (φ1~30mm) 15%、ローム粒 (φ1~2mm) 2%

第29号土坑 (ASK-29 : A-A')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫 (φ1~140mm) 60%、ローム粒 (φ1~2mm) 1%  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫 (φ1~150mm) 30%、ローム粒 (φ1~2mm) 2%

第30号土坑 (ASK-30 : A-A')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒 (φ1~2mm) 5%、礫 (φ1~50mm) 3%  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫 (φ1~160mm) 10%、ローム粒 (φ1~2mm) 3%

第31号土坑 (ASK-31 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~10mm) 1%、炭化物粒 (φ1~20mm) 1%  
第2層 炭化物主体 黒褐色土 (10YR3/2) 20%含む  
第3層 明赤褐色土 5YR5/8 地山 (破熱範囲)

第32号土坑 (ASK-32 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫 (φ1~120mm) 10%、ローム粒 (φ1~2mm) 2%、炭化物 (φ1~2mm) 1%  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 礫 (φ1~140mm) 15%、炭化物 (φ1~3mm) 5%、ローム粒 (φ1~2mm) 3%

図46 土坑 (3)

第25号土坑 (ASK-25 : 図46、写真16)

VII M・N-118グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。平面形は円形である。規模は、開口部で92×83cm、底面で80×73cm、深さは38cmである。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、箱状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は3層に分層された。

第26号土坑 (ASK-26 : 図46)

VII N-117グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。PIT140と重複し、これを切っている。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で118×107cm、底面で91×55cm、深さは32cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分層された。

第27号土坑 (ASK-27 : 図46、写真16)

VII M・N-114グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。PIT191と重複し、これに切られてい

る。平面形は楕円状である。規模は、開口部で193×116cm、底面で156×116cm、深さは38cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる逆台形状の断面形状をなす。底面には起伏がみられる。覆土は2層に分層された。

#### 第28号土坑（ASK-28：図46、写真16）

ⅦK-120・121グリッドに位置し、第Ⅳa層上面で確認した。小ピット群②のPit15と重複し、これに切られている。平面形は楕円状である。規模は、開口部で188×116cm、底面で129×67cm、深さは42cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、V字状の断面形状をなす。底面は中央が楕円状にくぼむ。覆土は4層に分層された。

#### 第29号土坑（ASK-29：図46、写真17）

ⅦJ・K-120グリッドに位置し、第Ⅳa層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で107×101cm、底面で86×66cm、深さは35cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土主体で2層に分層された。

#### 第30号土坑（ASK-30：図46、写真17）

ⅦK-118・119グリッドに位置し、第Ⅳa層上面で確認した。風倒木痕と重複し、これを切っている。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で84×75cm、底面で38×24cm、深さは36cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土主体で2層に分層された。

#### 第31号土坑（ASK-31：図46、写真17）

ⅦO-108グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。平面形は長方形である。規模は、開口部で132×90cm、底面で114×69cm、深さは21cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。壁及び底面に被熱痕がみられる。覆土は2層に分層された。第2層は炭化物層である。遺物は出土しなかったが、出土炭化材の放射性炭素年代測定結果から、中近世の時期が推定される。（第4章第1節参照）

#### 第32号土坑（ASK-32：図46・48、写真17）

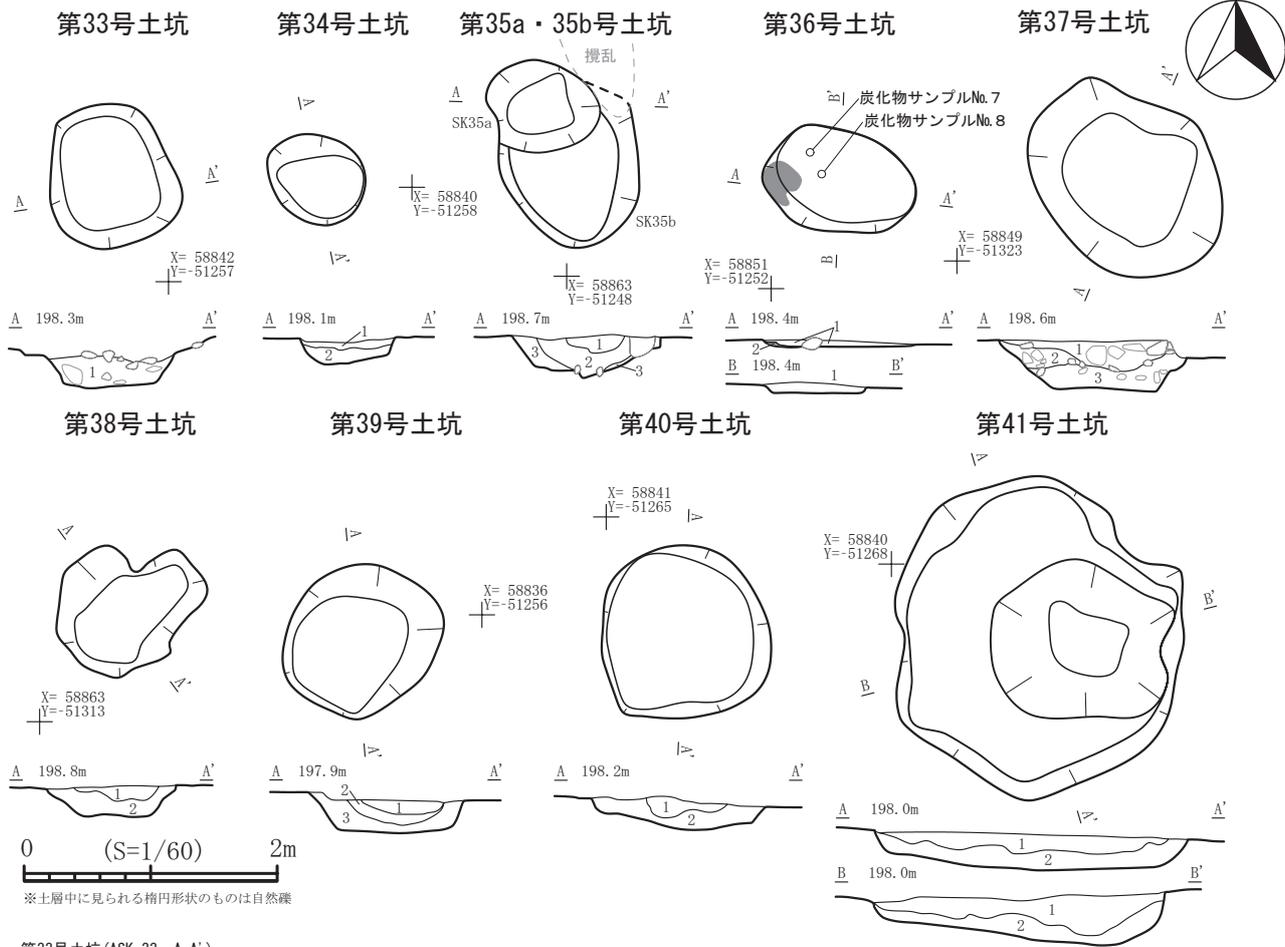
ⅦJ・K-121グリッドに位置し、第Ⅳa層上面で確認した。小ピット群②のPit10・16と重複し、これに切られている。平面形はほぼ円状である。規模は、開口部で131×114cm、底面で109×99cm、深さは53cmである。壁は底面からほぼ直立して立ち上がる。底面が傾斜しており、断面形状は平行四角形状である。覆土は2層に分層された。覆土中からⅡ～Ⅲ群の土器片が14点出土し、うち2点を図示した（図48-12・13）。出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する可能性がある。

#### 第33号土坑（ASK-33：図47・48、写真17）

ⅦK-110グリッドに位置し、第Ⅳa層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で114×95cm、底面で88×72cmで、深さは36cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土主体の単層である。覆土中からⅢ-1群の土器片が1点、Ⅱ～Ⅲ群の土器片が24点出土し、うち3点を図示した（図48-14～16）。出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する可能性がある。

#### 第34号土坑（ASK-34：図47、写真18）

ⅦJ・K-110グリッドに位置し、第Ⅳa層上面で確認した。PIT319と重複し、これを切っている。



第33号土坑 (ASK-33 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR3/2 礫 (φ1~300mm)30%、ローム粒 (φ1~10mm)7%、炭化物粒 (φ1~10mm)5%

第34号土坑 (ASK-34 : A-A')

第1層 暗褐色土 10YR3/4 小礫 (φ5~10mm)1%  
第2層 褐色土 10YR4/6 暗褐色土 (10YR3/4) ブロック状に30%含む、小礫 (φ5~30mm)1%

第35a・35b号土坑 (ASK-35a・35b : A-A')

第1層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土 (10YR4/4) ブロック状に15%含む、小礫 (φ5~20mm)、ロームブロック (φ1~100mm)1%  
第2層 黒褐色土 10YR2/3  
第3層 褐色土 10YR4/6 黒褐色土 (10YR2/3) ブロック状に20%含む、小礫 (φ5~50mm)1%

第36号土坑 (ASK-36 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒 (φ1~10mm)5%、炭化物粒 (φ1~10mm)1%  
第2層 明黄褐色土 5YR5/8 地山被熱範囲

第37号土坑 (ASK-37 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 礫 (φ20~180mm)10%、炭化物 (φ1~4mm)1%、ローム粒 (φ~1mm)1%未満  
第2層 褐色土 10YR4/4 礫 (φ10~120mm)5%、炭化物 (φ~1mm)1%未満  
第3層 暗褐色土 10YR3/3 礫 (φ5~110mm)30%、炭化物 (φ1~3mm)1% 砂質土

第38号土坑 (ASK-38 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR3/3 ローム粒 (φ1~2mm)1%、炭化物 (φ1~2mm)1%未満  
第2層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒 (φ1~60mm)3%、炭化物 (φ1~5mm)3%

第39号土坑 (ASK-39 : A-A')

第1層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物 (φ1~2mm)、3%ローム粒 (φ1~5mm)2%  
第2層 暗褐色土 10YR4/3 炭化物 (φ1~2mm)2%、ローム粒 (φ1~2mm)1%  
第3層 褐色土 10YR4/4 炭化物 (φ1~3mm)3%、ローム粒 (φ1~2mm)1%

第40号土坑 (ASK-40 : A-A')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 礫 (φ15~20mm)3%、小礫 (φ~3mm)2%、炭化物粒 (φ~1mm)1%未満 しまりあり  
第2層 暗褐色土 10YR3/3 明黄褐色土 (10YR6/6) (φ3~10mm)10%ブロック状に含む、礫 (φ10~20mm)2%、小礫 (φ~3mm)2%、炭化物粒 (φ~1mm)1% しまりあり

第41号土坑 (ASK-41 : A-A')

第1層 暗褐色土 10YR3/3 黒褐色土 (10YR2/2) 層上部に40%、礫 (φ20~180mm)5%、炭化物 (φ10mm)1%  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 褐色土 (10YR4/6) 30%含む、礫 (φ10~200mm)15%、炭化物 (φ10mm)1%

図47 土坑 (4)

平面形は円状である。規模は、開口部で82×68cm、底面で67×51cm、深さは23cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は中央が深くくぼみ、半円状の断面形状をなす。覆土は2層に分層された。

第35号 a 土坑 (ASK-35a : 図47、写真18)

VII P・Q-112・113グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。第35号 b 土坑と重複し、これより新しい。平面形は円形である。規模は、開口部で90×72cm、底面で50×40cm、深さは33cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、V字状の断面形状をなす。底面は中央が掘鉢状にくぼむ。覆土は3層に分層された。

**第35号 b 土坑** (ASK-35b : 図47、写真18)

VII P・Q-112・113グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。第35号 a土坑と重複し、これに切られている。また、風倒木痕と重複し、これを切っている。平面形は楕円形と推定される。推定規模は、開口部で111×80cm、底面で85×74cm、深さは19cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。

**第36号土坑** (ASK-36 : 図47、写真18)

VII M・N-111・112グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。風倒木痕と重複し、これを切っている。平面形は楕円形である。規模は、開口部で122×82cm、底面で113×72cm、深さは10cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、皿状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土主体の単層である。覆土中から炭化物が出土している。遺物は出土しなかったが、出土炭化材の放射性炭素年代測定結果から、中近世の時期が推定される。(第4章第1節参照)

**第37号土坑** (ASK-37 : 図47、写真18)

VII M-94グリッドに位置し、第Ⅲ層下面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で170×134cm、底面で108×107cm、深さは41cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は3層に分層された。

**第38号土坑** (ASK-38 : 図47、写真19)

VII P・Q-96・97グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。平面形は不整形である。規模は、開口部で124×98cm、底面で101×51cm、深さは27cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分層された。

**第39号土坑** (ASK-39 : 図47・48、写真19)

VII I・J-110グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で133×117cm、底面で98×81cmで、深さは35cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、逆台形状の断面形状をなす。底面はほぼ平坦である。覆土は3層に分層された。覆土中からⅡ～Ⅲ群の土器片が4点出土し、うち2点を図示した(図48-17・18)。出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する可能性がある。

**第40号土坑** (ASK-40 : 図47、写真19)

VII J・K-108・109グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。平面形は円形である。規模は、開口部で148×144cm、底面で131×123cm、深さは25cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は中央付近がへこむ。断面形状は皿状である。覆土は暗褐色土主体で2層に分層された。

**第41号土坑** (ASK-41 : 図47・48、写真19)

VII J・K-108グリッドに位置し、第IV a層上面で確認した。平面形はほぼ円形である。規模は、開口部で258×223cm、底面で73×55cmで、深さは43cmである。壁は底面から外傾して立ち上がり、皿状の断面形状をなす。底面は中央付近がへこむ。覆土は2層に分層された。覆土中からⅡ～Ⅲ群の土器片が3点出土し、うち1点を図示した(図48-19)。残りの1点は、第19号竪穴住居跡と接合した。出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する可能性がある。

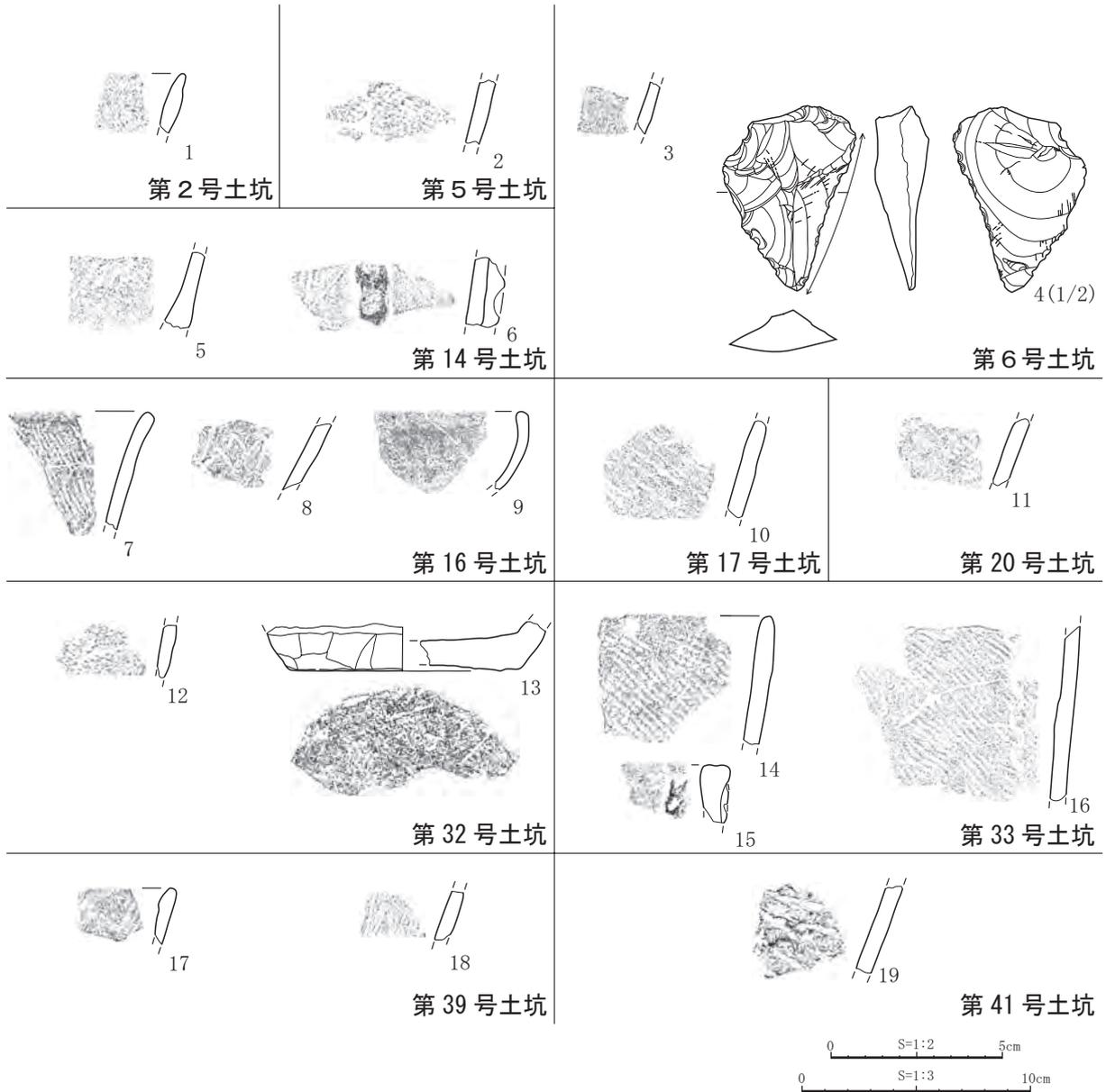


図48 土坑出土遺物

## 第5節 掘立柱建物跡

2棟検出した。第2号掘立柱建物跡は整理段階で図上復元したものである。なお、柱穴番号は、現場で使用した遺構番号をそのまま使用している。PITの規模は図版内の「PIT計測表」に示した。

### 第1号掘立柱建物跡（ASB-01：図49・56、写真20）

ⅦQ・R-105・106グリッドに位置し、第Ⅳa層上面で確認した。4基の柱穴で構成される1間×1間の正方形に近い形状の建物跡である。長軸方向はN-55°-W、桁行長3.0m、梁行長2.2mの規模である。支柱穴となるPIT209・213・269・292の他に、建物跡内部中央にPIT217、建物跡北西部にPIT218・283、建物跡南東部にPIT240、PIT269と重複するPIT270、PIT292と重複するPIT321が近接する。PIT218とPIT240は、軸が若干北東寄りにずれるが、4本柱にこのPITも含めたいわゆる「亀甲形」の6本柱になる可能性もある。PIT213底面からは、礎石と思われる扁平な礫が出土した。PIT覆土はいずれも黒褐色土中心であり、PIT209第1～3層、PIT213第1層は柱痕であると考えられる。

遺物は、支柱穴のPIT209から35.5g、PIT269から7.0g、PIT292から137.4gの計179.8gの土器が、また、建物跡内部中央のPIT217から35.5gの土器が覆土中から出土しており、うち、5点を図示した。内訳は、Ⅲ-1群が2点（図56-1～2）、Ⅱ～Ⅲ群が3点（図56-3～5）である。図56-1・2はPIT209、図56-4はPIT269、図56-5はPIT292、図56-3はPIT217から出土した。出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭の特徴が窺える。

### 第2号掘立柱建物跡（ASB-02：図49・56、写真20）

ⅦQ・R-106・107グリッドに位置し、第Ⅳa層上面で確認した。4基の柱穴で構成される1間×1間の正方形に近い形状の建物跡である。長軸方向はN-51°-W、桁行長2.8m、梁行長1.8mの規模である。支柱穴となるPIT284・289・290・322の他に、建物跡北東軸中間にPIT231が位置する。PIT231は、支柱穴より規模が大きく、長軸1.5m、短軸1.0m、深さ46cmの楕円形で、覆土からは土器片が多数出土した。建物跡北西部にはPIT323が近接するが、直接建物跡に関連する小ピットかどうかは不明である。覆土はいずれも黒褐色土中心であり、PIT284第1層は柱痕であると考えられる。遺物は、支柱穴のPIT289から55.6g、PIT290から12.6g、PIT322から190.3gの計258.5gの土器が、また、PIT231から2127.4g、PIT323から41.2gの土器が覆土中から出土しており、うち、13点を図示した。内訳は、Ⅲ-1群が8点（図56-7～12・14・15）、Ⅱ～Ⅲ群が5点（図56-6・13・16～18）である。図56-14・15はPIT289、図56-16はPIT290、図56-17はPIT322、図56-6～13はPIT231、図56-18はPIT323から出土した。出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭の特徴が窺える。

## 第6節 その他の遺構

### 1 硬化面

2箇所検出した。図版中には焼土跡やPITも含まれるが、焼土跡は本節4に記載し、PITの規模は図版中の「PIT計測表」に示した。

#### 第1号硬化面（ASM-01：図50、写真20）

第1・2号掘立柱建物跡

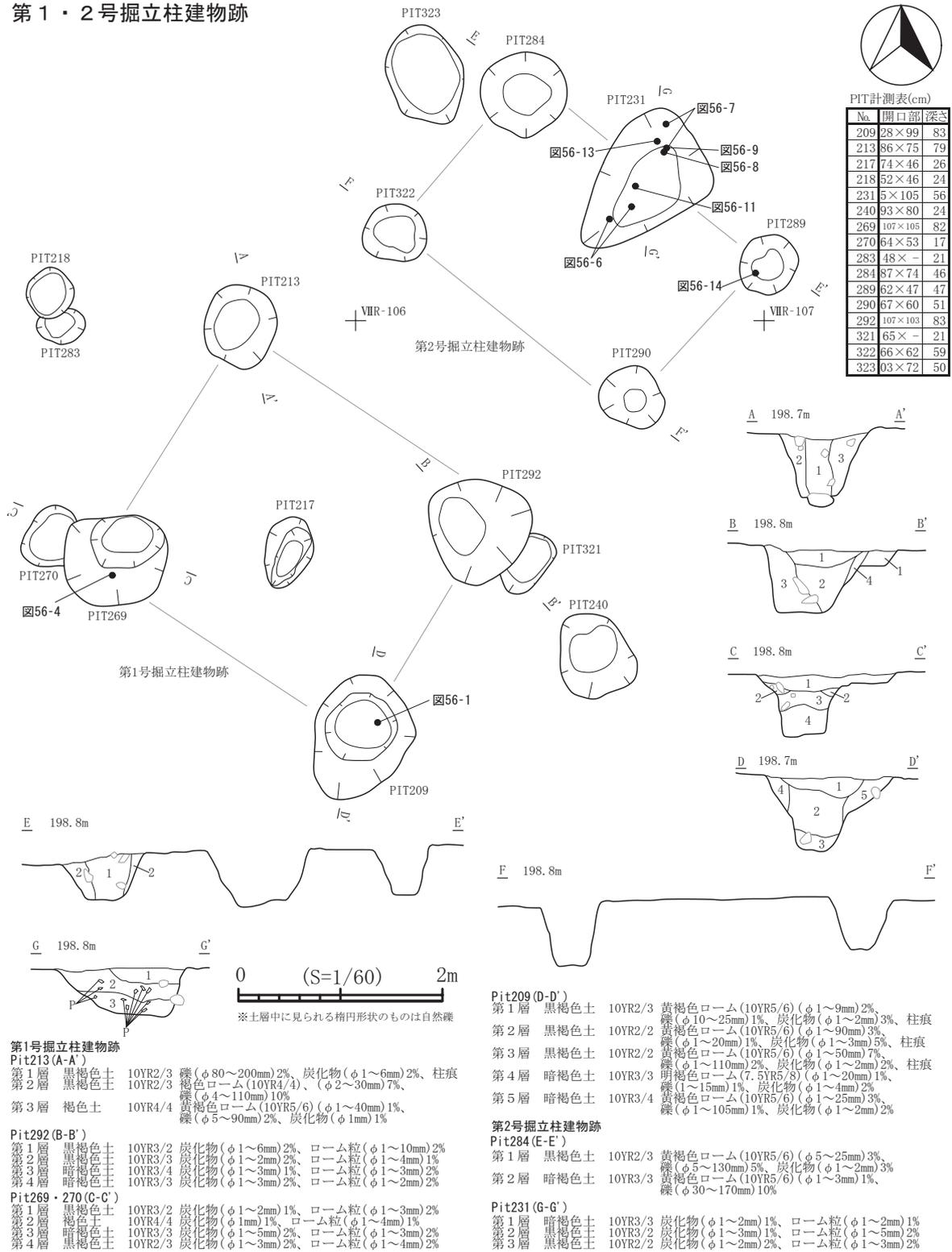


図49 第1・2号掘立柱建物跡

第1号硬化面

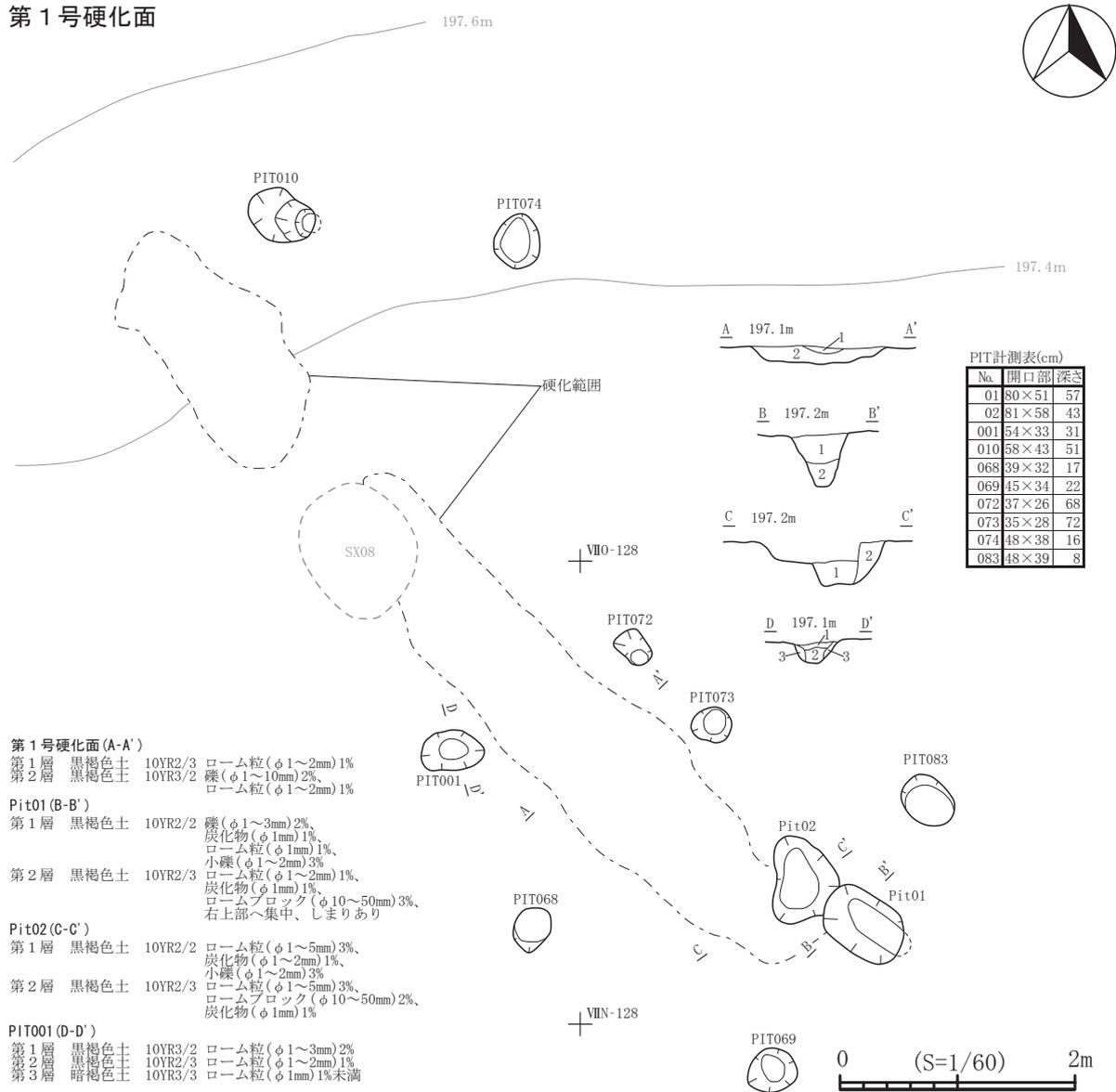


図50 第1号硬化面

VII N・O-127・128グリッドに位置し、北側から南側に緩やかに傾斜する第Ⅲ層上面で確認した。近現代の落ち込み(SX-08)と重複し、本遺構が古い。硬化範囲は、北西-南東軸で傾斜に沿った形で検出され、一部途切れるものの、長さ約7m、幅約1mの範囲で硬化している。堆積土は2層に分層したが、いずれも黒褐色土中心で強く締まっていた。硬化面付近から小ピットを10基を検出したが、PIT001-072、PIT068-073、PIT069-083は硬化範囲を挟んで対になっており、硬化面に関連する施設である可能性がある。遺物は出土しなかった。

第2号硬化面 (ASM-02: 図51、写真20)

VII P・Q-101・102グリッドに位置し、ほぼ平坦面の第Ⅳa層上面で確認した。硬化範囲中央部よりやや北側から第2号焼土跡を検出した。硬化範囲は、長軸約6m、短軸約5mの不整形で、面積は

第2号硬化面

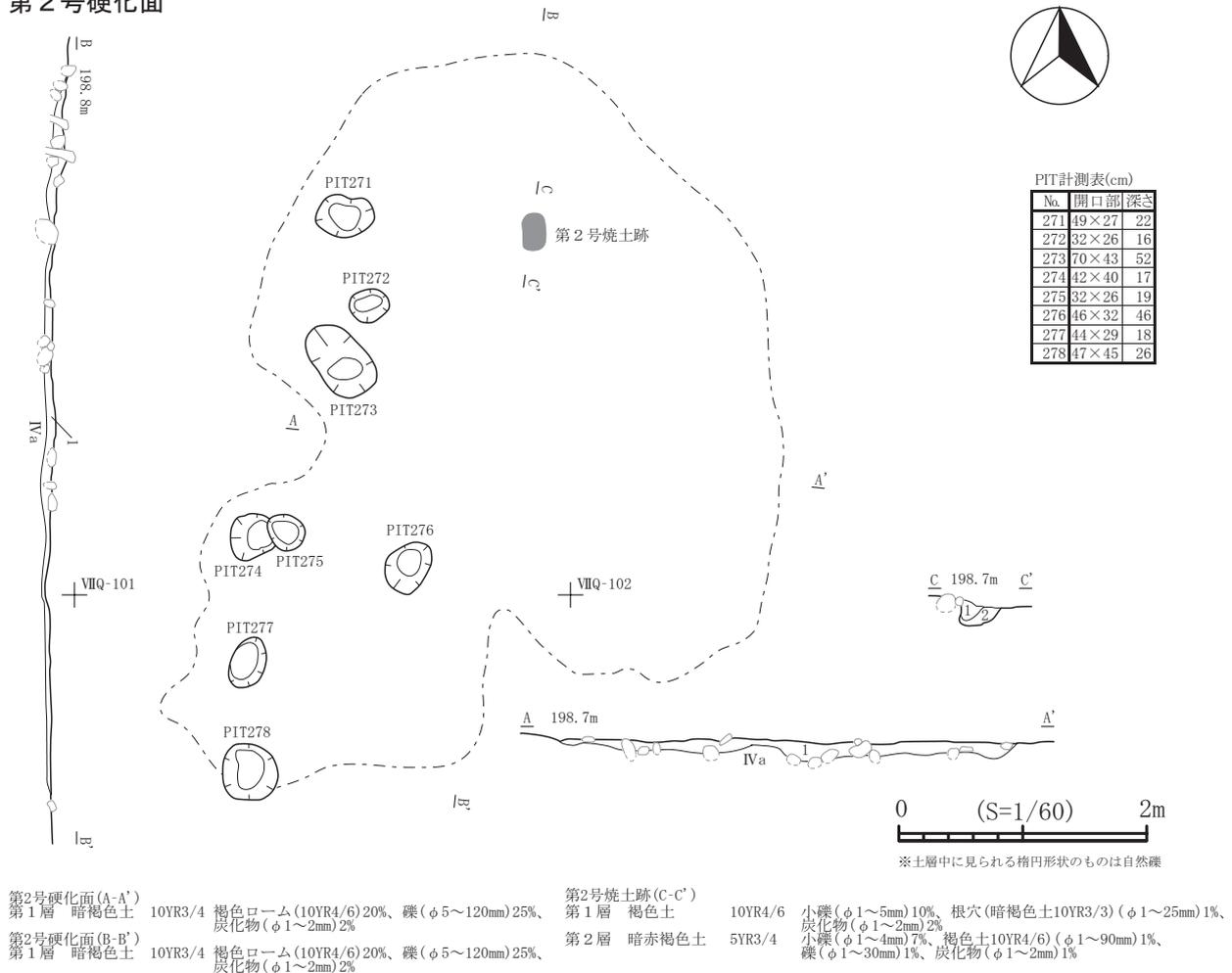


図51 第2号硬化面

約20㎡である。硬化面は深さ1～3cm程度が硬化しており、黒褐色土中心の土壌を貼床状に充填して踏み固めた可能性が考えられる。硬化面西側から列状に8基の小ピットを検出した。遺物は、硬化面上から縄文時代の土器小片が数点出土したが、時期がわかるものはなかった。

2 小ピット

小ピットは調査区全域にわたって294基検出した。確認面はいわゆる「礫堆積」区域ではIV a層上面、「埋没沢」区域では第Ⅲ層上面である。開口部規模は50cm前後、深さは40cm前後のものが最も多い。覆土は黒褐色・暗褐色の小礫が少量混じるものが中心である。遺物が出土した小ピットもあるが、時期は縄文時代中期末葉～後期初頭にかけての土器片が多い。なお、遺物が出土していない小ピットもあるが、覆土の様相や掘り込み面などから、周囲の遺構に近い時期であると考えられる。個々の小ピットにおける基礎データ及び変更・欠番などの詳細については表2・3にまとめた。

また、弧状に配置される小ピットについては、「小ピット群」として抽出し、詳細について記述していくこととする。調査段階で竪穴住居跡として取り扱った遺構(ASI-17・18)についても、炉や貼床等が伴わないということから小ピット群に含めたものもある。なお、図版中に含まれる焼土跡は

本節4に記載し、小ピット群に含まれる小ピットの規模は図版中の「小ピット計測表」に示した。

**小ピット群①** (ASI-17: 図52)

VII L・M-122・123グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。本小ピット群東側は風倒木と考えられる痕跡により一部壊されている。Pit01・02・05・06・07・09の6基が弧状に配置され、Pit03・04は弧状配置の外側に位置する。堆積土は黒褐色・暗褐色・褐色土中心で、Pit06には柱痕も確認できる。遺物は出土しなかった。

**小ピット群②** (ASI-18: 図52)

VII J・K-121・122グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。Pit01~08・10~13・16・18の14基が弧状に配置され、Pit09・14・15・17は弧状配置の外側に位置する。堆積土は黒褐色・暗褐色・褐色土中心で、Pit15には柱痕も確認できる。遺物は、本小ピット群範囲内から土器片が出土し、4点を図示した(図56-19~22)。

**小ピット群③** (図53、写真21)

VII G~I-127・128グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。PIT015~021・023・025・026・076の11基が群集する。PIT016~021の6基は、やや小規模ではあるが、いわゆる「亀甲形」の6本柱掘立建物跡になる可能性もある。堆積土は黒褐色・暗褐色中心の単層である。遺物はPIT025から土器片が出土し、1点を図示した(図56-23)。

**小ピット群④** (図53)

VII H・I-122・123グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。本小ピット群北西側・南西側は風倒木と考えられる痕跡により一部壊されている。途中途切れるもののPIT041~045・047・048・050・051の9基が弧状に配置され、PIT046・052は弧状配置の外側に位置する。堆積土は黒褐色・暗褐色中心の単層である。遺物はPIT048・050から土器片が出土し図示した(図56-24・25)。

**小ピット群⑤** (図54)

VII K・L-117・118グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で確認した。PIT097・110・111・120・125・164・174の7基が楕円状に配置され、PIT104・105・184・185は楕円状配置の外側に位置する。堆積土は黒褐色・暗褐色・褐色土中心で、PIT110・111には柱痕も確認できる。遺物はPIT105から土器片が出土し、1点を図示した(図56-26)。

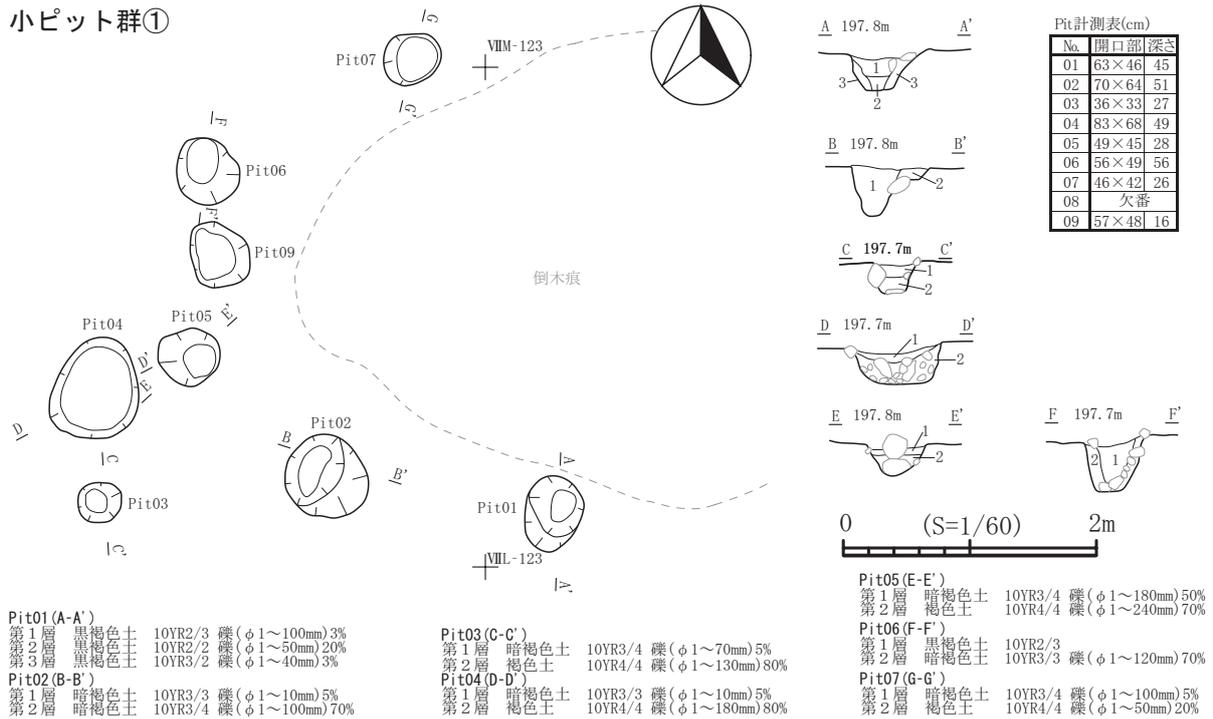
**小ピット群⑥** (図54)

VII O・P-107・108グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。本小ピット群内部には第1号焼土跡、第31号土坑、風倒木と考えられる痕跡が近接する。途中途切れるもののPIT228・263・264・265・268の5基が弧状に配置され、PIT266のみ弧状配置の外側に位置する。堆積土は黒褐色・暗褐色中心で、PIT228には柱痕も確認できる。遺物は出土しなかった。

**小ピット群⑦** (図55、写真21)

VII K・L-102・103グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で確認した。途中途切れるもののPIT223・226・227・229・230・233・242・244・281・298の10基が弧状に配置され、PIT241・297は弧状配置の外側、PIT299は弧状配置の中央部に位置する。堆積土は黒褐色・暗褐色中心の単層である。遺物は出土しなかった。

小ピット群①



小ピット群②

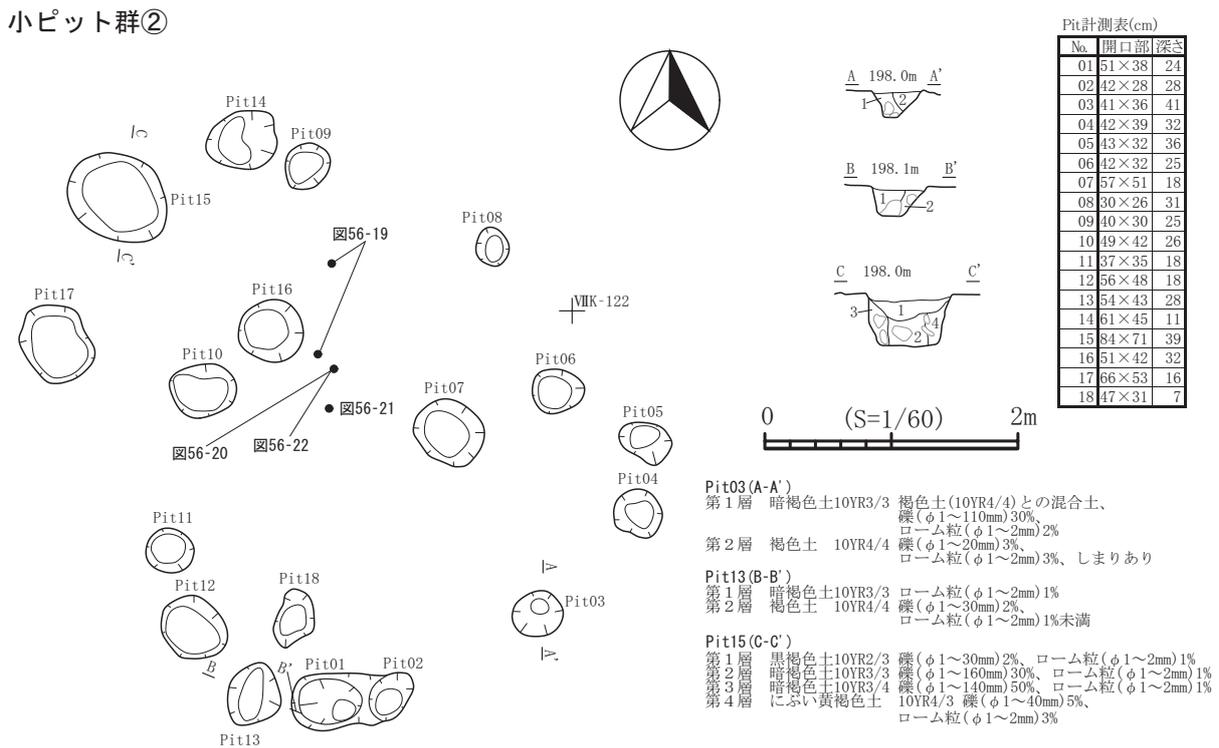
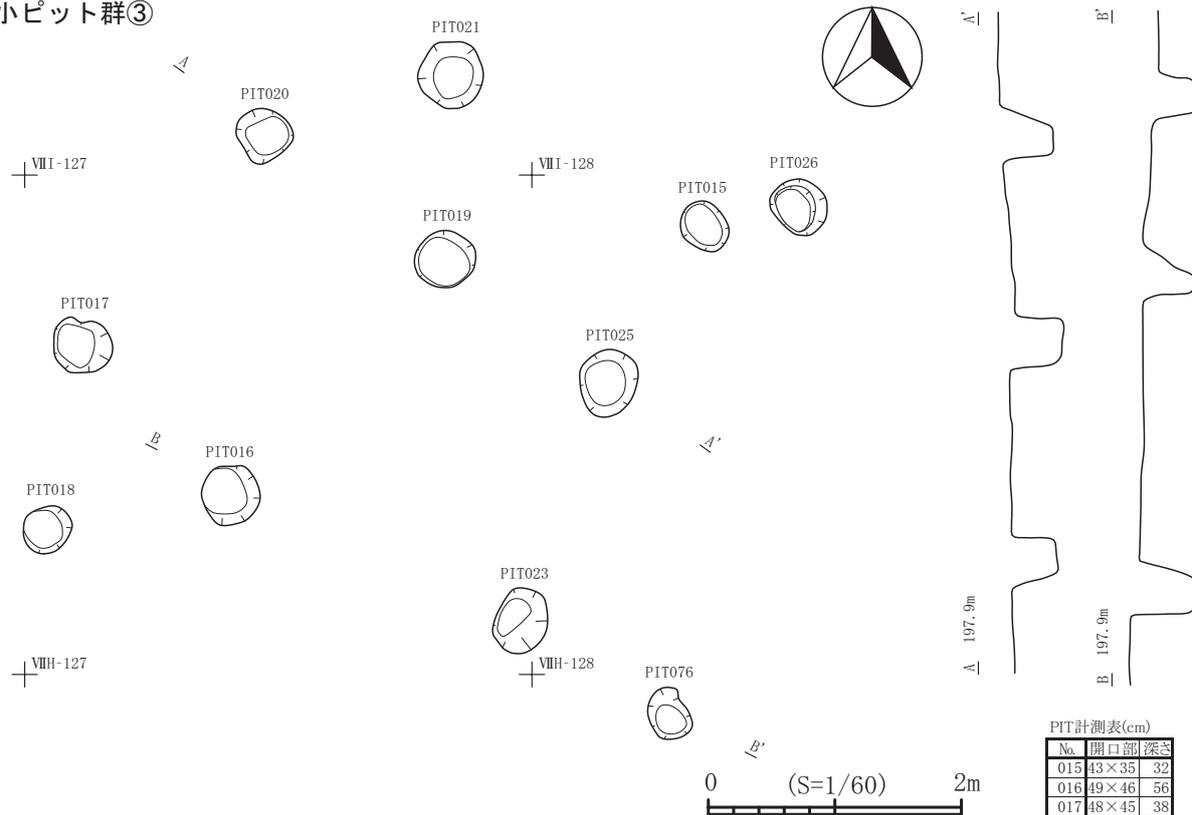


図52 小ピット群①・②

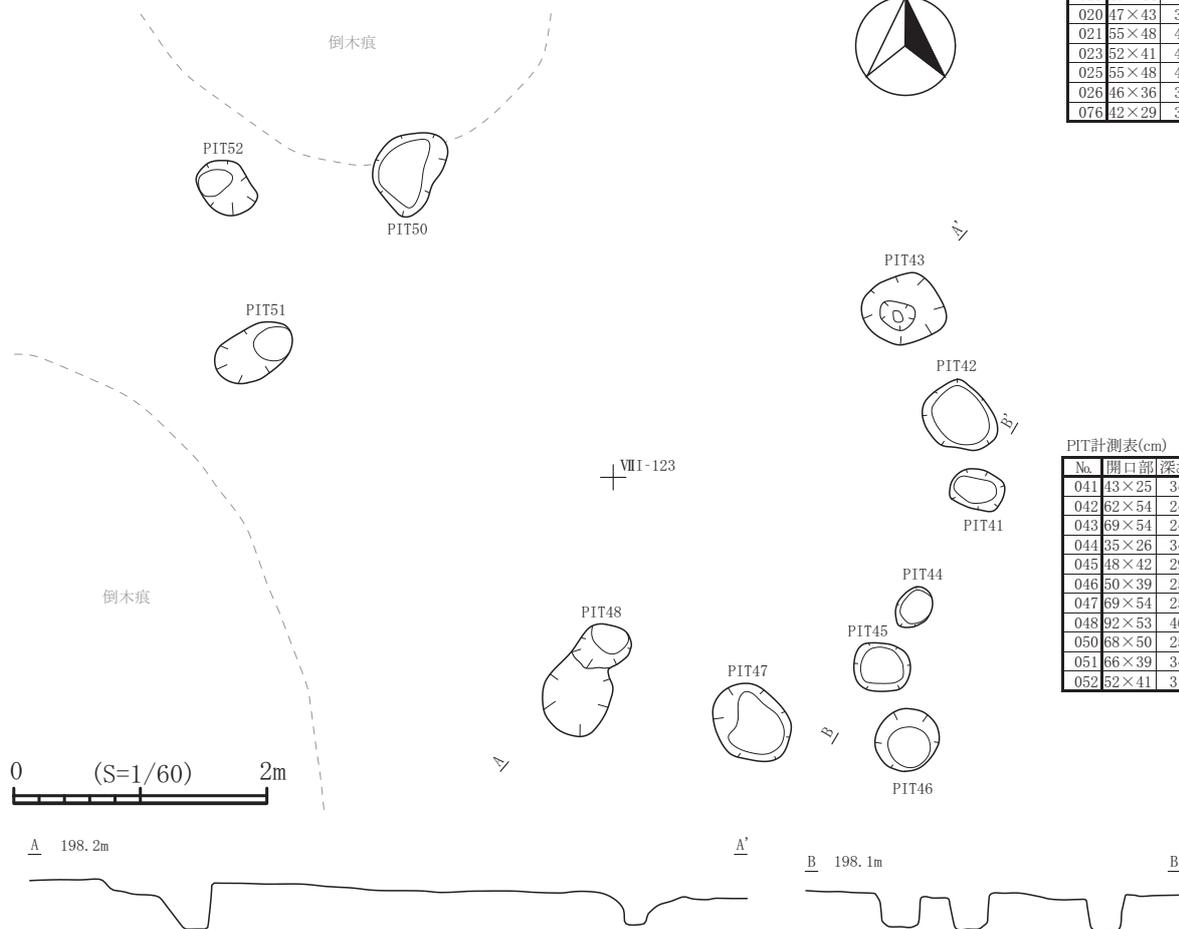
小ピット群③



PIT計測表(cm)

No.	開口部	深さ
015	43×35	32
016	49×46	56
017	48×45	38
018	39×27	25
019	48×44	48
020	47×43	38
021	55×48	45
023	52×41	44
025	55×48	49
026	46×36	37
076	42×29	35

小ピット群④

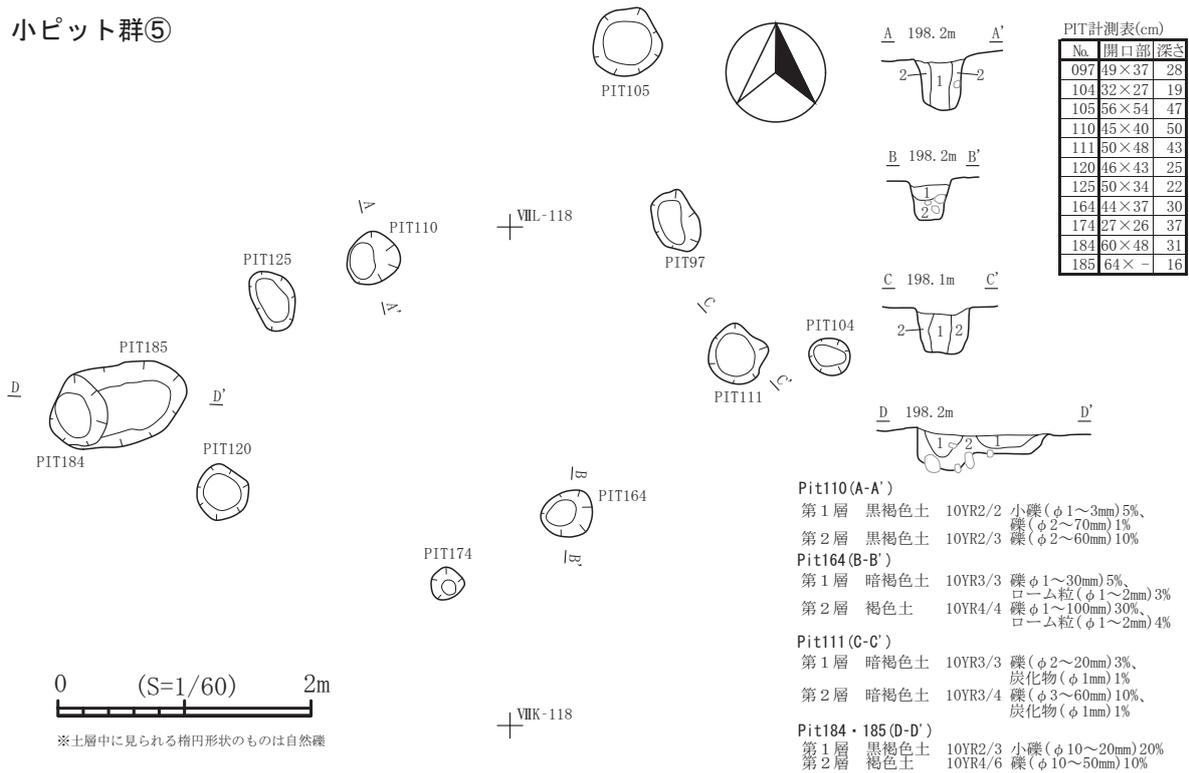


PIT計測表(cm)

No.	開口部	深さ
041	43×25	34
042	62×54	24
043	69×54	24
044	35×26	34
045	48×42	29
046	50×39	25
047	69×54	25
048	92×53	46
050	68×50	25
051	66×39	34
052	52×41	31

図53 小ピット群③・④

小ピット群⑤



小ピット群⑥

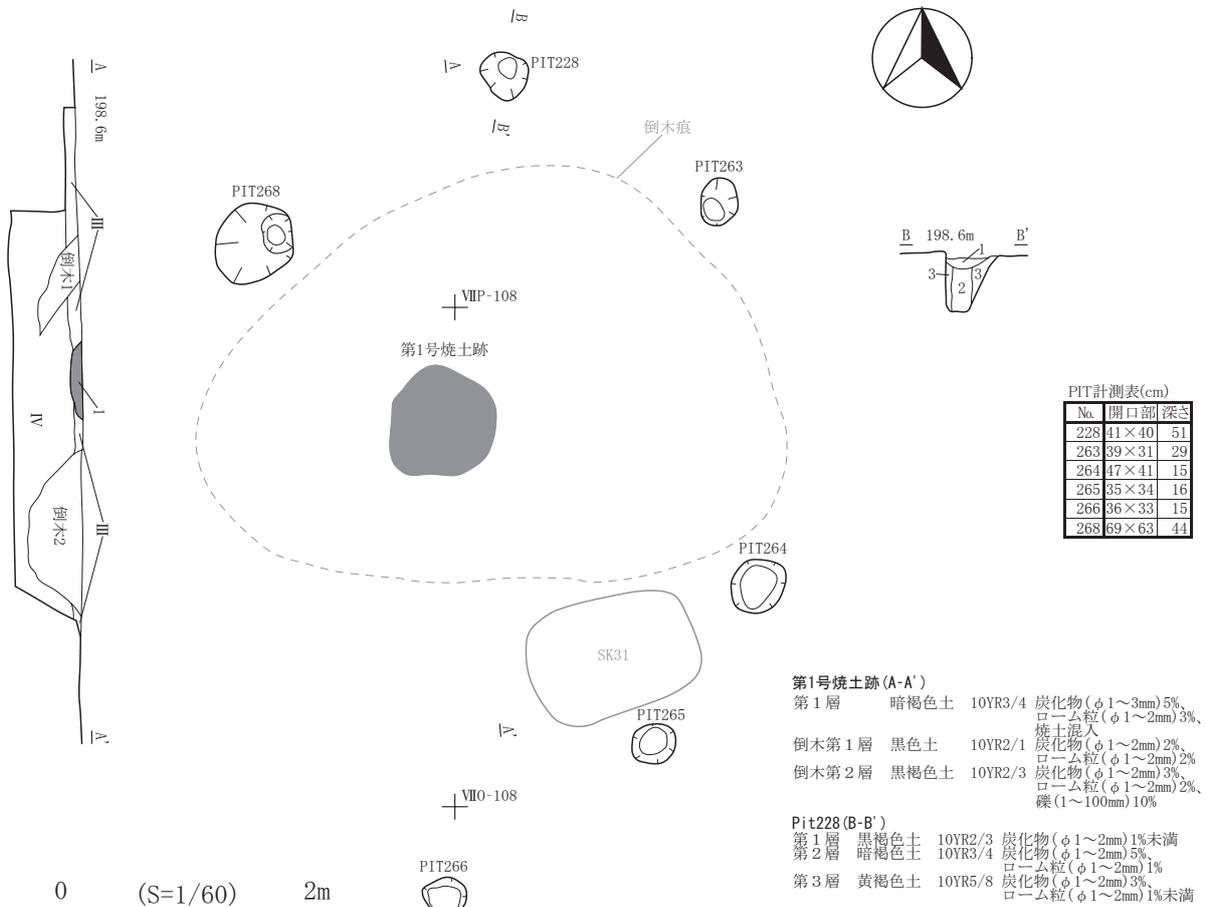


図54 小ピット群⑤・⑥

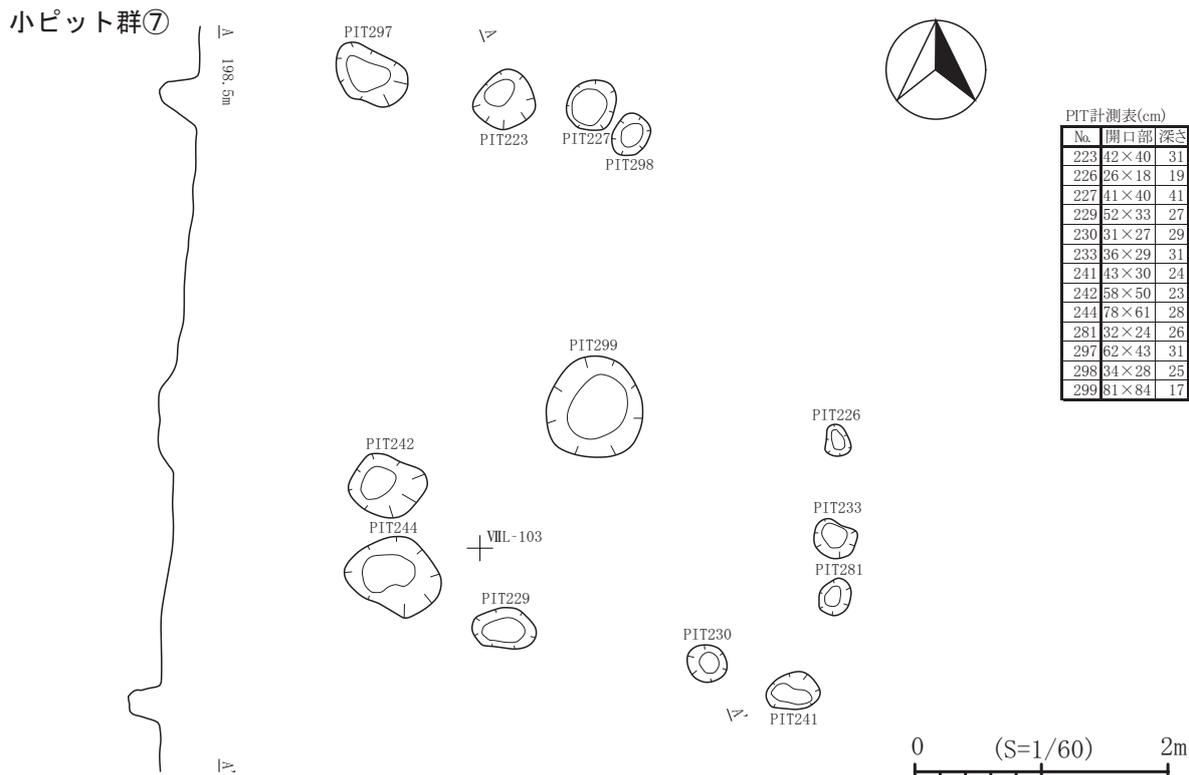


図55 小ピット群⑦

### 3 焼土跡

2基検出した。第1号焼土跡は「小ピット群⑥」図版内、第2号焼土跡は「第2号硬化面」図版内にそれぞれ示した。

#### 第1号焼土跡 (ASN-01: 図54)

VII O-107・108グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で検出した。小ピット群⑥内にある風倒木と考えられる痕跡内で検出されたが、ちょうど中央部にあたり風倒木の影響は受けていない感じであった。被熱規模は89×86cmのほぼ円形で、深さは9cmである。焼土層の一部から土壌を採取し、水洗選別して確認された炭化種実を同定分析したところ、オニグルミ・クリ・クワ属・ウルシ属・ヌルデ、キブシ・サナエタデーオオイヌタデ・キランソウ属が得られた(第4章第2節)。

#### 第2号焼土跡 (ASN-02: 図51、写真20)

VII Q-101グリッドに位置し、第Ⅳ a層上面で検出した。被熱規模は30×20cmの楕円形で、深さは13cmである。第2号硬化面中央部よりやや北側で検出されたため、硬化面と関連する焼土跡である可能性はある。  
(新山)

表2 小ピット属性表(1)

遺構名	計測値			グリット	備考(出土遺物・重複等)
	開口部(cm)	底面部(cm)	深さ(cm)		
PIT001	第1号硬化面				
PIT002	49×45	26×20	26	VIN-127	
PIT003	41×38	18×6	47	VIN-127	
PIT004	34×18	15×8	12	VIN-125	
PIT005	41×30	31×27	30	VIM-125	覆土からⅡ～Ⅲ群土器4点
PIT006	53×48	38×29	54	VIM-125	
PIT007	SI-05Pit011に変更				
PIT008	63×44	34×18	27	VIL-126	
PIT009	47×33	22×18	38	VIN-127	
PIT010	第1号硬化面				
PIT011	85×48	77×30	23	VIL-127	
PIT012	38×31	23×21	11	VIK-128	
PIT013	66×52	55×38	15	VIK-129	
PIT014	71×69	58×45	18	VII-128	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT015	小ピット群③				
PIT016	小ピット群③				
PIT017	小ピット群③				
PIT018	小ピット群③				
PIT019	小ピット群③				
PIT020	小ピット群③				
PIT021	小ピット群③				
PIT022	40×35	28×20	56	VIG-128	
PIT023	小ピット群③				
PIT024	49×44	32×25	14	VII-125	
PIT025	小ピット群③				
PIT026	小ピット群③				
PIT027	48×34	41×27	46	VII-127	覆土からⅡ～Ⅲ群土器2点
PIT028	50×-	47×28	26	VII-126	
PIT029	52×-	22×13	53	VII-126	
PIT030	62×61	23×19	20	VIM-129	覆土から削器1点
PIT031	51×43	35×29	18	VIL-126	
PIT032	30×28	21×19	26	VIO-125	
PIT033	35×32	19×13	23	VIP-125	
PIT034	38×34	19×14	20	VIP-125	
PIT035	60×43	53×32	18	VIP-125	
PIT036	41×37	22×29	56	VIP-126	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT037	50×35	21×10	35	VIP-122	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT038	31×28	16×12	16	VIP-122	
PIT039	49×43	38×30	52	VIK-126	
PIT040	49×43	21×15	34	VIIH-123	
PIT041	小ピット群④				
PIT042	小ピット群④				
PIT043	小ピット群④				
PIT044	小ピット群④				
PIT045	小ピット群④				
PIT046	小ピット群④				
PIT047	小ピット群④				
PIT048	小ピット群④				
PIT049	68×59	57×40	32	VIIH-122	
PIT050	小ピット群④				
PIT051	小ピット群④				
PIT052	小ピット群④				
PIT053	51×42	36×24	44	VII-126	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT054	46×36	26×22	38	VIIQ-130	
PIT055	64×50	44×35	52	VIIQ-129	
PIT056	44×41	31×24	48	VIIQ-129	
PIT057	114×81	94×67	32	VIR-129	
PIT058	74×-	71×48	40	VIIQ-129	
PIT059	82×-	100×22	55	VIIQ-129	
PIT060	104×70	87×63	35	VIP-129	覆土からⅠ-1群土器2点、削器1点、微小剥離1点
PIT061	67×54	35×33	59	VIIQ-129	覆土から微小剥離1点
PIT062	93×70	57×41	41	VIP-128	
PIT063	96×80	28×24	38	VIP-128	
PIT064	76×65	49×35	52	VIP-128	
PIT065	SI-16Pit03に変更				
PIT066	SI-16Pit26に変更				
PIT067	SI-16Pit06に変更				
PIT068	第1号硬化面				
PIT069	第1号硬化面				
PIT070	85×76	24×23	55	VIP-126	覆土からⅡ～Ⅲ群土器4点、Ⅰ-1群土器1点
PIT071	92×74	79×52	35	VIP-122	
PIT072	第1号硬化面				
PIT073	第1号硬化面				
PIT074	第1号硬化面				
PIT075	80×54	50×30	17	VIN-126	
PIT076	小ピット群③				
PIT077	62×52	29×28	35	VIO-129	
PIT078	42×34	24×23	15	VIO-128	
PIT079	31×26	18×13	16	VIO-129	
PIT080	73×36	20×13	34	VIM-128	
PIT081	30×28	21×13	13	VIN-128	
PIT082	34×33	14×7	23	VIN-129	
PIT083	第1号硬化面				
PIT084	34×24	23×10	18	VIN-129	
PIT085	147×121	116×89	13	VIN-129	覆土からⅡ～Ⅲ群土器2点、Ⅰ-1群土器3点

遺構名	計測値			グリット	備考(出土遺物・重複等)
	開口部(cm)	底面部(cm)	深さ(cm)		
PIT086	欠番				
PIT087	34×29	23×14	35	VIIQ-120	
PIT088	53×41	21×16	81	VIIQ-120	
PIT089	81×72	33×26	53	VIIQ-120	
PIT090	40×27	27×12	46	VIR-120	
PIT091	66×62	53×50	31	VIR-120	
PIT092	45×38	26×19	40	VIR-120	
PIT093	47×42	35×25	40	VIR-118	
PIT094	52×39	35×27	61	VIM-120	
PIT095	83×58	69×42	40	VIP-117	
PIT096	71×46	41×23	40	VIP-117	
PIT097	小ピット群⑤				
PIT098	72×65	56×51	52	VIL-120	
PIT099	49×44	35×27	18	VIR-120	
PIT100	75×62	64×30	35	VIR-117	
PIT101	49×40	42×25	22	VIS-115	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT102	56×42	33×24	30	VIR-115	
PIT103	52×45	33×16	32	VIR-114	
PIT104	小ピット群⑤				
PIT105	小ピット群⑤				
PIT106	54×49	43×38	25	VIL-116	
PIT107	34×26	25×19	11	VIL-116	
PIT108	79×65	52×32	29	VIL-116	
PIT109	75×47	44×25	29	VIL-116	
PIT110	小ピット群⑤				
PIT111	小ピット群⑤				
PIT112	31×25	17×11	12	VIIJ-118	
PIT113	40×22	30×15	14	VIR-118	
PIT114	47×42	37×35	58	VIL-118	
PIT115	36×22	24×12	13	VII-120	
PIT116	欠番				
PIT117	81×58	58×38	28	VIIJ-119	覆土からⅡ～Ⅲ群土器4点
PIT118	欠番				
PIT119	34×30	21×19	32	VIL-117	
PIT120	小ピット群⑤				
PIT121	24×17	15×11	11	VIIJ-118	
PIT122	44×30	32×20	18	VIIJ-117	
PIT123	28×22	18×12	23	VIIJ-117	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点、微小剥離2点
PIT124	33×30	23×20	12	VIIJ-117	
PIT125	小ピット群⑤				
PIT126	57×53	42×38	22	VIK-120	
PIT127	74×73	33×19	21	VIK-120	覆土から二次調整2点
PIT128	SI-18Pit14に変更				
PIT129	87×79	65×55	34	VIR-121	覆土からⅡ～Ⅲ群土器4点、Ⅲ群土器1点
PIT130	24×23	18×16	14	VIK-120	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT131	57×55	34×24	58	VIL-124	
PIT132	SI-06Pit19に変更				
PIT133	53×51	37×35	37	VIR-126	
PIT134	43×37	27×18	27	VIO-116	
PIT135	68×66	60×58	24	VIM-120	
PIT136	45×43	36×30	59	VIM-117	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT137	65×59	46×40	34	VIN-118	
PIT138	64×53	29×27	69	VIN-117	
PIT139	56×49	46×40	23	VIL-121	
PIT140	52×-	18×13	26	VIN-117	SK26と重複し、PITが古い
PIT141	欠番				
PIT142	57×50	45×36	23	VIN-116	
PIT143	35×30	20×16	25	VIN-115	
PIT144	43×41	36×19	30	VIN-115	
PIT145	35×32	10×7	41	VIN-115	
PIT146	41×38	14×13	37	VIO-115	
PIT147	62×46	51×34	18	VIN-115	
PIT148	51×45	43×37	18	VIN-115	
PIT149	52×37	40×25	18	VIO-110	
PIT150	59×38	42×30	29	VIIQ-110	
PIT151	52×46	38×33	50	VIK-119	
PIT152	45×28	27×14	25	VIK-120	
PIT153	66×64	38×24	37	VIIJ-120	
PIT154	59×50	26×18	31	VIIJ-120	
PIT155	64×58	50×35	61	VIIJ-120	
PIT156	62×58	51×41	25	VII-120	
PIT157	31×25	19×16	14	VIR-119	
PIT158	50×46	24×18	39	VIL-119	
PIT159	81×68	39×33	20	VIP-110	
PIT160	SI-12Pit38に変更				
PIT161	25×23	16×12	11	VIO-109	
PIT162	54×48	38×27	17	VIP-109	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT163	50×44	40×30	20	VIK-119	
PIT164	小ピット群⑤				
PIT165	63×54	43×25	41	VIIJ-118	
PIT166	84×64	47×43	44	VIIJ-118	
PIT167	41×29	28×17	13	VII-117	
PIT168	73×62	47×36	47	VII-118	
PIT169	32×21	22×13	14	VII-118	
PIT170	37×34	26×23	15	VII-119	

表3 小ピット属性表(2)

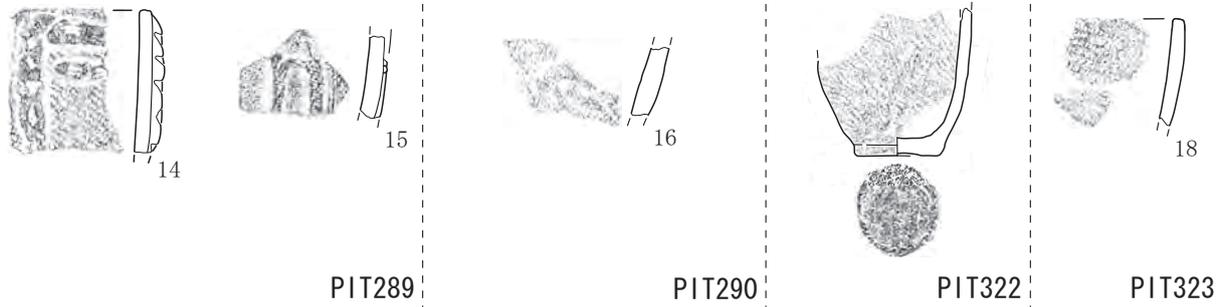
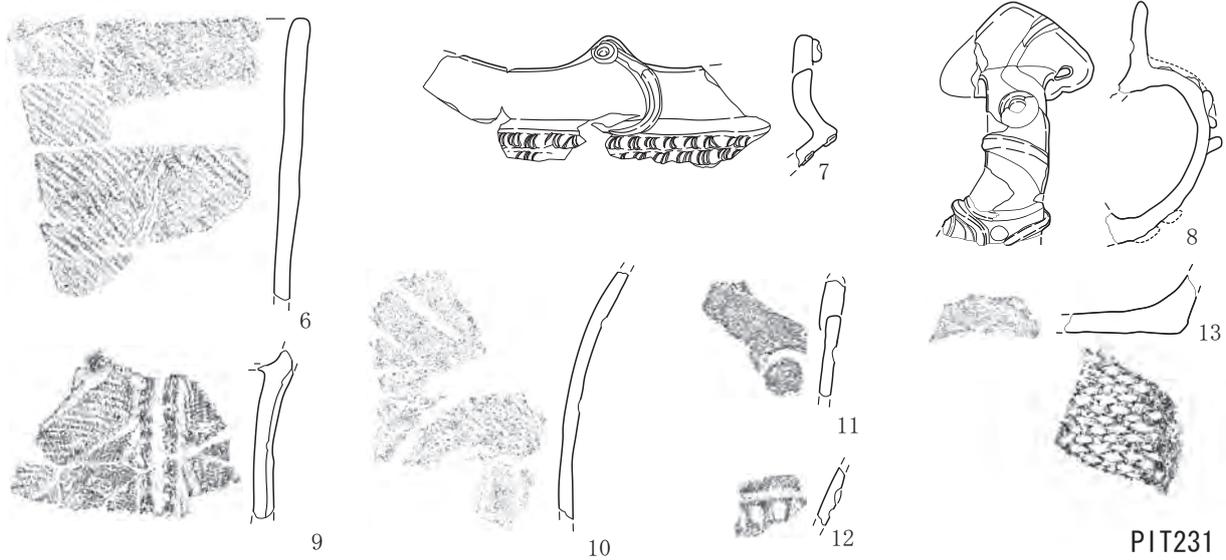
遺構名	計測値			グリット	備考(出土遺物・重複等)
	開口部(cm)	底面部(cm)	深さ(cm)		
PIT171	71×67	33×31	34	VII-120	
PIT172	71×58	43×25	25	VIIH-120	SK11と重複し、PITが古い
PIT173	36×34	25×22	18	VII-120	
PIT174	小ピット群⑤				
PIT175	43×38	37×28	25	VIO-111	
PIT176	28×24	15×13	17	VIN-112	
PIT177	50×47	32×18	15	VIM-109	
PIT178	38×35	24×18	42	VIM-108	
PIT179	45×43	27×24	42	VIM-108	
PIT180	32×31	19×11	24	VIIJ-118	
PIT181	52×45	26×18	34	VIIQ-110	
PIT182	69×65	40×21	25	VII-109	
PIT183	39×25	31×13	35	VIIK-110	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT184	小ピット群⑤				
PIT185	小ピット群⑤				
PIT186	50×43	35×27	35	VIIQ-110	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT187	37×36	26×24	29	VIIJ-120	
PIT188	54×51	39×37	52	VIIK-119	
PIT189	47×38	26×24	45	VII-119	
PIT190	42×31	30×19	13	VII-119	
PIT191	31×27	14×11	46	VIM-114	SK27と重複し、PITが古い
PIT192	116×89	35×19	37	VIIQ-97	
PIT193	30×26	15×13	34	VII-97	
PIT194	75×55	16×13	32	VIIQ-96	
PIT195	33×32	27×23	50	VIIQ-96	
PIT196	欠番				
PIT197	72×68	39×36	26	VII-95	
PIT198	59×51	40×25	23	VII-94	
PIT199	60×53	46×33	23	VII-95	
PIT200	105×59	67×20	44	VII-93	
PIT201	63×62	49×48	20	VIO-95	
PIT202	53×46	32×25	35	VIN-96	
PIT203	99×53	75×45	31	VIN-97	
PIT204	62×47	33×21	36	VIN-96	
PIT205	63×35	19×17	31	VIN-97	
PIT206	39×32	21×15	27	VIN-97	
PIT207	47×36	29×19	22	VIM-98	
PIT208	57×54	33×29	29	VIM-98	
PIT209	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT210	45×30	13×9	47	VIO-102	覆土からⅡ～Ⅲ群土器2点
PIT211	49×41	9×4	78	VIO-101	
PIT212	50×40	33×17	31	VIO-101	
PIT213	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT214	66×53	37×19	58	VIO-107	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT215	33×27	21×6	40	VIIQ-93	
PIT216	23×21	9×8	46	VIO-93	
PIT217	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT218	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT219	39×37	24×10	28	VIR-105	
PIT220	58×51	16×11	44	VIR-105	
PIT221	50×27	28×13	28	VIR-105	
PIT222	31×27	13×12	37	VII-97	
PIT223	小ピット群⑦				
PIT224	41×35	31×21	24	VIM-102	
PIT225	71×62	45×32	33	VIM-102	
PIT226	小ピット群⑦				
PIT227	小ピット群⑦				
PIT228	小ピット群⑦				
PIT229	小ピット群⑦				
PIT230	小ピット群⑦				
PIT231	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT232	159×115	110×55	41	VIIQ-107	
PIT233	小ピット群⑦				
PIT234	36×27	23×14	14	VIM-101	
PIT235	35×26	24×12	43	VIM-100	
PIT236	38×29	22×16	53	VIM-100	
PIT237	49×45	23×12	35	VII-99	
PIT238	64×37	43×18	40	VIM-99	
PIT239	41×33	16×14	27	VIO-103	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT240	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT241	小ピット群⑦				
PIT242	小ピット群⑦				
PIT243	30×22	19×8	31	VIM-101	
PIT244	小ピット群⑦				
PIT245	25×22	14×12	21	VII-100	
PIT246	34×24	21×13	33	VII-100	
PIT247	40×31	18×15	53	VIO-106	
PIT248	29×25	15×9	31	VIO-106	
PIT249	27×22	18×12	14	VIO-106	
PIT250	46×42	21×12	27	VII-106	
PIT251	48×46	32×17	30	VIIK-109	
PIT252	45×35	19×8	54	VIIK-109	
PIT253	43×24	33×16	18	VII-109	
PIT254	43×37	31×25	29	VIO-112	覆土から台石1点
PIT255	26×23	19×18	35	VIO-111	

遺構名	計測値			グリット	備考(出土遺物・重複等)
	開口部(cm)	底面部(cm)	深さ(cm)		
PIT256	37×33	26×20	18	VIO-111	
PIT257	35×34	27×15	28	VIN-109	
PIT258	26×24	18×12	12	VIN-109	
PIT259	33×30	25×19	19	VIN-109	
PIT260	71×65	40×27	28	VIM-109	
PIT261	41×28	33×22	22	VIN-109	
PIT262	44×31	32×19	12	VIN-108	
PIT263	小ピット群⑥				
PIT264	小ピット群⑥				
PIT265	小ピット群⑥				
PIT266	小ピット群⑥				
PIT267	59×54	45×38	23	VII-107	覆土から礫石1点
PIT268	小ピット群⑥				
PIT269	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT270	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT271	第2号硬化面				
PIT272	第2号硬化面				
PIT273	第2号硬化面				
PIT274	第2号硬化面				
PIT275	第2号硬化面				
PIT276	第2号硬化面				
PIT277	第2号硬化面				
PIT278	第2号硬化面				
PIT279	62×39	29×27	34	VIN-101	
PIT280	29×27	17×12	10	VII-101	
PIT281	小ピット群⑦				
PIT282	53×44	36×28	24	VII-102	
PIT283	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT284	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT285	48×44	23×18	25	VIR-104	
PIT286	32×26	13×11	32	VIIQ-103	
PIT287	92×83	67×56	42	VIIK-106	
PIT288	70×38	24×23	35	VIR-107	
PIT289	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT290	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT291	34×29	12×11	27	VIR-102	
PIT292	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT293	34×30	22×16	26	VIR-102	
PIT294	欠番				
PIT295	61×39	17×10	43	VIR-100	覆土から石籬1点
PIT296	29×20	20×13	14	VIM-102	
PIT297	小ピット群⑦				
PIT298	小ピット群⑦				
PIT299	小ピット群⑦				
PIT300	51×44	19×15	50	VIO-106	
PIT301	60×49	37×32	30	VIN-106	
PIT302	欠番				
PIT303	87×65	39×26	45	VII-106	
PIT304	57×48	26×17	36	VIIQ-113	
PIT305	50×43	28×20	46	VIIQ-113	
PIT306	68×51	47×30	43	VIIQ-112	
PIT307	56×53	29×23	42	VIIQ-112	
PIT308	51×33	40×27	30	VIR-112	
PIT309	53×52	37×33	25	VIIQ-112	
PIT310	93×61	58×35	57	VIR-112	
PIT311	45×37	27×15	31	VIIQ-114	
PIT312	39×32	18×12	31	VIIQ-114	
PIT313	77×56	36×27	73	VIIQ-114	
PIT314	欠番				
PIT315	39×36	29×23	9	VIIJ-111	
PIT316	68×67	52×48	26	VIIJ-111	覆土からⅡ～Ⅲ群土器1点
PIT317	35×23	16×8	30	VIIJ-110	
PIT318	44×39	33×24	16	VIIJ-110	
PIT319	104×86	89×67	23	VIIK-110	SK34と重複し、PITが古い
PIT320	49×47	15×9	31	VIIK-110	
PIT321	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT322	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT323	第1・2号掘立柱建物跡				
PIT324	72×46	33×25	18	VIIJ-109	覆土からⅡ～Ⅲ群土器2点、Ⅲ群土器1点、 礫石1点
PIT325	欠番				
PIT326	55×45	29×25	35	VIIK-109	

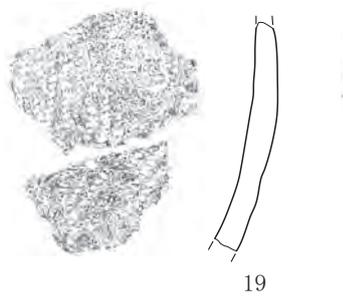
第1号掘立柱建物跡



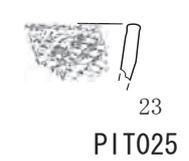
第2号掘立柱建物跡



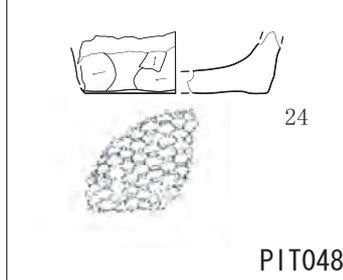
ピット群②



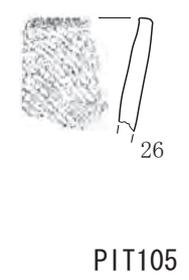
ピット群③



ピット群④



ピット群⑤



0 S=1:3 10cm

図56 その他の遺構出土遺物（1）

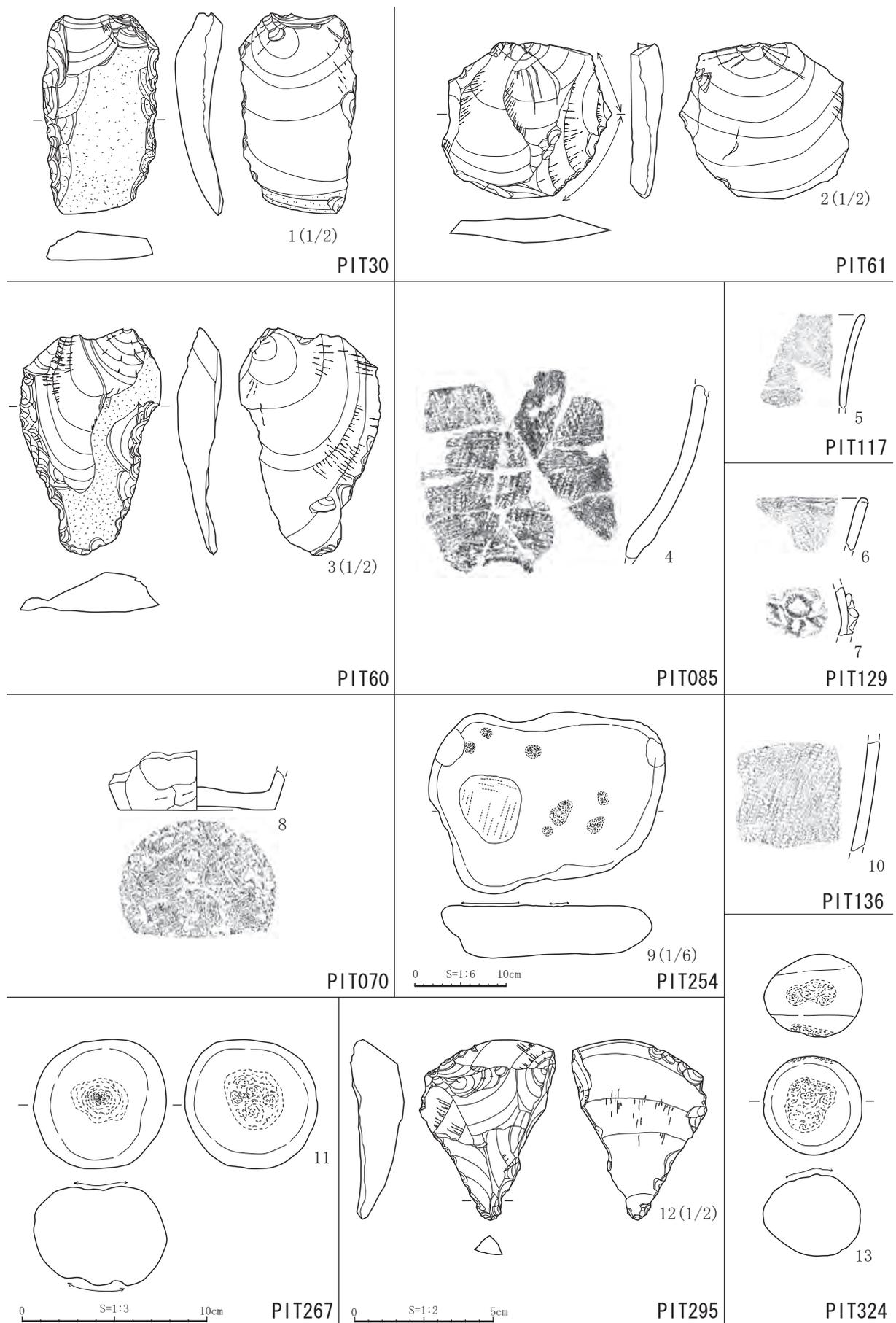


図57 その他の遺構出土遺物(2)

## 第7節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は、表土・耕作土、埋没沢、風倒木と思われる痕跡、トレンチ、用途不明の落ち込み (SX) から出土したものを取り扱う。層位は基本層序の第Ⅰ～Ⅲ層であり、層位がはっきりしないものについては一括・不明という表記にした。埋没沢は調査時に沢1・2 (図7) の番号を付したが、沢が埋没する過程において遺物を包含したのは沢1のみであり、沢2はすでに埋没していて、当時の生活面になっていたものと考えられる。風倒木・トレンチは、番号を照合できる図は示していないので、グリッドで位置を確認いただきたい。「用途不明の落ち込み (SX)」 (図58) は、調査区東側から数基検出したものであるが、落ち込み内部には大小の礫がぎっしりと詰められているという特徴があり、礫の中には「敲击石」等の礫石器も含まれていた。しかし、SX-01・02からは近世・近代の陶磁器も出土したため、新しい落ち込みと判断し、この落ち込みから出土した遺物については遺構外という扱いにした。

### 1 土器

遺構外からは総量で1,146点 (17,395.6 g) の縄文土器が出土した。ほとんどは、沢1とその近辺、及び遺構周囲から出土したものであるが、ⅦS-116・ⅦQ-128グリッド周辺にも集中がみられた。時期は縄文時代前期から晩期までの広範囲にわたるが、中心となるのは中期末葉～後期初頭と考えられるものである。分類については第2節に示したが、中期末葉～後期初頭にかけての粗製土器は「Ⅱ

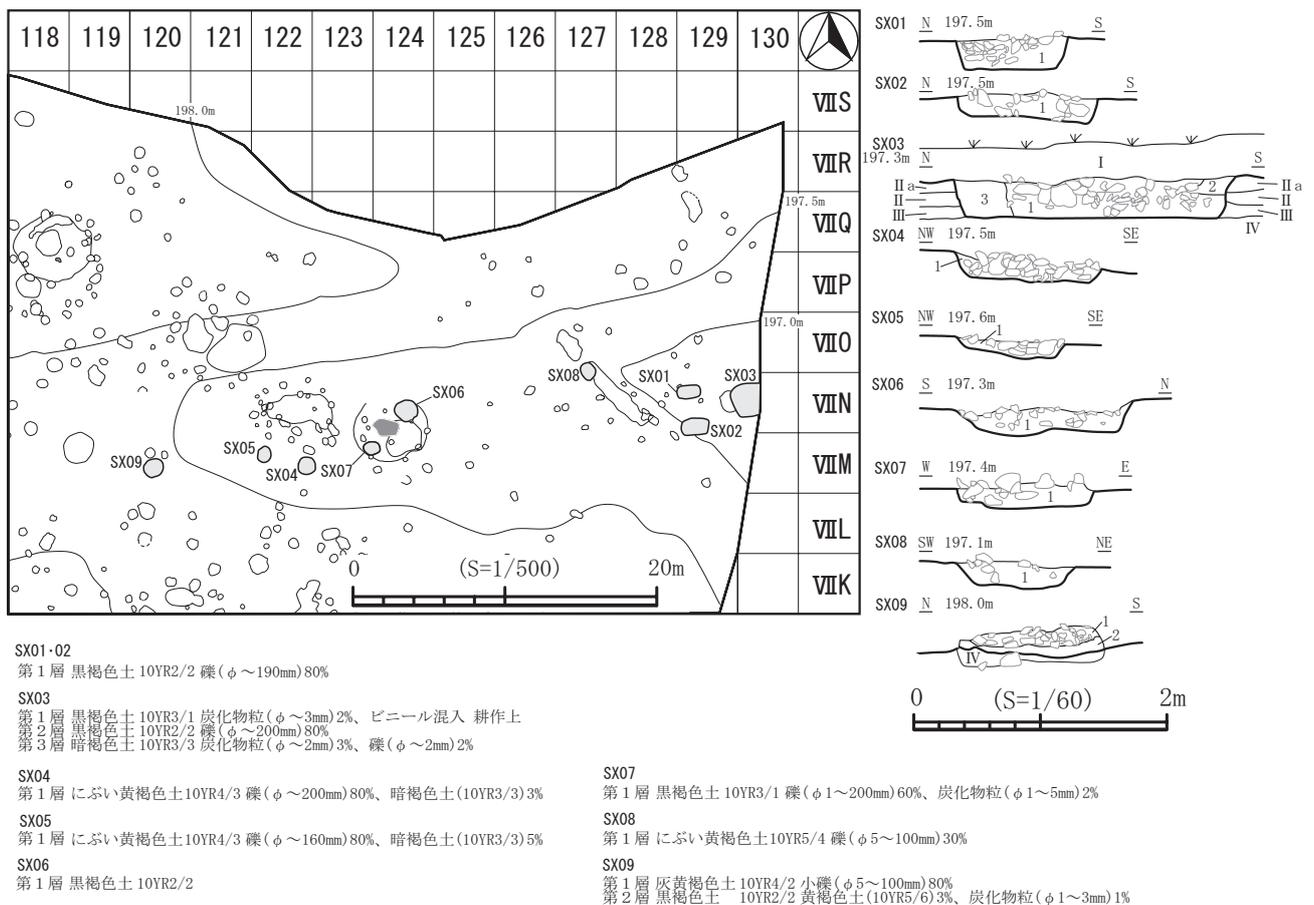


図58 用途不明の落ち込み (SX)

～Ⅲ群」とした。以下、67点について、時期別に記述する。

#### I 群 縄文時代前期の土器 (図59-1～5)

縄文時代前期の土器は、前葉に位置するとみられるものと、末葉に位置するものがあり、時期細分によってI-1群とI-2群とに分けた。

##### I-1群 前期前葉に位置するとみられる土器 (図59-4・5)

16点出土し、うち2点を図示した。全て深鉢である。施文が縄文のみで詳細は不明であるが、胎土中に繊維の混入が認められるものである。円筒下層式以前の前期前葉の土器と思われる。

##### I-2群 前期末葉の土器 (図59-1～3)

5点出土し、うち3点を図示した。全て深鉢である。結束第1種による羽状縄文が横位に施されており、前期末葉の円筒下層d式に比定される。

#### II 群 縄文時代中期の土器 (図59-6～10)

9点出土し、うち5点を図示した。全て深鉢である。器面に磨消縄文、沈線、刺突が施されるほか、鱗状突起が付加されるものである。中期末葉の大木10式併行の土器に比定される。

#### III 群 縄文時代後期の土器

縄文時代後期の土器は、初頭に位置するとみられるものと、後葉に位置するものがあり、時期細分によってⅢ-1群とⅢ-2群とに分けた。

##### Ⅲ-1群 後期初頭に位置するとみられる土器 (図59-11～35・図60-7・12～21・23・図61-4～6)

隆帯・側面圧痕・沈線・刺突が施される一群である。75点出土し、うち40点を図示した。器種は深鉢と壺とがある。全体形を把握できるものはないが、深鉢は頸部があまりくびれずに口縁部が直線的に外反するものと、内湾して立ち上がると思われるものがある。口縁部は平口縁と波状口縁とがあり、口唇部は平坦に整えられるものがほとんどである。壺は把手片と胴部片が確認された。

図59-11～17・20～29及び図60-23・図61-4～6は、器面に隆帯が貼り付けられるものである。隆帯は幅約1cm・厚さ3～4mm程度で、断面は半円状を基調としており上面は平坦に整えられているものはない。隆帯上面には、刺突が施されたもの(図59-11～13・15・17・20・21・25～29・図60-23・図61-4)、側面圧痕が施されたもの(図59-14)、縄による刺突が施されたもの(図59-16・22・24)、無文のもの(図59-23・図61-5・6)がある。隆帯は口縁部文様帯を区画するように頸部に横位に貼り付けられるものがほとんどであるが、口唇部直下に貼り付けられるもの(図59-23)や、胴部に垂下して貼り付けられるもの(図59-25)、胴部下半に横位に貼り付けられているもの(図60-23)もある。また、口縁部文様帯中には、口縁部から隆帯が垂下して⊥状(17)、十字状(22)、コ状(26・27)を呈するものもある。図59-15・24～26は隆帯上にボタン状貼付が、図59-23は円形文が施されたものである。貼付は隆帯の交点や端部に施され、ボタン状貼付上にも刺突が施されている。図61-4・5は壺の橋状把手片である。図61-4は蛇行状、図61-5は巴状に隆帯が貼り付けられている。図61-5の両端には貫通孔が開けられている。

図59-19・図60-7は側面圧痕が施された口縁部片である。図59-19は波状口縁をなし、波頂部には刺突が施されている。口唇部は平坦に整えられている。側面圧痕は口縁に沿って、また、胴部と口縁部文様帯を区切るように横位に施されている。図59-19は波頂部直下に縦位の側面圧痕と円形文が施されたもので、円形文上にも刺突が施されている。

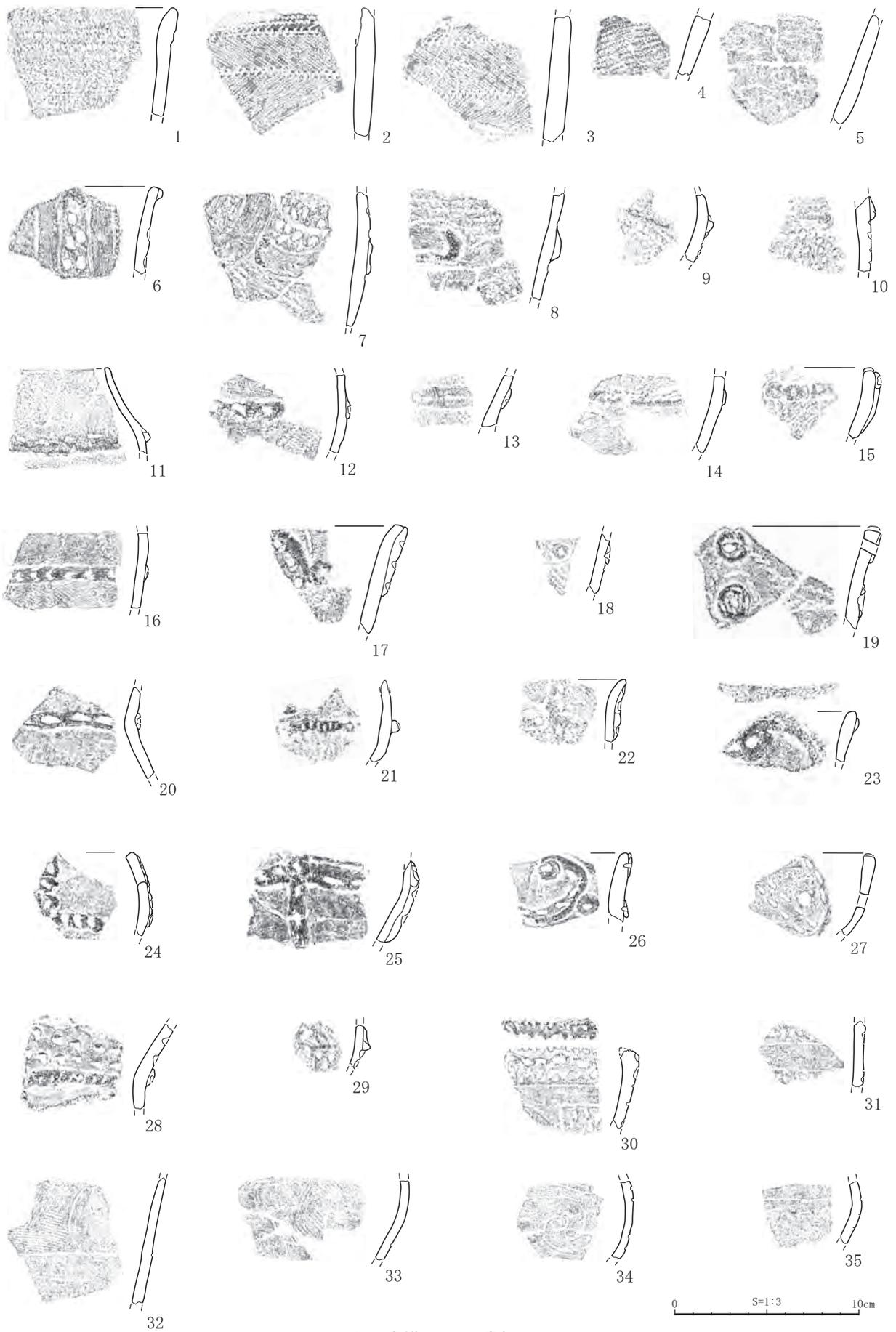


図59 遺構外出土遺物（1）



図60 遺構外出土遺物(2)

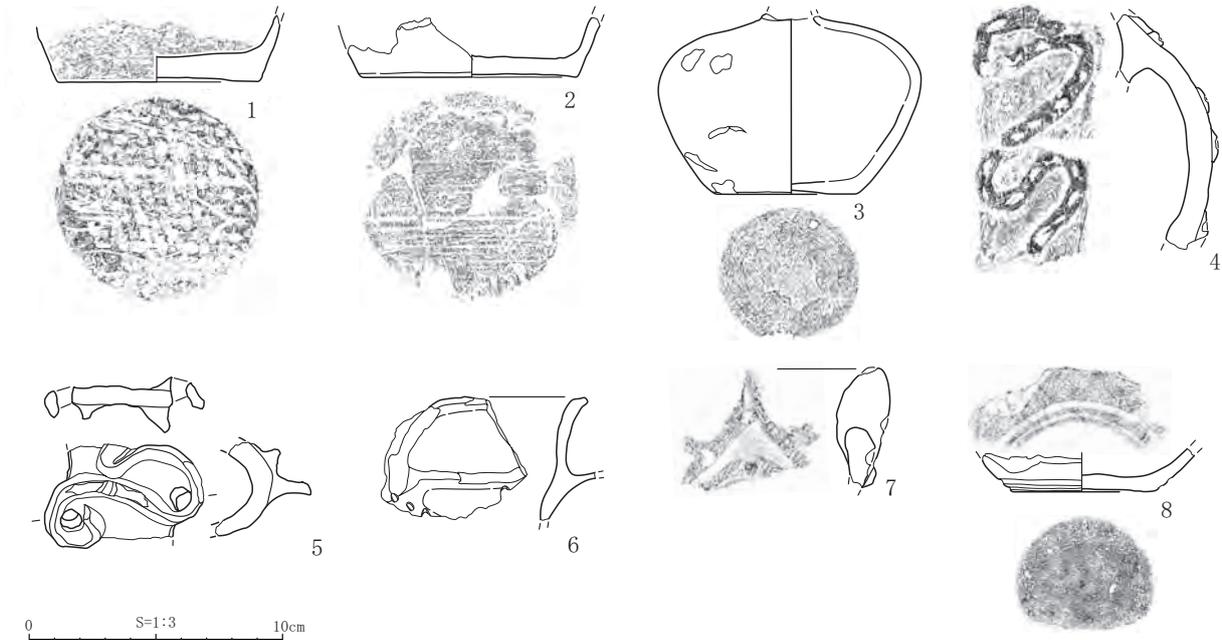


図61 遺構外出土遺物（3）

図59-18・30~35は沈線が施されたものである。沈線は幅1mm程度と細いもので、深さも浅く、断面は半円状を呈している。図59-18は地文縄文に沈線が施されたものである。小片のため文様ははっきりしないが、沈線は弧状に巡るようで、弧の内側にボタン状貼付が施されている。ボタン状貼付上にも刺突が施されている。図59-30~35は文様帯の境に沈線が施されたものである。文様は、図59-30・31は刺突、図59-32~35は縄文で構成され、後者に施された縄文は他に比べて非常に細かい。

図60-12~21は刺突を施すものである。刺突は図60-12が竹管状工具で、他は篋状の工具で施されている。図60-20・21は縄文の上に刺突が施されている。

### Ⅲ-2群 後期後葉の土器（図61-7）

深鉢の口縁部片が1点出土した。波状口縁で、波頂部には内側に肥厚した大型の突起が、また、波頂部の両脇には小突起が付されているのが特徴である。口縁に沿って沈線を区画文とした磨消縄文が施され、突起直下には刺突と瘤状の小突起が施されており、所謂「瘤付土器」の口縁部突起片である。

### Ⅱ~Ⅲ群 縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての粗製土器（図60-1~6・8~11・22・24・図61-1~3）

特徴的な文様を持たない地文縄文のみのもの、及び無文のものを纏めた。1,039点出土し、うち15点を図示した。器種は深鉢と壺とがある。全体形を把握できるものはないが、深鉢は頸部があまりくびれずに直線的に外反する。口唇部は比較的丸みを帯びるものが多い。壺は小型で無文のものが確認された。図60-1~6・11・22・24及び図61-1は器面に斜縄文が施文されたものである。縄文は縦位施文されたものが主体である。図60-9・10は単軸絡状体が施されたもので、図60-9は単軸絡条体第5類、図60-10は単軸絡条体第1類を縦位施文した口縁部片である。図60-8は深鉢の口縁部、図61-2は底面に平行葉脈痕が観察される深鉢底部、図61-3は小型壺である。

### Ⅳ群 縄文時代晩期の土器（図61-8）

鉢の底部が1点出土した。口縁部文様帯がないため詳細は不明であるが、晩期中葉以降の時期が推定される。(平山)

## 2 石器

遺構外から出土した石器は大きく分けて、剥片石器類110点、礫石器類18点、合計128点(総重量14,608g)である。詳細な出土地点・層位、計測値、石材等については観察表にまとめた。以下、器種ごとに記載していく。

### 剥片石器類(図62・63)

剥片石器類は、石鏃5点、石筥1点、石錐3点、石匙2点、搔器4点、削器12点、石核11点、二次調整のある剥片30点、微小剥離痕のある剥片42点、以上110点を本類で扱うこととし27点を図示した。なお、その他として、加工や使用した痕跡のない剥片は259点出土している。

石鏃(図62-1~5)は、1~4は凸基有茎鏃で、5は円基鏃に分類される。石材は、珪質頁岩の5を除いてカルセドニーである。

石匙(図62-6・7)は、縦形石匙(6)と、全体形は明らかではないが、横形のつまみ部が斜位につくタイプのもの(7)に分類される。

石錐は3点中2点を図示した(図62-8・9)。つまみ状の頭部をもち、長い錘部を有するもの(8)と、錘部のみ二次加工したもの(9)に分類される。9の両側縁は、微小剥離痕も確認できる。

石筥(図62-10)は、小型で撥形をした類のもので全体的に調整は粗い。

搔器(図62-11~14)は、いずれも末端に急角度の刃部を作り出している。不整形な剥片の一部に急角度の刃部を作り出すもの(11・12)、小型で細身の剥片に急角度の刃部を作り出すもの(13)、周縁を加工するもの(14)がある。

削器は13点中11点を図示した(図62-15・16、図63-1・3~10)。ほとんどが一側縁を加工して刃部を作り出しているものであるが、図62-15・16は特殊な形状をしている。15はつまみ状の頭部を有し、体部は円刃状の加工を施している。16の上半部は把手状に加工が施され下半部は斜位に刃部を作り出している。

石核は11点中1点を図示した(図63-11)。背面は原礫面であり、周縁から剥片を剥ぎ取った痕跡が顕著である。

二次調整のある剥片は1点を図示した(図63-2)。縦長剥片を素材として、末端部に加工を加えているものである。図示しなかったが、二次調整のある剥片の中には、微小剥離痕を有するものが5点含まれる。

微小剥離痕のある剥片は図示しなかったが、一側縁を使用するものが多かった。

### 礫石器類(図64~66)

礫石器類は、磨り石3点、敲き石8点、凹み石4点、台石1点、その他の礫2点が出土し全て図示した。

磨り石(図64-1~3)は、片面に磨りの痕跡があるもの(1・3)と、両面の広範囲を磨るもの(2)がある。いずれも側縁部および端部の一部に敲きの痕跡が確認できる。

敲き石(図64-4~7、図65-1~4)は両面と側縁部・端部を使用するもの(図64-4・6・7、図65-2)、片面のみを使用するもの(図64-5)、敲き主体で片面や側縁部に磨りの痕跡をもつもの(図65



図62 遺構外出土遺物 (4)

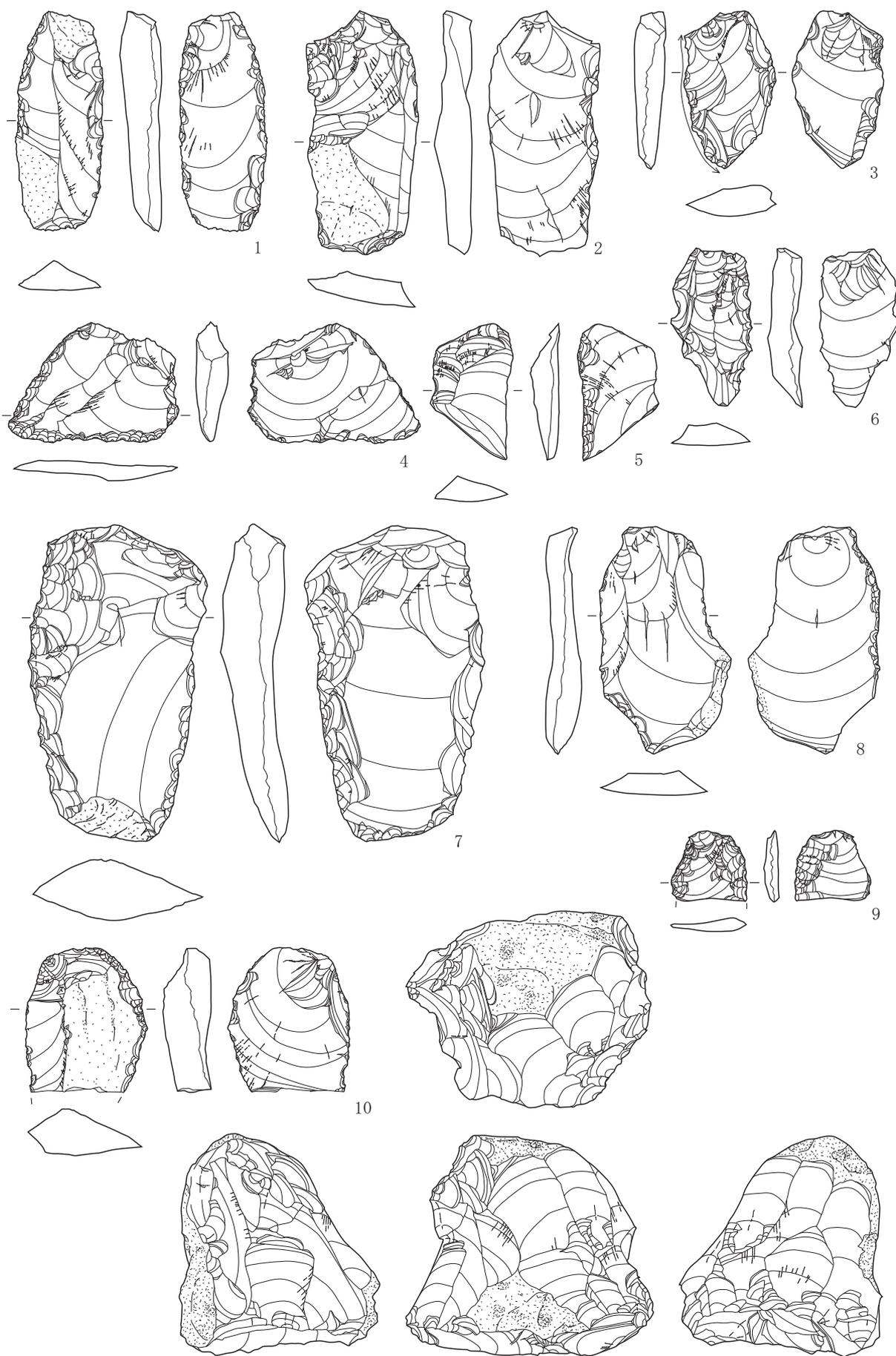


図63 遺構外出土遺物(5)

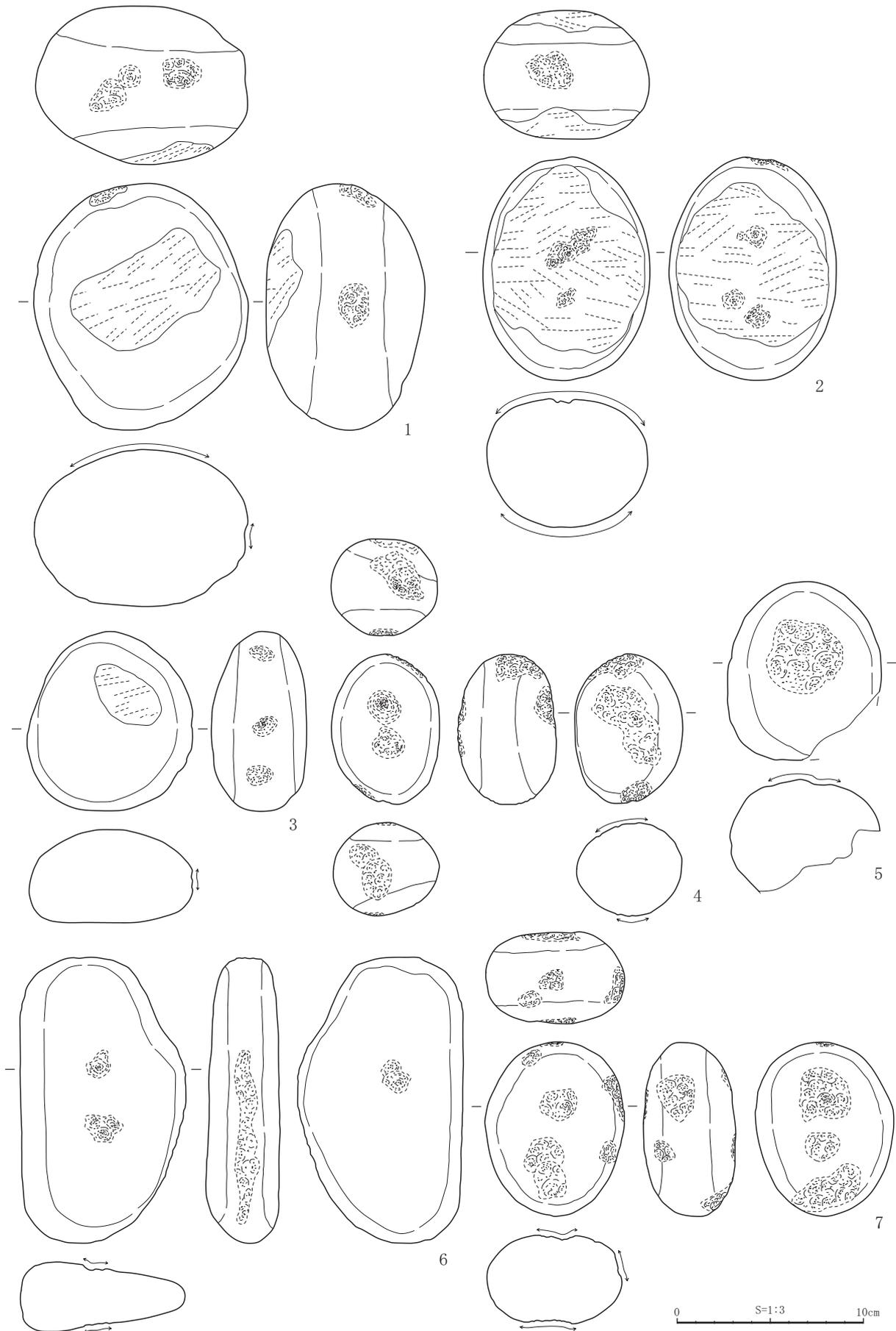


図64 遺構外出土遺物(6)

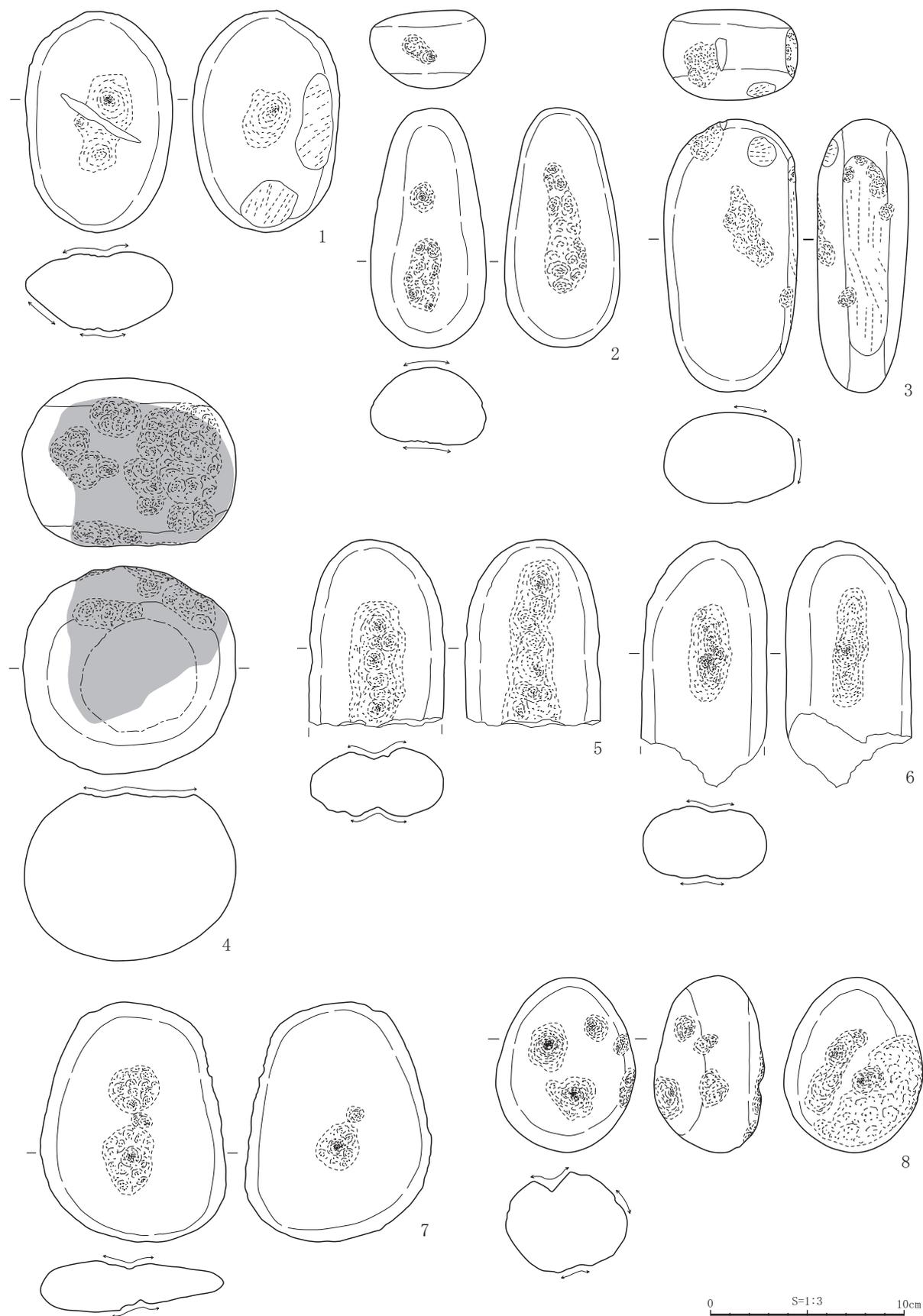


図65 遺構外出土遺物(7)

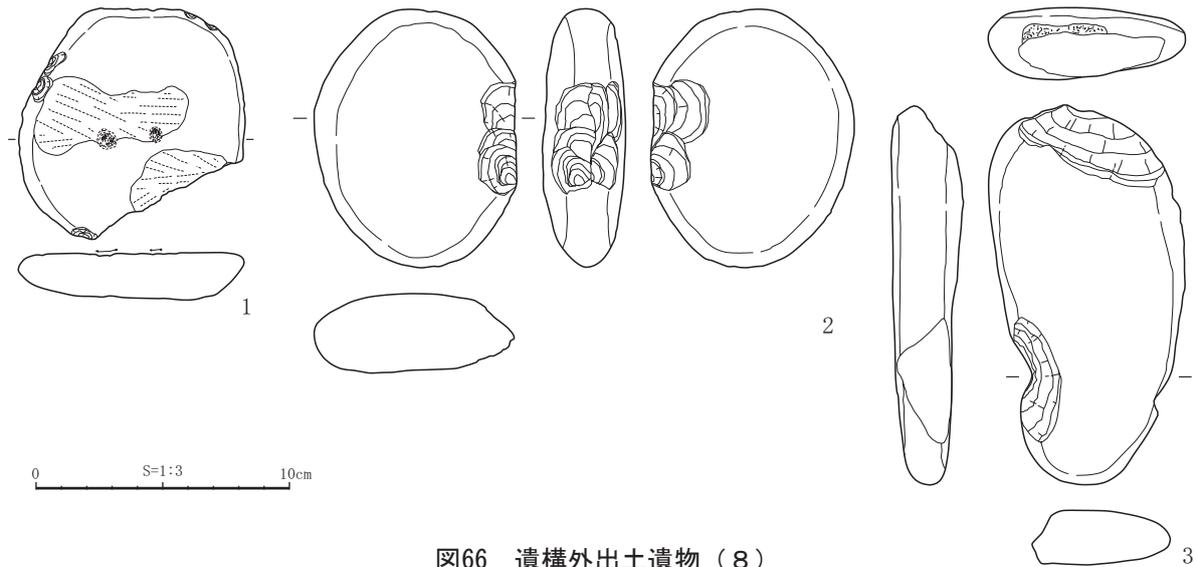


図66 遺構外出土遺物(8)

-1・3)、一端部使用で被熱の痕跡があり片面「火はじけ」しているもの(図65-4)がある。

凹み石(図65-5~8)は、二面使用するもの(5~7)のほか、片面・一側縁に敲きの痕跡が顕著なもの(8)もある。

台石類(図66-1)は扁平な礫の片面を使用したと思われるものである。

その他の礫として、扁平な円礫の1カ所のみ剥離するものが2点(図66-2・3)である。

### 3 その他の遺物

その他の遺物として、土製品・石製品・陶磁器が出土した。土製品は土偶が2点、石製品は、円盤状石製品4点、陶磁器は染付碗1点・甕1点である。詳細な出土地点・層位、計測値等については観察表にまとめた。以下、種別ごとに記載していく。

#### 土製品

##### 土偶

土偶の破片が2点出土した(図67-1・2)。1は頭部片であり、第4号竪穴住居跡Pit06付近で出土した。表裏面には輪郭に沿っては2列の刺突列が施され、突出した顔面部には、刺突で目・口が表現されている。後頭部には、縦位・横位に貫通孔が施されている。2は胴下部片で表裏面に刺突が施されている。また、表面には臍を表現したと推定される粘土状の貼り付けと、中央に沈線状の窪みが縦位に施されている。

#### 石製品

##### 円盤状石製品

4点出土した(図67-3~6)。扁平な円礫を素材とし、両面または片面を研磨して円盤状に成形している。3はやや不整形ではあるが、ほぼ中央に片面から穿孔を施そう(未貫通)としたものである。4は両面に残存する擦痕が顕著であり、何かを磨いた工具のような可能性もある。5は縁辺部を敲打により成形した痕跡も窺える。

#### 陶磁器

用途不明の落ち込みから出土した2点である(図67-7・8)。7は磁器碗の底部で、肥前Ⅳ期のものである。8は鉄釉がかけられた陶器甕の口縁部片であるが、詳細な時期は不明である。(新山)



图67 遺構外出土遺物(9)

## 第4章 理化学的分析

### 第1節 川原平(4)遺跡における放射性炭素年代 (AMS 測定)

(株) 加速器分析研究所

#### 1 測定対象試料

川原平(4)遺跡は、青森県中津軽郡西目屋村大字川原平字福岡（北緯40° 31' 41"、東経140° 13' 41"）に所在する。美山湖（旧岩木川）右岸、大沢川との合流点にある河岸段丘の段丘面上に位置する。測定対象試料は、ASI01 1層出土木炭（No.1：IAAA-111970）、ASI07炉検出面出土木炭（No.2：IAAA-111971）、ASI11炉1層出土木炭（No.3：IAAA-111972～No.5：IAAA-111974）、ASI12 Pit31 1層出土木炭（No.6：IAAA-111975）、ASK31 2層出土木炭（No.7：IAAA-111976、No.8：IAAA-111977）、ASK36 2層出土木炭（No.9：IAAA-111978、No.10：IAAA-111979）の合計10点である（表1）。

ASI01、ASI07、ASI11、ASI12は竪穴住居跡で、これらから出土した試料のうちNo.1、No.6は柱材が炭化したもの、No.2～5は燃焼材の残渣と考えられている。遺跡全体が耕作等による攪乱を強く受けており、竪穴住居跡の堆積土はほとんど遺存していない。竪穴住居跡からは縄文時代中期末葉から後期初頭の時期が推定される土器が出土している。土坑ASK31は底面が被熱し、底面付近に堆積する2層は炭化材主体層である。土坑ASK36の底面付近に堆積する1層にも炭化材が多く混入している。土坑の時期については、形状などから中世以降の炭窯と推定されている。

なお、測定試料の採取に当たっては、木炭の年輪を観察し、残存する最外部から採取するように努めた。

#### 2 測定の意義

住居跡等遺構の時期および集落の継続期間を明らかにする。

#### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除き、必要量の試料を採取、乾燥させ、秤量する（付表「処理前試料量」）。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させ、秤量する（付表「処理後試料量」）。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。
- (3) 必要量を採取、秤量（付表「燃焼量」）した試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製、定量する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する（付表「精製炭素量」）。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### 4 測定方法

加速器をベースとした $^{14}\text{C}$ -AMS専用装置（NEC社製）を使用し、 $^{14}\text{C}$ の計数、 $^{13}\text{C}$ 濃度（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）、 $^{14}\text{C}$ 濃度（ $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。測定回数と $^{14}\text{C}$ カウント数を付表に示す。

#### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い表中に「AMS」と注記する。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は付表に記載する。
- (2)  $^{14}\text{C}$ 年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。 $^{14}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい（ $^{14}\text{C}$ が少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（ $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

#### 6 測定結果

試料の $^{14}\text{C}$ 年代は、ASI01 1層のNo.1が $2400 \pm 20\text{yrBP}$ 、ASI07炉検出面のNo.2が $640 \pm 20\text{yrBP}$ 、ASI11炉1層のNo.3が $3820 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.4が $3840 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.5が $3910 \pm 20\text{yrBP}$ 、ASI12 Pit31 1層のNo.6が $3940 \pm 20\text{yrBP}$ 、ASK31 2層のNo.7が $260 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.8が $220 \pm 20\text{yrBP}$ 、ASK36

2層のNo.9が $380 \pm 20$ yrBP、No.10が $350 \pm 20$ yrBPである。ASI11炉1層の3点はおおむね近い年代値であるが、No.3とNo.4の値が誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) の範囲で重なるのに比べNo.4はこれらよりわずかに値が離れる。ASK31 2層出土の2点の値は誤差の範囲で近接し、ASK36 2層出土の2点の値は誤差範囲で重なるため、これらもおおむね近い年代を示す。

暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、No.1が506~404cal BCの間に3つの範囲、No.2が1297~1387cal ADの間に2つの範囲、No.3が2289~2207cal BCの間に2つの範囲、No.4が2342~2211cal BCの間に3つの範囲、No.5が2466~2349cal BCの間に3つの範囲、No.6が2487~2352cal BCの間に3つの範囲、No.7が1645~1659cal ADの範囲、No.8が1661~1797cal ADの間に2つの範囲、No.9が1454~1610cal ADの間に2つの範囲、No.10が1480~1620cal ADの間に3つの範囲で示される。No.1~6は出土土器の特徴により縄文時代中期末葉から後期初頭と推定されるのに対し、No.3、No.4は後期初頭から前葉頃、No.5、No.6は後期初頭頃に相当する年代値で、おおむね整合的な結果と言える。ただし、No.1は縄文時代晩期から弥生時代への移行期頃にあたり、No.2は大幅に新しく、中世に相当するNo.7~10は中世以降と推定されるのに対し、No.7、No.8が近世 (No.8は $2\sigma$ 暦年代範囲では近世以降)、No.9、No.10が中世から近世に相当する。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363  
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360  
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

表 1

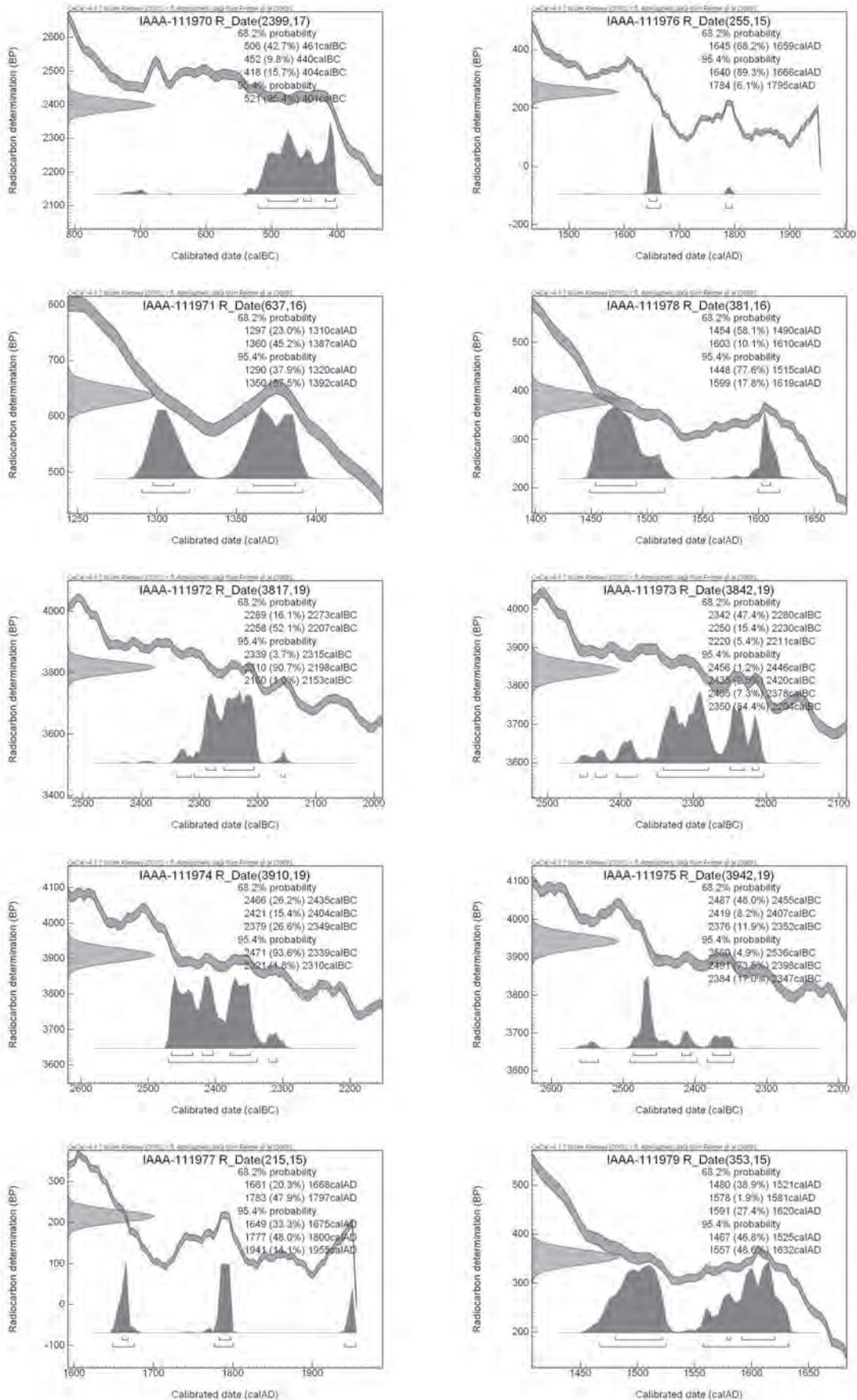
測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-111970	No.1	ASI01 1層	木炭	AAA	-24.76 $\pm$ 0.19	2,400 $\pm$ 20	74.18 $\pm$ 0.17
IAAA-111971	No.2	ASI07 炉検出面	木炭	AAA	-23.57 $\pm$ 0.24	640 $\pm$ 20	92.36 $\pm$ 0.19
IAAA-111972	No.3	ASI11 炉1層	木炭	AAA	-24.79 $\pm$ 0.26	3,820 $\pm$ 20	62.17 $\pm$ 0.15
IAAA-111973	No.4	ASI11 炉1層	木炭	AAA	-28.49 $\pm$ 0.26	3,840 $\pm$ 20	61.98 $\pm$ 0.15
IAAA-111974	No.5	ASI11 炉1層	木炭	AAA	-25.23 $\pm$ 0.28	3,910 $\pm$ 20	61.46 $\pm$ 0.15
IAAA-111975	No.6	ASI12 Pit31 1層	木炭	AAA	-26.96 $\pm$ 0.27	3,940 $\pm$ 20	61.22 $\pm$ 0.15
IAAA-111976	No.7	ASK31 2層	木炭	AAA	-25.49 $\pm$ 0.18	260 $\pm$ 20	96.87 $\pm$ 0.19
IAAA-111977	No.8	ASK31 2層	木炭	AAA	-22.14 $\pm$ 0.27	220 $\pm$ 20	97.35 $\pm$ 0.19
IAAA-111978	No.9	ASK36 2層	木炭	AAA	-25.21 $\pm$ 0.24	380 $\pm$ 20	95.36 $\pm$ 0.20
IAAA-111979	No.10	ASK36 2層	木炭	AAA	-23.62 $\pm$ 0.27	350 $\pm$ 20	95.70 $\pm$ 0.19

[#4767]

表2

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
<b>IAAA-111970</b>	2,400 $\pm$ 20	74.21 $\pm$ 0.16	2,399 $\pm$ 17	506calBC - 461calBC (42.7%) 452calBC - 440calBC (9.8%) 418calBC - 404calBC (15.7%)	521calBC - 401calBC (95.4%)
<b>IAAA-111971</b>	610 $\pm$ 20	92.63 $\pm$ 0.18	637 $\pm$ 16	1297calAD - 1310calAD (23.0%) 1360calAD - 1387calAD (45.2%)	1290calAD - 1320calAD (37.9%) 1350calAD - 1392calAD (57.5%)
<b>IAAA-111972</b>	3,810 $\pm$ 20	62.20 $\pm$ 0.15	3,817 $\pm$ 19	2289calBC - 2273calBC (16.1%) 2258calBC - 2207calBC (52.1%)	2339calBC - 2315calBC (3.7%) 2310calBC - 2198calBC (90.7%) 2160calBC - 2153calBC (1.0%)
<b>IAAA-111973</b>	3,900 $\pm$ 20	61.54 $\pm$ 0.15	3,842 $\pm$ 19	2342calBC - 2280calBC (47.4%) 2250calBC - 2230calBC (15.4%) 2220calBC - 2211calBC (5.4%)	2456calBC - 2446calBC (1.2%) 2435calBC - 2420calBC (2.5%) 2405calBC - 2378calBC (7.3%) 2350calBC - 2204calBC (84.4%)
<b>IAAA-111974</b>	3,910 $\pm$ 20	61.43 $\pm$ 0.14	3,910 $\pm$ 19	2466calBC - 2435calBC (26.2%) 2421calBC - 2404calBC (15.4%) 2379calBC - 2349calBC (26.6%)	2471calBC - 2339calBC (93.6%) 2321calBC - 2310calBC (1.8%)
<b>IAAA-111975</b>	3,970 $\pm$ 20	60.97 $\pm$ 0.14	3,942 $\pm$ 19	2487calBC - 2455calBC (48.0%) 2419calBC - 2407calBC (8.2%) 2376calBC - 2352calBC (11.9%)	2560calBC - 2536calBC (4.9%) 2491calBC - 2398calBC (73.5%) 2384calBC - 2347calBC (17.0%)
<b>IAAA-111976</b>	260 $\pm$ 20	96.77 $\pm$ 0.19	255 $\pm$ 15	1645calAD - 1659calAD (68.2%)	1640calAD - 1666calAD (89.3%) 1784calAD - 1795calAD (6.1%)
<b>IAAA-111977</b>	170 $\pm$ 20	97.93 $\pm$ 0.19	215 $\pm$ 15	1661calAD - 1668calAD (20.3%) 1783calAD - 1797calAD (47.9%)	1649calAD - 1675calAD (33.3%) 1777calAD - 1800calAD (48.0%) 1941calAD - 1955calAD (14.1%)
<b>IAAA-111978</b>	380 $\pm$ 20	95.32 $\pm$ 0.19	381 $\pm$ 16	1454calAD - 1490calAD (58.1%) 1603calAD - 1610calAD (10.1%)	1448calAD - 1515calAD (77.6%) 1599calAD - 1619calAD (17.8%)
<b>IAAA-111979</b>	330 $\pm$ 20	95.97 $\pm$ 0.18	353 $\pm$ 15	1480calAD - 1521calAD (38.9%) 1578calAD - 1581calAD (1.9%) 1591calAD - 1620calAD (27.4%)	1467calAD - 1525calAD (46.8%) 1557calAD - 1632calAD (48.6%)

[参考値]



[参考] 暦年較正年代グラフ

## 第2節 川原平(4)遺跡から出土した炭化種実

株式会社 パレオ・ラボ (佐々木由香・バンダリ スダルシャン)

### 1. はじめに

川原平(4)遺跡は、青森県中津軽郡西目屋村に位置し、標高約200mの岩木川右岸の河岸段丘上に立地する、縄文時代中期末葉～後期初頭を中心とした遺跡である。ここでは、縄文時代中期末葉～後期初頭中心の竪穴住居跡などから出土した炭化種実の同定を行い、利用植物の一端を明らかにする。

### 2. 試料と方法

試料は、A区で検出された竪穴住居跡のSI01から採取された1試料、SI04から採取された2試料、SI05から採取された2試料、SI08から採取された2試料、SI10から採取された3試料、SI12から採取された1試料、SI14から採取された2試料、SI15から採取された3試料、焼土跡であるSN01から採取された3試料の計19試料である。竪穴住居跡の試料はすべて炉から採取され、SN01の試料は風倒木が絡む1層から採取された。試料の時期は、出土土器型式などから判断して縄文時代中期末葉～後期初頭である。

試料の採取は、青森県埋蔵文化財調査センターによって行われた。試料は、最小0.5mm目の篩を用いて水洗した。種実の抽出・同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行った。同定された試料は、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

### 3. 結果

同定した結果、木本植物ではオニグルミ炭化核と、クリ炭化果実・炭化子葉、クワ属炭化核、ウルシ属-ヌルデ炭化内果皮、イロハモミジ近似種炭化果実、ブドウ科炭化種子、キブシ炭化種子の7分類群、草本植物ではサナエタデ-オオイヌタデ炭化果実と、キランソウ属炭化果実、ナス属炭化種子、イヌビエ属炭化種子の4分類群の計11分類群が得られた。この他に、科以下の同定ができなかった炭化種実を不明AからCにタイプ分けし、同定の識別点を欠く種実の一群を同定不能炭化種実とした。種実以外には、炭化した虫えいと子囊菌（塊を含む）が得られた（表1・2）。さらに、未炭化のスギ種子・葉と、マツ属種子、ブドウ属種子、キブシ種子、カナムグラ種子、ヤナギタデ果実、イヌタ

表1 川原平(4)遺跡A区から出土した炭化種実(1) (括弧内は破片数)

分類群	遺構名	SI01		SI04		SI05		SI08		SI10	
		②-2	④-4	④-5	②-1	②-3	③-3	③-6	④-1	④-2	④-3
	試料番号										
	採取位置	焼土(炉)	炉	炉	焼土範囲	炉	炉	炉	炉	炉	炉
	部位/層位	1層	2層①	2層②	1層	1層	1層	1層	2層	1層	1層
	水洗重量(g)	820	420	680	4220	3880	1020	320	1000	620	560
	時期	縄文時代中期末葉～後期初頭									
オニグルミ	炭化核				(6)	(2)					
クリ	炭化果実				(8)	(7)			(1)		
	炭化子葉				(7)	(4)					
同定不能	炭化種実	(3)			(6)	1			(10)		
子囊菌	炭化子囊	1	5 (1)		17 (9)	18			13	10	7
スギ	葉							1			
	種子								1		
ブドウ属	種子				1						
イヌタデ	果実						2		1		
タデ属	果実				1					1	
タンボボ属	果実		2	5					1		
エノコログサ	有ふ果								1		
昆虫							(+)		(+)		

1-9:+

デ果実、タニソバ果実、ミゾソバ果実、タデ属果実、アカザ属種子、エノキグサ属種子、ナス属種子、タンポポ属果実、キク科果実、キランソウ属果実、キビ属有ふ果、エノコログサ属有ふ果、スギナ近似種無性芽、昆虫遺体が得られたが、遺跡の立地から推定して、当時の生の種実が残存しないと考えられるため、現生種実とした。

以下に、炭化種実の出土傾向を遺構別に記載する（不明種実と同定不能炭化種実、虫えい、子囊菌を除く）。

SI01：同定可能な種実は得られなかった。

SI04：同定可能な種実は得られなかった。

SI05：クリ（果実・子葉）が少量、オニグルミがわずかに得られた。

SI08：同定可能な種実は得られなかった。

SI10：クリ（果実）がわずかに得られた。

SI12：クリ（子葉）とイヌビエ属がわずかに得られた。

SI14：オニグルミとクリ（果実）、ブドウ科がわずかに得られた。

SI15：オニグルミが少量、クリ（果実・子葉）とナス属がわずかに得られた。

表2 川原平（4）遺跡A区から出土した炭化種実（2）（括弧内は破片数）

分類群	遺構名	SI12		SI14		SI15			SN01		
		試料番号	③-2	③-1	③-4	⑤-1	⑤-2	⑤-3	⑦-1	⑦-2	⑦-3
	採取位置	炉	炉1	炉2	炉3	炉1	炉2		風倒木66		
	部位/層位	2層	1層			1層			1層		
	水洗重量(g)	1820	2400	480	3500	2080	4250	5200	5280	4600	
	時期	縄文時代中期末葉～後期初頭									
オニグルミ	炭化核		(2)		(20)	(10)	(15)	(3)			
クリ	炭化果実		(1)				(3)	(2)			
	炭化子葉	(5)			(1)						
クワ属	炭化核								1	1	
ウルシ属-ヌルデ	炭化内果皮							1 (2)	(1)		
イロハモミジ近似種	炭化果実										(1)
ブドウ科	炭化種子		(1)								
キブシ	炭化種子							1			
サナエタデ-オオイヌタデ	炭化果実										1
キランソウ属	炭化果実							2	1		1
ナス属	炭化種子						1				
イヌビエ属	炭化種子	1									
不明A	炭化種実						1				
不明B	炭化種実							1			
不明C	炭化種実							1			
同定不能	炭化種実	(1)		(9)	(8)	(2)	(5)	(32)	(4)	(7)	
虫えい	炭化				1 (1)		(3)			1	
子囊菌	炭化子囊(塊)							5	2	1	
	炭化子囊	6		7 (1)	7	1 (4)	11 (8)	37 (12)	24	18 (3)	
マツ属	種子	1						1			
キブシ	種子				(1)						
カナムグラ	種子			(1)							
ヤナギタデ	果実				8 (2)						
イヌタデ	果実				4	3 (1)	1	1			
タニソバ	果実				43 (3)						
ミゾソバ	果実						1				
タデ属	果実				1		1		1		
アカザ属	種子				2			2			
エノキグサ属	種子				7	2					1
ナス属	種子						1				
タンポポ属	果実	1	1				2	2	2		4
キク科	果実										1
キランソウ属	果実					1					
キビ属	有ふ果				37 (7)	(1)					
エノコログサ属	有ふ果				2						1
スギナ近似種	無性芽				1 (1)						1
昆虫							(+)	(+)			(+)

1-9:+

SN01：オニグルミとクリ（果実）、クワ属、ウルシ属－ヌルデ、イロハモミジ近似種、キブシ、サナエタデーオオイヌタデ、キランソウ属がわずかに得られた。

次に、炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1)オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sieboldiana* (Maxim.) Makino 炭化核 クルミ科  
すべて1/2以下の破片である。完形ならば側面観は広卵形。表面に縦方向の縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。壁は緻密で硬く、ときどき空隙がある。断面は角が尖るものが多い。最大の破片で残存長14.6mm、残存幅9.3mm、残存厚6.6mm。

(2)クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化果実・炭化子葉 ブナ科

果実は、完形ならば側面は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。殻斗着痕は完形であれば果実幅と同じ程度の幅広になり、不規則で微細な丘状の突起が密にある。果皮内面にはいわゆる渋皮が厚く付着する。最大の破片で、残存長5.1mm、残存幅3.7mm。子葉は、完形ならば側面観が広卵形。表面一面に縦方向のしわ状の溝がある。しわ以外の面は平坦でやや光沢があり、硬質。最大の破片で、残存長8.3mm、残存幅4.2mm、残存厚3.9mm。

(3)クワ属 *Morus* spp. 炭化核 クワ科

側面観はいびつな広倒卵形または三角状倒卵形で、断面形は卵形または三角形。背面は稜をなす。表面にはゆるやかな凹凸があり、厚くやや硬い。基部に嘴状の突起を持つ。長さ1.6mm、幅1.2mm。

(4)ウルシ属－ヌルデ *Toxicodendron* spp. -*Rhus javanica* L. 炭化内果皮 ウルシ科

上面観は中央がやや膨らむ扁平、側面観は中央がややくびれた広楕円形で、どちらかが膨れる三角形状になる。ざらついた質感がある。壁は軟質。比較的遺存状況が良好な1破片（試料番号⑦-1）の断面について、走査型電子顕微鏡で観察を行った。内果皮にある3層のうち、内果皮の一番内側の層が残存しており、細長い細胞配列が観察された。種レベルの同定根拠となる最外層は残存していなかった。ただし、ヌルデは一番内側の層では楕円形の細胞配列しているため、この試料はウルシ属まで同定可能である。他の試料は表面および断面構造の詳細な検討を行えなかったため、ウルシ属－ヌルデの同定に留めた。表および結果の記載では、実体顕微鏡下での同定であるウルシ属－ヌルデで一括した。長さ2.0mm、幅2.8mm。

(5)イロハモミジ近似種 cf. *Acer palmatum* Thunb. 炭化果実 カエデ科

上面観は円形、側面観は卵形。表面には浅い縦筋がある。試料の上端に翼が残る。残存長4.4mm、残存幅3.0mm。

(6)ブドウ科 Vitaceae 炭化種子

破片だが、完形ならば上面観は楕円形、側面観は先端が尖る卵形。腹面に深い溝がある。種皮は薄く硬い。残存長2.2mm、残存幅2.6mm。

(7)キブシ *Stachyurus praecox* Siebold et Zucc. 炭化種子 キブシ科

上面観は円形、側面観は倒卵形。表面は平滑で強い光沢がある。長さ1.6mm、幅1.2mm。

(8)サナエタデーオオイヌタデ *Persicaria scabra* (Moench) Mold. -*Persicaria lapathifolia* (L.) S.F.Gray 炭化果実 タデ科

上面観は扁平で両凸レンズ形、側面観は広卵形で先端が尖る。表面は平滑で、やや光沢がある。長さ1.8mm、幅1.2mm。

(9)キランソウ属 *Ajuga* sp. 炭化果実 シソ科

上面観は円形、側面観は楕円形。腹面に大きな着点を持ち、その周囲は畝状に隆起する。表面には不定形の網目状隆線がある。長さ1.6mm、幅0.9mm。

(10)ナス属 *Solanum* spp. 炭化種子 ナス科

上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には畝状突起の細かい網目模様がある。着点の一端がやや突起する。ここでいうナス属とは、ナス以外のナス属である。長さ1.1mm、幅1.4mm。

(11)イヌビエ属 *Echinochloa* spp. 炭化種子 イネ科

側面観が卵形ないし楕円形、断面は片凸レンズ形であるが、厚みは薄くやや扁平である。胚は幅が広くうちわ型で、長さは全長の2/3程度と長い。栽培型のヒエよりやや細長く、野生のイヌビエに近い。一部有ふ果が付着する。長さ1.7mm、幅1.3mm。

## (12)不明A Unknown A 炭化種実

上面観は楕円形、側面観はいびつな楕円形。厚みがあり、表面は平滑。長さ2.9mm、幅2.1mm。

## (13)不明B Unknown B 炭化種実

上面観は楕円形、側面観は片側が膨らむいびつな楕円形。周囲は縁取るように肥厚する。長さ1.8mm、幅2.2mm。

## (14)不明C Unknown C 炭化種実

破片だが、完形ならば上面観は楕円形、側面観は倒卵形か。表面は平滑。残存長1.4mm、幅1.2mm。

## (15)子囊菌 Ascomycetes 炭化子嚢

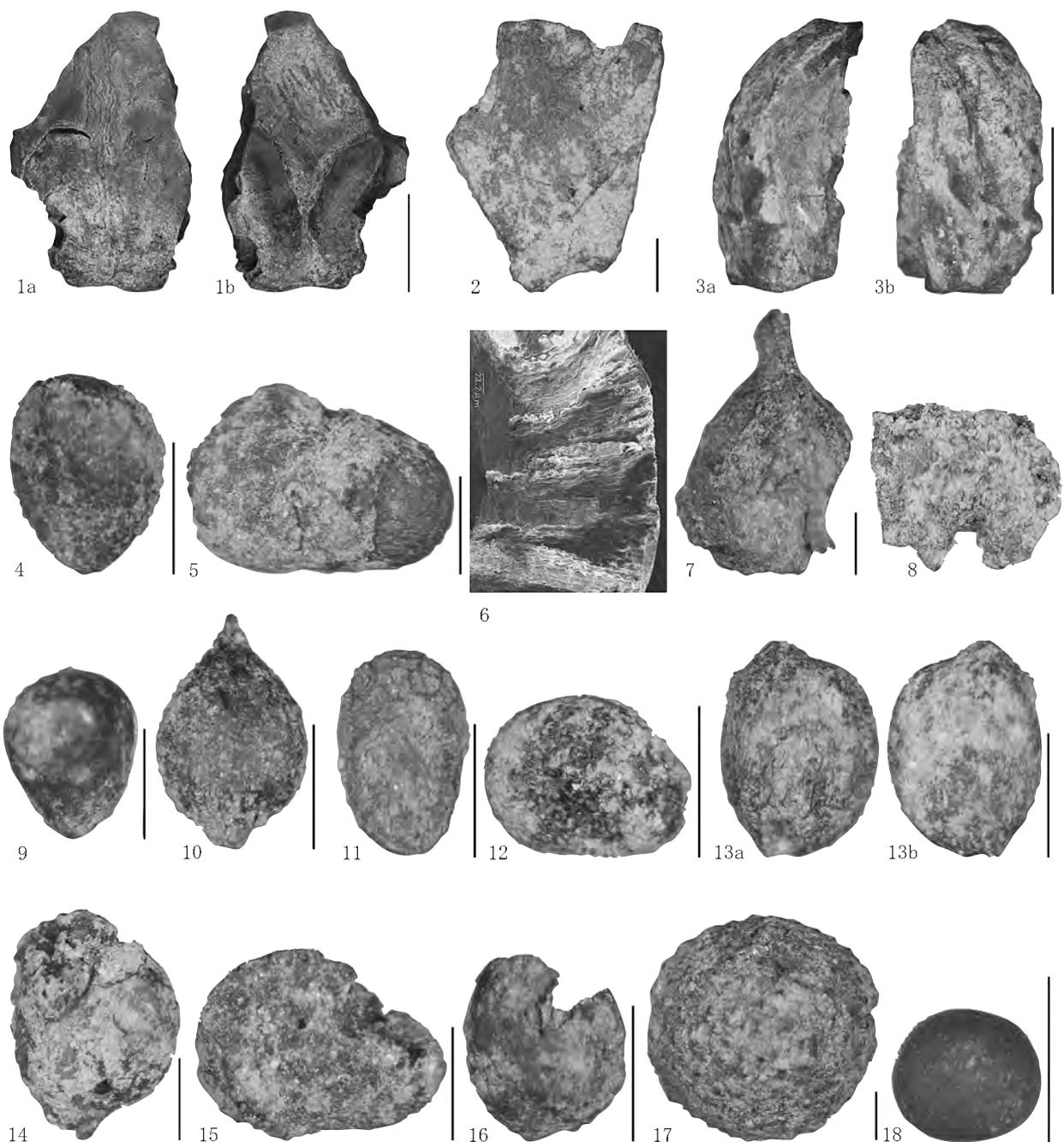
球形で、表面には微細な模様がある。長さ0.8mm、幅0.9mm程度。塊は径4.6mm。

#### 4. 考察

縄文時代中期末葉～後期初頭中心の8軒の竪穴住居跡から出土した炭化種実を同定した結果、5軒の竪穴住居跡から食用可能なオニグルミとクリがわずかに得られた。産出したのはオニグルミとクリの食用にならない部位(核・果実)で、微細な破片が多かった。食用になる子葉を利用するために割った残滓と考えられる。意図的かどうかは不明だが、不要な部分が炉で燃えた可能性がある。また、クリは炭化種実が得られたすべての住居跡で得られた。ブドウ科には食用可能なブドウ属と、食用できないノブドウが含まれるが、破片のため区別できなかった。SI12で得られたイヌビエ属には野生種と栽培種が含まれる。炉から産出しているため、利用された可能性がある。SI15で得られたナス属は、偶発的に混入し、炭化した可能性がある。

焼土跡であるSN01からは、食用可能なオニグルミとクリ、クワ属が得られた。ウルシ属-ヌルデには野生種と栽培種が含まれ、利用された可能性がある。完形1点と破片3点が得られたが、破片1点について走査型電子顕微鏡で観察したところ、ウルシ属と同定できた。他の試料についてもウルシ属の可能性がある。利用された可能性が低いイロハモミジ近似種やキブシ、サナエタデーオオイヌタデ、キランソウ属は、周辺に生育していたものが偶発的に混入し、炭化した可能性が考えられる。キブシは古代から黒色の染料に用いられるが、川原平(4)遺跡で利用されていたかは不明であった。

子囊菌や虫えいは、炭化材などに伴って遺構に持ち込まれたと考えられる。SN01では特に多く、子囊菌の塊もみられた。材に付着していたが、材自体は遺存しなかった可能性がある。



スケール 1, 3:5mm, 2, 4, 5, 7-17: 1mm

図版1 川原平(4)遺跡から出土した炭化種実

1. オニグルミ炭化核 (SI15, No. ⑤-2)、2. クリ炭化果実 (SI05, No. ②-3)、3. クリ炭化子葉 (SI05, No. ②-1)、
4. クワ属炭化核 (SN01, No. ⑦-2)、5. ウルシ属-ヌルデ炭化内果皮 (SN01, No. ⑦-1)、6. ウルシ属炭化内果皮 (SN01, No. ⑦-1)、7. イロハモミジ近似種炭化果実 (SN01, No. ⑦-3)、8. ブドウ科炭化種子 (SI14, No. ③-1)、
9. キブシ炭化種子 (SN01, No. ⑦-1)、10. サナエタデ-オオイヌタデ炭化果実 (SN01, No. ⑦-3)、11. キランソウ属炭化果実 (SN01, No. ⑦-2)、12. ナス属炭化種子 (SI15, No. ⑤-3)、13. イヌビエ属炭化種子 (SI12, No. ③-2)、
14. 不明A炭化種実 (SI15, No. ⑤-3)、15. 不明B炭化種実 (SN01, No. ⑦-1)、16. 不明C炭化種実 (SN01, No. ⑦-1)、
17. 子囊菌炭化子囊塊 (SN01, No. ⑦-1)、18. 子囊菌炭化子囊 (SI15, No. ⑤-3)

## 第5章 総括

### 第1節 検出遺構について

川原平(4)遺跡A区を調査した結果、竪穴住居跡17軒、土坑40基、掘立柱建物跡2棟、硬化面2箇所、焼土跡2基、小ピット294基が検出された。以下、それぞれの遺構について総括していく。

#### 1 竪穴住居跡

竪穴住居跡は17軒とまとまった数が検出されたが、竪穴部が削平されたものがほとんどであり、遺構の規模や形態等を捉えることが困難である。そこで、竪穴住居跡の構成要素の一つであり、残存状態が良好な炉について、その形態や規模などをまとめることにより、本遺跡で検出された竪穴住居跡の特徴の一端が捉えられればと考える。

まず、炉の構造について見ていくと、石囲炉が9基（第2・3・4・5・8・10・11・12・19号）、地床炉が4基（第1・13・14・15号）、炉の掘方と思われる落ち込みが3基（第6・7・9号）である。なお、第16号竪穴住居跡からは炉と思われる痕跡は検出されなかった。炉の規模は、地床炉については径20～50cm程度、石囲炉については径60～80cm程度のものが多いが、中には大型のものも見られ、径が100cmを超えるものが3基確認できた（第3・4・8号）。近隣地域において同時期で大型の石囲炉（径が約100cm）の検出例は、餅ノ沢遺跡第4号竪穴住居跡（青森県教委2000）があげられるが、類例は極めて少ない。石囲炉の形態は、ほぼ円形になるものが第4号竪穴住居跡くらいで、他の炉は楕円形もしくは方形が崩れたような形状となる。なお、第3・5号竪穴住居跡の石囲炉内部からは土器片が多量に出土し、いずれもほぼ1個体の深鉢に復元できた。土器片敷石囲炉や土器埋設石囲炉であった可能性がある。

炉の設置位置については推定になるが、支柱穴と思われる柱穴配置を復元した時に、ほぼ中央に設置されるものと、いずれかに偏って設置されるもの（第2・4・5・8・10・14・19号）がある。

最後に、竪穴住居跡の帰属時期についてだが、本遺跡における竪穴住居跡の時期決定要素としては、遺存状態の悪さから、炉内出土遺物やPit出土遺物のみとなる。その出土遺物からすると縄文時

表4 竪穴住居跡炉及びその他の属性

遺構名	軸方向 (推定)	規模 (推定径)	床面積 (推定)	平面形 (推定)	炉		時期
					構造	外径(cm)	
SI01	北から西へ約35°	約6～7m	約35㎡	楕円形	地床炉	32.5×20.2	不明
SI02	北から東へ約5°	約7m	約40㎡	円形	石囲炉	86.5×65.8	中期末葉～後期初頭
SI03	北から西へ約35°	約8～9m	約60㎡	楕円形	石囲炉	長軸137.0	中期末葉～後期初頭
SI04	北から東へ約60°	約7m	約35㎡	円形	石囲炉	116.9×96.2	不明
SI05	北から西へ約60°	約5m	約20㎡	円形	石囲炉	70.3×69.5	中期末葉～後期初頭
SI08	北から東へ約60°	約8m	約50㎡	円形	石囲炉	長軸122.4	中期末葉
SI10	北から西へ約60°	約6～7m	約35㎡	楕円形	石囲炉	86.9×73.6	不明
SI11	北から西へ約30°	約5m	約20㎡	円形	石囲炉	82.9×80.8	後期初頭
SI12	北から西へ約40°	約7～9m	約50㎡	楕円形	石囲炉	短軸93.9	後期初頭
SI13	北から西へ約10°	約6m	約35㎡	円形	地床炉	22.8×16.3	中期末葉～後期初頭
SI14	北から西へ約40°	約8m	約45㎡	円形	地床炉	炉1 23.1×20.4	不明
						炉2 29.2×24.5	
SI15	北から東へ約20°	約6m	約35㎡	円形	地床炉	炉1 44.0×37.1	中期末葉～後期初頭
						炉2 56.0×47.3	
SI19	北から東へ約70°	約5～6m	約40㎡	楕円形	石囲炉	炉3 31.1×30.4 長軸76.1	中期末葉～後期初頭

※表で取り上げた竪穴住居跡は、炉の設置が明確な13軒である。  
※炉以外の数値等は、柱穴及び住居推定範囲に基づいて割り出した。

代中期末葉～後期初頭に帰属するものと考えられる竪穴住居跡が多い。また、炉の中にはいわゆる複式炉と考えられるものはないが、炉の半数は住居跡の中心軸上でいずれかに偏って設置されたものと推定される。これは、複式炉を伴う住居と構造的に関連しているものと考えられる。炭素年代測定を行った第11・12号竪穴住居跡は、縄文時代後期初頭頃の年代値が得られている。また、検出された竪穴住居跡は、若干重複する第13・15号竪穴住居跡を除き、ほとんどの住居は単独で構築されており、1軒の住居自体に建て替えや建て増しなどの痕跡は見られるものの、大きく重複するものは見当たらなかった。このことは、本調査区においては、ほぼ当該時期だけの土地利用がなされ、大きく時期を隔てて居住空間としての土地利用はしなかったことが窺える。

まとめると、本遺跡で検出された竪穴住居跡には、石囲炉や地床炉が設置されるものが見られ、石囲炉の中には比較的大型のものも見られる。時期は縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属するものが多く、炉の状況や炭素年代測定の結果、重複の状況などからすると、複式炉が消滅してから間もない限られた期間に構築されたものであると考えられる。

## 2 土坑

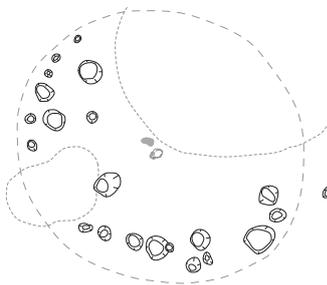
土坑は40基検出された。削平等により竪穴住居跡同様遺存状態は悪く、土坑の上半部は壊されている可能性が高い。平面形はほぼ円形や楕円形になるものが多く、中近世の時期が推定される第2・31・36号土坑は方形の形態をなす。断面形は遺構の下半部や底面に近いものが多いことから詳細は明らかではないが、逆台形状を呈するものが多い。フラスコ形になるものは1基もなく、いわゆる貯蔵穴としての用途が推定される土坑は検出されなかった。遺物が出土したのは、第2・5・6・14・15・16・17・20・32・33・39・41号土坑の12基であるが、第15号土坑以外は覆土からⅡ～Ⅲ群の土器が出土している。これらの土坑は、縄文時代中期末葉～後期初頭以前に構築された遺構である可能性があるが、中近世の時期が推定される第2・31・36号土坑を除き、その他の土坑についても、覆土の様相などから同時期である可能性は高い。なお、第31・36号土坑は、その形状や壁および底面の一部が被熱していることから、炭窯としての用途が推定される。時期は異なるが、古代における方形の炭窯（製炭遺構）は、青森市野木・新町野遺跡、同じく朝日山(1)・(2)・(3)遺跡などでも検出されており、状況が類似している。

## 3 掘立柱建物跡

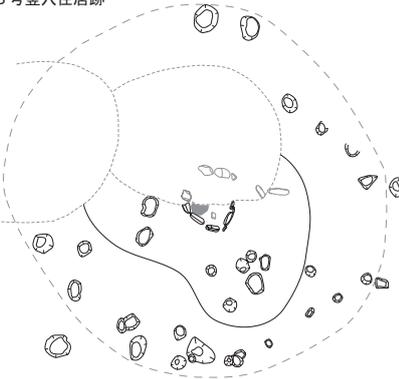
掘立柱建物跡は2棟並んで検出された。いずれも4基の柱穴で構成される1間×1間の正方形に近い形状のもので、第1号・第2号の建物間隔は約1.5mと近接している。調査区北側の段丘落ち際で確認されたが、標高が198.6mと調査区の中では高い位置に構築されている。竪穴住居跡で最も低い位置にあるのが第4・6号竪穴住居跡で、これが標高197.6mであることから掘立柱建物跡とは1mの標高差がある。PIT覆土出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭に構築された建物跡である可能性がある。ただ、第2号掘立柱建物跡の範囲内で検出されたPIT231覆土中からは、Ⅲ-1群土器がまとまって出土しており、このPITが第2号掘立柱建物跡に関連する遺構であるならば、時期は若干新しくなる可能性もある。

(主軸が北西-南東方向)

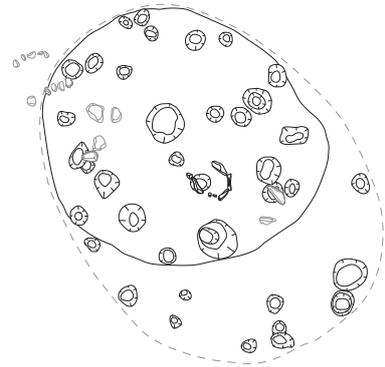
第1号竖穴住居跡



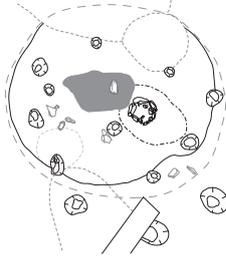
第3号竖穴住居跡



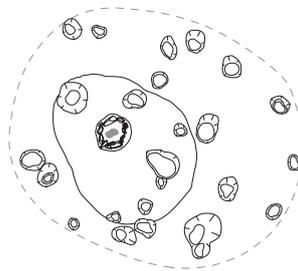
第12号竖穴住居跡



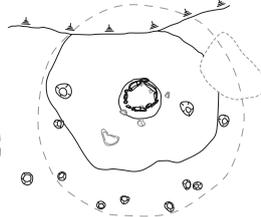
第5号竖穴住居跡



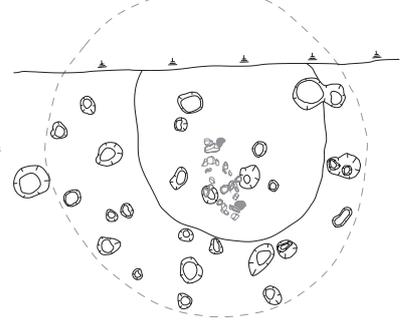
第10号竖穴住居跡



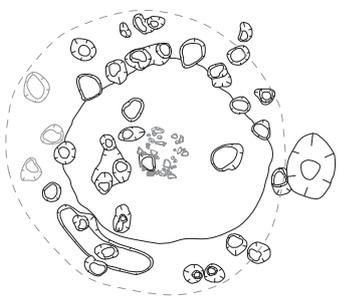
第11号竖穴住居跡



第14号竖穴住居跡

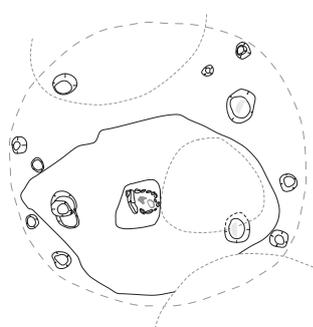


第13号竖穴住居跡

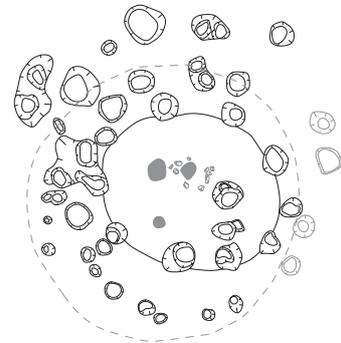


(主軸が北東-南西方向)

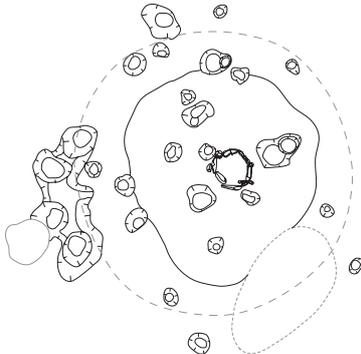
第2号竖穴住居跡



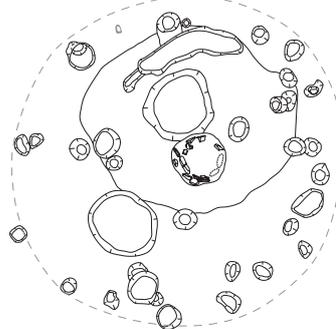
第15号竖穴住居跡



第4号竖穴住居跡



第8号竖穴住居跡



第19号竖穴住居跡

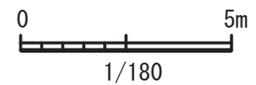
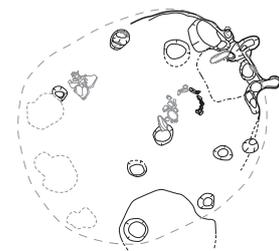


図68 竖穴住居跡集成

#### 4 その他の遺構

硬化面とした遺構が2箇所検出された。第1号硬化面は、いわゆる道跡としての用途が推定され、埋没沢2から北西側に向かって緩やかに上る傾斜を、繰り返し往来して踏み固められた痕跡であると考える。遺物は硬化面および付近のPITからも出土していないため、詳細な時期は不明である。第2号硬化面は、硬化範囲内に焼土跡やPITが検出されたことから、竪穴住居跡としての用途が推定されるが、周囲の竪穴住居跡のようにPITが弧状に配置されなかったり、硬化範囲（貼床範囲）の形状も不整形だったりすることから、竪穴住居跡とはしなかった。

小ピットは294基検出され、そのうち7箇所を小ピット群として抽出した。ほとんどが弧状に配置される小ピット群であるため、竪穴住居跡としての用途が推定されるが、炉や貼床・硬化面などが伴わないため竪穴住居跡とはしなかった。小ピット群の②～⑤に含まれるPIT覆土からⅡ～Ⅲ群に属する土器片が出土していることから、縄文時代中期末葉～後期初頭に帰属する可能性がある。

焼土跡は2基検出された。第1号焼土跡は、風倒木痕と思われる範囲内から検出されたが、この風倒木痕は、いわゆる天地返しの状況は見られず、木根がそのまま抜けたような状態であった。よって、検出された焼土跡は風倒木の影響は受けていないものと考えられる。時期は遺物が出土していないため不明であるが、すぐ南側には中近世の炭窯と考えられる第31号土坑があり、炭窯関連の焼土跡である可能性もある。第2号焼土跡は、第2号硬化面の硬化範囲内から検出されており、前述したが竪穴住居跡に伴う焼土の可能性もある。

（新山）

## 第2節 出土遺物について

遺物は、土器・石器等が段ボール箱で52箱分出土した。以下、土器・石器・その他の遺物（土製品・石製品・陶磁器）に分けて総括する。

### 1 土器

土器は遺構内出土のものが1,535点（25,428.9g）、遺構外出土のものが1,146点（17,395.6g）、合計2,681点（42,824.5g）出土した。時期は縄文時代前期から晩期までの広範囲にわたるが、中心となるのは中期末葉～後期初頭と考えられるものである。遺構内出土のものは、第19号竪穴住居跡の出土量が多かった。遺構外出土のものは、埋没沢1とその近辺、及び遺構周囲のほか、ⅦS-116・ⅦQ-128グリッド周辺からの出土量が多かった。

分類は、時期によってⅠ～Ⅳ群に大別し、各群において時期が大きく異なるものについては細別した。縄文時代中期末葉～後期初頭の粗製土器についてはⅡ～Ⅲ群とした。

#### Ⅰ群

Ⅰ群は縄文時代前期の土器である。前期前葉と思われるものをⅠ-1群、前期末葉のものをⅠ-2群とした。出土重量比率は1.2%（Ⅰ-1群0.8%・Ⅰ-2群0.4%）である。

##### Ⅰ-1群

総量23点（330.0g）のうち、掲載は4点（129.8g）である。縄文が施され、胎土中に繊維の混入が認められるもので、全て深鉢の胴部細片である。第13号竪穴住居跡・PIT060・070・085の覆土中と遺構外から出土した（図35-1・図57-4・図59-4・5）。円筒下層式以前の前期前葉の土器と思われる。

##### Ⅰ-2群

総量5点（171.5g）のうち、掲載は3点（148.0g）である。全て深鉢で、遺構外から出土した（図59-1～3）。結束第1種による羽状縄文が横位に施されるもので、前期末葉の円筒下層d式に比定される。

#### Ⅱ群

Ⅱ群は縄文時代中期の土器である。総量9点（161.9g）で、掲載は5点（106.9g）である。出土重量比率は0.4%である。遺構外から出土し、全て深鉢である（図59-6～10）。器面に磨消縄文、沈線、刺突が施されるほか、鱗状突起が付加されるものである。中期末葉の太木10式併行の土器に比定される。

（出土土器時期別比率表）

分類	Ⅰ群		Ⅱ群	Ⅱ～Ⅲ群	Ⅲ群		Ⅳ群	総重量	総点数
	1	2			1	2			
時期	前期前葉	前期末葉	中期末葉	中期末葉～後期初頭	後期初頭	後期後葉	晩期後半		
点数	23	5	9	2371	208	1	1	42824.5	2618
重量(g)	330.0	171.5	161.9	38692.2	3398.2	26.5	44.2		
重量比率	0.8	0.4	0.4	90.4	7.9	0.1	0.1	100.0	

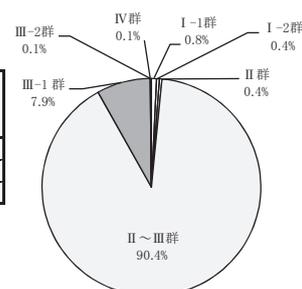


図69 出土土器時期別比率

### Ⅲ群

Ⅲ群は縄文時代後期の土器である。後期初頭に位置づけられるものをⅢ-1群、後期後葉のものをⅢ-2群とした。出土重量比率は8.0%（Ⅲ-1群7.9%・Ⅲ-2群0.1%）である。

#### Ⅲ-1群（図70～73）

Ⅲ-1群は器面に隆帯・沈線・側面圧痕・刺突が施されるもので、総量208点（3,398.2g）のうち、掲載は108点（2,312.7g）である。器種は深鉢と台付鉢、壺とがあるが、全体形を把握できるものはない。深鉢は頸部があまりくびれずに口縁部が直線的に外反するものと、内湾して立ち上がると思われるものがある。口縁部は平口縁と波状口縁とがあり、口唇部は平坦に整えられるものがほとんどである。壺は把手部と胴部片が確認された。

器面に隆帯が貼り付けられるものは本群の主体を占める。隆帯は幅約1cm・厚さ3～4mm程度で、断面は半円状を基調としている。隆帯は口縁部文様帯を区画するように頸部に横位に貼り付けられており、口縁部文様帯中には、隆帯が口唇部直下に貼り付けられるものや、口縁部から垂下して口縁部文様帯を区画するものもある。また、胴部には、口縁部文様帯から垂下するものや、胴部下半に横位に貼り付けられるものもある。なお、壺の把手には隆帯が蛇行状や巴状に貼り付けられる。隆帯の本数は殆どが1本であるが、幅約5mm・厚さ3mm程の細い隆帯が2本、平行して延びるものもある。隆帯上面には、刺突・指頭圧痕・縄による施文が施されるものと無文ものがある。刺突は、直径2mm前後の棒状もしくは角柱状の工具によるもの（図70-1～6）と、篋状工具によるものがある。篋状工具によるものでは、刺突が隆帯に対して垂直に施されるものと、斜めに施されるものがある。刺突が垂直に施されるものは、工具を隆帯の延びる方向に対して平行に当てるもの（図70-12・13）と、隆帯の延びる方向に対して直角方向に当てるもの（図70-7～11）があり、後者は隆帯を細かく刻む。篋状工具の厚さは1mm前後と推定される。刺突が隆帯に対して斜めに施されるものは、刺突の幅が3～5mmのもの（図70-14～25）と、刺突の幅が2mm前後のもの（図70-26～30）がある。後者の刺突痕は、中央が浅く両端が深い傾向にあり、また、細かい平行の筋が観察される。刺突は、隆帯上面に施されるものがほとんどであるが、一部、隆帯の側面に施されたもの（図70-1～3・5）も存在する。指頭圧痕を施すものは図70-31・32の僅か2点である。隆帯は縦位に貼り付けられるが、図70-32は2本の隆帯が上端で接する。隆帯脇には斜位の沈線が施されるが、図70-32は隆帯間に、図70-31は隆帯の両脇に施されている。縄による施文が施されるものは、縄文回転文を施すもの、側面圧痕を施すもの、結節を押圧したと思われるものがある。隆帯の交点や端部にボタン状貼付や円形文が施されるものや、隆帯に沿って沈線が施されるものがある。ボタン状貼付上にも刺突が施されている。胴部には、縄文が施されるもの、側面圧痕が施されるもの、沈線が施されるもの、刺突が施されるもの、無文のものがある。

沈線が施されるものは、深鉢と壺の胴部と思われるものがある。沈線の幅は1mm程度で、浅く、断面は半円状を呈するものがほとんどであるが、図71-30は沈線の幅が3mm程度と広いものである。沈線や器面の特徴が近似していることから、図71-7と同一個体の可能性が高い。沈線は頸部から胴部にかけて、横位・縦位・斜位若しくはU字状・人字状に施されているが、2条の沈線が平行して施されているものもある。小片のため詳細な文様構成は不明であるが、沈線は刺突や縄文が施された文様帯の区画文として施されているものと思われる。また、他と同様、ボタン状貼付が施されるものもあ

隆帯

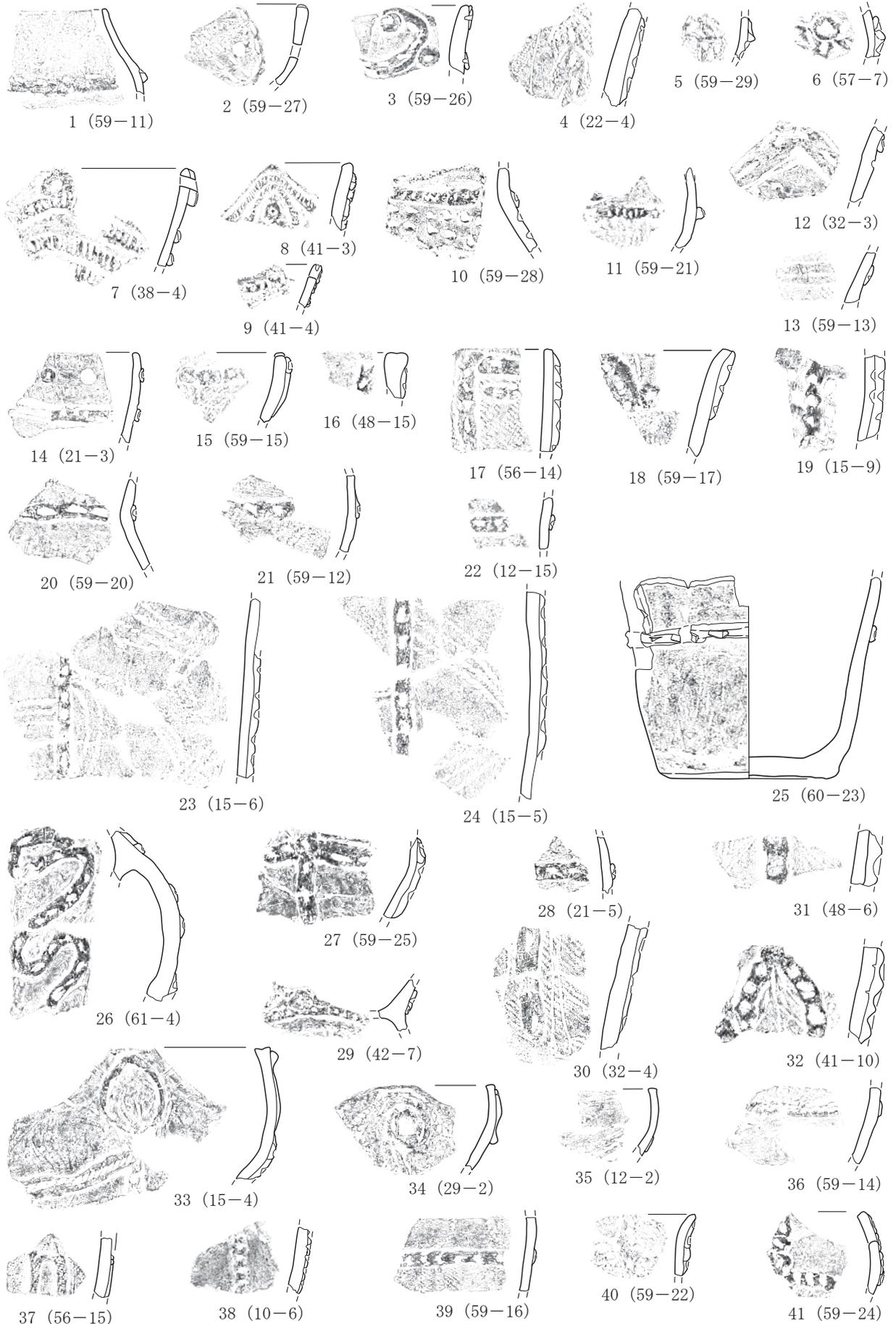
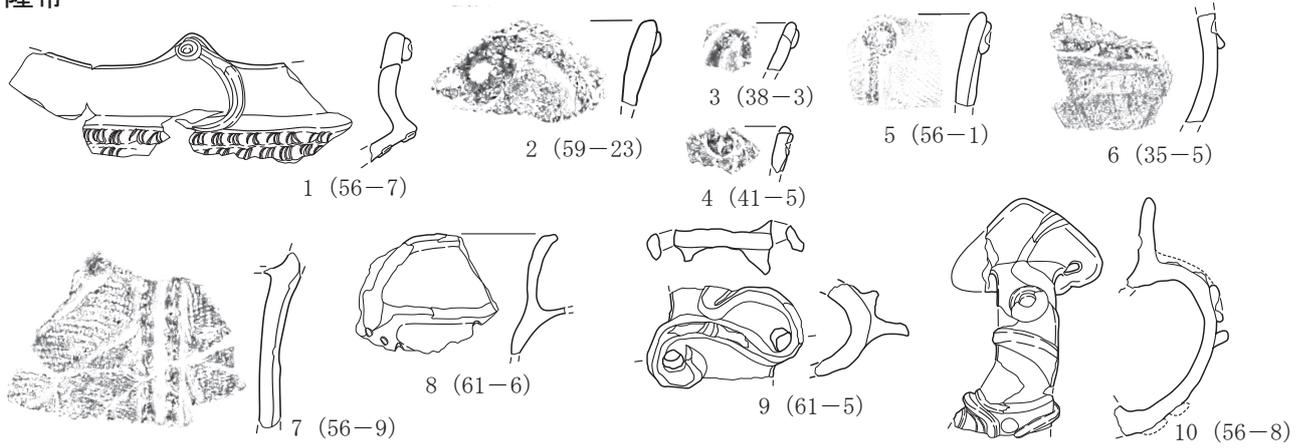


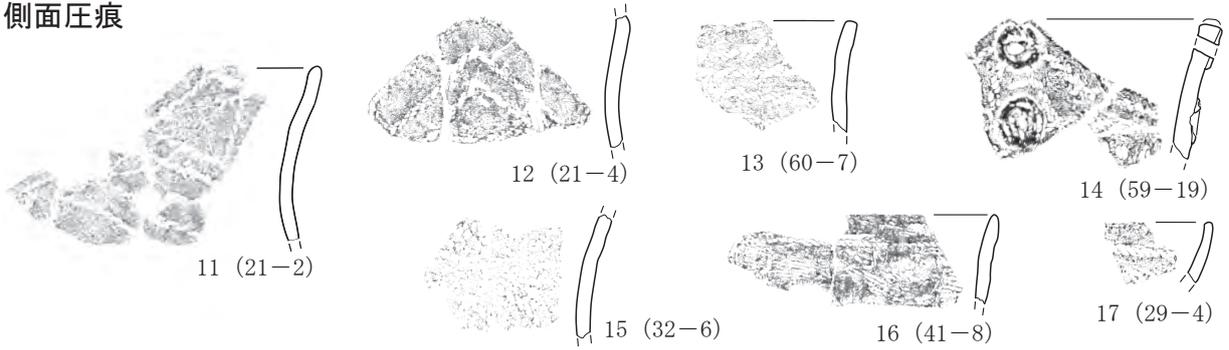
図70 III-1群土器集成(1)

※縮尺は1/3

隆帯



側面圧痕



沈線

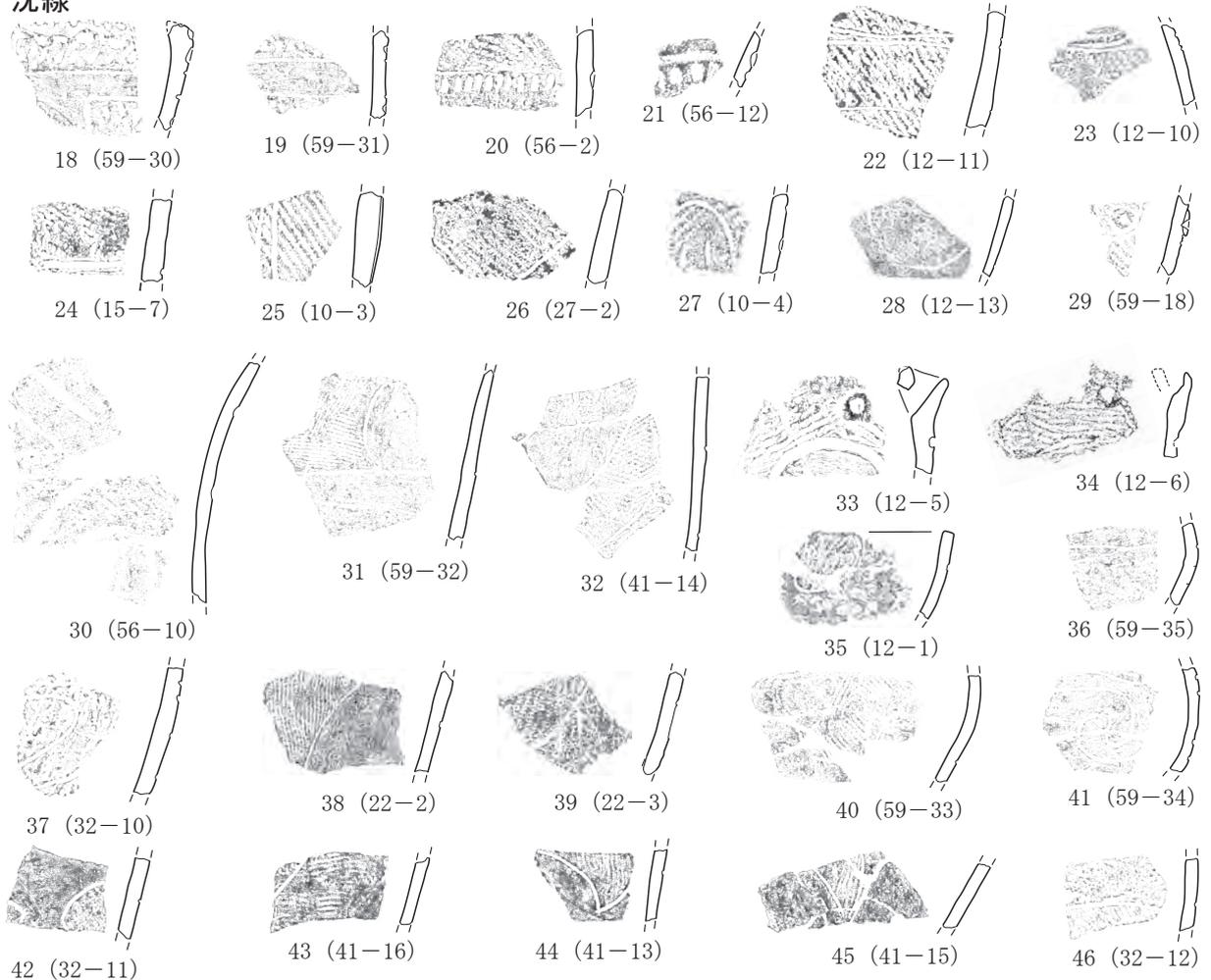


図71 Ⅲ-1群土器集成(2)

※縮尺は1/3

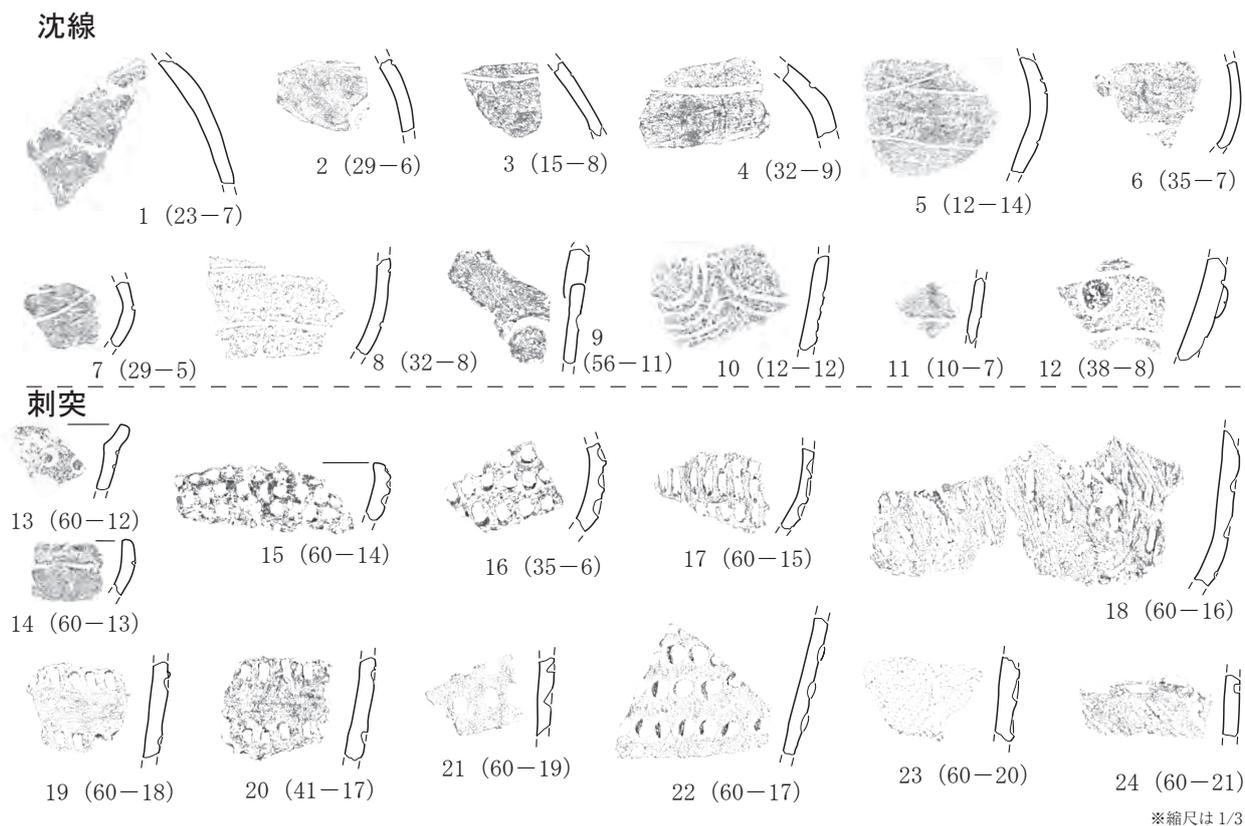


図72 III-1群土器集成(3)

り、ボタン状貼付上には刺突が施されている。

側面圧痕が施されるものは、深鉢の口縁部のみ確認できた。器形は、頸部がくびれ、口縁部からやや内湾気味に立ち上がるものと、直線的に外反して立ち上がるものがある。口縁部は平口縁と波状口縁をなし、波状口縁のものは波頂部に刺突が施されている。口唇部は平坦に整えられているものと、先端が先細りして尖るものがある。側面圧痕は口唇部直下に口縁に沿って施され、それによって区切られた口唇部付近を無文帯としている。波状口縁の口縁部文様帯は頸部まで広がり、口縁部文様帯内を更に縦位・斜位の側面圧痕によって区画している。また、波頂部の直下に、円形文が施されたものもある。

刺突のみを施すものは、深鉢と壺の胴部と思われるものがある。刺突は、ほとんどは篋状工具によるもので、先端が環になる竹管状工具によるもの(図72-13)も見られる。刺突は、器面に対して垂直なものは少なく(図72-13・14)、多くは器面に対して斜めに工具が当てられている。刺突の方向は、縦位のもの(図72-15~21・23)と、横位のもの(図72-22・24)がある。また、刺突の幅が3~5mm前後のもの(図72-15・16・19~22・24)と、刺突の幅が幅2mm前後のもの(図72-17・18・23)がある。後者の刺突痕は、中央が浅く両端が深い傾向にあり、また、細かい平行の筋が観察される。刺突は片側から押し込む・押しつけるように施されているため、粘土が押されて盛り上がっているものもある。刺突は、観察できる範囲では3段若しくは3列に施されている。

III-1群に類似する土器は、本遺跡周辺では、砂子瀬遺跡・大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡などから出土している。これらは、隆帯の断面形状や隆帯上の施文に差違があるものの、隆帯や側面圧痕を多用する特徴から、概ね牛ヶ沢式(成田1989)・葎窪式(本間1988)に相当するものと考えられる。隆

帯上に側面圧痕を施すものは、北秋田市日廻岱B遺跡で類例が出土しており、隆帯上に施文を施さないものや刺突列を施すものと同時期の縄文時代後期初頭とされている。また、図70-26の橋状把手は、岩手県西和賀町本町Ⅱ遺跡のBⅣv4土坑例と共通したモチーフと思われる。図71-10の口縁部把手は、岩手県一関市清水遺跡の捨て場5B-5T出土例に類似することから、門前式との関連が考えられる。

### Ⅲ-2群

後期後葉のものである。総量1点(26.5g)を掲載した。出土重量比率は0.1%である。遺構外のⅦG-101グリッドから出土した深鉢の口縁部片である(図61-7)。いわゆる瘤付土器で、「瘤付土器第Ⅰ段階」(小林2008)若しくは「(仮称)中屋敷段階(第3期)」(関根2005)に相当するものである。

### Ⅱ～Ⅲ群

Ⅱ～Ⅲ群は縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての粗製土器で、特徴的な文様を持たない縄文のみのものであり、及び無文のものである。総量2,371点(38,692.2g)で、掲載は168点(13,698.7g)である。出土重量比率は90.3%である。器種は深鉢と壺とがある。深鉢は頸部があまりくびれずに直線的に外反するものと、内湾すると思われるものがある。口唇部は比較的丸みを帯びるものが多い。壺は小型で無文のものが確認された。縄文のみものには斜縄文が施文されたもの、単軸絡条体が施されたものがある。

### Ⅳ群

Ⅳ群は縄文時代晩期の土器である。総量1点(44.2g)点を掲載した。出土重量比率は0.1%である。遺構外のⅦQ・R-105・106グリッドから出土した鉢の底部である(図61-8)。口縁部文様帯がないため詳細は不明であるが、晩期中葉以降の時期が推定される。(平山)

## 2 石器

石器は、遺構内から145点、遺構外から128点、合計273点、総重量190423.8kgである。剥片石器類、石斧・礫石器類それぞれの内訳は図73の表とグラフに示した通りであるが、以下、詳細について記載する。

剥片石器類は合計227点で、石器全体の割合で見ると82.8%であり、大多数を占めている。器種別で見えていくと、石鏃(3.1%)・石槍(0.4%)・石篋(0.4%)・石錘(3.1%)・石匙(0.9%)といった、いわゆる定形石器の類はそれぞれ5%に満たないほど少量であることがわかる。一方、削器(10.1%)・二次調整のある剥片(40.5%)・微小剥離痕のある剥片(33.5%)といった、いわゆる不定形石器の類は、剥片石器類の約8割以上を占める出土量であることがわかる。また、加工・使用痕の無いただの剥片が670点、剥片石器類を含めた割合で7割を超える量が出土している点の特筆される。これは、本遺跡から西へ直線距離で800m離れた位置に所在する大川添(1)・(2)遺跡でも類似した報告がされている。本遺跡近隣では、剥片石器の石材となる珪質頁岩が容易に採取できたことが推察されるが、それがどの辺りなのかは明らかにはなっていない。

石斧・礫石器類は合計46点で、石器全体の割合で見ると16.8%と少ないことがわかる。本類の中では敲き石が41.3%と多数を占めるが、石器全体で見ると7.0%と10%に満たない。その他、磨製石斧(2.2%)、磨り石(8.7%)、凹み石(10.9%)、石錘(10.9%)、台石(10.9%)、その他の礫(15.2%)で



が施されている。また、両肩から脇の下に向けて貫通孔があげられている。遺構外出土の2点は、図67-1が第4号竪穴住居跡付近、図67-2が第2・3号竪穴住居跡付近から出土している。本遺跡から出土した3点は、餅ノ沢遺跡（青森県教委2000）出土例と近似しており、縄文時代中期末葉の年代が推定される。

石製品は円盤状石製品4点である。図67-3は出土地点不明であるが、図67-5・6は小ピット群④付近から、図67-4は、第26号土坑付近からそれぞれ出土している。形状や成形の痕跡などに違いも見られ、出土層位がI層ということもあり、詳細な時期は不明である。

陶磁器は2点のみを図示した。用途不明の落ち込み（第3章第7節に詳細を記載）覆土から出土しており、図67-7はSX01から、図67-8はSX02からそれぞれ出土した。いずれの陶磁器も時期的に新しい要素が見られ、近世・近代のものであると考えられる。（新山）

## 引用参考文献

- 青森県教育委員会 1984 『葦窪遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第84集
- 青森県教育委員会 1984 『牛ヶ沢(3)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第86集
- 青森県教育委員会 1994 『野場(5)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第150集
- 青森県教育委員会 1996 『上蛇沢(2)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第177集
- 青森県教育委員会 2000 『餅ノ沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第278集
- 青森県教育委員会 2006 『川原平(1)・(4)遺跡・大川添(2)遺跡・水上遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第409集
- 青森県教育委員会 2008 『太田野(2)遺跡Ⅱ・太田(1)遺跡・北野(1)遺跡・北野(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第455集
- 青森県教育委員会 2011 『大川添(1)遺跡・水上(4)遺跡・芦沢(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第500集
- 青森県教育委員会 2012 『砂子瀬遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第513集
- 青森県教育委員会 2012 『大川添(2)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第515集
- 青森市蛭沢遺跡発掘調査団 1979 『蛭沢遺跡』
- 秋田県教育委員会 1999 『深渡遺跡』秋田県文化財調査報告書第286集
- 秋田県教育委員会 2000 『姫ヶ岱D遺跡』秋田県文化財調査報告書第300集
- 秋田県教育委員会 2001 『桐内B遺跡・桐内D遺跡』秋田県文化財調査報告書第318集
- 秋田県教育委員会 2002 『桐内A遺跡』秋田県文化財調査報告書第334集
- 秋田県教育委員会 2003 『砕淵遺跡』秋田県文化財調査報告書第349集
- 秋田県教育委員会 2005 『日廻岱B遺跡』秋田県文化財調査報告書第394集
- 秋田県教育委員会 2006 『深渡遺跡』秋田県文化財調査報告書第407集
- 秋田県教育委員会 2008 『地藏岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第434集
- 秋田県教育委員会 2010 『森吉家ノ前A遺跡』秋田県文化財調査報告書第453集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1994 『柳上遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第213集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 『上米内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査

## 報告書第220集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998 『本内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第271集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『上野平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第333集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 『清水遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第382集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003 『清田台遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第412集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2007 『里古屋遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第499集

安達尊伸・中村直 2007 「門前式の周辺～地域性認識の試論～」『岩手考古学会第38回研究大会資料集』

安部昭典 2008 『縄文時代の社会変動論』（株）アム・プロポーション

稲村晃嗣 2008 「門前式土器」『総覧縄文土器』（株）アム・プロポーション

植松なおみ 1981 「東北型網代圧痕について－鳥取市桂見遺跡出土資料の再検討－」『古代文化』第33巻3号

榎本剛治 2008 「十腰内Ⅰ式土器」『総覧縄文土器』（株）アム・プロポーション

小保内裕之 2008 「陸奥大木系土器（榎林式・最花式・大木10式併行土器）」『総覧縄文土器』（株）アム・プロポーション

菊池寛子 2004 「三十稲場式類似土器の施文方法について」『岩手考古学』第16号

小林圭一 2008 「瘤付土器」『総覧縄文土器』（株）アム・プロポーション

鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年研究』雄山閣出版

鈴木克彦・中村哲也 2011 「青森県の大規模住居集成」『北日本縄文時代大型住居集成』北日本縄文文化研究会

関根達人 2005 「「十腰内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器」に関する今日的理解」『葛西勲先生還暦記念論文集』

成田滋彦 1989 「入江・十腰内土器様式」『縄文土器大観4』小学館

本間宏 1987 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)－東北地方北部を中心に－」『よねしろ考古』第3号

本間宏 1988 「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)－東北地方北部を中心に－」『よねしろ考古』第4号

松永篤知 2004 「東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類について」『金沢大学考古学紀要』第27号

松永篤知 2008 「縄文土器底部の「敷物圧痕」について」『考古学雑誌』第92巻第2号

## 土器観察表

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	P番	分類	備考
10-1	SI-01	覆土	深鉢形	口縁部	P-24	Ⅱ～Ⅲ	LR (縦位)
10-2	SI-01	貼床2層	深鉢形	胴部	P-47	Ⅱ～Ⅲ	
10-3	SI-01	床面	深鉢形	胴部	P-36	Ⅲ-1	LR (縦位)、沈線
10-4	SI-01	覆土	深鉢形	胴部	P-8	Ⅲ-1	RL (縦位)、沈線
10-5	SI-01	床面	深鉢形	胴部	P-48	Ⅱ～Ⅲ	単軸絡条体第5類 (R)
10-6	SI-01	覆土	深鉢形	胴部	P-43	Ⅲ-1	LR、隆帯 (結節?による刺突)
10-7	SI-01	床面	壺形?	胴部	P-33	Ⅲ-1	沈線
10-8	SI-01	覆土	深鉢形	底部	P-25	Ⅱ～Ⅲ	被熱、
12-1	SI-02	覆土	壺形?	口縁部	P-27	Ⅲ-1	RL (縦位) 磨消、沈線、被熱
12-2	SI-02	覆土	深鉢形	口縁部	P-20	Ⅲ-1	隆帯 (LR側面圧痕)
12-3	SI-02	覆土	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ～Ⅲ	外面ミガキ
12-4	SI-02Pit01 VII0-107	覆土, 4層 I層, II層	深鉢形	口縁～胴部	P-1, P-3	Ⅱ～Ⅲ	単軸絡条体第5類 (R)
12-5	SI-02Pit01	覆土	深鉢形	口縁部	P-2	Ⅲ-1	注口状口縁 (口唇に刺突)、L 沈線、ボタン状貼付
12-6	SI-02	覆土	深鉢形	口縁部	P-36	Ⅲ-1	注口状口縁 (口唇に刺突)、L 沈線、ボタン状貼付
12-7	SI-02Pit03	覆土	深鉢形	胴部	P-1	Ⅱ～Ⅲ	RL (横位)、外面黒色物質付着
12-8	SI-02	床面	深鉢形	胴部	P-5	Ⅱ～Ⅲ	R
12-9	SI-02	覆土	深鉢形	胴部	P-32, 34	Ⅱ～Ⅲ	単軸絡条体第1類 (R) 縦位
12-10	SI-02	覆土	壺形?	胴部	P-30	Ⅲ-1	LR (縦位)、沈線
12-11	SI-02	覆土	深鉢形	胴部	P-14	Ⅲ-1	LR (縦位)、沈線
12-12	SI-02	覆土	深鉢形	胴部	P-29	Ⅲ-1	沈線
12-13	SI-02Pit05	覆土	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	RL (横位)? 沈線、外面黒色物質付着
12-14	SI-02	覆土	壺形?	胴部	P-2	Ⅲ-1	沈線
12-15	SI-02	覆土	深鉢形	胴部	P-20	Ⅲ-1	隆帯 (篋状工具による刺突)
12-16	SI-02 SI-02付近	覆土	深鉢形	底部	P-27 -	Ⅱ～Ⅲ	被熱、内面黒色物質付着
12-17	SI-02	覆土	深鉢形	底部	P-41	Ⅱ～Ⅲ	
15-1	SI-03 SI-03 炉	覆土 炉覆土	深鉢形	略完形	P-18 P-1, 2 4~9, 13 P-16~18 10~12, 14, 15 20~29 P-30~32, 33, 43 34~37, 41, 42 - -	Ⅱ～Ⅲ	LR (縦位)、外面黒色物質付着
15-2	SI-03	覆土	深鉢形	口縁部	P-22	Ⅱ～Ⅲ	LR (縦位)
15-3	SI-03	床面	深鉢形	口縁部	P-21	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)
15-4	SI-03	床面	深鉢形	口縁部	P-20	Ⅲ-1	隆帯 (RL側面圧痕)、円形文貼付
15-5	SI-03	床面	深鉢形	胴部	P-20	Ⅲ-1	RL側面圧痕、隆帯 (篋状工具による刺突)
15-6	SI-03	覆土	深鉢形	胴部	P-26	Ⅲ-1	RL側面圧痕、隆帯 (篋状工具による刺突)
15-7	SI-03	覆土	深鉢形	胴部	P-23	Ⅲ-1	RL (横位) + 結節回転文?、沈線
15-8	SI-03炉	掘方	壺形?	胴部	-	Ⅲ-1	沈線
15-9	SI-03	床面	深鉢形	胴部	P-9	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)、隆帯 (篋状工具による刺突)
15-10	SI-03炉	掘方	深鉢形	胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	内面黒色物質付着
15-11	SI-03	覆土	深鉢形	底部	P-24	Ⅱ～Ⅲ	砂混入
19-1	SI-04	床面	深鉢形	胴部	P-1	Ⅱ～Ⅲ	
19-2	SI-04Pit01	1層	深鉢形	胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	RR (横位)
19-3	SI-04Pit06-1	覆土	深鉢形	底部	-	Ⅱ～Ⅲ	被熱、小礫混入
21-1	SI-05 炉	1~3層 層位なし	深鉢形	略完形	P-1, 3, 4, 5, 8, 10 P-15~19, 21 P-25, 26, 28, 29, P-30, 32, 42, 46 P-50, 53, 56, P-61~63 P-66~71, 73, 74	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)、外面黒色物質付着
21-2	SI-05	1層 床面	深鉢形	口縁部	P-74 P-53, 55	Ⅲ-1	RL側面圧痕、波状口縁、波頂部に刺突
21-3	SI-05	覆土	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	隆帯 (篋状工具による刺突)、沈線、ボタン状貼付、 外面黒色物質付着
21-4	SI-05	貼床5層	深鉢形	胴 (頸) 部	P-70	Ⅲ-1	RL側面圧痕
21-5	SI-05	覆土	深鉢形	胴部	P-42	Ⅲ-1	隆帯 (篋状工具による刺突)
21-6	SI-05	覆土	深鉢形	胴部	P-58 P-4, 52, 64, 65	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)、外面黒色物質付着

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	P番	分類	備考
21-7	SI-05 炉	覆土	深鉢形	胴部	P-19, 48, 49, 67	Ⅱ～Ⅲ	LR (縦位)、摩滅
21-8	SI-05	覆土	深鉢形	胴部	P-63, 82 P-90, 91	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)
21-9	SI-05	覆土	深鉢形	胴部	P-26	Ⅱ～Ⅲ	LR (縦位+側面圧痕)
21-10	SI-05	床面	深鉢形	胴部	P-51	Ⅱ～Ⅲ	単軸絡糸体第1類 (R) 縦位 外面黒色物質付着
22-1	SI-05	貼床5層	深鉢形	胴部	P-79	Ⅱ～Ⅲ	単軸絡糸体第1類 (R) 縦位 外面黒色物質付着
22-2	SI-05	覆土	深鉢形	胴部	P-37	Ⅲ-1	LR (縦位) 磨消、沈線
22-3	SI-05	覆土	深鉢形	胴部	P-48	Ⅲ-1	RL (縦位) 磨消、沈線
22-4	SI-05	覆土	深鉢形	胴部	P-15	Ⅲ-1	RL (縦位) 磨消、沈線、隆帯 (棒状工具による刺突)
22-5	SI-05	覆土	深鉢形	底部	P-1	Ⅱ～Ⅲ	
22-6	SI-05	床面	深鉢形	底部	P-9	Ⅱ～Ⅲ	
23-1	SI-06Pit13	覆土	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ～Ⅲ	内外面黒色物質付着、小礫混入
23-2	SI-06Pit02	1層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ～Ⅲ	LR (縦位)
23-3	SI-06Pit17	覆土	深鉢形	胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)
23-4	SI-06Pit18	覆土	深鉢形	胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	LR (縦位)
23-5	SI-06	覆土	深鉢形	胴部	P-1	Ⅱ～Ⅲ	単軸絡糸体第5類 (R)、被熱
23-6	SI-06Pit13	覆土	深鉢形	胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	単軸絡糸体第5類 (L)
23-7	SI-06Pit05	覆土	壺形	胴部	-	Ⅲ-1	沈線
23-8	SI-06Pit01	1層	深鉢形	底部	-	Ⅱ～Ⅲ	砂混入
24-1	SI-07	炉掘方1層	深鉢形	胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)、外面黒色物質付着
24-2	SI-07	覆土	深鉢形	胴部	P-3	Ⅱ～Ⅲ	単軸絡糸体第5類 (R)
24-3	SI-07	覆土	深鉢形	底部	P-1, 3	Ⅱ～Ⅲ	小礫混入
26-1	SI-08	床面	深鉢形	胴部	P-1	Ⅱ～Ⅲ	LR (縦位)?
26-2	SI-08	床面	深鉢形	底部	P-2	Ⅱ～Ⅲ	被熱、砂
27-1	SI-09 SI-09付近	覆土 1層	深鉢形	胴部	P-3 P-1	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)、被熱
27-2	SI-09	覆土 1層	深鉢形	胴部	P-4	Ⅲ-1	LR (縦位)?、沈線、外面黒色物質付着
28-1	SI-10	床面	深鉢形	胴部	P-1	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)、外面黒色物質付着
29-1	SI-11	床面	深鉢形	口縁部	P-2	Ⅱ～Ⅲ	LR (縦位)
29-2	SI-11	床面	深鉢形	口縁部	P-1	Ⅲ-1	LR (縦位)、隆帯 (篋状工具による刺突)、円形文貼付 外側黒色物質付着
29-3	SI-11	床面	深鉢形	口縁部	P-3	Ⅱ～Ⅲ	被熱?
29-4	SI-11	床面	深鉢形	口縁部	P-1	Ⅲ-1	LR (縦位+側面圧痕) 外面黒色物質付着
29-5	SI-11	貼床1層	壺形	胴部	P-5	Ⅲ-1	沈線
29-6	SI-11 炉	覆土	壺形?	胴部	P-5	Ⅲ-1	外面ミガキ、沈線
32-1	SI-12Pit33	覆土	深鉢形	口縁～胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	LR (縦位)、摩滅
32-2	SI-12Pit33	覆土	深鉢形	口縁～胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	単軸絡糸体第1類 (L) 縦位
32-3	SI-12	覆土	深鉢形	頸部	P-58	Ⅲ-1	沈線、隆帯 (篋状工具による刺突)、外面黒色物質付着
32-4	SI-12	覆土	深鉢形	胴部	P-35	Ⅲ-1	LR (縦位)→沈線→隆帯 (篋状工具による刺突)
32-5	SI-12Pit33	覆土	深鉢形	口縁～胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)
32-6	SI-12	覆土	深鉢形	頸部	P-1, 2	Ⅲ-1	LR側面圧痕
32-7	SI-12	床面	深鉢形	胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)、外面黒色物質付着
32-8	SI-12	覆土	壺形	胴部	-	Ⅲ-1	沈線、赤色顔料付着?
32-9	SI-12 炉	覆土	壺形	胴部	P-3	Ⅲ-1	外面ミガキ、沈線
32-10	SI-12	覆土	深鉢形	胴部	P-33	Ⅲ-1	R磨消、沈線、外面黒色物質付着
32-11	SI-12Pit05	覆土	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	RL (横位) 磨消、沈線
32-12	SI-12	覆土	壺形?	胴部	P-23	Ⅲ-1	RL (縦位) 磨消、沈線、外面黒色物質付着 赤色顔料付着
32-13	SI-12	覆土	深鉢形	底部	P-37	Ⅱ～Ⅲ	小礫混入
32-14	SI-12Pit33	覆土	深鉢形	底部	-	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)、木葉痕
32-15	SI-12Pit33	覆土	深鉢形	底部	-	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)、木葉痕
32-16	SI-12	覆土	深鉢形	底部	-	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)、L側面圧痕
32-17	SI-12	覆土	深鉢形	底部	P-8	Ⅱ～Ⅲ	砂
33-1	SI-12 VIN-111	覆土 覆土 Ⅱ層	深鉢形	底部	P-4, 7 57, 63 - P-X	Ⅱ～Ⅲ	LR (縦位)、外面黒色物質付着
35-1	SI-13	覆土	深鉢形	胴部	P-9	I-1	LLR? (縦位)、繊維混入
35-2	SI-13Pit22	覆土	深鉢形	胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	RL (縦位)、外面黒色物質付着
35-3	SI-13 SI-13Pit26	覆土	深鉢形	胴部	P-7 -	Ⅱ～Ⅲ	LL? (縦位)
35-4	SI-13Pit22	覆土	深鉢形	胴部	-	Ⅱ～Ⅲ	単軸絡糸体第5類 (R)

## 川原平(4)遺跡Ⅱ

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	P番	分類	備考
35-5	SI-13	覆土	壺形?	胴部	P-10	Ⅲ-1	刺突(筥状工具)、隆帯
35-6	SI-13Pit01	覆土	壺形?	胴部	-	Ⅲ-1	刺突(筥状工具)、外面黒色物質付着
35-7	SI-13Pit22	覆土	壺形	胴部	-	Ⅲ-1	沈線
35-8	SI-13	床面	ミニチュア	底部	P-12	Ⅱ~Ⅲ	
35-9	SI-13Pit01	覆土	深鉢形	底部	-	Ⅱ~Ⅲ	
36-1	SI-14	貼床1層	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	LR(縦位)、外面黒色物質付着
36-2	SI-14Pit06	覆土	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	単軸絡条体第1類(L)縦位
38-1	SI-15	床面	深鉢形	口縁部	P-19	Ⅱ~Ⅲ	単軸絡条体第1類(L)縦位
38-2	SI15Pit39	覆土	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL(横位)
38-3	SI-15	床面	深鉢形	口縁部	P-6	Ⅲ-1	隆帯
38-4	SI-15	床面 フク土	深鉢形	口縁部	P-15 -	Ⅲ-1	隆帯(筥状工具による刺突)、ボタン状貼付
38-5	SI-15Pit02	覆土	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL(縦位)、内面ミガキ
38-6	SI-15	床面	深鉢形	胴部	P-2	Ⅱ~Ⅲ	LR(縦位)
38-7	SI-15	覆土	深鉢形	胴部	P-10	Ⅱ~Ⅲ	単軸絡条体第5類(LR)
38-8	SI-15	覆土	深鉢形	胴部	P-5	Ⅲ-1	LR(横位)?、沈線、ボタン状貼付
38-9	SI15Pit39	覆土	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	外面ミガキ、内面被熱
41-1	SI-19	覆土	深鉢形	口縁~胴部	P-25, 26, 46 56, 57 -	Ⅱ~Ⅲ	RL(縦走)+結節回転文
41-2	SI-19 SI-19 SI-19Pit05	覆土	深鉢形	口縁~胴部	P-34, 38, 134 - -	Ⅱ~Ⅲ	LR(縦位)、外面黒色物質付着
41-3	SI-19	覆土	深鉢形	口縁部	P-40	Ⅲ-1	隆帯(筥状工具による刺突)、ボタン状貼付
41-4	SI-19	確認面	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	隆帯(筥状工具による刺突)、突起部の口唇に刺突、ボタン状貼付
41-5	SI-19	覆土	深鉢形	口縁部	P-136	Ⅲ-1	隆帯(筥状工具による刺突)、ボタン状貼付
41-6	SI-19	覆土	深鉢形	口縁部	P-105, 127 128	Ⅱ~Ⅲ	LR(縦位)、外面黒色物質付着
41-7	SI-19Pit4	覆土	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL(縦走)
41-8	SI-19	覆土	深鉢形	口縁部	P-33	Ⅲ-1	L(縦位+側面圧痕)
41-9	SI-19	覆土	深鉢形	口縁部	P-40 -	Ⅱ~Ⅲ	単軸絡条体第1類(R)縦位、外面黒色物質付着
41-10	SI-19	覆土	深鉢形	胴部	P-7	Ⅲ-1	隆帯(指頭圧痕)、沈線、外面黒色物質付着
41-11	SI-19	覆土	深鉢形	胴部	P-40, 51, 92 -	Ⅱ~Ⅲ	LR(縦位)、外面黒色物質付着
41-12	SI-19 ASK-40	覆土	深鉢形	胴部	P-69, 70 -	Ⅱ~Ⅲ	LR(縦位)
41-13	SI-19Pit9	覆土	深鉢形	胴部	S-55	Ⅲ-1	RL(縦走)磨消、沈線、赤色顔料付着?
41-14	SI-19	確認面	深鉢形	胴部	P-114	Ⅲ-1	RL(充填)磨消、沈線
41-15	SI-19	確認面	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	RL(縦位)磨消、沈線
41-16	SI-19	覆土	深鉢形	胴部	P-96	Ⅲ-1	RL(横走)磨消、沈線
41-17	SI-19	覆土	深鉢形	胴部	P-41	Ⅲ-1	刺突(筥状工具)
42-1	SI-19	覆土	深鉢形	胴~底部	P-24, 32, 84 85, 106, 119	Ⅱ~Ⅲ	LR(縦位)、外面黒色物質付着
42-2	SI-19	覆土 確認面	深鉢形	胴~底部	P-7, 40, 79 102, 120	Ⅱ~Ⅲ	LR(縦位)
42-3	SI-19	覆土	深鉢形	胴~底部	P-1, 4, 5, 7 16, 131	Ⅱ~Ⅲ	LR(縦位)、外面黒色物質付着
42-4	SI-19	覆土	深鉢形	底部	P-9, 68, 101	Ⅱ~Ⅲ	RL(縦位)、内面黒色物質付着
42-5	SI-19	覆土	深鉢形	底部	P-57	Ⅱ~Ⅲ	単軸絡条体第5類(R)、外面黒色物質付着
42-6	SI-19	覆土	ミニチュア	底部	P-81	Ⅱ~Ⅲ	
42-7	SI-19	確認面	台付鉢形	脚部	-	Ⅲ-1	隆帯(筥状工具による刺突)
48-1	SK-02	1層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	被熱
48-2	SK-05	1層	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL(縦位)、被熱
48-3	SK-06	1層	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	
48-5	SK-14	1層	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL(縦位)
48-6	SK-14	1層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	RL(縦走)磨消、沈線、隆帯(指頭圧痕)
48-7	SK-16	1層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	L(縦位)
48-8	SK-16	1層	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	単軸絡条体第5類(R)
48-9	SK-16	1層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	外面黒色物質付着
48-10	SK-17	1層	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	単軸絡条体第1類(R)斜位?
48-11	SK-20	1層	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL(縦位)
48-12	SK-32	覆土	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL(縦位)、被熱
48-13	SK-32	覆土	深鉢形	底部	-	Ⅱ~Ⅲ	小礫混入
48-14	SK-33	1層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	LR(縦位)、付加条か?
48-15	SK-33	1層	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	隆帯(筥状工具による刺突)

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	P番	分類	備考
48-16	SK-33	1層	深鉢形	胴部	-	II～III	LR (縦位)、外面黒色物附着
48-17	SK-39	覆土	深鉢形	口縁部	-	II～III	RL (縦位)
48-18	SK-39	覆土	深鉢形	胴部	-	II～III	単軸絡条体第1類 (R) 縦位
48-19	SK-41	確認面	深鉢形	胴部	-	II～III	LL? (縦位)、外面黒色物質附着
56-1	SP-209	3層	深鉢形	口縁部	P-2	III-1	LR、隆帯、ボタン状貼付
56-2	SP-209	1層	深鉢形	胴部	P-1	III-1	LR (縦位)、刺突 (籠状工具)、沈線
56-3	SP-217	覆土	深鉢形	口縁部	-	II～III	単軸絡条体第1類 (L) 縦位
56-4	SP-269	1層	深鉢形	胴部	P-2	II～III	RL (縦位)、外面黒色物附着
56-5	SP-292	覆土	深鉢形	胴部	-	II～III	RL (縦位)、被熱
56-6	SP-231	1層 覆土	深鉢形	口縁～胴部	P-1, 7 -	II～III	LR (縦位)
56-7	SP-231	1層 2層 覆土	深鉢形	口縁部	P-30 P-32 -	III-1	刺突 (籠状工具)、隆帯、ボタン状貼付
56-8	SP-231	1層 覆土	深鉢形	口縁部突起	P-28 -	III-1	隆帯、ボタン状貼付
56-9	SP-231	3層 覆土	深鉢形	頸部	P-32	III-1	RL (縦走) 磨消、沈線
56-10	SP-231	1層 1層	深鉢形	頸部	P-26 P-28	III-1	RL (横位) ? 磨消、沈線
56-11	SP-231	1層	深鉢形	口縁部	P-13	III-1	沈線、山型口縁?
56-12	SP-231	覆土	深鉢形	胴部	-	III-1	刺突 (籠状工具)、沈線
56-13	SP-231	1層	深鉢形	底部	P-31	II～III	小礫混入
56-14	SP-289	覆土	深鉢形	口縁部	P-2	III-1	LR (縦位)、隆帯 (籠状工具による刺突)
56-15	SP-289	覆土	深鉢形	胴部	P-4	III-1	RL (縦位)、隆帯 (RL)、沈線
56-16	SP-290	覆土	深鉢形	胴部	-	II～III	RL
56-17	SP-322	覆土	ミニチュア	胴～底部	-	II～III	LR (縦位)、内面ミガキ状
56-18	SP-323	覆土	深鉢形	口縁部	-	II～III	RL (横位)
56-19	小ピット群② (旧SI18)	床面	深鉢形	胴部	P-3, 4	II～III	RL (縦位)、内面黒色物質附着
56-20	小ピット群② (旧SI18)	床面	深鉢形	胴部	P-2	II～III	RL (縦位)、被熱
56-21	小ピット群② (旧SI18)	床面	深鉢形	胴部	P-1	II～III	RL (縦位)、被熱
56-22	小ピット群② (旧SI18)	床面	深鉢形	胴部	P-2	II～III	
56-23	SP-025	1層	深鉢形	口縁部	-	II～III	RL (縦位)
56-24	SP-048	1層	深鉢形	底部	-	II～III	外面ケズリ状→RL縦位
56-25	SP-050	1層	壺形?	口縁部	-	II～III	
56-26	SP-105	1層	深鉢形	口縁部	-	II～III	LL? (縦位)、外面黒色物附着
57-4	SP-085	1層	深鉢形	胴部	P-2	I-1	RL (横位)、繊維混入
57-5	SP-117	1層	深鉢形	口縁部	-	II～III	
57-6	SP-129	覆土	深鉢形	口縁部	-	II～III	RL (縦位)
57-7	SP-129	1層	深鉢形	胴部	-	III-1	隆帯 (籠状工具による刺突)、ボタン状貼付
57-8	SP-070	1層	深鉢形	底部	-	II～III	外面ケズリ状、砂混入
57-10	SP-136	1層	深鉢形	胴部	-	II～III	RL (縦位)、外面黒色物附着
59-1	VII0-129	III層	深鉢形	口縁部	-	I-2	結束第1種 (RL・LR) 横位、LR側面圧痕
59-2	VIIQ-128	III層	深鉢形	胴部	-	I-2	結束第1種 (RL・LR) 横位 繊維混入、59-3と同一個体
59-3	VIII-128	I層	深鉢形	胴部	-	I-2	結束第1種 (RL・LR) 横位 繊維混入、59-2と同一個体
59-4	VIIIN-129	III層	深鉢形	胴部	-	I-1	LR (横位)、繊維混入
59-5	VII0-129	III層	深鉢形	胴部	-	I-1	繊維混入
59-6	VIIIM-102	I層	深鉢形	口縁部	-	II	沈線、刺突、鱗状突起、59-7と同一個体
59-7	VIIIM-102	I層	深鉢形	胴部	-	II	LR磨消、沈線、刺突 鱗状突起、59-6と同一個体
59-8	VIIIM-102	I層	深鉢形	胴部	-	II	LR磨消、沈線、鱗状突起
59-9	VIIIN-123	I層	深鉢形	胴部	-	II	隆帯、刺突
59-10	VIIIM・N-120・121	I層	深鉢形	胴部	-	II	隆帯、刺突
59-11	VIIIR-103	II層	深鉢形	口縁部	-	III-1	LR (縦位)、隆帯 (籠状工具による刺突)
59-12	VIIIL-122・123	-	深鉢形	胴部	-	III-1	RL (縦位)、隆帯 (籠状工具による刺突)
59-13	埋没沢1	I層	深鉢形	胴部	-	III-1	LR (縦位)、隆帯 (籠状工具による刺突)
59-14	VIIIN-109	II層	深鉢形	胴部	-	III-1	RL (縦位、側面圧痕)、隆帯 (RL側面圧痕)、外面黒色物質附着
59-15	VII0・P-102・103	III層	深鉢形	口縁部	-	III-1	LR (横位、側面圧痕)、隆帯 (籠状工具による刺突)
59-16	VIIK-122	III層	深鉢形	胴部	-	III-1	LR (縦位+側面圧痕)、隆帯 (縄による刺突)
59-17	VIIIR-115	I層	深鉢形	口縁部	-	III-1	L側面圧痕、隆帯 (籠状工具による刺突)

図版番号	出土地点	層位	器種	部位	P番	分類	備考
59-18	VIR-100	Ⅱ層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	RL (横位)、沈線、ボタン状貼付
59-19	VII-109	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	LR側面圧痕、ボタン状貼付
59-20	VIIH-111	不明	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	隆帯 (篋状工具による刺突)
59-21	VIIQ-127	Ⅰ層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	外面ハケメ状、隆帯 (篋状工具による刺突)
59-22	VIIIN-100	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	隆帯 (RL結節?による刺突)
59-23	VIIH-112	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	隆帯、口唇部LR、ボタン状貼付
59-24	VIIQ-129	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	隆帯 (LR結節?による刺突)、ボタン状貼付
59-25	VIIH-111	Ⅰ層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	隆帯 (篋状工具による刺突)、ボタン状貼付
59-26	VIR-102	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	隆帯 (篋状工具による刺突)、ボタン状貼付
59-27	VIIIM-121	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	刺突 (棒状工具)、隆帯 (棒状工具による刺突)、外面黒色物質付着
59-28	VIIJ-109	Ⅱ層	深鉢形	頸部	-	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)、隆帯 (篋状工具による刺突)、外面黒色物質付着
59-29	VIIIN-122	Ⅰ層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)、隆帯 (篋状工具による刺突)
59-30	VIIIN-122	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)、沈線、外面黒色物付着、59-31と同一個体か
59-31	VIIIN-122	Ⅰ層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)、沈線、外面黒色物付着、59-30と同一個体か
59-32	VIIK-105	Ⅰ層	深鉢形	胴部	P-15	Ⅲ-1	RL (充填) 磨消、沈線
59-33	VIIIN-117	Ⅱ層	壺形	胴部	P-2	Ⅲ-1	RL (充填) 磨消、沈線、赤色顔料付着?
59-34	VIIJ-109	Ⅱ層	壺形	胴部	-	Ⅲ-1	RL (充填) 磨消、沈線
59-35	VIIIS-115	Ⅰ層	壺形	胴部	-	Ⅲ-1	LR (横位) 磨消、沈線
60-1	VIIIP-108	Ⅲ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL (縦位)、外面黒色物付着
60-2	VII L-122・123	-	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	RLR (横位)
60-3	VIIIS-116	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL (縦走)
60-4	VIIIP-108	Ⅱ層, Ⅲ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL (縦位)
60-5	VIIIM・N-117	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL (縦位)、外面黒色物付着
60-6	VIIQ・R-116・117	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	LR (縦位)、折返し口縁
60-7	VIIJ-109	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	RL側面圧痕
60-8	VIIIP-124	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	小礫混入
60-9	VIIIO-107	Ⅱ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	単軸絡糸体第5類 (R)、外面黒色物質付着
60-10	VIIIS-116	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅱ~Ⅲ	単軸絡糸体第1類 (R) 縦位、外面黒色物質付着
60-11	VII J-123・124	-	深鉢形	胴部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL (横位)、外側黒色物質付着
60-12	ASX-08	覆土	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	刺突 (竹管状工具)
60-13	VIIIO-106	Ⅰ層	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)
60-14	VIIH-112	不明	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)
60-15	VIIIM-121	Ⅰ層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)
60-16	VIIH-111	不明	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)
60-17	VIIIS-116	Ⅰ層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)、内外面黒色物質付着
60-18	VIIIN-117	Ⅰ層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)
60-19	埋没沢1	Ⅲ層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	刺突 (篋状工具)
60-20	VIIIP-103	Ⅱ層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	RL (縦位)、刺突 (篋状工具)
60-21	VII L・K-104	Ⅲ層	深鉢形	胴部	-	Ⅲ-1	LR (縦位)、刺突 (篋状工具)
60-22	VIIIS-116	Ⅰ層	深鉢形	底部	-	Ⅱ~Ⅲ	RL (縦位)、砂、小礫混入、
60-23	VII L・M-104・105	Ⅱ層	深鉢形	底部	-	Ⅲ-1	RL (縦走)、隆帯 (篋状工具による刺突)
60-24	VIIIM-102	Ⅰ層	深鉢形	底部	-	Ⅱ~Ⅲ	LR、被熱
61-1	VIIQ-102	Ⅱ層	深鉢形	底部	-	Ⅱ~Ⅲ	外面ケズリ状→RL (縦位)
61-2	VII Q-102	Ⅱ層	深鉢形	底部	-	Ⅱ~Ⅲ	被熱
61-3	VII O-110	Ⅱ層	壺形	頸~底部	P-1	Ⅱ~Ⅲ	外面ミガキ、外面赤色顔料物付着?
61-4	VIIH-111	不明	壺形	把手部	-	Ⅲ-1	隆帯 (篋状工具による刺突)、外面黒色物質付着
61-5	VIIIN-123	Ⅰ層	壺形	把手部	-	Ⅲ-1	隆帯、貫通孔2カ所
61-6	VIIH-111	Ⅰ層	深鉢形	口縁部?	-	Ⅲ-1	隆帯
61-7	VII G-101	不明	深鉢形	口縁部	-	Ⅲ-2	RL (縦位) 磨消、沈線、刺突、貼付
61-8	VIIQ・R-105・106	Ⅲ層	深鉢形	底部	-	Ⅳ	LR? (横位)、摩滅

石器観察表  
剥片石器類

図版番号	出土地点	層位	種類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
13-1	SI-02Pit03	覆土	石鏃	珪質頁岩	2.3	1.1	0.4	0.6	S-1、有茎、アスファルト付着
13-2	SI-02	床面	微小剥離	珪質頁岩	5.1	2.8	1.2	13.8	S-13、一側縁に微小剥離痕
13-3	SI-02	覆土	搔器	珪質頁岩	4.6	5.4	1.8	43.9	S-5
16-1	SI-03	床面	石錐	珪質頁岩	5.9	3.4	1.5	16.3	S-8、錘部両面加工
16-2	SI-03	覆土	削器	珪質頁岩	5.2	7.2	1.2	47.3	S-27、一側縁に刃部・頭・末端部に微小剥離痕
16-3	SI-03	覆土	微小剥離	珪質頁岩	5.5	4.8	1.6	45.9	S-6、一側縁に微小剥離痕
16-4	SI-03	覆土	敲石	珪質頁岩	4.4	3.6	3.3	65.7	S-25、腹面以外に敲打痕
22-7	SI-05	床面	削器	珪質頁岩	6.0	6.7	1.6	60.8	S-14、一側縁に刃部
22-8	SI-05	床面	微小剥離	珪質頁岩	5.4	4.9	0.8	16.5	S-22、両側縁に微小剥離痕
22-9	SI-05	床面	微小剥離	珪質頁岩	4.6	5.2	1.0	20.8	S-22、両側縁・末端部に微小剥離痕
23-9	SI-06Pit09	覆土	石錐	珪質頁岩	7.4	6.0	2.1	59.8	錘部両面加工
26-3	SI-08炉	覆土	石鏃	珪質頁岩	(2.1)	1.4	0.4	0.9	S-3、有茎、先端部欠損
26-4	SI-08	床面	石槍	珪質頁岩	5.0	2.8	1.0	14.7	S-1、小型
26-5	SI-08炉	覆土	微小剥離	珪質頁岩	4.7	3.2	1.1	11.0	一側縁に微小剥離痕
29-7	SI-11	床面	搔器	珪質頁岩	(3.6)	5.0	1.0	18.2	S-2、上半部欠損
30-1	SI-11	覆土	削器	珪質頁岩	5.7	3.0	1.4	16.8	S-3、両側縁に刃部
30-2	SI-11	床面	削器	珪質頁岩	10.8	5.2	2.4	119.1	S-1、一側縁から末端部にかけて刃部
33-2	SI-12	貼床1層	削器	珪質頁岩	8.3	4.2	1.8	41.9	一側縁から末端部にかけて刃部
33-2	SI-12	貼床2層	削器	珪質頁岩	(4.2)	4.2	1.5	20.3	一側縁に刃部、上半部欠損
38-10	SI-15	覆土	削器	珪質頁岩	9.3	6.4	1.0	76.4	S-3、両側縁・末端部に刃部
42-8	SI-19	覆土	石錐	珪質頁岩	4.5	2.5	2.0	11.8	S-4、錘部両面加工
42-9	SI-19	覆土	削器	珪質頁岩	7.2	3.2	1.5	35.3	S-37、一側縁に刃部
42-10	SI-19	覆土	削器	珪質頁岩	7.7	5.4	1.2	39.9	S-35、一側縁に刃部
48-4	SK-06	I層	微小剥離	珪質頁岩	5.5	3.9	1.6	19.3	一側縁に微小剥離痕
57-1	PIT030	I層	削器	珪質頁岩	7.4	4.1	1.7	47.6	両側縁に刃部
57-2	PIT061	I層	微小剥離	珪質頁岩	5.8	6.2	1.2	33.1	一側縁に微小剥離痕
57-3	PIT060	I層	削器	珪質頁岩	8.4	5.1	1.6	47.9	両側縁に刃部
57-12	PIT295	覆土	石錐	珪質頁岩	6.6	4.9	1.5	47.5	錘部加工弱い
62-1	VIN-100	I層	石鏃	カルセドニー	3.8	1.2	0.5	1.5	有茎
62-2	VIN-121	I層	石鏃	カルセドニー	3.7	1.4	0.5	1.9	有茎
62-3	VIO-118	不明	石鏃	カルセドニー	3.7	1.1	0.6	1.9	有茎
62-4	VIK-106	I層	石鏃	カルセドニー	(3.1)	1.2	0.4	1.1	有茎、先端部欠損
62-5	VIN-129	III層	石鏃	珪質頁岩	2.8	1.4	0.5	1.2	無茎円基
62-6	VIIJ-124	一括	石匙	珪質頁岩	6.5	3.0	0.8	18.2	風倒木04、縦形
62-7	VIIJ-102	I層	石匙	珪質頁岩	(4.2)	4.2	0.8	9.7	横形、先端部欠損
62-8	VIIJ-103	I層	石錐	カルセドニー	4.6	1.4	0.6	1.8	錘部長く全体を加工
62-9	VIM-122	I層	石錐	珪質頁岩	5.3	3.8	1.7	18.1	錘部加工弱い
62-10	VIK-107	I層	石筥	珪質頁岩	6.8	4.2	1.0	26.5	SK-19付近、小型
62-11	VIM-123	不明	搔器	珪質頁岩	7.0	5.9	1.6	61.4	不整形剥片使用
62-12	VIP-102	I層	搔器	珪質頁岩	5.7	4.2	0.9	14.8	不整形剥片使用
62-13	VIF-108	I層	搔器	珪質頁岩	3.9	1.5	0.5	2.9	小型細身
62-14	VIN-116	I層	搔器	珪質頁岩	4.5	2.9	0.9	11.1	周縁加工
62-15	VIN-119	一括	削器	珪質頁岩	9.7	6.4	2.2	128.3	風倒木01、頭部つまみ状、体部円刃状
62-16	VIR-105	一括	削器	流紋岩	11.4	5.4	3.5	114.1	TR4、一側縁から末端部にかけて斜位に刃部
63-1	VIK-107	I層	削器	珪質頁岩	7.5	3.1	1.5	30.2	SK-19付近、両側縁に刃部
63-2	VIK-107	I層	二次調整	珪質頁岩	8.8	4.0	1.3	43.8	頭部・末端部を加工
63-3	VIM-102	I層	微小剥離	珪質頁岩	5.2	3.3	1.2	19.8	一側縁に微小剥離痕
63-4	VIIQ-117	一括	削器	珪質頁岩	4.4	6.1	7.0	25.8	風倒木14、一側縁・末端部に刃部
63-5	VIP-124	IIIa層	削器	珪質頁岩	5.0	3.0	1.1	11.0	一側縁に刃部
63-6	VIO-111	II層	削器	珪質頁岩	5.7	2.9	1.4	15.8	一側縁に刃部
63-7	VIK-107	I層	削器	珪質頁岩	11.5	6.5	2.3	144.4	SK-19付近、両側縁に刃部
63-8	VIIQ-122	I層	削器	珪質頁岩	8.2	4.7	1.3	43.3	一側縁に刃部
63-9	VIN-123	I層	削器	珪質頁岩	(2.6)	2.7	0.5	3.4	一側縁に刃部、下半部欠損
63-10	表採	不明	削器	珪質頁岩	(5.2)	4.3	1.7	36.0	一側縁に刃部、下半部欠損
63-11	VIIQ-102	II層	石核	珪質頁岩	8.0	8.8	7.1	498.1	背面以外周縁から素材剥片剥ぎ取り

## 石斧・礫石器類

図版番号	出土地点	層位	種類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
13-4	SI-02	覆土	被熱礫	凝灰岩	36.3	57.5	9.8	30700.0	S-31、炉石か？
16-5	SI-03炉	覆土	石錘	凝灰岩	7.8	6.8	2.5	150.4	2面敲き、2端打欠剥離
16-6	SI-03	覆土	敲き石	凝灰岩	10.2	10.2	8.6	1130.7	S-19、ほぼ全面に敲打痕
17-1	SI-03Pit02	覆土	敲き石	花崗岩	10.8	11.5	9.2	1500.0	S-24、3面使用
17-2	SI-03Pit02	覆土	敲き石	凝灰岩	10.8	10.7	9.1	1350.0	S-24、3面使用
17-3	SI-03	覆土	敲き石	凝灰岩	11.6	11.0	9.6	1500.0	S-14、4面使用
17-4	SI-03	覆土	台石	凝灰岩	21.5	26.4	8.6	5100.0	S-18
17-5	SI-03	炉	被熱礫	凝灰岩	30.9	40.7	12.0	24300.0	S-13、炉石
22-10	SI-05	覆土	凹み、敲き石	凝灰岩	7.8	9.1	5.4	398.8	2面凹み、側縁敲き
22-11	SI-05	覆土	敲き石	凝灰岩	(7.2)	6.9	3.4	218.9	2面使用
22-12	SI-05	覆土	敲き石	凝灰岩	6.1	6.3	3.8	131.3	1面使用
26-6	SI-08	覆土	台石	凝灰岩	17.7	23.7	4.0	1900.0	S-2、被熱範囲あり、1面・両側縁敲き
30-3	SI-11	貼床1層	磨り石	凝灰岩	9.3	8.0	5.4	571.9	S-4、2面使用
33-4	SI-12	床面	被熱礫	凝灰岩	39.6	(27.1)	11.8	16200.0	S-1
33-5	SI-12炉	炉	被熱礫	砂質凝灰岩	43.1	33.8	10.5	21250.0	S-4、炉石
33-6	SI-12炉	炉	被熱礫	凝灰岩	30.6	42.9	12.8	20050.0	S-3、炉石
36-3	SI-14Pit06	1層	敲き石	流紋岩	(19.3)	10.4	9.0	2400.0	1面、先端部に敲打痕
38-11	SI-15	床面	台石	凝灰岩	16.0	23.3	7.9	3850.0	S-8、擦り面あり
42-11	SI-19Pit08	覆土	磨製石斧	緑色岩	(3.8)	1.3	0.8	7.1	小型
43-1	SI-19	覆土	凹み石、磨り石	凝灰岩	13.6	6.5	4.6	495.7	S-33、1面凹み・磨り
43-2	SI-19	覆土	石錘	凝灰岩	9.5	7.1	2.4	176.3	S-20、1面敲き、4端打欠
43-3	SI-19	覆土	石錘	凝灰岩	6.7	5.0	1.5	62.5	S-44、2端打欠
43-4	SI-19	覆土	石錘	凝灰岩	5.4	5.8	1.0	51.2	S-46、2端剥離
43-5	SI-19	覆土	石錘	凝灰岩	6.1	4.7	1.9	70.7	S-48、2端打欠
57-9	PIT254	1層	台石	砂質凝灰岩	20.0	25.6	5.8	4450.0	1面磨り・敲き
57-11	PIT267	覆土	敲き石	凝灰岩	7.1	7.2	5.4	340.5	2面使用
57-13	PIT324	覆土	敲き石	凝灰岩	5.5	5.4	4.6	134.5	1面・1端敲き
64-1	SX-01	覆土	磨り、敲き石	凝灰岩	13.4	11.6	8.6	1700.0	1面磨り、2側面敲き
64-2	VIN-103	一括	磨り、敲き石	凝灰岩	12.2	9.0	7.0	1550.0	SI03風倒木S-28、2面磨り、3面敲き
64-3	SX-02	覆土	磨り、敲き石	凝灰岩	9.8	8.9	5.1	554.4	1面磨り、1側縁敲き
64-4	VII0-104	III層	敲き石	砂岩	8.2	5.8	5.3	339.9	4面使用
64-5	SX-06	覆土	敲き石	凝灰岩	9.7	8.3	6.1	477.9	1面使用
64-6	SX-02	覆土	敲き石	凝灰岩	15.6	8.9	4.0	748.8	2面、1側面
64-7	SX-03	覆土	敲き石	凝灰岩	9.5	7.5	5.1	484.1	2面、2側面使用
65-1	SX-03	覆土	敲き、磨り石	凝灰岩	11.6	7.6	4.2	464.2	2面敲き、1面磨り
65-2	VIII-117	I層	敲き石	凝灰岩	12.5	6.0	4.1	373.3	2面敲き
65-3	SX-06	覆土	敲き、磨り石	凝灰岩	14.3	7.0	4.8	737.6	1面・1端敲き、1側縁磨り
65-4	VIII-109	III層	敲き石	凝灰岩	10.8	11.1	8.8	1559.9	被熱痕、1端敲き、一面火はじけ
65-5	VII-107	I層	凹み石	凝灰岩	(9.5)	6.8	3.5	275.7	埋没沢1、2面凹み・敲き
65-6	VII-112	I層	凹み石	凝灰岩	(12.9)	6.5	3.8	416.9	埋没沢1、2面凹み・敲き
65-7	VIII-115	I層	凹み石	凝灰岩	12.6	9.6	2.7	346.8	2面凹み・敲き
65-8	VII0-109	II層	凹み、敲き石	砂質凝灰岩	9.3	7.2	5.4	408.5	S-1、2面5カ所に凹み
66-1	VIII-99	II層	台石	凝灰岩	18.5	18.0	4.0	1450.0	1面磨り・敲き
66-2	SX-04	覆土	加工礫	凝灰岩	10.4	8.0	3.3	349.9	1側縁剥離
66-3	SX-03	覆土	加工礫	凝灰岩	16.1	7.8	2.9	366.2	1側面剥離、1端敲き(剥離)

## 土製品

図版番号	出土地点	層位	種類	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
26-7	SI08	覆土	土偶	胴上部	(5.9)	9.5	1.6	79.2	2列の刺突列、ボタン状貼付、貫通孔
67-1	VIII-122	III層	土偶	頭部	(4.0)	2.6	4.2	24.4	2列の刺突列、目・口(刺突)、貫通孔
67-2	VII P-104	II層	土偶	胴下部	(5.5)	4.7	2.2	51.9	刺突、粘土貼付、沈線状の窪み

## 石製品

図版番号	出土地点	層位	種類	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
67-3	排土	—	円盤状	凝灰岩	4.6	5.1	1.5	32.7	片面中央部に未貫通の穿孔
67-4	VII N-117	I層	円盤状	凝灰岩	4.0	3.1	0.9	18.5	両面擦痕顕著
67-5	VII I-122	I層	円盤状	凝灰岩	6.5	6.1	1.2	29.1	両面擦痕、周縁敲打痕
67-6	VII I-122	I層	円盤状	凝灰岩	7.8	7.9	1.9	134.7	両面擦痕

## 陶磁器

図版番号	出土地点	層位	種類	部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
67-7	SX01	1層	碗	底部	—	3.6	(2.4)	56.7	磁器、内外面染付
67-8	SX02	覆土	甕	口縁部	(11.2)	—	(4.7)	35.0	陶器、内外面鉄釉



調査区北東部空中撮影（平成23年度）



基本層序①（調査区東壁：西から）



基本層序②（PIT213壁：西から）

写真1 空中撮影・基本層序



作業風景（第12号竪穴住居跡：南東から）



作業風景（調査区北東部：西から）

写真2 作業風景



第1号竪穴住居跡完掘（南西から）



第2号竪穴住居跡完掘（南から）

写真3 第1・2号竪穴住居跡



第3号竖穴住居跡完掘（南から）



第4号竖穴住居跡完掘（南西から）

写真4 第3・4号竖穴住居跡



第3号竪穴住居跡石囲炉（南から）



第4号竪穴住居跡石囲炉（南西から）



第5号竪穴住居跡完掘（西から）



第5号竪穴住居跡炉遺物出土状況（南東から）



第5号竪穴住居跡炉断割断面（南東から）

写真5 第3・4号竪穴住居跡石囲炉・第5号竪穴住居跡



第6号竪穴住居跡完掘（西から）



第7号竪穴住居跡完掘（南西から）

写真6 第6・7号竪穴住居跡



第8号竪穴住居跡完掘（北西から）



第9号竪穴住居跡完掘（西から）

写真7 第8・9号竪穴住居跡



第8号竖穴住居跡石囲炉（南西から）



第8号竖穴住居跡炉断割断面（北東から）



第10号竖穴住居跡完掘（北西から）



第10号竖穴住居跡石囲炉（南から）



第10号竖穴住居跡炉断割断面（西から）

写真8 第8号竖穴住居跡石囲炉・第10号竖穴住居跡



第11号竖穴住居跡石囲炉検出（西から）



第12号竖穴住居跡石囲炉検出（北東から）

写真9 第11・12号竖穴住居跡



第13号竖穴住居跡完掘（南から）



第14号竖穴住居跡完掘（南西から）

写真10 第13・14号竖穴住居跡



第15号竪穴住居跡完掘（南から）



第16号竪穴住居跡完掘（南から）

写真11 第15・16号竪穴住居跡



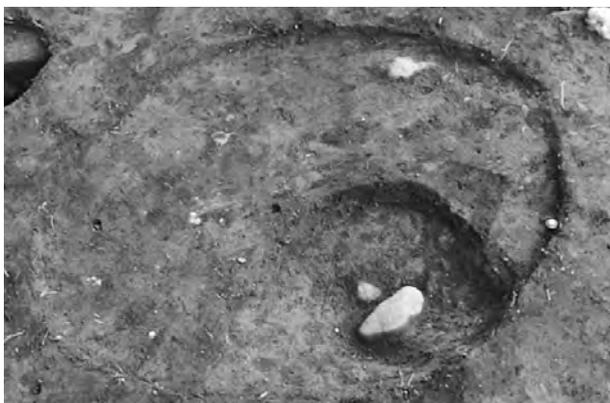
第19号竖穴住居跡完掘（南東から）



第1号土坑土層断面（南西から）



第2号土坑動物遺存体（南から）

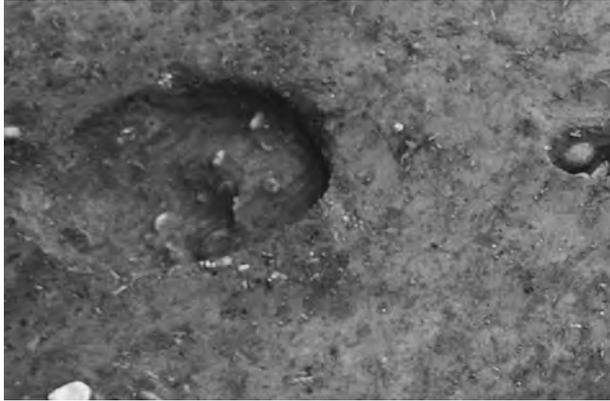


第3号土坑完掘（西から）



第3号土坑土層断面（西から）

写真12 第19号竖穴住居跡・土坑（1）



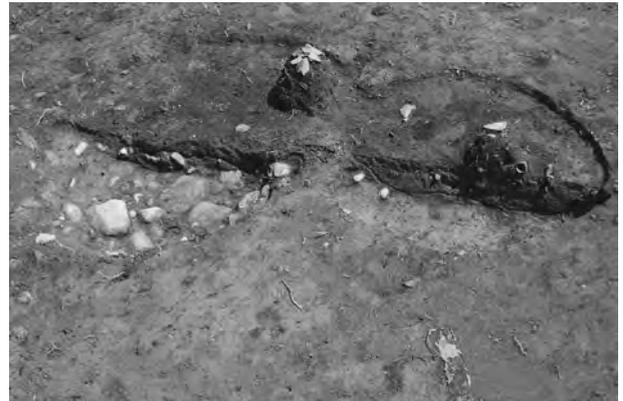
第4号土坑完掘（西から）



第4号土坑土層断面（西から）



第5・6号土坑完掘（西から）



第5・6号土坑土層断面（西から）



第7号土坑土層断面（西から）



第9号土坑土層断面（西から）



第8号土坑完掘（右側：西から）



第8号土坑土層断面（西から）

写真13 土坑（2）



第10号土坑完掘（南から）



第10号土坑土層断面（南から）



第11号土坑完掘（西から）



第11号土坑土層断面（西から）



第12号土坑完掘（西から）



第12号土坑土層断面（西から）



第13号土坑完掘（西から）



第13号土坑土層断面（西から）

写真14 土坑（3）



第14号土坑完掘（南西から）



第14号土坑土層断面（南西から）



第15号土坑完掘（西から）



第15号土坑土層断面（西から）



第16号土坑完掘（東から）



第16号土坑土層断面（東から）



第17号土坑完掘（北から）



第17号土坑土層断面（北から）

写真15 土坑（4）



第18a・18b号土坑完掘（西から）



第18a・18b号土坑土層断面（西から）



第19号土坑完掘（北西から）



第21号土坑土層断面（南東から）



第25号土坑土層断面（西から）



第27号土坑完掘（西から）



第28号土坑完掘（東から）

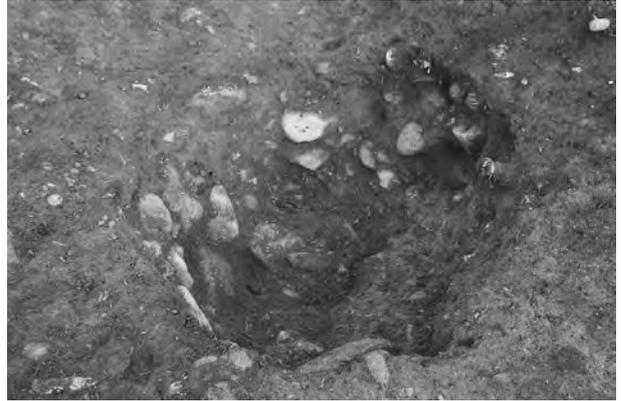


第28号土坑土層断面（東から）

写真16 土坑（5）



第29号土坑完掘（西から）



第30号土坑完掘（西から）



第31号土坑完掘（東から）



第31号土坑土層断面（南から）



第32号土坑完掘（南西から）



第32号土坑土層断面（南西から）



第33号土坑完掘（南西から）



第33号土坑土層断面（南西から）

写真17 土坑（6）



第34号土坑完掘（西から）



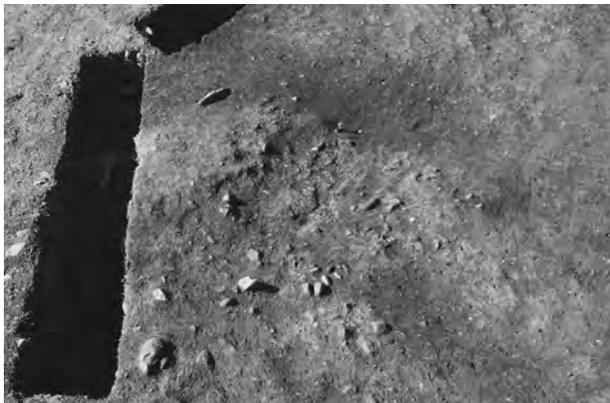
第34号土坑土層断面（西から）



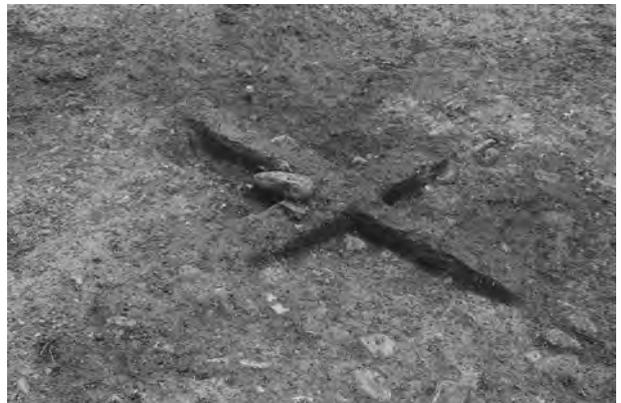
第35a・35b号土坑完掘（南から）



第35a・35b号土坑土層断面（南から）



第36号土坑完掘（東から）



第36号土坑土層断面（南東から）



第37号土坑完掘（西から）



第37号土坑土層断面（西から）

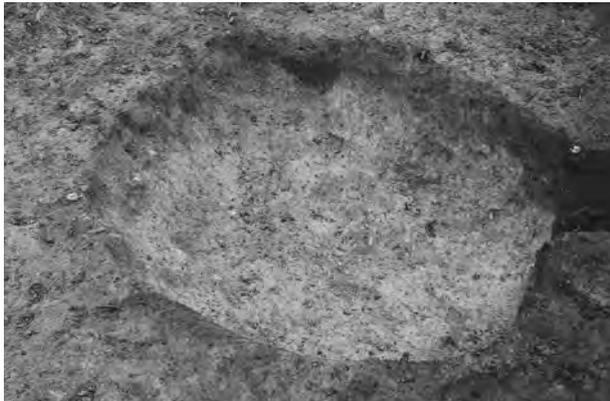
写真18 土坑（7）



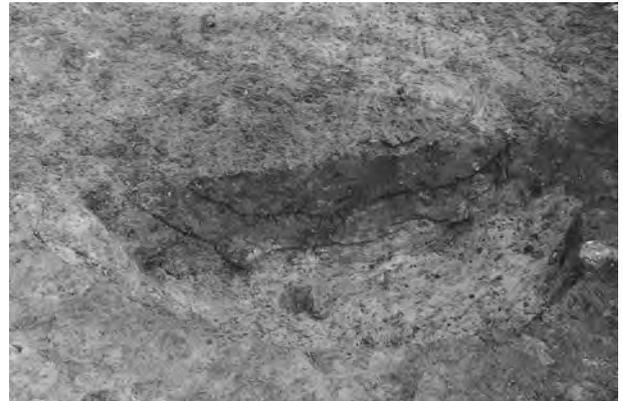
第38号土坑完掘（南西から）



第38号土坑土層断面（南西から）



第39号土坑完掘（西から）



第39号土坑土層断面（西から）



第40号土坑完掘（西から）



第40号土坑土層断面（西から）



第41号土坑完掘（南から）



第41号土坑土層断面（南から）

写真19 土坑（8）



第1号硬化面（南東から）



第2号硬化面（南から）



PIT209完掘（SB01：西から）



PIT213完掘（SB01：西から）



PIT269土層断面（SB01：北から）



PIT231土層断面（SB02：西から）

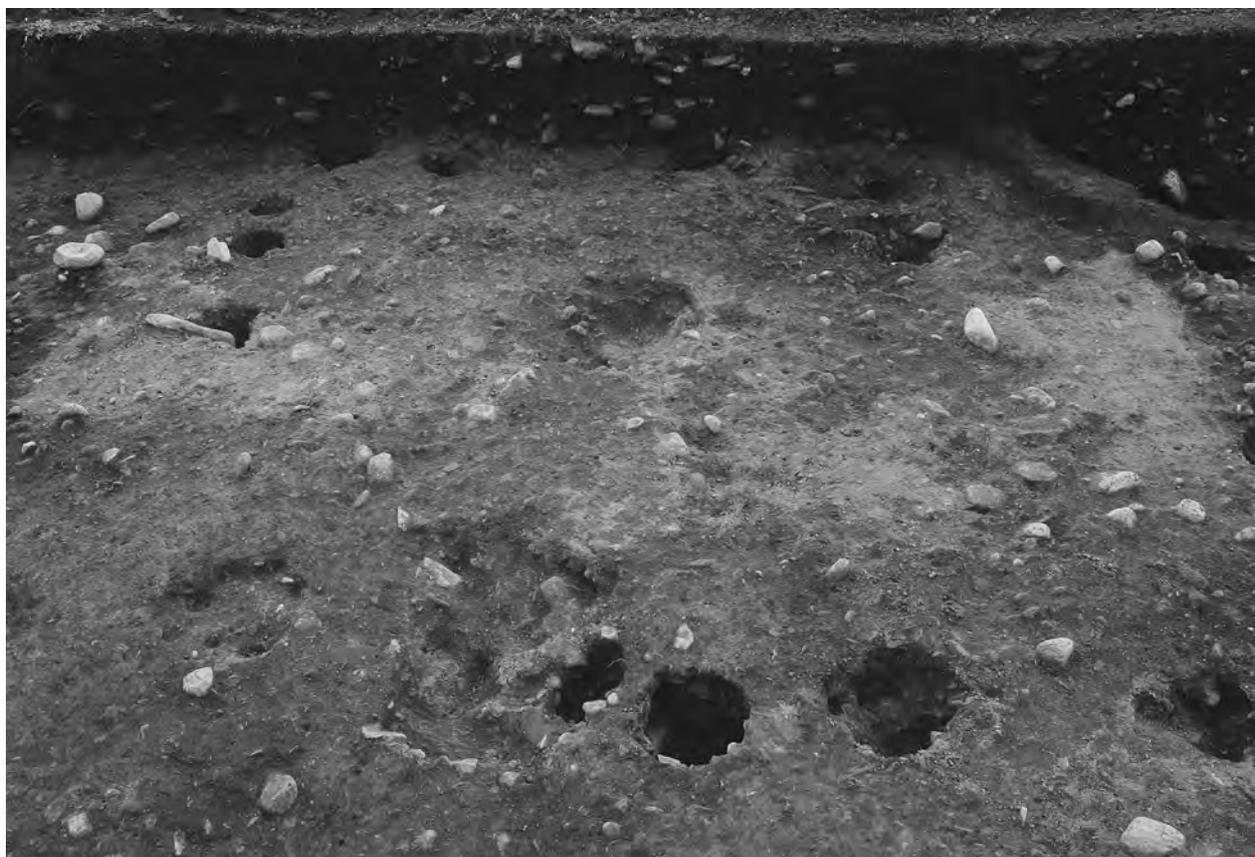


PIT284土層断面（SB02：南西から）

写真20 硬化面・掘立柱建物跡（PIT）



小ピット群③ (南西から)



小ピット群⑦ (北から)

写真21 小ピット群



写真22 竖穴住居跡出土遺物(1)

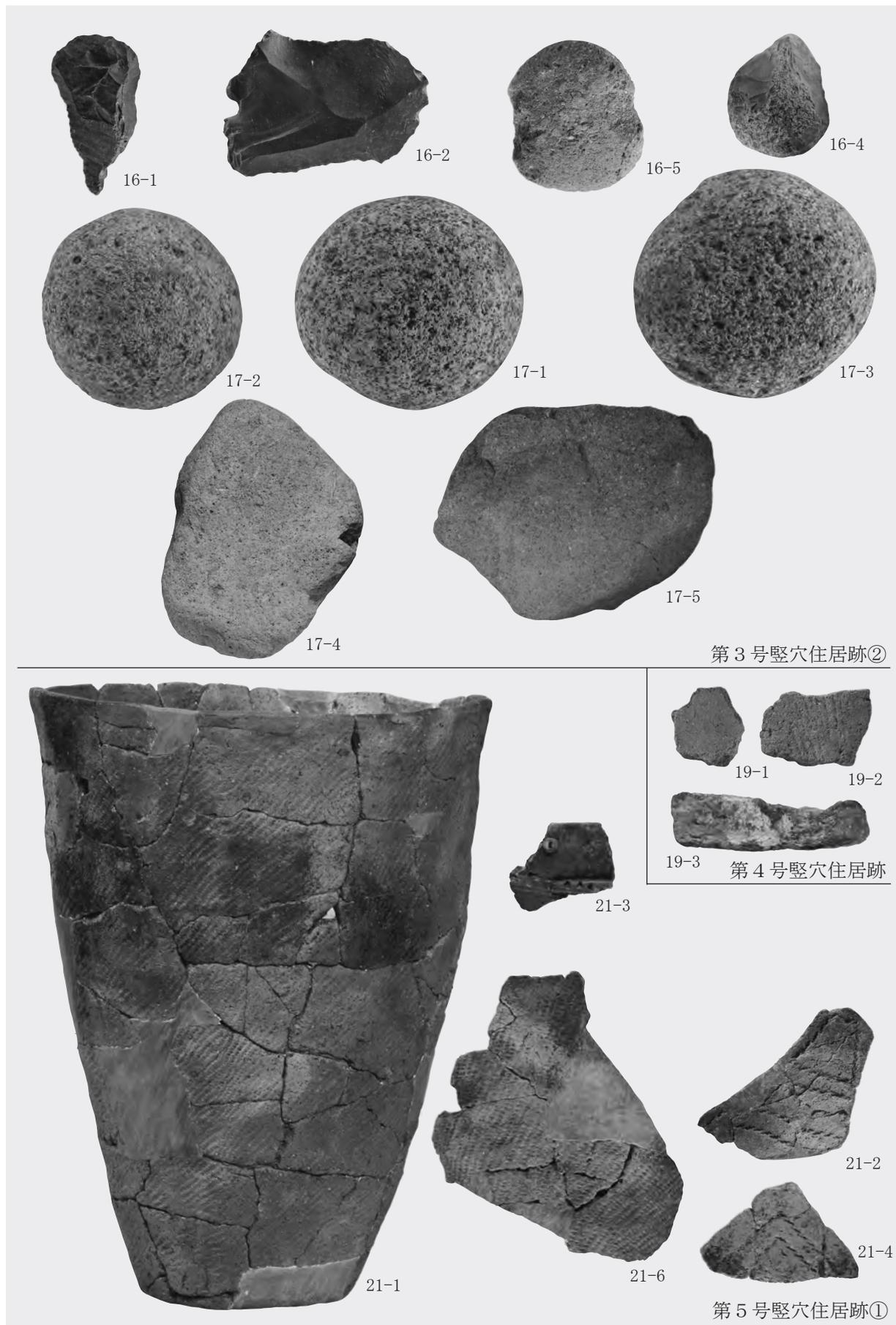
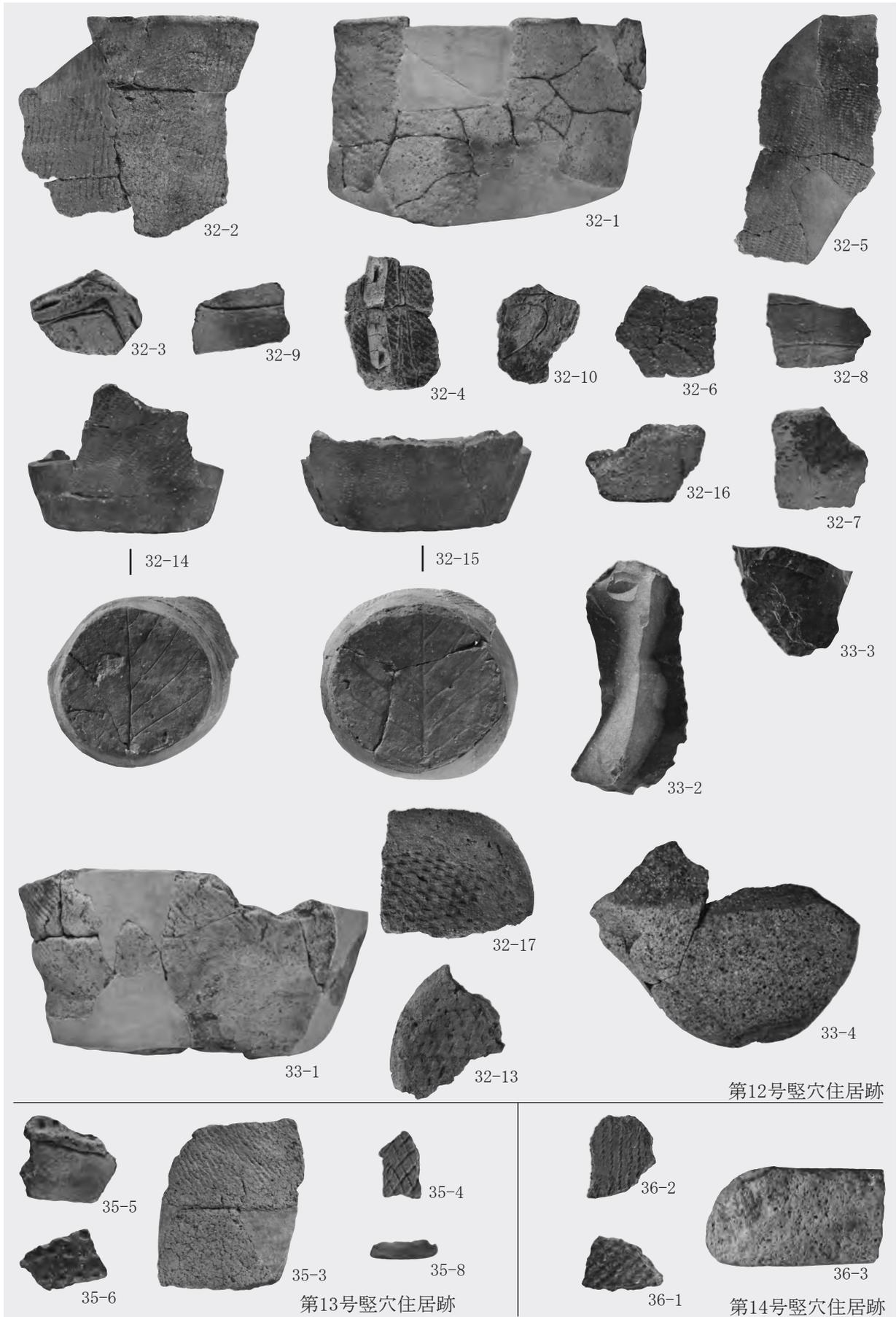


写真23 竖穴住居跡出土遺物(2)



写真24 竖穴住居跡出土遺物(3)



第12号竖穴住居跡

33-1

32-17

32-13

33-4

33-2

33-3

32-14

32-15

32-7

32-16

32-8

32-6

32-10

32-4

32-9

32-3

32-5

32-1

32-2

第14号竖穴住居跡

36-3

36-1

36-2

35-4

35-3

35-8

35-5

35-6

第13号竖穴住居跡

写真25 竖穴住居跡出土遺物(4)

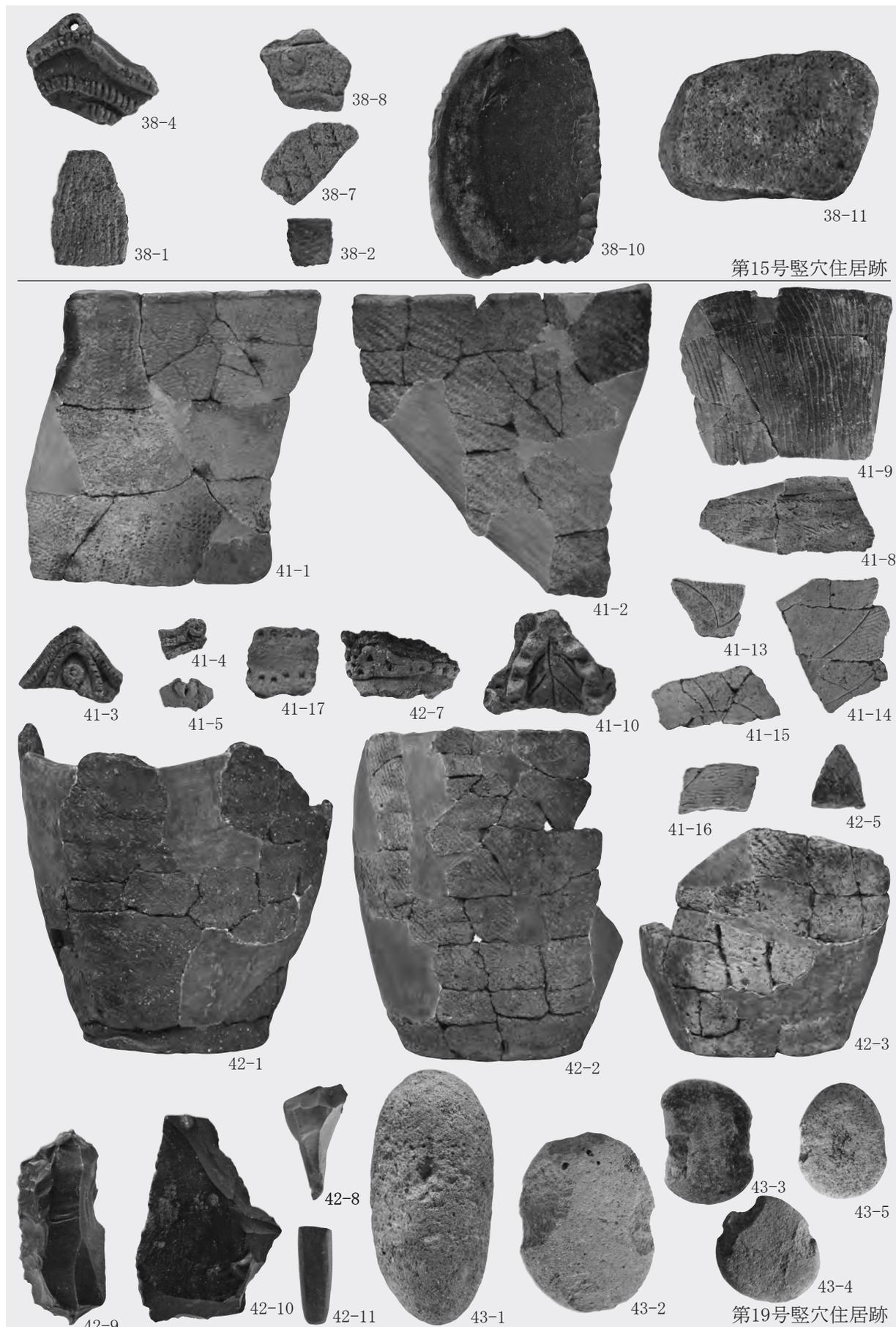


写真26 竖穴住居跡出土遺物(5)

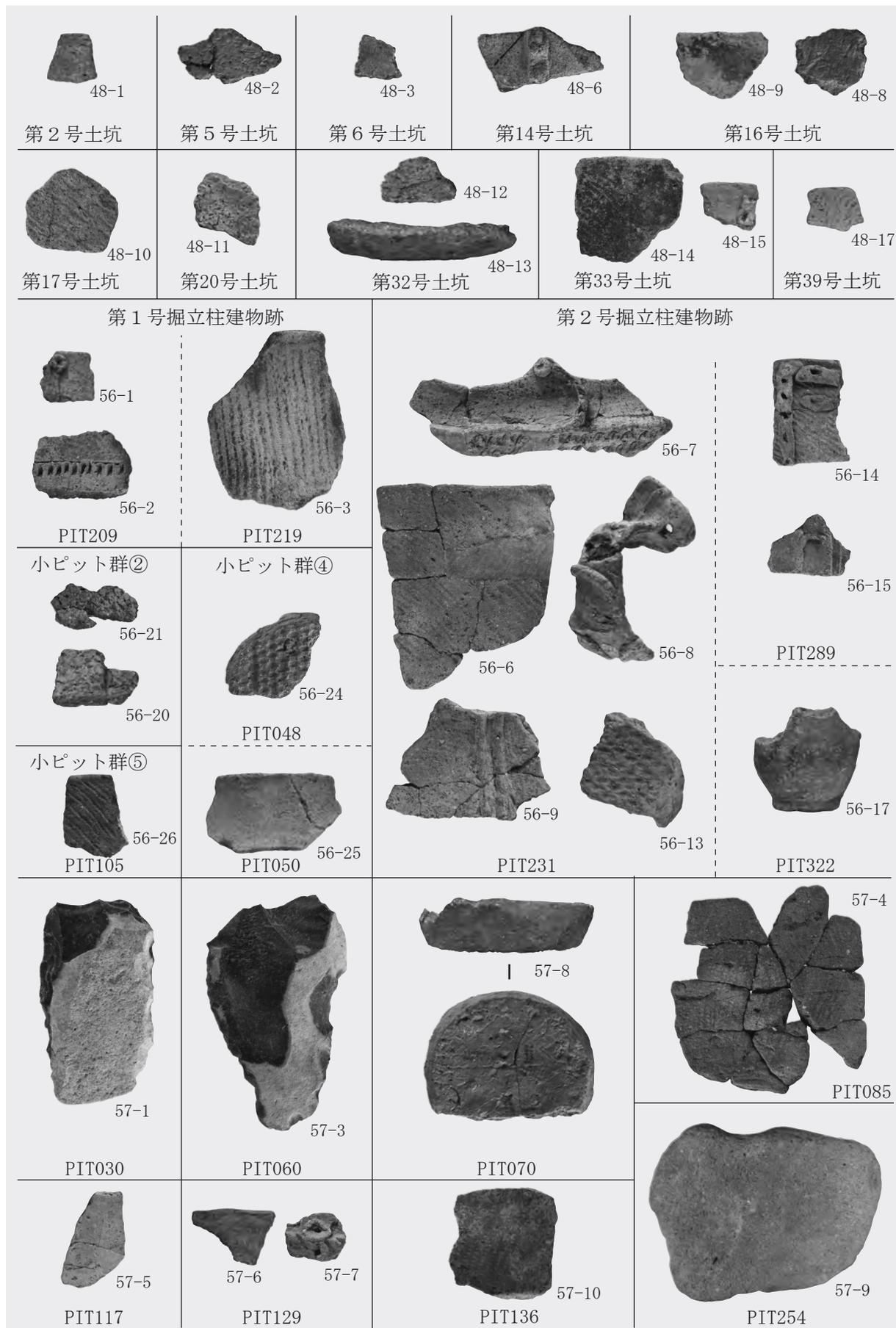


写真27 土坑・その他の遺構出土遺物

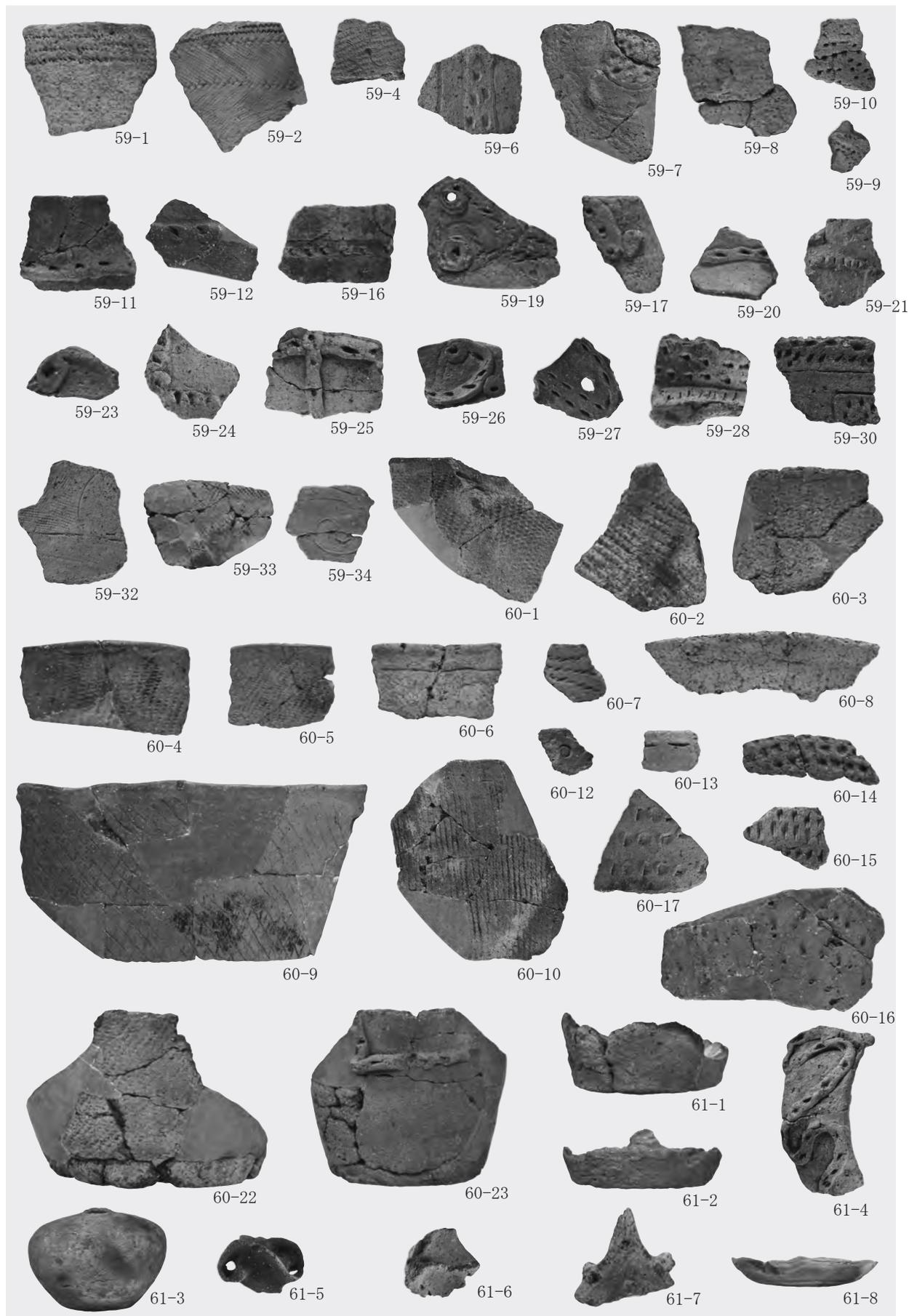


写真28 遺構外出土遺物(1)

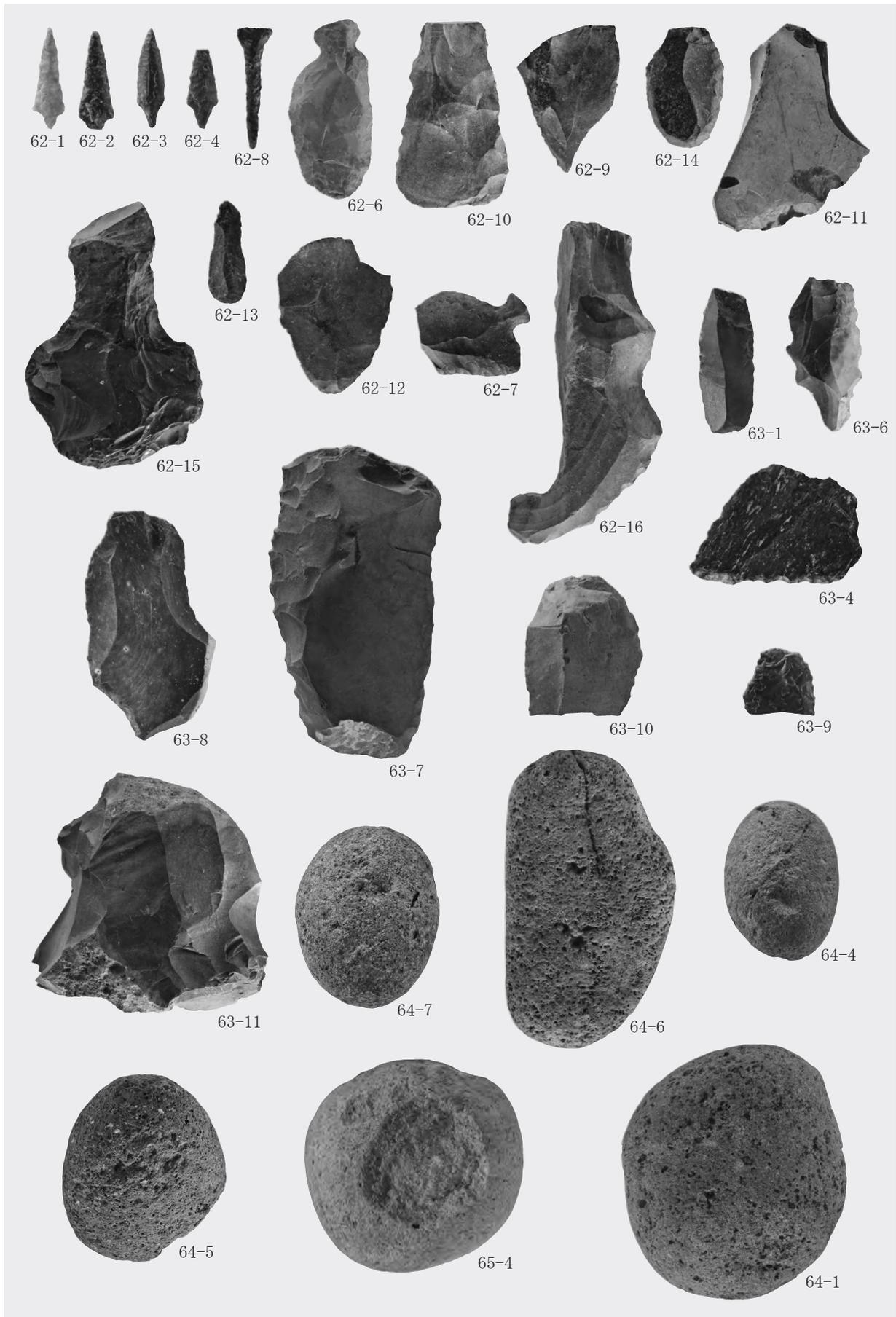


写真29 遺構外出土遺物(2)

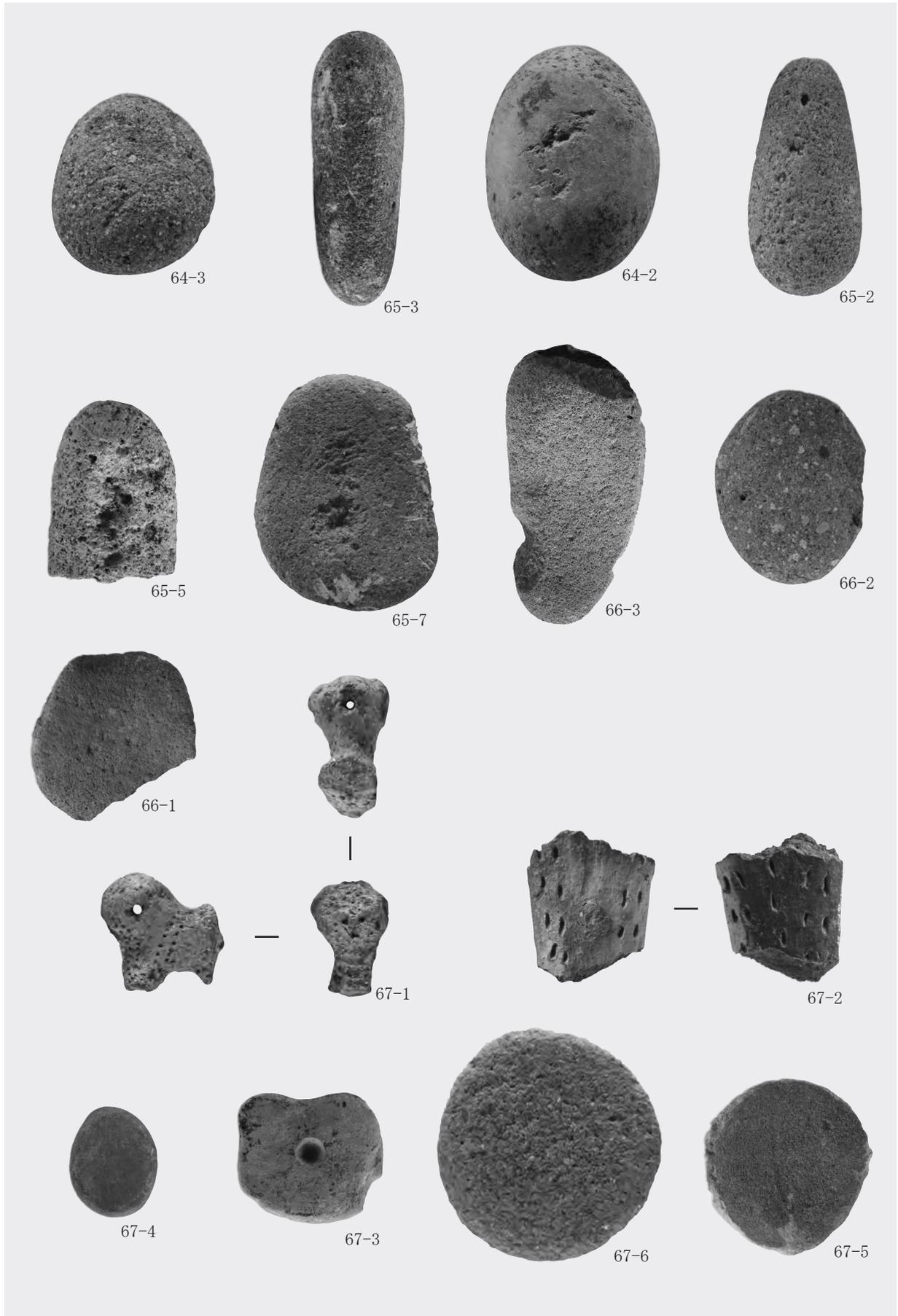


写真30 遺構外出土遺物(3)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	かわらたいかつこよんいせきに							
書名	川原平(4)遺跡Ⅱ							
副書名	津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第527集							
編著者名	新山隆男・平山明寿・最上法聖・畠山 昇							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2013年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわらたい いせき 川原平(4)遺跡	あおもりけん 青森県 なかつがるぐん 中津軽郡 にしめやむら 西目屋村 おおあざかわらたい 大字川原平 あざふくおか 字福岡	02304	343022	40°	140°	20110511	5,200	記録保存 調査
				31′	13°	20111118		
			41″	41″	20120801			
					20120928	2,500		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
川原平(4)遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡	17	縄文土器・石器・ 土製品・石製品			
			土坑	37				
			掘立柱建物跡	2				
			硬化面	2				
			小ピット	294				
			焼土跡	2				
		中・近世	土坑	3	陶磁器			
要約	<p>川原平(4)遺跡A区は、縄文時代中期末葉～後期初頭の集落跡であることがわかった。竪穴住居跡のほとんどは、竪穴部欠損により得られる情報が少なかったが、住居自体の拡張等を行った痕跡はあるものの、住居が重複するなどの痕跡はほとんど見られず、出土した土器からも限定された時期に営まれた集落であった可能性が高い。</p> <p>その他の遺構も同時期である可能性が高いが、土坑の一部には中世から近世にかけての炭窯と思われる遺構も検出した。</p>							

---

青森県埋蔵文化財調査報告書第527集

## 川原平(4)遺跡Ⅱ

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2013年3月27日  
発行 青森県教育委員会  
〒030-8540 青森県青森市新町二丁目3-1  
編集 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15  
TEL 017-788-5701、FAX 017-788-5702  
印刷 株式会社サンエイ  
〒030-0121 青森県青森市妙見三丁目2-19  
TEL 017-738-0040、FAX 017-738-0880

---